

クレールーキアの研究

—アテナイ植民活動にみる人的結合の諸相—

前野弘志

1999年

目次

目次	i
はじめに	ii-v
序論 研究史の整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・問題の所在	
序章 クレールーキア研究の現状と課題	1-24
第Ⅰ部 アテナイ植民の二つの類型・・・・・・・・・・・・・・・・仮説の設定	
第1章 アテナイ帝国主義とアポイキア	25-43
第2章 アポイキアとクレールーキア	44-71
第Ⅱ部 アテナイ植民活動と種族イデオロギー・・・・・・・・仮説の検証	
第3章 ペイシストラトスの時代	72-88
第4章 キモンの時代	89-108
第5章 ペリクレスの時代	109-129
第6章 クレオンの時代	130-142
第7章 ティモテオスの時代	143-167
第Ⅲ部 アテナイ植民者の市民権とアイデンティティー・・・・・・・・残された問題	
第8章 前5世紀におけるアテナイ植民者の市民権	168-181
第9章 アテナイ植民者のアイデンティティー	182-213
第10章 前4世紀におけるアテナイ植民者の市民権	214-237
結論	238-239
主要参考文献および略記号一覧	240-252
地図	

はじめに

本論文の目的は、アテナイ植民の二つの類型を示すと考えられるアポイキア ἀποικία とクレールーキア κληρουχία という語を手がかりとして、前 6 世紀末から前 4 世紀末までのアテナイ植民活動の分析し、古典期ギリシアにおける人的結合の諸相を探ることにある。本論文は 3 部から成り、序章の 1 章、第 1 部の 2 章、第 2 部の 5 章、第 3 部の 3 章の計 11 章、及び結論から構成される。

従来、アテナイの植民活動は、専らいわゆるアテナイ帝国主義との関わりで論じられてきた。その際に注目されてきたのは、いかにアテナイの植民市が軍事力として同盟諸都市や軍事的拠点の統制に役だったかという点であった。このような視点を端的に現しているのがクレールーキアという歴史学的専門用語である。ギリシアに一般に見られる植民市のタイプはアポイキアと呼ばれ、その特徴は、植民者が母市の市民権を喪失して、自らの市民権を持つ独立的なポリスを形成することにあるが、一方、クレールーキアの特徴は、植民者が母市アテナイの市民権を保持し、そのことによって母市に従属的な植民団となることにあるとされてきた。その意味に置いて、クレールーキアと言う語は軍事植民と同義である。しかし、本当に古典期のアテナイ人はクレールーキアと言う語をそのような意味で用いていたのであろうか。

本論文の意義は、第一に、アポイキアとクレールーキアという語は本来、アテナイ人の統合意識と密接な関係にあったことが明らかにされること、第二に、その分析結果に依拠して、古代ギリシアにおける人的結合の諸相を明らかにすることにある。そもそも植民活動とは、本来共に住んでいた人々の分離、移動、そして他者との接触ないしは混合を意味する。従って、植民活動によって幾つかの人間関係が取り結ばれていくことになる。一つは母市市民と植民者との関係、もう一つは植民者と先住民との関係である。これらは植民活動に伴う第一義的な人間関係であるが、それらにはさらに二つの人間関係が絡んでいる。一つはポリスという国家形態の中における人間関係。これはより根元

的な所で人間関係を規定したに違いない。もう一つは帝国支配。これは命令する者と従属する者との関係であり、アテナイは自らをイオニア人の母市、デロス同盟諸都市を自らの植民市と見なし、支配被支配の関係を母市植民市の関係にすり替えて、帝国支配を正当化しようとしていた。本論文では、これら四つの側面における人間関係を統合的に分析する。このような視点は従来のアテナイ植民市研究には欠けていたものである。章立ての各章の要旨は以下の通りである。

序論では、クレルーキア研究の現状と課題が提示される。本格的な最初のクレルーキア研究は 19 世紀初頭に始められた。その後 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、クレルーキアの解釈はスペクトル的に展開された。20 世紀の 30 年代から 60 年代にかけて、この問題の解決が模索されたが成功には至らず、堂々巡りに終わった。そしてとうとう 70 年代には、この問題は未解決のまま放棄されてしまった。これらの議論は専ら、用語法、形態論(実際には、種族イデオロギーによって規定されている)、市民権の三つの側面を巡って展開されたので、本論文でもそれらの問題をそれぞれ第 1 部、第 2 部、第 3 部で扱うこととする。従来の議論が行き詰まった最大の欠点用語法を巡るものであった。

第 1 部『アテナイ植民の二つの類型』では、用語法を巡る諸問題が考察され、本論文の仮説が設定される。第 1 章「アテナイ帝国主義とアポイキア」は、従来等閑視されてきたアポイキアという語こそが帝国主義的な統合のイデオロギーを表していたことを明らかにする。アテナイは、大植民運動に参加しなかったにもかかわらず、前 500 年のイオニア反乱の時までに、自他ともに認めるイオニア人の母市たる地位を獲得し、以後もそれを喧伝していった。この虚構の成立には神話や儀礼が大きな役割を果たしていた。アポイコイないしはアポイキアの語が用いられたのはこの文脈においてであり、それらは同族の絆を指していた。第 2 章「アポイキアとクレルーキア」では、アポイキアとは同種族同居型植民を、クレルーキアとは異種族追出型植民を意味するという仮説が提起される。前者は、アテナイ人と同種族つまりイオニア人のポリスに

対する植民で、先住民の中の反アテナイ的分子だけを追放して、そこに植民者を送り込むパターンである。これは前4世紀にはエンクテーマタと呼ばれていた。その典型例は、ケルソネソス・ナクソス・エウボイアである。後者は、アテナイ人と異民族のポリスに対する植民で、先住民を全て追い出した後に植民者を送り込むパターンである。これは前4世紀にはクテーマタと呼ばれていた。その典型例は、レムノス・イムブロス・スキュロスである。

第2部『アテナイ植民活動と種族イデオロギー』では、具体的な事例に即してこの仮説の妥当性が検証される。対象時期は前6世紀から前4世紀までとし、それをその時々々の植民活動の推進者に因んで便宜的に、第1章「ペイシストラトスの時代」、第2章「キモンの時代」、第3章「ペリクレスの時代」、第4章「クレオンの時代」、第5章「ティモテウスの時代」に小区分することとする。アテナイ人は先住民から無理矢理に土地を奪うばかりではなく、先住民によって招かれていく場合もあった。実際には、植民者と先住民との関係は千差万別であった。しかしアテナイ植民には、既に述べたように一定のパターンがあった。このパターンは前404年を境にして変化した。つまり、それ以前には例のパターンはよく守られていたが、それ以後は全く無視されるようになったのである。この変化は、種族イデオロギーに基づくアテナイの植民政策が前404年以降放棄されたことを意味する。アポイキア・クレールーキアという用語法からエンクテーマタ・クテーマタという用語法に変化した理由もまた、アテナイの植民政策の転換と関係があったものと思われる。

第3部『アテナイ植民者の市民権とアイデンティティー』では、旧説の本質である市民権に関わる諸問題が検討される。第1章「前5世紀におけるアテナイ植民者の市民権」は、ナウパクトス碑文を援用しながら、母市市民と植民市市民との関係を根本的に規定したのは、市民権という抽象的で、喪失するか保持するかの二者択一的な法的権利ではなく、むしろ母市市民との相互面識性という曖昧かつ柔軟なものであったことを主張する。これはポリスにおける基本的な社会原理であり、母市植民市間にもこの原理が機能していた。第2章「アテナイ植民者のアイデンティティー」は、植民者の持っていた市民権で

はなく、植民者の抱いていたアイデンティティーという観点から母市植民市関係を捉え直そうとする試みである。従来、アテナイ市民権を保持した植民者はアテナイに従属的であると安易に見なされて来たが、植民者のプロソポグラフィックな分析によれば、彼らのアイデンティティーは母市からの距離と植民者の世代に強く影響されて、実際には様々な方向性を示していたことが明らかとなる。第3章「前4世紀におけるアテナイ植民者の市民権」は植民者の呼称の変化に着目する。例えば前5世紀には「レムノス人」と呼ばれた植民者が前4世紀には「レムノスに住むアテナイ人」と呼ばれるようになった。この変化はアテナイというポリスが海を越えて拡大したことを示唆している。この地理的拡大にも拘わらず、植民者の子弟の市民登録はアテナイにおいて行われ、その際に面識という要素が依然として重要な役割を果たしていた。ここにポリスの限界が見て取れるであろう。

結論では、クレルーキアは、従来言われて来たように、単に帝国支配の装置として働いた軍事力としてのみ意義付けられるべきではなく、またポリスの変質を示す一つの有効な指標として、さらには古典期ギリシアにおける人的結合の類型を示す指標として意義付けられるべきことが示されるであろう。

序論 研究史の整理

—問題の所在—

序章 クレールーキア研究の現状と課題

—再考に向けて—

はじめに

古典期のアテナイ人は自分たちが建設した植民市群をアポイキア ἀποικία とクレールーキア κληρουχία という二つのカテゴリーに分類していた (IG.I²237)。しかしそれぞれの語がどのような性格の植民市を表していたのか、また具体的にどの植民市を指していたのかを明確に示す史料は今のところ存在しない。この問題を解明しようとする研究は、既に 19 世紀初頭から存在し、19 世紀後半から 20 世紀の 60 年代まで盛んに論じられてきたが、70 年代以降は未解決のまま放棄されてしまった。小稿の目的は、①このいわゆるアポイキア・クレールーキア問題の研究史を振り返り、その発端、変遷、現状までを後付けること、②この問題が放棄されるに至った方法論的欠陥を検証すること、③この問題を見直すことによって得られる新たな知見の可能性を探ること、以上の三点にある。

第 1 節 クレールーキア概念の誕生

クレールーキアに関する最初の本格的な研究は Boeckh の著書であった¹⁾、と見なして差し支えないであろう²⁾。彼によってクレールーキア概念の基礎が作られた。そもそも彼の関心はアテナイの国家財政にあった。彼は同盟から入るアテナイ国家の定期的な収入源の一つとしてクレールーキアに言及した。彼はこれまでの研究がアテナイの同盟関係とアッティカの国家財政を理解する上で不可欠なクレールーキアという研究対象を見落としてきたと指摘し、後の研究者がこの問題を発展させてくれることを望みつつ、今までの研究の穴

を埋めることを意図して、この一章を設けたのであった。彼の論のポイントは三つあるように思われる。

第一のポイントは、クレルーキアをギリシアに普遍的なものと捉える点である。つまり、クレルーキアをアテナイ人が発明した特殊な土地獲得としてではなく、遙か昔から普遍的に存在していた野蛮性の残滓として見なすのである。遙か昔から征服民が被征服民の土地を「籤引き地」*κλήροι* として分配することは「征服権」*Eroberungsrecht* として認められており、その顕著な例としてドーリア人やテッサリア人の征服行為などを挙げている。アテナイ人はバルバロイに対してのみならず、ギリシア人に対してもそれを用いた。強い言えば、それがアテナイ人に帰されるべき新しい点である。即ち、彼の言う「クレルーキア」*Kleruchie* と「クレルーコイ」*Kleruchen* とは、ギリシアに普遍的に見られる新しい「籤引き地」と「籤引き地の所有者」を意味するのである。

彼は前 5 世紀においてアテナイ人によって建設されたクレルーキアを様々なクレルーキアの中の一例として捉え、その特殊性を建設の背景と動機に求める。つまり、他のクレルーキアの場合には、先住民に対する憎悪と自国の過剰人口による市民の貧困化を動機としていたが、アテナイ人のクレルーキアの場合には、それらに加えて、デロス同盟の盟主という特殊な事情における「国家の知恵」*Staatsklugheit* という動機が加わったと見るのである。「国家の知恵」とは、クレルーキアによる土地獲得を同盟ポリスの離反に対する懲罰とし、それを最も効率のよい支配の手段として利用したアテナイ帝国支配の意思のことである。この見方は今日まで貫かれるクレルーキア概念の骨子の一つである。これをここでは「軍事植民説」と呼ぶこととしよう。彼はこのような動機を持ったクレルーキアを、他のクレルーキアと区別して「アッティカクレルーキア」*die Attischen Kleruchien* と呼ぶのである。具体例として、カルキス、スキュロス、レムノス、イムブロス、ヘスティアイア、ポテイダイア、アイギナ、デロス、レスボス、スキオネ、メロス、ケルソネソス、ナクソス、アンドロス、トラキア、トゥリオイ、他のエウボイア諸市、サモスを挙げ

ている。

第二のポイントは、アッティカクレルーキアの特徴を母市に対する従属性に帰する点である。民族移動の時代にアテナイを經由して島々やイオニア地方に「植民市」*Colonien* が建設された。それらは独自の市民権を有する自治独立の新しいポリスを形成して、母市とは外国の関係になったが、それらとは対照的である。従属性を示す第一の証拠は、アテナイのクレルーコイがアテナイ市民であったことにある。このことは疑う余地がないと彼は断言する。まず理論的根拠として、①クレルーキアは貧民に土地を与えると同時に、軍事拠点を確保するという母市の利害のために建設されたのであるから、クレルーコイはアテナイ市民であらねばならないこと、②いつ潰されるか分からない植民市における一片の土地と交換に、植民者が高い価値を持ったアテナイ市民権を放棄したとは考えられないこと、の二点を指摘する。次にこの理論を裏付ける証拠として多くの史料を列挙しているが、整理すると、①クレルーコイがアテナイの部族や区に属すること、②クレルーコイがクレルーキアにおいてもアテナイに帰国した後もアテナイ市民のように振る舞うこと、③クレルーキアの土地がアッティカのもものと看做されること、④クレルーコイがアテナイの市民と呼ばれること、の四点である。従属性を示す他の証拠として、⑤宗教的施設が母市のそれに依存すること、⑥クレルーキアの土地が部分的にも母市に帰属すること、⑦クレルーコイが独自の軍隊を持たず、母市の指揮下にあること、⑧クレルーコイが母市からの役人を受け入れること、⑨上位の裁判権が母市にあること、⑩貢納金支払義務を負うこと、の六点を指摘する。これも今日まで受け継がれるクレルーキア概念のもう一つの骨子である。これをここでは「市民権理論」と呼ぶこととしよう。

第三のポイントは、アッティカクレルーキアが独自の「クレルーコイ国家」*Kleruchenstaaten* を形成することによって、母市からの独立性を有していたと見る点である。クレルーコイは、先住民を全て追い出して独自の行政機構を備えたポリスを形成するか、あるいは先住民と共存して彼らと共にポリスを形成する。いずれにしても、クレルーコイは母市とは別個のポリスを

形成する。特にカルキスの場合は、母市アテナイに対して反乱さえも起こしたと彼は見なす。即ちアッティカクレルーキアは、アテナイ市民から構成されていながら、アテナイとは別個のポリスを形成するという相矛盾する性格を併せ持っていたと見るのである。

クレルーコイの持つこのような二面性を統合するものとして、彼は二重市民権を想定する。つまり、クレルーコイはアテナイ市民でありながら、同時にクレルーコイ国家の市民でもあったのだという論理である。例えば、先住民を全て追放して建設されたクレルーキアの場合には、クレルーコイが「レムノス人」と呼ばれたり、あるいは「レムノスに住むアテナイ人」と呼ばれたりするが、この矛盾はそのように考えることによって解決されるのである。このように Boeckh の描くクレルーキア像は、母市への従属性と母市からの独立性という二つの極の中間に位置する微妙なスタンスをとっていた。この微妙なスタンスは、後の複雑な議論を予感させるものである。

第2節 スペクトルの展開

彼に続く諸研究は、アッティカクレルーキアの従属性と独立性の度合いを巡って解釈が分かれ、それらは二つの極の間にスペクトル的に配置されることとなった。従属性を最も強調したのは Kirchhoff であった³⁾。彼は Boeckh の著書を概ねにおいては正しいと評しながら、ただ一点において批判を加えている。つまり Boeckh は、デロス同盟の存続した期間、クレルーコイからなる共同体の大部分がデロス同盟諸ポリスと並んで貢納表に記載され、貢納金を支払っていた事実を根拠として、クレルーキアは母市に対して同盟ポリスの関係にあり、それゆえに自治独立の国家「クレルーコイ国家」という性格を持っていたと見なしたのであったが、これに対して Kirchhoff は、アッティカクレルーキアが貢納金を支払ったかどうかは、Boeckh が思ったほど自明のことではないと注意を喚起し、実際には全てのアッティカクレルーキアは貢納金を支払わなかったことを証明しようとした。彼の説は受け入れられ、そのこと

によって、微妙な存在であったアッティカクレルーキアは、母市への従属性という極に強く引きつけられることとなった。

Boeckh も Kirchhoff もアッティカクレルーキアを一様なものとして性格付けていたが、Beloch はアッティカクレルーキアの中に、国家を形成するものとしなないものがあることを発見した⁴⁾。このことによって、アッティカクレルーキアは二つの部分に引き千切られることとなった。そもそも彼の関心はアテナイ市民の人口にあった。クレルーコイとはアテナイ市民権を持った植民者であるので、アッティカの全市民人口を得るためには、アッティカに住む市民の数にクレルーコイの数を加えればよいが、クレルーコイの中には、植民市に住むタイプと母市に留まるタイプがあり、それらを厳密に区別しなければならないと考えたのである。彼の分類法によれば、①クレルーコイが植民市に居住するタイプは、全ての先住民が追放された場合に建設される。具体的には、サラミス、レムノス、イムブロス、スキュロス、オレオス、ブレア、アイギナ、ポテイダイア、メロス、サモスがこれに属し、この種のクレルーコイは、独自の地方自治体を形成し、独自の部隊を保持するのが特徴であり、クレルーコイはアッティカの外に住むアテナイ市民と見なされる。彼はこのタイプの建設目的を、従来通り、社会政策的および軍事的なものと解釈した。②クレルーコイが母市に居住するタイプは、なお存続する国家の領土の中にクレルーコイが土地を受け取る場合に発生する。具体的には、カルキス、エレクトリア、アンドロス、ナクソス、レスボス、ケルソネソスがこれに属し、この種のクレルーコイは、彼らの法定の、恐らく大部分の場合は、実際の居住地をアテナイに持つために、独自の地方自治体を形成せず、独自の軍隊も持っていなかったもので、アッティカの部族部隊に編成された。彼らは不在地主として母市に留まり、先住民の小作人が支払う賃貸料で生計を立てる年金生活者となったので、彼はこのタイプの建設目的を単に社会政策的なもの即ち貧民救済と解釈した。

彼の二分法そのものは受け入れられたが、その解釈は、クレルーコイは軍事植民として現地に定住するという当時の通説に反するものであったの

で、受け入れられなかった。この点に最も徹底した反駁を行ったのは Swoboda であった⁹⁾。彼は国家を形成しないクレルーキアの典型と思われるカルキスとレスボスを扱い、特にレスボスに関するトゥキュディデスの記述「クレルーコイを送り出した」 κληρούχους ἀπέπεμψαν (Thuc.3.50.2) に着目した。そこでは過去における事実を表記するアオリスト形が用いられていることから、クレルーコイは実際に現地に送り出されたと見なした。また、クレルーコイと現地人との関係を示す史料の存在から、彼らは長く現地に留まったと考えた。さらに、Beloch が余り注目しなかったことであるが、クレーロスが現地人に賃貸された事実を重く見て、それとクレルーコイの機動力との関係を指摘した。つまり、レスボスへのクレルーコイは、地方自治体組織を持たず、まとまって野営し、クレーロスを現地の小作人に賃貸に出し、その賃貸料で生計を立てつつ、アテナイの部族部隊に編入されて、軍事拠点の防衛に専念した駐留軍と見なし、このタイプの建設目的は、軍事が一義的であり、社会政策は二義的なものに過ぎなかったと解釈した。これと同種のクレルーキアとしてカルキスが挙げられるが、これらの他に存在したかどうかについては、史料の少なさから決定できないとする。彼はこの種のクレルーキアを、一般のクレルーキアとは区別して、「疑似クレルーキア」 Pseudo-Kleruchien と呼んだ。

彼らの議論は同じ対象を巡りながら、不在地主説と駐留軍説とに分かれたが、この時は結局、後者に軍配が挙げられた。これら二つの解釈は表面的には正反対であったけれども、国家を形成しないクレルーコイについて、Beloch は帝国支配の奇食者として、Swoboda は帝国支配の尖兵として理解することによって、両者ともこの特殊な存在に、クレルーキアが本質的に備えている帝国支配の意思のより先鋭化した姿を読み取ろうとした。その点においては、両者の考えは本質的には同じであったように思われる。

この分裂傾向は更に進んだ。Ed. Meyer は¹⁰⁾、アテナイが建設した植民市をまずデロス同盟結成を境にして二分し、結成以後に建設された植民市については、軍事高権の有無を基準として更に二分して、都合三つに分類した。①ペリクレス時代以後に建設された、独自の軍事高権を持たず、アテナイの部族

部隊に編入されたままで、アテナイの市民からなる、国家を形成しない、駐留軍的なクレルーキア。エウボイア、レスボス、サラミスがこれに属する。これは Swoboda 説と同じである。②結成後からペリクレス時代までに建設されたクレルーキア。独自の軍事高権と軍隊を持ち、アテナイに対しては同盟ポリスとして援軍を派遣したが、その反面、クレルーコイはアテナイの部族部隊に留まり、アテナイから送られた役人の指揮下にあり、戦死者はアテナイの戦死者名簿に刻まれた。これは自治独立の国家とアッティカとの中間に位置する従来のクレルーキアに相当するが、クレルーコイが母市から離れて住み、市民としての権利を実質的には行使できなかったことを重視して、彼はこれをクレルーキアとは呼ばないで「事実上の植民市」*die eigentlichen Colonien* と呼んだ。具体的には、エイオン、タソス、スキュロス、エウボイア、アイギナ、アムフィポリス、ヘスティアイア、プレア、レムノス、イムブロス、ケルソネソスがこれに属する。③同盟結成以前に建設された植民市は、独自の市民権と裁判権を持ったポリスを形成し、アテナイに対しては貢納金を支払い、その植民者はアテナイからイオニアへ移住した者たちと同等に見なされるべきものとし、彼はこれを「古いアッティカ植民市」*die altattischen Colonien* と呼んで、クレルーキアとは別個に扱う。後にこのタイプは、Swoboda によって「アテナイのアポイキア」*Apoikia der Athener* と呼ばれるようになった⁷⁾。具体的には、シガイオン、ケルソネソス、レムノス、イムブロスがこれに属する。このように彼は従属性から独立性へのベクトル上に三つのタイプの植民市を位置づけた。その結果、従来のクレルーキアは再び従属性の極へと大きく引き戻されることとなったのである。その方向性を究極的に押し進めたのは *Berve* であった⁸⁾。彼は前 5 世紀に建設されたアテナイの植民市の全てをアポイキアと見なしたのである。

第 3 節 解決の模索

クレルーキアの性格を巡る議論は以上のようにスペクトル的に展開

された。この混乱的な研究状況の解決の模索は、新たな四つの論点を通して行われた。最初の画期的な研究は Ehrenberg によってなされた⁹⁾。彼の功績は三つある。第一は、従来の「市民権理論」の限界を明示したことである。彼は、アポイキアとクレルーキアの本質的な違いが国内法上の地位、即ち植民者が母市市民権を保持するか否かにあったことは認めるが、母市市民権を保持した植民市=クレルーキアでも、自治組織を備えた独自のポリスを営むタイプもあれば、母市市民権を喪失した植民市=アポイキアでも、母市と密接な関係を保ったタイプもあることに注目する。このように、母市植民市関係の実態という視点から見れば、「市民権理論」はあくまで理論に過ぎず、実態とは必ずしも一致しない。そこで彼は、この矛盾を解消するために、母市市民権という分類基準に母市植民市間の政治的関係という分類基準を加えて評価することを提唱した。即ち、まず市民権を基準としてアポイキアとクレルーキアに分け、次に母市に対する植民市の従属度に従ってそれぞれを二つのサブカテゴリーに分けるのである。こうして次のような四分法が考案された。まずクレルーキアとして、①「駐留軍」Garrison、これはアテナイ市民からなり、独自の自治体を持たず、ただ駐留軍として占領地に滞在するクレルーキアで、サラミス、カルキス、レスボスがこのタイプに属する。②「地方自治体クレルーキア」Gemeindekleruchie、これもアテナイ市民からなるが、地方自治体を形成して、独立のポリスの体裁を備えたクレルーキアで、レムノス、イムブロス、ケルソネソス(エライウス、クリトテ、マデュトス、ネアポリス)がこのタイプに該当する。次にアポイキアとして、③「従属的帝国アポイキア」abhängige Reichsapoikie、これは母市市民権を喪失した植民者からなるが、アテナイの帝国支配に組み込まれた、母市に従属的なアポイキアで、シゲイオン、ブレアがこれに該当する。④「普通の植民市」normale Kolonie、これも母市市民権を喪失した植民者からなり、一般のギリシア植民市のように母市と疎遠になる普通のアポイキアで、アムフィポリス、トゥリオイがこれに属する。

第二の功績は、クレルーキアの起源を突き止めたことである。彼は初期アテナイの植民市を分析して、その発展を次のように跡付ける。まずアッ

ティカの傍にあるサラミスは、普通の植民市建設の系譜に連なるが、母市との政治的関係においては、母市に対して従属的であり、既にクレルーキア的な特徴を示していた。一方同じ時期に建設されたシゲイオンは、アッティカからはるか彼方に位置したにもかかわらず、ペイストラティダイの血縁によって母市と密接に結び付けられていた。次に、シゲイオンの対岸のケルソネソスがペイストラトスの命に従ってフィライダイによって植民された。フィライダイはアテナイにおける名門の一つで、ペイストラティダイにとっては敵ではないが、潜在的なライバルであった。そこで、当地におけるフィライダイの自治の強大化を阻止するために、ペイストラトスは初めてアテナイ市民を植民させた。Ehrenbergによれば、ペイストラトスこそクレルーキアの発明者であると言う。最後に、ケルソネソスからその沖に浮かぶレムノスが植民された。これは次第に自治的なクレルーキア共同体を形成していった。このように、植民市建設における主導権が個人から国家へと移行して行く過程は、母市アテナイが僭主政ポリスから民主政ポリスへと発展して行く過程に同調していたのであり、クレルーキアの起源もそこに位置付けられると彼は論じる。

第三の功績は、用語法理論を確立したことである。Ehrenbergは、公文書としての碑文史料において用語が正確に使用されていたことは認めるが、文献史料においては、同時代史料であるトゥキュディデスでさえも用語を不正確に使用していたと見なした。実は、この考えは彼のオリジナルではなく、以前から言われてきたことであつたし、また彼の主要な論点でもなかったが、期せずしてその後の議論の出発点となった。

Ehrenbergの用語法の解釈に対して反論したのはATLの著者たちであつた¹⁰⁾。このことは同時に彼の四分法を否定することにも繋がる。彼らの主張によれば、植民者を表わすアポイコイ、エポイコイ、クレルーコイという語には本来、はっきりした意味の違いがあり、後世の作家はアポイキアとクレルーキアという語を混同して用いていたかも知れないが、前5世紀の碑文もトゥキュディデスも用語法を混同して使用した証拠は一つもない。それゆえに、トゥキュディデスさえも時々これらを混同しているというEhrenbergの発言には、

「我々は挑戦しなければならない」と強い反論を示した。

Ehrenberg の考えは実態に重きを置いた柔軟なものであったのに対して、*ATL* の著者たちの考えは国内法に重きを置いた厳格な二分法であった。彼らによると、①アポイコイとエポイコイは同じであり、ただ前者は「出国移民」*emigrants* を後者は「入国移民」*immigrants* を意味する点において異なっていた。従って、アポイコイあるいはエポイコイと表記された植民者はアポイキアを形成する。アポイキアとは、独自の市民権と独自の「属地主義」*ius soli* を持った新しい都市国家を形成するタイプの植民である。その代表例はアムフィポリスであるが、その植民者は血によってアテナイ人に留まるが、「属人主義」*ius sanguinis* はないので、実際には、アテナイの政治的権利を持っていない。一方、②クレールーコイの植民は理論的にクレールーキアを形成する。クレールーキアは新しい都市国家を形成せず、クレールーコイはアテナイの市民権とアテナイの属地主義を保持する。その代表例はレスボスであるが、彼らは血によってアテナイ人であると同時に、区に登録され続け、アテナイに住むアテナイ人と同様の政治的権利を持つ。そして、デロス同盟設立以前に建設されたアポイキアは貢納金を支払ったが、それ以後に建設されたアポイキアはそれを支払わず、またクレールーキアも支払わなかったと述べた。

議論の焦点は、レムノスの植民者をどのように性格付けるかにあった。彼らについては、三つの戦死者名簿が発見されている。一つはレムノスから出土した前5世紀初頭のもので、アテナイの十部族が刻まれている。他の二つはいずれもアテナイから出土した前5世紀半ばのもので、レムノス人とアテナイの十部族が刻まれている。またレムノスの植民者は、トゥキュディデスにおいては、繰り返しアポイコイと表記されている。これらについて Ehrenberg は、すべて完全なアテナイ市民と見なし、地方自治体クレールーキア の概念を導入した。つまり、レムノスの植民者はアテナイ市民でありながら、レムノスというポリスを形成する、言わばクレールーキアの性格とアポイキアの性格を併せ持った中間形態と解釈したのである。それに対して *ATL* の著者たちは、もしすべてがアテナイ市民だったならば、いったい誰が貢納金を支払ったのか、また

なぜ貢納金の減額が起こったのか、これらの点が説明できないと反論した。彼等の解釈は中間形態という曖昧なものを排する、きっぱりとした二分法であったので、彼等はレムノスにはアポイコイとクレルーコイが同居していたと考えた。つまり、レムノスには、ミルティアデス 2 世の植民以来住んでいた古い植民者=アポイコイがおり、彼らが貢納金を支払っていたが、前 5 世紀の中頃に新しい植民者=クレルーコイが追加植民され、その分の減額が生じたのだ、という解釈である。そしてトゥキュディデスは古い植民者をアポイコイと読んでいたのであるから、彼の用語法は正しいと言う。

このように Ehrenberg と *ATL* の議論は、用語法を巡って真っ向から対立していた。しかし冷静に見れば、アポイキアとクレルーキアの定義については、両者は基本的に同じであったと言って差し支えないであろう。Ehrenberg は明らかに「市民権理論」に立脚しており、ただ実態に即してサブカテゴリーを設けただけであった。一方 *ATL* の著者たちは実態よりも「市民権理論」に固執しただけであった。そもそも法というものは、その施行において実態とかけ離れるのが当然であろう。両者の違いは、Ehrenberg がかけ離れた実態に、*ATL* の著者たちが法そのものに力点をおいたことにあると評価できるであろう。

Ehrenberg は「この直接的な挑戦に対して応戦しなければならない」と感じて、徹底的に反論した¹¹⁾。まず彼は、*ATL* のエポイコイに関する定義さえも気に入らないと言う。なぜトゥキュディデスは、先住民を追放して植民した同じケースであるはずのアイギナ、ポテイダイア、メロスについて、前二者にはエポイコイを送ったと書き、後者にはアポイコイを送ったと書いたのか。これら二つの単語のこの無差別な用法こそ、トゥキュディデスが用語を正確に使っていないのではないかと疑わせた最初の原因であると言う。ポテイダイアの場合、碑文史料が発見されており、それに見られる表記とトゥキュディデスの表記とはエポイコイで一致している。公文書である碑文における用語法は常に専門的な意味で用いられているので、この場合、トゥキュディデスの用語法は正しいと見なしてよい。しかし *ATL* の主張するように、エポイコイを「入国移民者」と取れば、アテナイは入国移民者を送り出したことになり、これは不自

然である。そこで彼は、伝統的な説に従って、エポイコイを「追加植民者」の意味であるとして *ATL* の説を修正した。

次に彼は、トゥキュディデスの記述における植民に関するその他の様々な用語の意味を確定した後に、クレールーコイの意味の分析に至る。それによれば、トゥキュディデスは前 427 年のレスボスにおける 3000 のクレーロスの分配過程を説明する文脈の中で (*Thuc.3.50.*)、この語を一回きり用いている。幸いこの植民に関する碑文史料が残されており、そこに見られる表記もクレールーコイで一致している。従って、この場合のトゥキュディデスの用語法は正しいと見なしてよい。しかし、トゥキュディデスは、クレールーキアと見なされる他の幾つかの植民について述べておきながら、クレールーキアやクレールーコイの用語をそれらに用いていないのはなぜか。決定的な事例はアイギナである。*ATL* はトゥキュディデスのエポイコイという表記からアイギナをアポイキアと規定した。しかしプルタルコスはそのクレールーコイと呼んでいる。確かに、後世の史料には用語法の乱れが予想されるが、アイギナ出身のアリストファネスやプラトンがアテナイ人であった事実から、その島にアテナイ人が住んでいたことは疑いえない。従って、アイギナのエポイコイ=追加植民者はクレールーコイであったのであり、アイギナはクレールーキアであったと結論される。ここでも *ATL* の説は否定された。

最後に彼は、ヘスティアイアの事例を取り上げて、先に提示した植民市の四分法の有効性を再確認する。ヘスティアイアには、非常に断片的な碑文史料から、評議会、民会、裁判所、役人が存在したことが知られており、これらはヘスティアイアが独立のアポイキアの様相を呈していたことを示している。また同じ碑文から、ヘスティアイアの植民者は本来アテナイ市民に課される戦時財産税を支払っていたことも知られる。このことはその植民者がアテナイ市民であったことを示唆する。従ってヘスティアイアは、アポイキアとクレールーキアの性格を併せ持っていたと見なすべきである。それゆえに、彼の地方自治体クレールーキアというカテゴリーは有効であると主張するのである。また同時に、ヘスティアイアの植民者をトゥキュディデスがアポイコイと表記

していたことから、トゥキュディデスの用語法の曖昧さが窺えると述べる。

結局、用語法を巡る論争は Ehrenberg に軍配が挙げられたと言える。① トウキュディデスは植民者の用語を必ずしも専門的な意味で用いていた訳ではなく、時には専門的な意味として、時には一般的な意味として用いていたのであるという Ehrenberg の説は、②後世の文献史料における用語法はあまり信憑性がない、及び、③同時代の公文書である碑文史料における用語法は常に専門的な意味で用いられている、という二つの通説とセットになって、ここに言わば「用語法理論」が成立した¹²⁾。

この理論から論を展開したのが Gauthier であった¹³⁾。彼は論文の冒頭で「今日までの解釈では、アポイキア、エポイキア、クレールーキアの違いが十分には区別されていない」という Schaefer の言葉を引用して¹⁴⁾、アポイキア・クレールーキア問題に関する 1960 年までの研究状況を端的に示している。ではこの分野の研究を困難にしている原因は何であろうか。彼は二つの原因を指摘する。第一は、前 5 世紀のクレールーキアに関する史料の少なさである。つまり、不正確な史料(トゥキュディデス)、後世の史料(プルタルコス)、不完全な史料(碑文)から、これはクレールーキアこれはアポイキアと決定してきたこと自体に無理があったのである。第二は、その史料上の欠点を補うために、前 4 世紀のクレールーキア像を前 5 世紀に当てはめてきたことである。前 4 世紀には碑文史料が多く残されているため、比較的良好にクレールーキアの実態を知ることが出来る。しかし、既に Gschnitzer が指摘したように¹⁵⁾、そうして得られたクレールーキア像を無批判に前 5 世紀に当てはめることは、恣意的であると言わねばならない。従って、数少ない前 5 世紀史料の中から確実にクレールーキアと看做される事例を厳選して、そこから論を出発しなければならない。その事例とは前 427 年のレスボス以外にありえなかった。なぜならば、その植民は碑文史料によってもまた唯一トゥキュディデスによっても共通にクレールーコイと表記されているからである。

前 5 世紀の文献史料によってクレールーコイと表記された植民は、カルキスとレスボスの二例だけである(クレールーキアと表記されたものは皆無

である)。一方、前 4 世紀の文献史料であるイソクラテスやアリストテレスによつてはしばしばクレールーコイ、クレールーキアと表記されており、彼らの描くクレールーキア像には三つの特徴があった。①クレールーキアの領土がアテナイの領土と見なされたこと、②クレールーコイは、実際には行使出来なくても、アテナイ市民権を保持していたこと、③その一方で、クレールーキアは、民会、評議会、役人を備えた別個のポリスを形成したことである。

言うまでもなく、前 5 世紀にもこのような植民市は存在した。レムノス、スキュロス、ヘスティアイア、アイギナ、ポテイダイア、メロスがこれに属する。それなのに、なぜヘロドトスやトゥキュディデスは、これらに対してクレールーキアと言う語を用いなかったのか。その理由を彼は、ポリスを形成するタイプのクレールーキアは、彼らの目にはアポイキアに映ったから、アポイキアと表記したのでであると説明する。つまり、アテナイ人は先住民を完全に追放して、空になった領土にアテナイ市民を入植させたので、これは「定住の」*définitif* タイプの植民である。植民者は妻や子供を連れて村を出て行った。この外見は、前 5 世紀のアテナイ人にとってはアポイキアの特徴に見えたに違いない。但しこのタイプの植民は、「古典的なアポイキア」 *ἀποικίαι classiques* とは区別して、「新しいタイプのアポイキア」 *ἀποικίαι d'un type nouveau* と呼ぶべきである。というのは、母市との関係において、後者は前者よりも緊密であったからである。

一方、前 5 世紀のクレールーキアは次のように定義した。カルキスとレスボスに共通する特長は、それが「借りの」*provisoires* 植民であり、当地に長くは存続しなかったこと、先住民のポリスは消滅せず、従つて、クレールーコイは外国のポリスの中に存在したこと、そして何よりも、クレールーコイが駐留軍であったことである。この結論は、Gauthier 自信が認めているように、Swobosa、Busolt、Gomme に至る「駐留軍説」を踏襲したものに過ぎなかった¹⁶⁾。彼は、賃貸料の 2 ムナという金額が当時の重装歩兵の賃金に相当すること、レスボスへ送られたクレールーコイが長くはそこに留まらなかったことの二点を実証して、この駐留軍説を補強したのである。

Brunt もこの「用語法理論」を受け入れて、次のように彼なりに解釈している¹⁷⁾。アポイコイは「出国移民」 emigrants を、エポイコイは「入国移民」 immigrants あるいは「追加植民者」 additional settlers を、一彼にとってはどちらでもよい、そしてクレルーコイは「クレロス所有者」 lot-holders を表わす。従って、ある同一の植民者たちは、異なった視点から、アポイコイともエポイコイともクレルーコイとも呼ばれ得るのである。実際にギリシアの作家たちがこれらの用語を無頓着に使っていたのは、そのためであった。つまり、これらの語を頼りにして植民者の性格を規定することの無意味さを改めて明示したものと言える。この指摘は言われて見れば当り前に思えるが、今までの研究者が用語法に過重な重心をおいていたことを思えば、画期的な着眼点として評価できる。

彼のもう一つの功績はアポイキアの見直しであった。アポイキアは市民権を喪失するという通説は、Ehrenberg も含めて連綿と受け継がれてきた。しかし既に検討した Ehrenberg による四分法の考案は、「市民権理論」の綻びを修正する試み以外の何ものでもなかった。翻って言えば、それはこの理論の不備を表明していることにほかならない。Brunt はこの線をより進めて「市民権理論」の否定を試みたのである。彼が持ち出した論拠は「同等市民権」 isopolity であった。つまり、植民者は植民市にいる間、母市から遠く離れているために、実質的に母市市民権を行使することは出来ないが、一定の条件の下では、母市への帰還が許され、母市市民権が回復されるという仕組みである。アテナイについては直接的な証拠がないが、テラとキュレネ、東ロクリスとナウパクトス、ミレトスとその植民市、パロスとタソス、キュメとアスクラなどについてそれが見られることから、アテナイ人もこの習慣に従った可能性は十分にあると彼は考える。

このようにアポイコイが、潜在的にはあれ、母市市民権を保持していたとすれば、アポイキアとクレルーキアの分類基準は市民権ではあり得ない。ではそれはいったい何であったのか。ここで彼は 19 世紀末から行われていたもう一つの分類法、すなわち「自治体理論」を前面に押し出してくる。つ

まり問題は、植民者が自治体を形成するか否かにあり、①追放あるいは殺戮によって先住民がいなくなった所に建設された新しい地方自治体をアポイキア、②先住民のポリスが存続している所に入植する単なるクレーロス所有者の集団をクレルーキアと規定し、前者には、スキュロス、ヘスティアア、アイギナ、ポテイダイア、スキオネ、メロスが、後者には、ケルソネソス、ナクソス、アンドロス、カルキス、エレクトリア、ネアポリス、レムノス、イムブロス、シノペ、アミソス、アスタコス、レスボスが属するとしたのである。

クレルーキアの定義については、ここまでは Gauthier のそれと同じである。しかし違うのは、Brunt はクレルーキアを不在地主と規定した点である。彼のこのクレルーキア概念は、自らが認めるように、Jones のそれを継承したものであった¹⁸⁾。つまり、クレルーコイとは不在地主であり、クレーロスを分配された現地には赴かず、母市に留まってそこからの地代を受け取っていたとする考えである。これは既に前章で見た Beloch の説と本質的に同じものと評価して差し支えない。かつてレスボスに関する Beloch の説は、トゥキディデスのアオリスト型を無視してクレルーコイは現地に送られなかったと主張したため論駁された。Jones の説もまた同じ理由で否定されたが、Brunt はクレルーコイが一旦は現地に派遣されたことを認めた上で、彼らがそこに長くは留まらなかったこと、またカルキスとエレクトリアにもクレルーコイが駐留した証拠がないことを理由に、不在地主説を復活させたのである。

この時期の研究成果は、クレルーキアの本質が「市民権理論」から「自治体理論」へとその重心を移したことにあったと言える。確かに、そのこと自体は進展と言えるであろう。しかしそこから得られた、レスボスとカルキスこそ典型的なクレルーキアであるという結論は、20世紀初頭の「疑似クレルーキア」の焼き直しに過ぎなかった。ただ今回は「疑似」という不名誉な形容詞を廃して「典型的な」に換えたただけであった。

第4節 問題の放棄

このような研究状況において、ついに 70 年代になるとアポイキア・クレルーキア問題との決別を宣言するものが現れ始めた。Erxleben は¹⁹⁾、先行するクレルーキア研究の方法論について彼の論文の序文で次のように批判した。「この論文のテーマは、何よりもまずアポイキアとクレルーキアの区別を取り扱ったものではない。その理由は、一つには、二つの植民形態の法的な区分は、他の諸ポリスに対するアテナイの支配を具体的に研究しようとする我々の努力には殆ど役立たないからであり、今一つには、例えアポイキア・クレルーキア問題を取り扱う新たな研究が出たとしても、今日までに得られた成果を越えることは殆ど期待できないという状況にあるからである。」Schuller も同様に²⁰⁾、アポイキア・クレルーキア問題に関して、市民権を基準とする分類法は前 4 世紀以降の植民市について当てはまるものであり、それを前 5 世紀の植民市に遡及的に適用すべきではなく、前 5 世紀のアポイキア・クレルーキアという分類法が存在したことが否定出来ないとしても、その基準が何であったかは、史料の不足から不明であるとして見切りを付け、植民市と帝国支配の具体的な関係に主眼を置いた。このようにクレルーキア研究は、その本来の目的である帝国支配を見る一視点としての機能を果たさないと放棄されるに至ったのである。

その後、新たな挑戦がなされた。Figueira は²¹⁾、アテナイとアイギナという具体的な事例を基にして、植民形態と支配の実態とを結びつけようとした。彼は市民権を前 5 世紀植民市の決定的な分類基準とはしない点、遡及的方法論を取らない点を受け継ぎ、TLG を利用して今一度トゥキュディデスの用語法を分析し、その一貫性と碑文史料や他の文献史料との整合性を確認した。その結果、アポイキアとはポリスを形成する植民市のことであり、その構成要素となるエポイコイとは、あるポリスの反アテナイ派を追放した後、そのポリスを破壊せずに、親アテナイ派を増援するために送られた植民者であると定義する。一方、かつて議論の中心になっていたクレルーコイとは、レスボスをモデルとして、クレーロス保有者のことであり、クレルーキアとは、定住性を持たず、ポリスを形成しない、土地財産分配の過程を意味する語であるとし

た。従来クレルーコイに帰せられていたこのような軍事的機能は、実際にはエポイコイこそが担っていたとする点に彼の論の新しさがある。しかし、議論をレスボスから出発させる点、レスボスことクレルーキアの典型とする点は、60年代からの方法論と結論を踏襲したものと見なせるであろう。また Cargill は²⁹⁾、その題が示す前4世紀に限らず、アテナイ植民者に関する膨大なデータをまとめ、優れた研究材料を提供してくれた。これは新しいタイプの研究ではあるが、彼はアポイキア・クレルーキア問題について特に新しいことを言っている訳ではない。

日本におけるクレルーキア研究の動向は、欧米におけるそれに同調したものと言える。クレルーキアないしはクレルーコイ、クレロスという語は、ポリスの持つ共同体的性格、アテナイの帝国主義、市民権政策などとの関連において、多くの概説書および研究書に言及されているが、クレルーキアを正面から扱った邦語文献は少ない。最初に60年代末の真下英信「クレルーキア考(一)」および「クレルーキア考(二)」が挙げられる³⁰⁾。これは Ehrenberg の研究成果を取り入れて、前5世紀におけるクレルーキアの全体像を描いたものである。次に80年代に入ると、長島武之「前五世紀アテナイのクレルーキア」が挙げられる³¹⁾。これは Gauthier 説を紹介したものである。同じく80年代初期に出版された文献解説『ヨーロッパの成立』の第1部、第1章、第4節「前5世紀のギリシア世界」の項目では、クレルーキアがデロス同盟を支配する道具の一つとして説明されている³²⁾。しかし、80年代後半に出版された『西洋古代史料集』では、もはやクレルーキアという語は現われない³³⁾。また、90年代後半に出された『西洋古代史研究入門』では、I ギリシア史のIF「中心と周縁」において、前5世紀のアテナイ植民を説明する際に「従属的な植民市」という表現を用いて、クレルーキアと言う語の使用を明らかに避けている³⁴⁾。

おわりに 一再考に向けて一

今やクレルーキア研究がアテナイの帝国支配を理解する上では何の貢献もしないと見なされる状況は否定できない。アポイキアとクレルーキアが何を指すのであれ、アテナイの建設した植民市はいずれも母市に対して従属的であったと述べるだけで事足りるのである。これまでの約 100 年間、積み重ねられてきたアポイキア・クレルーキア問題に関する議論は、あっさりと放棄されてしまうしかないのであろうか。この問題に関して今までに書いてきた若干の拙論を紹介しつつ、新たな試みに向けて残された五つの課題を提起したい。

第一に、アポイキアという語から検討されなければならない。なぜならば Boeckh 以来、この語は疑いなく母市から政治的に独立した植民市を意味すると見なされ、そのことから、それと対になるクレルーキアという語はポリスを形成しない植民市であると自動的に了解されてきたからである。しかし実際には、アポイキアないしアポイコイという語が同時代人によって使われる場合、それらは政治的な分離をではなく、「同族の絆」を意味していた。従ってまず、アポイキア・クレルーキアという語は種族と関係の深い語であったことを再認識すべきであろう²⁸⁾。

第二に、クレルーキアの語が検討されなければならない。その際に問題となるのは κληρούχους ἀπέπεμψαν (Thuc.3.50.2) という記述である。これまでの研究は、この記述を根拠としてレスボスがクレルーキアであったと疑うことなく見なしてきた。しかしそもそもクレルーコイと表記された植民市をクレルーキアと見なすことが出来るのであろうか。Brunt が指摘したように、本来植民者はアポイコイともエポイコイともクレルーコイとも表記され得た。[ταῖ]ς ἀποικίαις καὶ κληρουχία[ις] (IG.I²237) が示すように、植民市の類型を探るためにはこれらの集合名詞をのみ追求すべきであろう。その結果、アポイキアとは「同種族共存植民」をクレルーキアとは「異種族追放植民」を意味するのではないかという仮説が成り立った²⁹⁾。

第三に、この仮説が各植民市の実態に即して検証されなければならない。その際に注意すべき点は、検出された例外によってこの仮説が損なわれる

ものではないということである。むしろこの例外にこそ、種族の虚構性を見出すべきである。種族とは自然に存在するものではなく、他者を統合するために、何者かが強い意志と努力をもって創り上げていくものである。アテナイが海外領土の獲得をどのようにして正当化したか、またその際に種族というアイデンティティーがどのように利用されたか、その過程をさぐるためには、エリート
の神話、伝承、宗教行為に着目することが肝要であろう。

第四に、植民者の市民権が再考察されなければならない³⁰⁾。従来の理論に従えば、古典期アテナイの植民者の多くは母市市民権を保有しており、そのために植民市は母市と緊密な関係を維持し、母市に対して従属的であったとされてきた。しかしこのような理論は成り立つのであろうか。例え法的には母市市民権を保有していたとしても、植民者の中には、母市市民から謂われのない差別を受けた者もいたし、逆に母市を手玉に取ろうとしたたかな者もいた。母市植民市関係を見るかつての眼差しは、母市から植民市ないしは植民者へ向けられたものであったが、植民者諸個人に視点を置き、彼らの目から母市ないし植民市を見ることによって、母市植民市関係の新たな側面が明らかになるのではないであろうか。

第五に、種族の統合の問題が検討されなければならない。既に見たように、古典期のアテナイ人が自らの植民市群を「同種族共存植民」と「異種族追放植民」とに分類していたとすれば、いずれにせよ「単種族植民」が建設されたことになる。このことから、少なくともアテナイ人がそのような都市建設を理想としていたことは窺える。つい最近まで自分たちが単一民族であると信じて疑わなかった多くの日本人にとっては、これは当たり前のように思われるかも知れないが、ギリシア世界においては必ずしもそうではなかった。ギリシアの周辺世界を見渡せば、シケリアやマケドニアなどでは権力者による都市破壊と住民移動が積極的に行われ、そこでは逆に「多種族植民」が指向されたようである。このようにアポイキア・クレルーキアという語を種族との関係で捉え直すことによって、アテナイ人の持っていたアイデンティティーおよび統合原理が見えてくるのではないであろうか。またクレルーキア研究の中心テ

ーマである帝国支配と植民の関係についても、従来の軍事力としての側面ばかりでなく、アイデンティティーによる統合という視点から見直すことは有効であろう。この点にこそ、廃れかけたアポイキア・クレルーキア問題を再考する意義があると思われる。

註

1) A. Boeckh, *Die Staatshaushaltung der Athener: herausgegeben und Anmerkungen begleitet von Max Fränkel*, 18. Von den Kleruchien (Berlin, 1886³) S.499-509. 1850², 1817¹.

2) Boeckh 以前にもクレルーキアに言及した研究はあったかも知れないが、K. F. Hermann/V. Thumser, *Lehnbuch der griechischen Staatsaltertümer* I. 2, § 77 Mitteilung des Bürgerrechtes, Kleruchen (Freiburg, 1892⁶) S.434-443 の参考文献表の中で最も古いものがこの Boeckh の著書であることから、19 世紀末において実際にこれがクレルーキア研究の先駆と考えられていたようである。

3) A. Kirchhoff, "Über die Tributpflichtigkeit der attischen Kleruchien", *Philologische und historische Abhandlungen der königlichen Akademie der Wissenschaft zu Berlin* (1873) S.1-35. この時期の先駆的な研究として、P. Foucart, "Mémoire sur les colonies athéniennes au cinquième et au quatrième siècle", *Mémoires présentés par divers savants à l'académie des inscriptions et Belles-Lettres de l'institut de France* I.9.I, (1878) p.323-413.

4) K. J. Beloch, *Bevölkerung der griechisch-römischen Welt* (Leipzig, 1886) S.81-83; Ders., *Griechische Geschichte* I (Strassburg, 1893) S.467-468.

5) H. Swoboda, "Zur Geschichte der attischen Kleruchien", *Seria Harteliana* (1896) S.28-32.

6) Ed. Meyer, *Forschung zur alten Geschichte* II, (Halle, 1899) S.182-183; ders., *Geschichte des Altertums* III. 1, (Stuttgart und Berlin, 1915) § 394, S.18-21.

7) H. Swoboda / K. F. Hermnn, *Lehnbuch der griechischen Altertümer* I. 3, § 23 Militärkolonien, (Tübingen, 1913) S.196-197. この時までの議論と成果をまとめたものとして、G.

Gilbert, *Handbuch der griechischen Staatsaltertümer* I, (Leipzig, 1881) S.502-510; M. Wagner, *Zur Geschichte der attischen Kleruchien*, (Tübingen, 1914) Diss; O. Schulthess, "Κληροῦχοι", *RE*, (Stuttgart) S.814-832; J. Oehler, " Ἀποικία ", *RE*, (Stuttgart) S.2823-2835; ders, " Ἐποικία ", *RE*, (Stuttgart) S.227-228; G. Busolt / H. Swoboda, *Griechische Staatskunde* II, (Stuttgart, 1926) S.1264-1280.

8) H. Berve, *Miltiades. Studien zur Geschichte des Mannes und seiner Zeit*, *Hermes*, Einzelschrift, 2, (1937).

9) V. Ehrenberg, "Zur älteren athenischen Kolonisation", *Eunomia : Studia Graeca et Romana*, I, (1939), S.11-32. = *id. Aspects of the Ancient World : Essays and Reviews* (Oxford, 1946) p.116-143. = *id. Polis und Imperium* (Zürich/Stuttgart, 1965) S.221-244.

10) B. D. Meritt /H. T. Wade-Gery /M. F. McGregor, *The Athenian Tribute Lists* III (Princeton, N.J, 1950) p.284-297. 貢納金と植民の関係について論じたものとして、H. Nesselhauf, *Untersuchungen zur Geschichte der delisch-attischen Symmachie*, *Klio*, Beif. 30, (1933) S.120-140.

11) V. Ehrenberg, "Thucydides on Athenian Colonization", *Cph* 47 (1952) p.143-149. = *id. Polis und Imperium* (Zürich/Stuttgart, 1965) p.245-253.

12) 用語法を巡る議論は一つの研究史をなしている。J. T. Vömel, *De discrimine vocabulorum Κληροῦχος, Ἀποικος, Ἐποικος*, Diss. (Frankfurt a.M, 1839); J. de Weber / R. van Compernelle, "La valeur des terms de « colonisation » chez Thucydide", *AC*, 36, (1967) p.461-532.

13) Ph. Gauthier, "Les clérouques de Lesbos et la colonisation athénienne au V^e siècle", *REG* 79 (1966) p.64-88.

14) H. Schaefer, "Eigenart und Wesenzüge der griechischen Kolonisation", *Heiderberger Jahrbücher* IV (1960) S.77-93.

15) F. Gschnitzer, "Abhängige Orte im griechischen Altertum", *Zetemata* 17 (München, 1958) S.88-112. 植民市の領土に関するものとして、F. Hampl, "Polis ohne Territorium", *Klio*, 32, (1939) S.1-60. それに対する反論として、A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece*, (Machester, 1964) Chapter IX Athens and Late Imperial Colonies, p.166-210.s

- 16) H. Swoboda, *op.cit.*, (1896); G. Busolt, *Griechische Geschichte* III. 2, (Ghota, 1904) S.1032-1033; II (1895) S.445-449; III (1897) S.411; A. W. Gomme, *A Historical Commentary on Thucydides* II. 50. 2, (Oxford, 1956) p.329.
- 17) P. A. Brunt, "Athenian Settlements Abroad in the Fifth Century B.C.", E. Badian (ed.), *Ancient Society and Institutions: Studies Presented to VICTOR EHRENBERG on His 75th Birthday* (Oxford, 1966) p.71-92.
- 18) A. H. M. Jones, "The Citizen Population of Athens during the Peloponnesian War", *The Economic Basis of the Athenian Democracy* (Oxford, 1957) p.161-180.
- 19) E. Erxleben, "Die Kleruchien auf Euböa und Lesbos und die Methode der attischen Herrschaft im 5 Jh", *Klio* 1.57 (1975) S.83-100.
- 20) W. Schuller, *Die Herrschaft der Athener im ersten attischen Seebund* (Berlin, 1974) S.13-32.
- 21) Th. J. Figueira, *Athens and Aigina in the Age of Imperial Colonization* (Baltimore, 1991) p.10; 19-20; 39; 47-48.
- 22) J. Cargill, *Athenian Settlements of the Fourth Century B.C.* (Leiden/New York/Köln, 1995)
- 23) 『史学』41.3、1969年、137-154頁。『史学』41.4、1969年、85-96頁。及び「初期アテナイの植民活動」『史学』43.4、1971年、105-118頁。
- 24) 『西洋史研究』10、1981年、1-24頁。
- 25) 前沢伸行・大江善男・平田隆一・松本宣郎・渡部治雄・佐藤伊久男篇、南総社、1981年、40頁。
- 26) 古山正人・中村純・田村孝・毛利晶・本村凌二・後藤篤子訳篇、東京大学出版会、1987年。
- 27) 伊藤貞夫・本村凌二篇、東京大学出版会、1997年。
- 28) 前野弘志、「アテナイ帝国主義と植民 —イオニア人の母市アテナイ—」、『季刊軍事史学』33.1、1997年、7-25頁。
- 29) 同、「[ΤΑΙ]Σ ΑΠΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ[ΙΣ] —クレールーキア概念の再検討 碑文史料 IG.I²237 の解釈をめぐって—」、『史学研究』191、1991年、34-52頁。同、「レームノス、イムプロス、スキュロス植民 —「クテーマタ型植

民」の検討一」、『史学研究』195、1992年、49-70頁。同、「ケルソネーソス、ナクソス、エウボイア植民 —エンクテーマタ型植民の検討一」、『西洋史学報』20、1993年、46-65頁。但し、これらの論文については、「アポイキアとクレルーキア —碑文史料 IG.P237の分析一」と改題してまとめる予定である。

30)同、「前5世紀におけるアテーナイ植民者の市民権 —その両義性をめぐって一」、『西洋古典学研究』43、1995年、32-41頁。同、「前4世紀におけるアテーナイ植民者の市民権 —「レームノス人」から「レームノスにおけるアテーナイ人」へ一」、『史学研究』212、49-66頁。

第 I 部 アテナイ植民の二つの類型

—仮説の設定—

第1章 アテナイ帝国主義とアポイキア

一 イオニア人の母市アテナイ 一

はじめに

前 500 年イオニア地方のギリシア諸市は、ペルシア帝国の支配からの解放を求めて反乱を起こした。反乱の首謀者であるミレトスの僭主アリスタゴラスは、援助要請のためにギリシアを訪れた。まず彼は、当代随一の軍事国家であるスパルタに赴き、クレオメネス王に援軍を請うた。しかし彼を説得することは出来なかった。次に、当時スパルタに次ぐ強国となっていたアテナイを訪れた。彼は民会に出席して、アジアがいかに豊かな土地であるか、ペルシア軍がいかに弱いかについて述べた後、それに加えて「ミレトス人はアテナイ人の植民者(アポイコイ)であり」 *Μιλήσιοι τῶν Ἀθηναίων εἰσὶ ἀποικοί*、それゆえにアテナイがミレトスを保護するのは当然であると主張した(Hdt.5.97)。アテナイ人は彼の要請を受け入れて、20 隻の軍船を派遣した。7 年間に渡るイオニア反乱は結局失敗に終わったが、それは新たな戦争の始まりとなった。派遣されたアテナイ艦隊がサルデイスの破壊に参加したことがダレイオス王にギリシア人に対する復讐を決意させたからである。前 481 年クセルクセス王の侵略が必至となった時、ギリシア人はスパルタの覇権の下でギリシア連合を結成してそれに対抗した。その後ペルシアから解放されたイオニア人は、スパルタ人パウサニアスの傲慢を嫌悪し、「同族の絆に従って」 *κατὰ τὸ ξυγγενές* アテナイ人が覇権を握ることを望み(Thuc.1.95.1)、前 477 年アテナイの覇権の下で新たに海上同盟が結成された。

以上は、イオニア反乱からデロス同盟の結成に至る経緯の概略であるが、ここで注目したいのは、これら二つの史料がともにアテナイとイオニア諸市の関係を母市と植民市の関係として説明している点である。つまり、アテナ

イはイオニア人の母市、イオニア人はアテナイの植民者であり、両者は同族の絆によって結ばれており、母市たるアテナイには植民者たるイオニア人を保護する義務があるという論理である。そしてここでは、植民市ないしは植民者を意味する語として、アポイキア ἀποικία、アポイコイ ἀποικοί という語が使われている。

ところで、アテナイの建設した植民市には、アポイキアとクレールーキアと呼ばれる二種類が存在していたことが知られている。このことは、これら二つの語が並記された前 5 世紀末の断片的な碑文史料によって証明される (IG.I²237 ; ταῖς ἀποικίαις καὶ κληροχίαις)。しかし、これらの語がそれぞれどのような植民を指していたのかについては、辞書的な解釈は 19 世紀後半にはほぼ確立され¹⁾、今日においてもなお通用しているものの²⁾、決定的な解釈は未だになされていない³⁾。辞書的定義によれば、アポイキアとはギリシアに一般的な古い形態であり、その特徴は母市からの独立性にある。一方、クレールーキアとは古典期のアテナイに特有な新しい形態であり、その特徴は母市に対する従属性にあるとされる。つまり、アポイキアが母市とは別個の市民権を有する独立したポリスを形成し、母市とは宗教的な絆によってのみ結び付き、それゆえに母市との間で戦争が起こることもあったのに対して、クレールーキアは母市市民権を保持し、母市から独立したポリスを形成しないことによって、母市との緊密な関係を維持し得たとされる。前者が専ら土地や交易地を求めての農業植民あるいは商業植民であったのに対して、後者はアテナイ帝国支配の尖兵としての軍事植民であったと定義される。

しかし、この辞書的定義と冒頭に紹介したヘロドトスやトゥキユデイスのアポイキアという語の用法とを比較すると、両者の意味合いに微妙なずれのあることが判る。即ち、アポイキアの本質を、19 世紀以来の定義は母市からの政治的独立に求めるが、同時代史料は母市との絆を示唆する。確かに、政治的独立と母市との絆とは矛盾しない。両者はコインの表裏の関係にある。しかし、当時のアテナイ人がどちらの側面に力点を置いてこの語を用いたかは、アテナイの母市植民市関係を検討する上で重大な問題となる。

本稿では、アポイキア・クレルーキアの諸問題を網羅的に取り扱うことはしない。ここでは、その問題を再検討すめための手がかりとして、今まで自明のこととして殆ど議論されることのなかったアポイキアについて敢えて考察したい。アポイキアの性格が自明のこととされてきた理由は、それがギリシア一般に見られる植民形態と見なされ、移住や大植民運動の時代における他の植民市との類推から既に一定の像が出来上がってしまっていたことにある。議論は、特殊アテナイ的な新しい植民形態であり、史料も少ないクレルーキアの方に集中してきた。その際、既知のアポイキアの定義がそれと対の関係にある未知のクレルーキアの定義に大きな影響を与えたことは見逃せない。ここに重大な方法論上の問題点があるように思われる。つまり、表向き議論はクレルーキアに集中してきたが、アポイキアの定義が既にクレルーキアの定義を規定してしまっていたのである。従って、クレルーキアを見直すためには、まずアポイキアを見直さなければならない。

先住民から土地を奪うこと自体、帝国主義的な行為であるが、植民がシステムとして具体的にどのようにアテナイの帝国支配に役立ったのかということについては、理論的に推測は出来るものの、史料によって跡付けることは、史料の少なさから、なかなか困難である。そこで、本稿の目的は、アポイキアという語がいかなる文脈の中で用いられてきたのかを明らかにすることによって、古典期のアテナイ人自身のアポイキアの定義を再現し、それとアテナイ帝国支配とのイデオロギー的な関わりを明らかにして、それをクレルーキア定義を見直すための出発点とすることにある。

第1節 大植民運動

古代ギリシアの歴史において、植民は恒常的な営みであった。しかしそれには大きく見て三つのピークがあった。第一は、ミュケナイ諸王国の崩壊に続く暗黒時代、前12世紀から前9世紀末にかけての住民の大規模な移住であり、この時にギリシアにおける諸種族の配置が確定された。第二は、前古典

期、ポリスの誕生にともなう前 8 世紀半ばから前 6 世紀半ばにかけての大植民運動であり、この時にポリス世界が地中海及び黒海一帯に拡大した。第三は、時代の主役がポリスから領域国家へ移行するヘレニズム期、前 4 世紀末以降のアレクサンドロス大王及びヘレニズム諸王や僭主たちによる大規模な植民および住民移動政策であり、この時にギリシア風の文化がはるかオリエントにまで広がった。そして、アテナイが最も活発に植民活動を展開したのは、第二と第三のピークの谷間の古典期で、ペルシア、アテナイ、スパルタ、テーベ、マケドニアが順次ギリシアの覇権を争った前 6 世紀末から前 4 世紀末にかけての約 200 年間であった。

イオニア人の母市たることを自他ともに認めるアテナイは、いかにしてイオニア人の母市となったのであろうか。その過程を跡付けるために、まず大植民運動とアテナイ植民活動との関わりを明らかにする必要がある。

ギリシア中央部に位置する母市群は(地図・表 1 参照)、前 8 世紀の半ばから前 6 世紀の半ばにかけて、南フランス、北イタリア、南イタリア、シチリア島、北西ギリシア、リビア、エーゲ海北岸、マルマラ海、黒海に渡る地域に多数の植民市群を建設した⁴⁾。史料から窺い知ることの出来る主要な植民市についてのみ示したが⁵⁾、実際にはそれを遥かに超える数の植民市が存在したに違いない。このような植民運動を包括的に把握することは難しいが、時期と距離に従って二つのカテゴリーに分けることが出来るであろう。第一は早い時期に母市から比較的近い地域に建設された植民市群、第二は遅い時期に母市から比較的遠い地域に建設された植民市群である。

第一のカテゴリーは、前 8 世紀半ばから前 7 世紀半ばにかけてのもので、地域によってさらに二つのサブカテゴリーに分けられる。一つは、エーゲ海北岸及びマルマラ海を目指した植民運動であり、もう一つは、南イタリア及びシチリア島を目指したものである。

エーゲ海北岸及びマルマラ海方面について見れば(地図・表 2 参照)⁶⁾、イオニア諸市の独壇場であった。ミレトスによるキュジコス(前 756 年)の建設、エレクトリアによるメトネ(前 733 年)の建設が最も早い時期のものとして記録さ

れている。ミレトスはその他、パリオン(前 709 年)、プロコンネソス(前 690 年頃)、アビュドス(前 680 から 652 年頃)、ラムプサコス(前 654 年)などを建設した。カルキスとアンドロスは、トロネ(前 650 年頃)やアカントス(前 655 年)をはじめとするカルキディケの諸市を建設した。また、パロスの植民市であるタソス(前 682 年)は、ガレプソス(前 650 から 625 年頃)、オイシュメ(前 650 から 625 年頃)、ストリュメ(前 650 年頃)を建設した。ドーリス人としてはメガラが早い時期にアスタコス(前 712 年)を建設し、次の世紀にはマルマラ海に、カルケドン(前 685 年)、セリュムブリア(前 668 年頃)、ピュザンティオン(前 661 年)を建設した。またコリントスは少し遅れてポティダイア(前 625 から 585 年頃)を建設した。レスボス諸市のアイオリス人は、それより遅れてヘレスポントス地方に、シゲイオン(前 600 年頃)、アッソス(前 600 から 500 年頃)、アロペコンネソス(不明)、マデュトス(不明)、セストス(不明)などを建設した。

南イタリア及びシチリア島方面について見れば(地図・表 3 参照)、アカイア人、イオニア人、ドーリス人がほぼ均一に展開した。この方面に近いアカイア人は、メタポントティオン(前 773 年)、シュバリス(前 720 年)、クロトン(前 709 年)を建設し、次の世紀にはそれらが母市となり、シュバリスはポセイドニア(前 625 から前 600 年頃)、ピュクソス(不明)、ラウス(不明)を、クロトンはカウロニア(前 650 年頃)、テリナ(前 500 年頃)、テメサ(前 500 年頃)を建設した。イオニア人では、カルキスとエレクトリアが主役を演じた。彼らはシチリア島を通りすぎ、まず南イタリアのピテクーサイ(前 750 から 725 年頃)を建設し、そこから対岸のキュメ(前 725 から 700 年頃)に進出した”。シチリア島では彼らはカタネー(前 737 年)、ナクソス(前 734 年)、ザンクレ(前 730 から前 720 年頃)、レギオン(前 730 から 720 年頃)、レオンティノイ(前 729 年)を建設した。そしてザンクレは、クニドスと共同でミュライ(前 716 年)を、ロクロイエピゼフュロイと共同でメタウロス(前 650 年頃)を、ミュライと共同でヒメラ(前 650 年頃)を建設した。ドーリス人のエースはコリントスであった。コリントスは、まずシュラクサイ(前 733 年)を建設し、シュラクサイは次の世紀にヘロロス(前 700 年頃)、アクライ(前 664 年)、カスメナイ(前 644 年)、カマリ

ナ(前 602 年)を建設した。コリントスは他に、コルキュラ(前 706 年)、アムブラキア(前 655 から 625 年頃)、レウカス(前 655 から 625 年頃)を建設し、コルキュラと共同でアナクトリオン(前 655 から 625 年頃)、アポロニア(前 589 年)を建設し、コルキュラは単独でエピダムノス(前 627 年)を建設した。スパルタも早い時期にタラス(前 706 年)を建設した⁹⁾。

第二のカテゴリーは、前 7 世紀半ばから前 6 世紀半ばにかけてのもので、その地域の主なものは、今述べた二つの地域の延長線上に位置する。南イタリア及びシチリア島の延長線上に南フランス沿岸がある(地図・表四参照)。そこには、イオニア人としては、フォカイアがマッサリア(前 600 年頃)を建設し、フォカイアとマッサリアが共同で、エムポリオン(前 600 から 575 年頃)、アラリア(前 565 年頃)、ニカイア(不明)、アガタ(前 600 から 500 年頃)を建設した。この地方にはアカイア人の植民市も混在していた。

エーゲ海北岸及びマルマラ海の延長線上には黒海がある(地図・表 5 参照)⁹⁾。黒海は前 6 世紀半ばまでイオニア人、特にミレトスの独壇場であった¹⁰⁾。ミレトスは早い時期にシノペ(前 756 年)を建設した。シノペは間もなくトラペズス(前 756 年)を建設し、後にはケラスス(不明)、コテュオラ(不明)も建設した。ミレトスは、次の世紀になって、イストロス(前 657 年)、オルビア(前 647 年)、ベレザン(前 647 年)、タナイス(前 625 から前 600 年頃)、アポロニアポンティカ(前 609 年)、パンティカパイオン(前 600 年頃)、ヘルモナッサ(前 600 から 575 年頃)など多数の植民市を建設し、パンティカパイオンはミレトスと共同でミュルメキオン(前 600 から 575 年頃)を建設し、また単独でテュリタケ(前 550 年頃)を建設した。ドーリス人が参入しはじめたのは、前 6 世紀後半になってからのことであった。メガラは単独でヘラクレイアポンティカ(前 560 年頃)を、またビュザンティオンと共同でメセンブリア(前 510 年)を建設した。ヘラクレイアポンティカはタウロスのケルソネソス(前 422 年)を建設した。

延長線上に位置しない地域としては、リビアが挙げられる(地図・表 6 参照)。リビアはドーリス人の独占であった¹¹⁾。テラはキュレネ(前 633 年)とアポロニア(前 600 年頃)を建設し、キュレネはその周辺にタウケイラ(前 630

年頃)、バルカ(前 560 から 550 年頃)、エウヘスベリデス(前 515 年)を建設した。また東地中海沿岸にも若干の植民市が建設されたが、見るべきものは殆ど無い(地図・表 7 参照)。エジプトのナウクラティス(前 700 年頃)は、ミレトスの主導で建設されたが、それはポリスではなく、様々な地方から来た雑多な商人たちの町であった。

第 2 節 アテナイの植民活動

考古学的調査によれば、前 8 世紀に全ギリシア的な規模で「人口爆発」が起こったことが明らかにされている。大植民運動がこの人口爆発と連動していることは間違いない。アテナイも当時この人口爆発を経験した。しかしアテナイは、余剰人口をアッティカ内部における再植民によって吸収することに成功した¹³⁾。そのために、アテナイの植民活動の開始の時期は他のポリスよりも遅く、大植民運動が終わりかけた時期になってやっと始まったのである。

初期の植民活動については詳しいことは分からない¹⁴⁾。シゲイオン(前 600 年頃)はフリュノンの主導で建設されたが、ミュティレネ人との抗争を経て、最終的にペイシストラトスが武力で奪還した(前 530 年)。フリュノンはまだエライウスにも植民を導いたと言われている。トラキアのケルソネソス(前 560 年頃)はペイシストラトスの計画に従って、大ミルティアデスによって植民された。

アテナイが本格的な植民活動を開始するのは、前 6 世紀末になってからのことである。前 6 世紀中頃からアテナイはサラミスの領有をめぐるメガラと抗争を続けていたが、この時期それに決着をつけて、サラミス(前 509 年)を建設した。またボイオティア軍とカルキス軍の侵入を防衛したアテナイ軍は、それらを追撃し、その勢いでカルキス(前 506 年)を植民した。当時ケルソネソスを統治していた小ミルティアデスは、そこから南下してレムノス(前 505 年頃)、イムブロス(前 505 年頃)の両島を征服し、アテナイに与えた。しかし、レムノスとイムブロス及びケルソネソスは前 493 年にペルシアに征服され、カ

ルキスの植民者はペルシア軍の侵入を恐れて前 490 年に撤退した。マラトンにペルシア軍を案内したヒッピアスの亡命先であるシゲイオンとアテナイとの関係は、既に疎遠となっていた。アテナイの領有に留まったのはサラミスだけであつた。

ペルシア戦争後、レムノスとイムブロスは逸早くアテナイとの関係を回復した。またデロス同盟が結成された当初、小ミルティアデスの子キモンの主導でエイオン(前 476 年頃)、スキュロス(前 473 年頃)、アムフィポリス(前 465 年頃)が建設された¹⁴⁾。

アテナイ植民活動は、前 5 世紀後半にそのピークを迎えた¹⁵⁾。前 449 年のカリアスの平和によってペルシアとの戦争は一応の終結を迎え、前 446 年の三十年の平和によってペロポネソス諸市との戦争にも一段落がつくと、存在理由を失ったデロス同盟から同盟諸市の離反が相次いだ。アテナイはペリクレスの指導の下に反乱を鎮圧した後、あるいは反アテナイ的分子をあるいは全ての市民を追放して、あるいは同盟ポリスの要請に応じて、ケルソネソス(前 447 年)、エウボイア(前 447 年頃)、ナクソス(前 447 頃)、アンドロス(前 447 年頃)、カルキス(前 446 年)、カリュストス(前 446 年頃)、エレトリア(前 446 年)、ヘスティアイア(前 446 年)、ブレア(前 445 年)、トゥリオイ(前 444 年)、アミノス(前 440 年)、シノペ(前 440 年)、アムフィポリス(前 437 年)、アスタコス(前 435 年)に植民者を送り込んだ。前 431 年にペロポネソス戦争が勃発した後も引き続いてアテナイは、アイギナ(前 431 年)、ポティダイア(前 429 年)、レスボス(前 427 年)、ノティオン(前 427 年)、スキオネ(前 421 年)、メロス(前 416 年)に植民した。これら植民市は、ペロポネソス戦争終結まで存続しなかったものもあつたが、存続したものも、サラミスを除いて、全て前 404 年の終戦とともに解体され、先住民に返還されるか、或いはアテナイとの関係を断ち切られて自治独立となつた。

前 4 世紀になるとさつそくアテナイは、喪失した植民市の回復を目論むようになった。アテナイは、前 394 年までにレムノス、イムブロス、スキュロスとの関係を回復していたようである。またケルソネソス領有も主張して、

そこに再び前 357 年と前 346 年に植民者を送り込んだ。前 361 年にはポティダイアの要請に応じて再び植民者を送り込んだ。一方アテナイは、新たにサモス(前 365 年)を植民した。はじめは植民者はサモス人とともに住んだが、追加植民を送り込んで(前 361 年と前 352 年)、ついには島を独占してしまった。またアテナイはアドリア方面(前 324 年)にも植民市を建設したらしいが、詳細は不明である。これらの植民市のうち、ケルソネソスは前 338 年のカイロネイアの敗北に伴って、サモスは前 322 年のラミアの敗北に伴って消滅した。残りの植民市は、アテナイがマケドニアに占領された後もしばらくは存続したが、サラミス、レムノス、イムプロスは前 318 年に、スキュロスは前 314 年にアテナイから分離された。

以上見てきたように、アテナイは大植民運動に全くと言っていいほど関与していなかった。ましてや、イオニアの諸市を建設したのでもなかった。つまり、アテナイは、実際にはイオニア人の母市ではなかったのである。それにも拘わらず、アテナイは前 500 年の時点でイオニア人の母市としての地位を獲得していた。これは非常に奇妙なことである。この逆説を可能にしたものは一体何だったのであろうか。

第 3 節 コドロス王伝説

コドロスとは自らの犠牲をもってペロポネソス軍の侵略から祖国アテナイを防衛したとされる伝説的なアテナイの王である。ポセイドンの家系に繋がる彼と彼の息子を巡る伝説は、アテナイの植民と深い係わりがある。伝説には様々なバージョンがあるが、その概略は以下の通りである。

コドロスの父メラントスは、メッセニアのピュロス王ネレウスの子孫であったが、ヘラクレイダイの侵入によって祖国を追われ、アテナイへ逃亡した。彼はアテナイのためにボイオティア王クサントスに対してよく戦ったので、テセイダイの王テュモイテスから王位を譲られた。メラントスの死後、息子のコドロスが王位を継いだ。彼はアテナイの女性と結婚して 21 年間王位にあっ

た。ペロポネソス軍がアテナイへ侵入してきた時、アテナイ王を殺さなければ勝利するであろうというデルフォイの神託を敵が受けたという情報をデルフォイ人のクレオマンテスからは聞き知り、王は貧しい身なりをして自ら敵陣に入り、兵と喧嘩してわざと殺された。はからずもアテナイ王を殺してしまったことを知ったペロポネソス軍は撤退した。かくしてコドロスは祖国アテナイを守り抜いたと言う¹⁶⁾。

コドロスには沢山の息子たちがいたとされる。ネレウスは、兄のメドンと王位を巡って争ったが、デルフォイの神託がメドンを支持したために、彼は他の兄弟たちとともにイオニア人を引き連れて小アジアへ移住し、イオニアの十二市を建設したという¹⁷⁾。コドロスの嫡子であるネレウスとアンドロクロスは、それぞれミレトスとエフェソスを建設した。ネレウスの子アイプュトスは、プリエネの創設者の一人となった。ダマシクトンとプロメトスは、コロフォンの創設者となった。また庶子のクノポス、キュドレロス、ナウクロスは、それぞれエリュトライ、ミュウス、テオスを建設した。アンドロポムポスは、レベドスを植民した。フォカイアは、コドロス家の王を受け入れるまではパンイオニア祭から除外されていたために、エリュトライからデオイテスとペリクロス、テオスからアバルトスを招いた。メラントスの四世代後の子孫であるアポイコス、テオスを植民した。アンドライモンは、カリア人をコロフォンから追放するのに尽力した。クレオポスは、イオニアの様々な植民市から住民を集めてエリュトライへ移住させた。ブレプソスとフォボスの双子はフォカイア出身であるが、フォボス(フォクソスともいう)はラムプサコスを植民した¹⁸⁾。

要するに、コドロス王伝説は、アテナイ王コドロスの子孫がイオニア諸市の創設者であるということを説いているのである。この伝説が史実ではないことは明らかであるが、これがドーリス人の侵入にともなう前 11 世紀中頃の混乱と民族移動を反映していることは間違いない¹⁹⁾。前 12 世紀末にドーリス人は、北部ギリシアから侵入し、アルゴリス、ラコニア、メッセニアを蹂躪し、さらに海を渡って、クレタ、テラ、メロス、ロドス、コス、クニドスなどに広がった。以前から住んでいたアイオリス人は、彼らに押し出される形で、

海を渡って、レスボス、テネドスなどへ移住した。イオニア人は、初めアイギアライと呼ばれ、後にアカイア人と呼ばれるようになった、もとはペロポネソスに住む人々であったが、アッティカへ避難し、そこから海を渡ってエーゲ海の島々や小アジア沿岸へ移住して行った²⁰⁾。そして、このイオニア移住を指導したのが先に述べたコドロス王の子孫たちであったと例の伝説は説明しているのである。トゥキュディデスは、こうして建設されたイオニア諸市をアポイキアと呼んでいる(Thuc.1.2.6)。

さて、この伝説が一定の史実をもとにした作り話であるとするならば、それはいつ誰によって、何の目的で創作されたのであろうか。実は、コドロスに関する史料は、前六世紀にまで遡るものは存在しないと言われている。前古典期の詩や壺絵もコドロスについては、何も記していないらしい。彼に関する最古のものとして、所謂ボローニャのコドロス皿があるが、それは前 470 年から前 460 年頃のものと言われている。またパウサニアスによれば(Paus.10.10.1)、アテナイ人がマラトンの戦利品によってデルフォイに立てたフェイディアスの像の中にコドロスのものもあったが、それも前 5 世紀後半のものであるらしい。またコドロスが殺された場所とされているイリッソス河の右岸には彼の聖域が彼の息子ネレウスとその妻バシレのそれと並んであったが、それも前 5 世紀より古いものではない。つまり、コドロス王の伝説は、前 5 世紀になってから作られたものであると考えられるのである²¹⁾。

コドリダイとはコドロスの子孫を意味するが、コドリダイという家柄はアッティカには存在せず、そもそもイオニア地方にあったものであった。つまりアテナイは、もともとイオニアで行われていたコドリダイの崇拜とメッセニアからの難民がアッティカを経由してイオニアへ出発したという古い記憶とを結び付けて、自らがイオニアの母市であることを喧伝するために、コドリダイと言う家名から連想される名祖コドロスをでっち上げ、彼がピュロスからアテナイに逃れて来て、アテナイの王となり、彼の子孫がイオニア十二市の創設者となったという伝説を創作したと考えられるのである²²⁾。

この伝説の創作にはアテナイ人のイオニア諸市に対する覇権を確立し

ようとする強い意思が読み取れる。アテナイは、コドロス伝説を持ち出すこと
によって、実際に自らが建設したのではないポリスの母市になろうとしたので
ある。コドロス伝説の成立年代が前5世紀初頭とすると、アリストゴラスの言
葉とほぼ同じか、或いはそれより少し新しいことになるだろう。とするとアテナイ
は、イオニアの母市になろうとする野心をコドロス伝説の創設以前から抱き、
前500年にはそれがある程度成功していたということになるであろう。では、
それ以前にはどのような手段が用いられていたのでしょうか。

第4節 デロス島の清祓

神話によれば、デロス島は、ゼウスに愛されたレトがヘラの呪を逃れ
てアポロンとアルテミスの二神を生んだ所であり、それまで根なしの浮島であ
ったが、その際にゼウスによって海底に繋がれたとされている。キュクラデス
諸島の中央に位置する最小のこの島は、交通の要所でもあり、またアポロン崇
拝に代表される古くからのイオニア人の宗教的中心地でもあった²³⁾。ホメロス
は、デロス=アポロンの賛歌の中で「そこには裾長き礼服を着たイオニア人が
妻子を伴って集い寄り、競技を催し、拳闘・舞踊・歌をもってアポロンを称え
た」と歌っている²⁴⁾。

この集会はアムフィクテュオニアの一種であった。アムフィクテュオ
ニアは隣保同盟あるいは神事同盟とも訳されるが、これは特定の時期になされ
る特定の祭祀、供儀、奉納、祭典などの宗教的義務を共同で実施するために、
一つの神殿を中心として諸ポリスや諸種族によって結成された統合の一形態で
ある。これは本来宗教的な統合であったが、必要に応じて政治的、軍事的機能
をも発揮した²⁵⁾。アテナイもデロスのアムフィクテュオニアの一員で、既にソ
ロンの時代に名門から選ばれた聖使デリアスタイを派遣していた
(Athen.Deipn.6.234)。

ペイストラトスが活発な宗教政策を行ったことはよく知られてい
る。彼は、デルフォイやオリュムピアとは付かず離れずの関係を保っていたが、

デロスに対しては積極的な行動をとった。彼は、正確な年代は判らないが、前6世紀の後半に、その島の神域の周辺に埋葬されていた遺体を全て掘り起こして、島の別の場所へ移した(Hdt.1.64)。これはデロスに対する指導権が自分にあるということを誇示するための示威行動であったと考えられる。実際に、ソロンの時代から既にアテナイ人は、自分たちがイオニアの母市であるという意識を持っていたことがソロンの詩から窺われるが(Aristot.Ath.Pol.5.2)²⁶⁾、ペイシストラトスの行動はこの意識に従ってなされたものと言えるであろう。彼はまた、これに先立って、デロス島のすぐ近くに位置するナクソス島を攻略し、盟友であるリュグダミスを僭主に就けて統治させていた。ナクソスはキュクラデス諸島最大のポリスで、前7世紀から前6世紀にかけてデロスにおける祭祀を牛耳っていた。彼のナクソス攻略の目的は、ナクソスのデロスに対する影響力を削ぎ、アテナイのデロス進出の地ならしをすることにあつたと考えられる²⁷⁾。

前477年におけるデロス同盟の結成もこの延長線上に位置付けられるものであろう。それに先立って前481年秋にクセルクセスの侵攻が必至となった時、恐らくスパルタとアテナイの呼びかけに応じて、ペルシアとの決戦を決意した30前後ほどのポリスの代表団がイストミアのポセイドン神殿に会し、互いに宣誓を交すことによってギリシア連合が結成されていたが、デロス同盟はそれを母体として生まれた²⁸⁾。ギリシア連合からデロス同盟へと移行していく過程に関しては複雑な議論があるが、ここで注目したいのは、同盟金庫と同盟代表者会議がデロス島に設置され、その結成に際してはイオニア人が重要な役割を果たしたという点である。このことは、デロス同盟が現代的な意味における単なる軍事同盟ではなく、本来デロスのアムフィクテュオニアを継承したものであつたことを示している。

同盟結成の目的についても議論があるが、基本的にはペルシア再来の脅威に備えたアテナイとイオニア諸ポリスの間の攻守同盟であり、それにペイシストラトス以来のアテナイの権力志向が結び付いていたと考えることは的外れではあるまい。同盟のメンバーの中核は、小アジア西岸のイオニア諸ポリス、ヘレスポントス、プロポンティス、エーゲ海の島々の諸ポリスであり、その数

は正確には分からないが、前 454/3 年から前 451/0 年までの第一査定期における
貢納表からの推定では、141 から 163 程であったと推測されている²⁹⁾。

前 450 年以降、同盟の盟主から帝国の覇者へとその性格を変えていっ
たアテナイは、帝国の統合のために軍事、制度の整備のみならず、宗教政策も
積極的に行った。代表的な例として、大パンアテナイア祭、エレウシスの祭儀、
デリア祭などが挙げられるが³⁰⁾、ここでは大パンアテナイア祭に注目したい。
この祭は前 440 年代はじめに帝国祭式化したと考えられているが、前 425 年の
貢納金の査定碑文は (IG.I⁷71.56-58)、査定された全ポリスに対して「牛一頭と武
具一式」を奉納するよう βὸ[ν καὶ πανθοπ]λ[ίαν ἀπά]γεν ἐς Παναθ[ε]νάια
τὰ με[γάλα] θαπάσας 命じている。特に興味深いのは、もし復元が正しけ
れば、全ての参加ポリスは「アポイコイと同様に」祭礼行列に供物をもって参
加せよ πεμπόντων δ[ὲ ἐν] τῆι πομπῆι [καθάπερ ἀποι]κ[οι という箇所であ
る。アテナイが実際に建設した植民市であるブレアの碑文にも「牛一頭と武具
一式」の奉納規定 βούν δὲ καὶ π[ανθοπλ]ίαν ἀπ[ά]γεν ἐς Παναθ[ε]νάια τὰ
μεγάλ[α] が見られることから (IG.I⁷46.11-12)、アテナイの植民市がそうしてい
たことは理解できる。しかし、条文はそれに止まらず、同じことを全同盟ポリ
スに対して命じているのである。同盟の中には非イオニア人のポリスも含まれ
ていた。今やアポイキアという言葉は、イオニア人という種族の枠を超えて、
全ての同盟ポリスを意味するようになりつつあったのである³¹⁾。その前年の前
426 年には、アテナイは再びデロスを清祓し、デリア祭を創設して、イオニア
の母市であることを喧伝していた³²⁾。

おわりに

これまでの考察から、アポイキアという語は、常に母市と植民市の絆
という文脈で用いられてきたことが明らかとなった。大植民運動の波に取り残
されたアテナイは、事実上イオニア人の母市ではあり得なかった。しかし、ペ

イストラティダイやフィライダイを推進者として海外での権力を志向していたアテナイは、デロス島の清祓を敢行し、コドロス王伝説を創作して、自らをイオニア人の母市の座に就けようと努力した³³⁾。また帝国期には国家祭儀を創設し、その場で同盟諸ポリスに自分たちがイオニア人として同族であると想像することを強要した。そうすることによってアテナイは、イオニア人を統合し、イオニア人の母市としてその頂点に立とうとしたのである。言い替えると、古典期のアテナイ人にとってアポイキア・アポイコイという語は、アテナイと同盟ポリスの関係を同族の絆に基づいて母市植民市の関係にすり替え、植民市に対する保護の名目でそれらを支配するための帝国主義の言説であったと看做せるのではないであろうか。

植民市と訳される ἀποικία という語は、「分離」を意味する接頭辞 ἀπό と「家」を意味する οἰκία との合成語であり、本来「家の分かれ」を意味する。しかし忘れてはならないことは、接頭辞アポには、それと表裏一体の関係において、「出自」をも意味するということである。つまりアポイキアという語は、一面では政治的な分離独立を意味するが、他面では同族としての精神的な繋がりをも意味する語なのである。この二面性は今まで無視されてきたのでは決してなかったが、これら二つの意味のうち政治的独立の側面を選び取ってアポイキアの本質としたのは、クレールーキアの定義の基礎を作り上げた 19 世紀のドイツの学者たちであった。彼らの関心がそもそも同盟関係にあったために、彼らは専ら政治的な側面に注目し、まずアポイキアとは母市から政治的に独立してアテナイと同盟関係にある植民市と定義し、次にそれとペアになる植民形態として母市に従属的なクレールーキア像を作り上げたのであろう³⁴⁾。しかし、以上の考察の結果が示すように、アテナイ人が用いるアポイキア・アポイコイという語からはむしろ同族意識を読み取るべきではないであろうか。この見方はアポイキア・クレールーキア問題を見直す新たな出発点になるかも知れない。

註

-
- 1) Oehler, s.v., Apoikia, *Paulys Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft*, Georg Wissowa, Hrsg. (Stuttgart : Alfred Druckenmüller Verlag, 1894) 以下 *RE* と略す ; Schulthess, s.v., κληρούχοι, *ibid*, 1921.
- 2) A.J.Graham, s.v., cleruchy, *The Oxford Classical Dictionary*, Second Edition, N.G.L. Hammond and H.H. Schullard, eds. (Oxford : Oxford University Press, 1979) ; Heinz Bellen, s.v., Kleruchoi, *Der Kleine Pauly Lexikon der Antike* in fünf Bänden, Konrat Ziegler und Walther Sontheimer, Hrsg. (München : Deutschen Taschenbuch Verlag, 1979) ; David Sacks, s.v., colonization, *Encyclopedia of the Ancient Greek World* (New York : Facts On File, 1995) ; Claude Mossé, s.v., Clerouquies, *Dictionnaire de la civilisation grecque* (Bruxelles : Éditions Complexe, 1992) ; M.C. Howatson, s.v., Kleruch, *Reclams Lexicon der Antike* (Stuttgart : Philipp Reclam jun, 1996).
- 3) Thomas J. Figueira, *Athens and Aigina in the Age of Imperial Colonization* (Baltimore and London : The Johns Hopkins University Press, 1991) ; Jack Cargill, *Athenian Settlements of the Fourth Century B.C.* (Leiden, New York, and Köln : E.J.Brill, 1995).
- 4) 大植民運動の概観については以下を参照。清永昭次「国制転換のダイナミズム」(『岩波講座世界歴史』古代 1、1969年5月)466-469頁、古川堅治「ギリシア植民者の日常生活 — Paul Faure, *La Vie Quotidienne des Colons Grecs de la mer Noire à l'Atlantique au siècle de Pythagore, VI^e siècle avant J.-C.*, Hachette, Paris, 437pp. 1978. 解説と翻訳—(その5)」(『独協大学教養諸学研究』第30巻1号、1995年10月)94-135頁。A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece* (Manchester : Manchester University Press, 1964) ; A. J. Graham, s.v., COLONIZATION, GREEK, *The Oxford Classical Dictionary*, Second Edition (Oxford : Oxford University Press, First Edition 1970, Reprinted 1979) ; A. J. Graham, The Colonial Expansion of Greece, *The Cambridge Ancient History Volume III, The Expansion of the Greek World, Eighth to Sixth Centuries B.C.*, John Boardman, N. G. L. Hammond, eds (Cambridge, London, New York, New Rochelle, Melbourne, and Sydney : Cambridge University Press, Second Edition 1982), pp. 83-162 ; Robin Osborne, *Greece in the Making 1200 - 479 BC* (London and New York : Routledge, 1996) ; Getzel M. Cohen, *The Hellenistic Settlements in Europe, the Islands, and Asia Minor* (Berkeley, Los Angeles, and

Oxford : University of California Press, 1995).

5) この地図と表は、専ら A. J. Graham, *op. cit.*, 1982 を元にして作成した。

6) エーゲ海北岸については以下を参照。馬場恵二「前 6・5 世紀のエーゲ海北岸のトラキアとギリシア世界」(『駿台史学』第 69 号、1987 年 2 月)1-34 頁、Benjamin Isaac, *The Greek Settlements in Thrace until the Macedonian Conquest* (Leiden : E.J.Brill, 1986)。

7) イタリア及びシチリアについては、桜井万里子「古代ギリシア・アーケイック期初期の植民活動 ―ギリシア人と先住民」(『地理と歴史』第 345 号、1984 年)1-14 頁、参照。

8) タラス植民については、清永昭次「パルテニアイのタラス植民」(『学習院史学』第 7 号、1970 年)1-14 頁、Irak Malkin, *Myth and Territory in the Spartan Mediterranean* (Cambridge : Cambridge University Press, 1994)、参照。

9) 黒海方面の植民については以下を参照。保田孝一「黒海北岸地方のギリシア植民市における農業 ―ケルソネソスの場合―」(『史学雑誌』第 67 篇第 9 号、1958 年 9 月)47-64 頁、篠崎三男「黒海北岸のギリシア世界」(弓削徹・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ ―古典古代の比較史的考察―』河出書房新社、1988 年 4 月)495-519 頁、同「黒海北岸のギリシア植民市と土着住民」(『歴史学研究』増刊号、1996 年 10 月)142-150 頁。

10) ミレトスの植民については、Norbert Ehrhard, *Milet und seine Kolonien* (Frankfurt am Main, Bern, New York, and Paris : Peter Lamg, 1988) 参照。

11) 前掲「古代ギリシア・アーケイック期初期の植民活動 ―ギリシア人と先住民」1-14 頁、参照。

12) Whitehead, D., *The Demes of Attica 509/7 - ca . 250 B.C., A political and social study* (Princeton : Princeton University Press, 1986), pp. 5-9.

13) アテナイの初期の植民については、真下英信「初期アテーナイの植民活動」(『史学』第 43 巻第 4 号、1971 年 5 月)105-118 頁、Victor Ehrenberg, "Zur älteren Athenischen Kolonisation", ders, *Polis und Imperium* (Zürich und Stuttgart : Artemis, 1965), S. 221-244.

14) キモンについては、桜井万里子「「雅量」の人・キモン — そのエートスのアテナイ民主政における位置 —」（桜井万里子『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年）371-389頁、参照。

15) 前五世紀のアテナイ植民については以下を参照。真下英信「クレールーキア考(一)」(『史学』第41巻第3号、1968年)137-154頁、同「クレールーキア考(二)」(『史学』第41巻第4号、1969年3月)85-96頁、長島武之「前五世紀アテナイのクレールーキア」(『西洋史研究』第10号、1980年)1-24頁、森谷公俊「古典期アテネの帝国支配」(『歴史学研究』別冊特集、1983年)50-58頁、前野弘志「[ΤΑΙ]Σ ΑΠΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ[ΙΣ] クレールーキア概念の再検討 碑文史料 IG.I²237 の解釈をめぐって」(『史学研究』第191号、1991年3月)34-52頁、同「レームノス、イムブロス、スキュロス植民 — 「クテーマタ型植民」の検討 —」(『史学研究』第195号、1992年2月)49-70頁、同「ケルソネーソス、ナクソス、エウボイア植民 — 「エンクテーマタ型植民」の検討 —」(『西洋史学報』第20号、1993年3月)46-65頁、同「前5世紀におけるアテナイ植民者の市民権 — その両義性をめぐって —」(『西洋古典学研究』第43号、1995年)32-41頁、同「前4世紀におけるアテナイ植民者の市民権 「レームノス人」から「レームノスにおけるアテナイ人」へ」(『史学研究』第212号、1996年6月)49-66頁、Georg Busolt / Heinrich Swoboda, *Griechische Staatskunde*, zweite Hälfte (München: C.H. Beck'sche Verlagbuchhandlung, 1926), S. 1271-1280.

16) 高津春繁「コドロス」『ギリシア・ローマ神話辞典』(岩波書店、1960年)。

17) イオニアの十二市とは、ミレトス、ミュウス、プリエネ、エフェソス、コロフォン、レベドス、テオス、クラゾメナイ、フォカイア、サモス、キオス、エリュトライを指す。

18) Scherling, *RE*, s.v., Kodros, S. 987-988.

19) コドロス王の没年は、前1068年とも前1088年とも前1091年とも言われている(Scherling, *ibid.*, S. 986)。

20) Leonard Whibley, ed, *A Companion to Greek Studies*, Fourth Edition, Revised (Cambridge: Cambridge University Press, 1931), p.82.

- 21) Scherling, *op.cit.*, S. 986-992.
- 22) Scherling, *ibid.*, S. 988-993.
- 23) 高津春繁「デーロス島」前掲『ギリシア・ローマ神話辞典』。
- 24) 高山十一「神事同盟」(同『ギリシア社会史研究』未来社、1970年)168頁。
- 25) 前掲「神事同盟」163-168頁。
- 26) 「私は識る、そしてイアオニアの最も古き地の切り殺されるのを眺めるとき私の心の奥底に苦痛が横たわる。」アリストテレス『アテナイ人の国制』村川堅太郎訳(岩波書店、1980年)第5章注(2)参照。
- 27) 桜井万里子「ポリスと宗教」(前掲『古代ギリシア社会史研究』)26-30頁。
- 28) 馬場恵二「デロス同盟とアテナイ民主政」(『岩波講座世界歴史』古代2、1969年)18-19頁。
- 29) 前掲「デロス同盟とアテナイ民主政」30頁。
- 30) 笠原匡子「宗教政策から見た前五世紀アテナイの対同盟政策」(『関学西洋史論集』第12号、1983年3月)1-13頁。
- 31) Wolfgang Schuller, *Die Herrschaft der Athener im Ersten Attischen Seebund* (Berlin und New York: Walter de Gruyter, 1974), S. 112-117.
- 32) 前掲「神事同盟」168-172頁。
- 33) ペイシストラトス一族は、コドロスの末裔とされている。「彼らはピュロス人でネレウス一族の末裔であり、彼等からコドロスとメラントスの一門がでた。これらの者たちはもともとは他所からやって来た新参者でありながら、アテナイの王になったのである。そしてこのことを記念するために、ヒッポクラテスは、ネストルの子ペイシストラトスに因んで、自分の子にペイシストラトスという名を付けたのである。」(Hdt.5.65)
- 34) August Boeckh, *Die Staatshaushaltung der Athener*, Reprinted in the Netherlands: Georg Reimer, 1967, S.499-509, 3 Aufl. Berlin, 1886, 1 Aufl. 1817.

第2章 アポイキアとクレールーキア

— 碑文史料 IG. I'237 の分析 —

はじめに

これから考察する碑文史料は¹⁾、かつて IG. I'140 に登録され、そこでは漠然と前 445/4 年から前 405/4 年の間に刻まれた様々な税に関するもの DE VECTIGALIBUS と題されていたが、今では IG. I'237 に再登録されて²⁾、より具体的に前 410 年から前 404 年までの間にニコマコスが編纂した法 LEGES A. 410-404 の一つと看做されるている³⁾。小稿はニコマコスの法を扱うものではないが、この碑文の 9 行目に見える一句に注目する。なぜならば、そこにはアテナイの二つの植民類型を示すと考えられる二語が、[ΤΑΙ]Σ ΑΠΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ [ΙΣ]と並んで刻まれているからである⁴⁾。この種の史料は今のところ他に例がない。それ故にこの碑文は、アテナイ植民市の二類型の存在を裏付ける唯一の証拠として見なされてきた。しかしあまりにも断片的であるために、書かれた内容については詳しい考察がなされてこなかったようである。

小稿の目的は、①アポイキア・クレールーキア問題の研究史を概観し、その問題点を明らかにすること、②この碑文の内容を検討し、これら二つの語が刻まれた文脈を明らかにすること、③それぞれの語が具体的に何を意味し、どの植民市を指しているのかを考察すること、④得られた結論からアポイキア・クレールーキア問題の新たな意義付けを試みることにある。

の軍隊を備えた自立的なポリスの体裁を備えて、植民者が定住することを前提に建設されたのか、或いは、それらの諸機関が備わっておらず、植民者はあたかも駐留軍のようにそこに滞在し、軍事に専念していたのかに掛かっている。アポイキアとは前者の類型を、クレールーキアとは後者の類型を意味していた。

30年代から今日に至るまでの研究は、細かな差異はあるものの、概ねこの線で一致していると思なしてよい⁹⁾。しかしこの新説は、旧説に取って代わり、辞書項目の内容に書き換えを迫る程の説得力を発揮するには至らなかった。第一の理由は、新説の本質が実は旧説のサブカテゴリーとして既に19世紀後半から議論されていたことであり、今世紀の50年代から60年代にかけての激しい論争の末にたどり着いた結論が正しく旧説の焼き直しに過ぎなかったことへの失望である。第二の理由は、個々の植民市の具体的な検証が進むに連れて、学者によってアポイキアと呼ばれようともクレールーキアと呼ばれようとも、前5世紀にアテナイが建設した植民市は皆、多かれ少なかれ軍事的機能を果たしていたということが明らかになり、敢えて分類することの意味がなくなったことである。このようにして70年代には、アポイキア・クレールーキア問題を解決することの意義自体が無意味と見なされ、放棄されてしまったのである⁹⁾。今日、異民族接触、文化変容、共生というテーマで盛んな古代ギリシア植民市研究の分野において、アポイキア・クレールーキア問題は全くの隅に追いやられてしまった状態にある。

この問題の研究が停滞していることの原因は、方法論において幾つかのセオリーが出来上がってしまい、各論者がそれらに乗っ取って論を進めたことにあると考えられる。それは尤もなことではあるが、それらのセオリー自体には再検討の余地がなかったのであろうか。今日までの研究史を整理してそのセオリーをまとめると、以下の9点に集約されるであろう。

1. 全ての碑文史料は公式な用語法を用いている。
2. 文献史料は必ずしも公式な用語法を用いているとは限らない。
3. クレールーコイはクレールーキアの構成要素である。

4. レスポスとカルキスは間違いなくクレルーキアである。
5. クレルーキアはポリスを形成しない。
6. 前5世紀の用語法は前4世紀の用語法と異なる。
7. アポイキア・クレルーキアの分類は前6世紀から存在した。
8. 市民権は植民市分類の決定的な基準ではない。
9. 決定的な分類基準は植民市がポリスを形成するか否かである。

これらの9つのセオリーは以下のように互いに関連している。まず、クレルーキアの定義においてカルキスとレスポスが議論の出発点になることが多いが、その理由はセオリー1とセオリー2にある。つまり、レスポスへの植民者は、碑文史料によってもトゥキュディデスによってもクレルーコイと表記されているから(IG.I³66; Thuc.3.50.2)、レスポスは間違いなくクレルーキアであると見なされるのである。またヘロドトスもカルキスへの植民者をクレルーコイと表記しており(Hdt.5.77; 6.100.)、レスポスとカルキスには4つの共通点が見いだせる。①先住民の一部のみを追放して植民が行われたこと、②先住民のポリスは存続したこと、③植民者は恒常的にそこに止まった形跡を残さなかったこと、④彼等は土地を先住民に賃貸したことである。このことからセオリー4とセオリー5が導き出された。セオリー1は頷ける。しかしセオリー2は疑問が残る。なぜ私的な文章は不正確であると思なされなければならないのであろうか。それにも増してセオリー4とセオリー5は議論の余地があるように思われる。なぜならば、それらの妥当性はセオリー3にかかっているからである。実際にはセオリー3を根拠付けるものは何もない。それは、クレルーコイとクレルーキアという語が互いに似ているということからきた先入観に過ぎない。それにもかかわらず、この理論は暗黙の了解に基づいて使用されてきた。これは自明なことなのであろうか。

レムノスから出土した前387/6-386/5年の碑文史料(IG.II.I³30)は、その植民者をクレルーコイと表記している。しかしレムノスはポリスを形成するタイプの植民市なので、この事実によってセオリー1とセオリー5の矛盾が明

らかとなる。そこでセオリー 6 が必要となる。しかしこの理論も受け入れることは出来ない。確かにペロポネソス戦争の終結は大きな変革をもたらしたであろうが、用語がこのように短い期間に、しかも従来の意味と全く反対になるように変化したとは考え難いからである。また変化したとすれば、一体何のためにそうしたのであろうか。アポイキア・クレルーキアという用語法は、前 5 世紀・前 4 世紀を通して変わらなかったと考えるほうが自然であろう。

セオリー 7 に従えば、前 506 年に建設されたカルキス植民が最古のクレルーキアというところになる。しかしこの結論もセオリー 3 にかかっている。従って、セオリー 3 はアポイキア・クレルーキア問題の要であると言える。ここでは、植民者の市民権について考察する余裕はないが、セオリー 8 とセオリー 9 に対する部分的な同意が示されるであろう。小稿では、これらの 9 つのセオリーが順次検証されるであろう。

第 2 節 IG.I²37 の分析

この碑文は残念ながら判読可能な僅か 47 語から構成される断片史料であり、完結した文章は一つもない。碑文の左端は残されているが、右端が失われるいるので、一行の文字数も不明である。そこでこの碑文の内容を知る方法としてキーワードの分析を試みたい。つまり、まずこの断片碑文の中からキーとなる単語あるいは語句を抽出し、次にそれらと同じキーワードを含み且つ内容が明確に判る他の碑文史料と比較して、この碑文の内容を類推するという方法である。結果を先取りして言えば、これは公有地ないしは神域の賃貸契約の内容と非常に似ているように思われる。

第 1 のキーワードは、3 行目の καρπῶ、4 行目の γλεῦκ[ος、そして 5 行目の μέλιτ[ος である。タソスで出土した前 425 年から前 400 年の間の葡萄酒販売に関する罰則規定を定めた碑文がヒントとなる (IG.XII.suppl.347.)。γλεῦκος μηδὲ οἶνον τῷ καρπῷ τῷ ἐπὶ τῆς ἀμπέ[λοις ὦν]εσθαι πρὸ νεομηνίης Πλυντηριῶνος· ὃ δ' ἂν πα[ραβάς] πρίηται, ὀφείλεν στατήρα παρὰ στατήρα. 「葡萄の樹になる果実

から作られた新酒も葡萄酒もプリュンテリオン月の新月より前に買ってはならない。もしこれに違反して買った者は、1 スタテールに付き 1 スタテールの罰金を支払うべきこと」ここには例の3語のうち γλεῦκος と καρπῶがそれぞれ「新酒」「果実」の意味で、οἶνον「葡萄酒」、ἀμπέ[λοις]「葡萄の樹」と並んで現われている¹⁰⁾。μέλιτος は見当たらないが、ヘシュキオスによれば (Hesch, s.v. μέλι)、μελιτόν κηρίον, ἢ τὸ ἐφθὸν γλεῦκος. 「メリトン、蜂の巣あるいは精製された新酒」とある¹¹⁾。従ってこれら3語は葡萄酒製造の文脈で読まれるべきであろう¹²⁾。

第2のキーワードは、繰り返し現わる ὑπὲρ ἐκάστο のパターンである。これは、2行目には ημιοβέ]λιον ὑπὲρ ἑκ[άστο 「～半オボロス、～に付き」¹³⁾、3行目から4行目にかけては ὑπ]ὲρ ἐκάστο 「～に付き」、4行目から5行目にかけて ὑπὲρ ἐκάστο ἀμφ]ορέος ὀβολόν 「1アンフォレウスに付き1オボロス」の形で現われる。これと似たパターンを含んだ史料として、前4世紀のアモルゴスにおける神域の賃貸契約碑文が挙げられる (Di.Syll.963.)。賃借人はまず保証人を立て、神殿管理人に相当のものを抵当に入れて土地家屋を賃借したが、ここで興味深いのは、借地で行われる葡萄及び無花果の栽培に関して事細かな規定がなされ、その規定に違反した際の罰金が詳しく記載されている点である。例えば、土地は連年ではなく1年交代で耕作すること、樹の暫定は決められた時に行うことが述べられた後で、もし契約に違反して作られたものについては、ἀποτείσει τῆς ἀ]μ[π]έλο[υ] ἐ[κ]άστης καὶ συκῆ[ς] ὀβολόν, ἀρότου ἐκάστου ζυγοῦ τρεῖς δραχμάς. 「葡萄の樹1本、無花果の樹1本に付き1オボロス、1ジュゴンの作物に付き3ドラクマを支払え (18-13)」。倒れた垣根については、自分で立て直せという規定の後に、εἰάν δὲ μὴ ἀνορθώσει, ὀφειλέτω ἐκάστης ὀρ[γυιάς] δραχμήν. 「もし立て直さないならば、1オルギュイアに付き1ドラクマの罰金を支払え (18-19)」。施肥については、毎年13メディムノス入る籠で150杯分の肥料を投入せよという規定の後で、εἰάν δὲ μὴ ἐμβάλῃ, ἀποτείσει ἐκάστης ἀρσίχου τριώβολο[υ]. 「もし投入しない場合には、1籠に付き3オボロスの罰金を支払え (22-23)」。もしその農民が土地を手放す時には、150杯分の肥料を残

し、神殿管理人の目の前で 13 メディムノス入る籠で量れという規定の後に、
εάν δὲ μὴ παραμετρήσει, [ἀπ]οτεισάτω ἐκάσ[της] ἀρσίχου δραχμῆν. 「もし量ら
ないならば、1 籠に付き 1 ドラクマ支払え (43-44)」。植樹については、εάν δὲ μὴ
ἐμφυτε[ύσει] τὰ φυτὰ, ἀποτεισάτω ἐκάστου δραχμῆν. 「もし樹を植えない場合は、
1 本に付き 1 ドラクマの罰金を支払え (9-10)」とある。このように、この碑文
に現われる果樹栽培に関する罰金の表現および金額が問題の断片碑文に現われ
るパターンと似ている。また先ほど見たタソス碑文も、ὀφείλεν στατήρα παρὰ
στατήρα. 「1 スタテールに付き 1 スタテールの罰金を支払うべきこと (3)」と
あるように、葡萄酒製造に関する罰則金を定めたものであった。従って、断片
碑文も同様に葡萄酒製造に関わる罰金に関するものと考えられることは可能であろ
う。

第 3 のキーワードは 5 行目から 6 行目にかけての μισθόσεος γῆς καὶ
οἰκιῶν 「土地および家屋の賃貸」と、7 行目の ἢς ἂν μισθοῖ ἀποτε[ισάτο] 「もし
賃貸した者は罰金を支払え」である。ここで比較の材料として注目される史料
は、前 6 世紀末のサラミスの土地に関する諸規定を刻んだ碑文である
(ML.14=Tod.11)。これもかなり断片的で、編集者によって解釈のニュアンスが
異なるが、主題は読み取ることが出来る。ここで諸規定の対象となっている人
々は、τ[οὺς ἐς Σ]αλαμ[ῖνι κληρούχους] 「サラミスに住むクレールーコイ」と
復元され¹⁴⁾、議論はあるが、彼等がアテーナイからの植民者であったと考え
られる。注目すべきは、τ[οὺς δὲ κλήρους μ]ὴ μισθοῦν, εἰ μὴ οἰκ[ῆ] ἐκεῖ ὁ
μισθούμενος· εἰ μὴ δὲ μισθῶι, ἀποτί[νειν τὸν μισθούμενον καὶ τὸν μισθοῦντα
ἐκάτερον τὸ διπλάσιον τοῦ μισθοῦ] εἰς δημόσιο[ν] 「賃借人がそこに住まない場
合、それらのクレールーコスを賃貸してはならない。もし賃貸したならば、賃借人
と賃貸人の双方は賃貸料の 2 倍を国庫に罰金として支払うべきこと (3-7)」。
つまり、サラミスの植民者たちは、一定の条件を満たした上でその土地を耕
作したが、彼等は土地を不在にして、それを他人に又貸しすることは許されな
かったということである。同様の禁止条項は、かなり断片的ではあるが、前 387/6
年のレムノスのクレールーコイに対する規定の中にも確認される

(IG. II. I^{30a}; b; c.)。[μήτε……]ναι μήτε μισθῶσαι πλὴν……「～を除いては～も～も賃貸してはならない (b.4)」、γῆν τὸς κληρῶχος κα……「クレールーコイは土地を～ (b.6)」、[……καθάπ]ερ τοῖς ἐς Σαλαμ[ίνα]「サラミスへの～に対すると同様に (b.7)」とある。このサラミスについての言及は、今見たサラミス碑文との関連を示唆していて非常に興味深い。これらの碑文と比較する時、問題の断片碑文に見られる賃貸禁止条項も同様に、当該地で葡萄酒製造に携わる者が自分の土地および家屋を第三者に又貸することを禁止したものと読むことが可能であろう¹⁶⁾。

第4のキーワードは、8行目から9行目にかけての ταῖς ἀποικίαις καὶ κληροχία[ις]である。それぞれの語が具体的に何を意味するのかについては、次章で考察するとして、ここではその文脈を考察するに留めたい。次のキーワードへ進もう。

第5のキーワードは、9行目から10行目にかけての καὶ τὸς ἀπε]λειθέρους κατὰ ταύτῃ ποῆ[ν]「解放奴隷たちも同様にすべきこと」である。ここにおいて上述の諸規定に従わなければならない人々が誰であるのかが具体的に示されている。但し、この位置と書き方から判断すれば、彼らは追加的に記載されたと見るべきであろう。本来これら諸規定に従うべき人々は、この法令の今は失われてしまった冒頭に刻まれていたはずである。残された全体の構成から考えて、2行目から8行目までにかけて諸規定が列記され、8行目から11行目にかけてそれらに従うべき人々の追加が示されているとすれば、ここにもう一つの追加として、例えば τὸς κληρῶχος ἐν ταῖς ἀποικίαις καὶ κληροχία[ις]「アポイキアおよびクレールーキアにいるクレールーコイ」が刻まれていたと推測できる¹⁶⁾。従って、当該碑文に刻まれた様々な規制を受けなければならない人々には、植民市における土地で農業をするアテナイ市民および解放奴隷も含まれたことが窺える¹⁷⁾。

第6のキーワードは、ἐπὶ τῆς δευτέρας πριτανε[ίας]「第二当番評議会の時に」および τῆς βολῆς τ[εῖ] κυ[ρίαι] ἐκκλησῖαι「評議会、主要民会」である。この箇所は評議会暦で、既述の諸規定を決議した時と場が示されているものと

思われる。この書式は、先程見たサラミス碑文のそれを思い起こさせる。そこでは様々な規定が列挙された後、*ταῦτ' ἔδοξεν [ἐπ]ὶ τῆς β[ουλῆς πρώτης]*「以上のことは第一評議会の時に決議された。(12)」と復元されている(IG.II)¹⁸⁾。この書式を見る限り、これまで述べて来られた諸規定は、この碑文が建てられた時にはじめて決議されたのではなく、それ以前に既に決議されていたものの再録であることが推察される。

最後のキーワードは、*τὰ δὲ τέλε*「税金」である。断片碑文の主題が何らかの金銭支払に係わることは既に見てきた通りである。しかしそれらをまとめてここで「税金」と記述しているのではなさそうである。というのは、2行目から5行目にかけて問題になっているのは葡萄酒製造に係わる罰金であり、続く5行目から7行目にかけては土地および家屋の又貸しの禁止で、恐らくそれに係わる罰金も記載されていたからである。罰金が税金とは別ものであったことは、これも既に言及したアモルゴス碑文から明らかとなる。*[τὰς ζημίας] [ἀπάσας] ἀποδιδ[ότ]ω ἅμα τῷ μισθώματι. ἀποδ[ι]δότηω [τὸ τέλος], ὅσον ἀντι[ο]ῦ [ἐ]νιαυτοῦ, χωρὶς τοῦ μισθώμα[τος] το[ῖς] ταμίαις] ἐμ μηνὶ Θαργηλιῶνι.*「全ての罰金を賃貸料と一緒に支払え。毎年の税は賃貸料とは別にタルゲリオン月に財務官たちに支払え(47-49)」。このように、*ζημία*「罰金」、*μισθωμα*「賃貸料」、*τέλε*「税金」は別ものである。恐らく当該断片碑文のこの箇所には、これらの金を支払うべき場所と時期が記述されていたと思われる。

以上の考察から全体の意味を概括して見よう。この断片碑文の内容は5つのテーマからなっているように読み取れる。

1. 葡萄酒製造に関する諸規定と罰金 (2-5)
2. 土地および家屋の又貸しの禁止とそれに対する罰金 (5-8)
3. これら諸規定の対象の追加 (8-11)
4. これら諸規定が決議された場と時 (11-14)
5. 罰金、賃貸料、税金の支払い先および期限 (14)

この碑文の内容は、本来おそらくアッティカにおける公有地ないしは神域の土地賃貸契約であり、それと同様の規定が植民市に住む市民と解放奴隷にまで及ぶことを記したものと見るのが可能であろう。従って、ταῖς ἀποικίαις καὶ κληροχίαις とは、アテナイの徴税権が及ぶアテナイの領土を示していると考えられる。

第3節 アポイコイとクレルーコイ

では、アポイキアとクレルーキアとはそれぞれどのような領土を意味するのであろうか。この問題を考察する前に、解決して置かなければならないことがある。それはセオリー3の妥当性、即ちレスボスとカルキスのように、植民者がクレルーコイと表記された植民市はクレルーキアと見なしてよいのかという問題である。このセオリーは、クレルーキアの本質がクレルーコイの本質によって決定され、クレルーコイがアポイコイとは異なる本質を持っていたという前提条件の上に成り立っている。本章では、エポイコイも含めて、アポイコイとクレルーコイという普通名詞の間には本質的な意味の違いがなかったことを証明する。

アポイキアとクレルーキアが我々の「植民市」に相当する語であることは間違いない。また、「植民者」に相当する語には、アポイコイ、エポイコイ、クレルーコイなどがあることも知られている¹⁹⁾。ここでは、表に掲げたように(表1参照)、前5世紀と前4世紀に書かれた文献史料および碑文史料に限定して、これら5つの語の意味をそれぞれの語が使われた文脈を分析することによって明らかにする²⁰⁾。この表は全ての史料を網羅している訳ではないけれども、少なくともここから全体的な傾向を知ることは出来るであろう。

表を見て気付くことは、用語の使用頻度における片寄りである。ἀποικ-系(以下、A-系と表記)の使用頻度は全体の77%を占めバリエーションも多い。一方、ἐποικ-系(以下、E-系と表記)と κληρουκ-系(以下、K-系と表記)はそれぞれ11%と12%を占めるに過ぎない。このことは、もしA-系、E-系、K-系が植民

に関してそれぞれ対の意味を表わす語だとしたら、少々奇妙な結果である。むしろ基本的に使われたのは A-系であり、E-系、K-系はそれを言い替えるオプションの関係にあったと見れば理解しやすいのではないだろうか。

実際に、普通名詞のアポイコイ、エポイコイ、クレルーコイは、いずれも「送り出す」を意味する動詞 πέμπω などと組み合わせられることによって、共通に「植民者」を意味していた²¹⁾。また、集合名詞のアポイキア、クレルーキアも、同様の語を伴って共通に「植民団」を意味していた²²⁾。つまり、A-系、E-系、K-系の間で意味の重複があったのみならず、それぞれの普通名詞と集合名詞の間にも重複があったのである。従って、これら 5 つの語が基本的には共通して「植民者として送り出される人々」を意味したこと、そして、普通名詞には「人々」に、集合名詞には「集団」に重点が置かれたために、前者は「植民者」を、後者は「植民市」を意味するようになったこと、まずこの点に留意すべきであろう。

レスボス植民のように、同時代の複数の文献史料や碑文史料によって共通に表記された事例は幾つかある。例えば、ポティダイアへの植民団は、前 429 年の碑文史料によっても、前 428/7 年の碑文史料によっても、またトゥキュディデスによってもエポイコイと表記され²³⁾、サモスへの植民団は、アリストテレスによってクレルーキア、アイスキネスによってクレルーコイと表記されている²⁴⁾。

しかし実際には、ある一つの植民団が同一の史料の中でさえも別な語に言い換えられることの方が多い。例えば、トゥキュディデスは、アイギナへの植民団を指して、アポイコイともエポイコイとも表記しているし²⁵⁾、アムフィポリスの植民団を指してアポイキアともエポイコイとも表記している²⁶⁾。イソクラテスもアポイキアの植民者をエポイコイと呼んでいる²⁷⁾。同様のことは碑文史料にも確認され、アドリア方面への植民を決議した碑文は、その植民団をアポイキアともエポイコイとも表記しているし²⁸⁾、ブレア植民の設立に関する碑文は、その植民団をアポイキアともアポイコイとも表記しながら、復元が正しければ、それをまた ἐποι[κέσσοντας]とも言い換えている²⁹⁾。

従来この言い換えは、正しい用語法の混同と見なされてきた。つまり、碑文史料は公文書であるので常に正確な語を用いていたが、文献史料は私的な文書であるので必ずしも正確ではないという理屈である。公文書が正確な語を用いたであろうこと、即ちセオリー 1 は頷ける。しかしなぜ私的な文書は不正確だと言えるか。セオリー 2 は疑問である。そもそも用語法が正確か不正確かという問題は、学者が採用した用語の定義に掛かっている。もし学者の定義が間違っていれば、史料の用語の正確さについては何も言えないはずである。ここではその問題は置いておくとして、言い換えの原因は、正確・不正確にあったのではなく、それらは本来、互いに言い換えることが可能な関係にあったのではないであろうか。

では、これらの語の意味はどの程度に異なっていたのであろうか。ここでも再び、A-系と E-系・K-系との間に太い線が引かれるようである。つまり、A-系は、例えば、οἱ Μιλήσιοι τῶν Ἀθηναίων εἰσὶ ἄποικοι「ミレトス人はアテナイ人のアポイコイである(Hdt.5.97)」とか Ἀπολλωνίαν, Κορινθίων οὖσαν ἄποικίαν、「アポロニアはコリントス人のアポイキアである(Thuc.1.26.2)」のように、市民名の複数属格とともに用いられて、植民団の出身を説明するパターンが普通に見られるのに対して³⁰⁾、E-系・K-系にはそれが一例も確認されない。この点に A-系と E-系・K-系との違いが明確に現われている。

A-系の重点が母市と植民市の絆にあることは明白である。このことは多くの史料によって証明されるが³¹⁾、一例を挙げれば、トゥキュディデスは前 413 年のシケリア遠征軍の編成について次のように記述している。「アテナイ人自身はイオニア人であり、ドーリス人であるシュラクサイ人に対して自らの意思で向かった。そして、彼らと同じ方言と制度を変わず保っていたレムノス人とイムブロス人、そして当時アイギナを所有していたアイギナ人、そしてまだエウボイアのヘスティアイアに住んでいたヘスティアイア人、彼らはみなアポイコイであり、彼らもともに遠征に参加した(Thuc.7.57.2)。」

続いてトゥキュディデスは、同じ遠征に参加した同盟国について述べている。「(中略)また、従属する貢納金支払国の内には、エウボイアからは、

エレクトリア人、カルキス人、ステュラ人、カリュストス人がおり、島々からは、ケオス人、アンドロス人、テノス人、イオニアからは、ミレトス人、サモス人、キオス人がいた。(中略) そしてその大部分はイオニア人であり、カリュストス人を除いて(彼らはドリュオプス人であった)、これらの者はみなアテナイから別れ出た者たちであった(Thuc.7.57.4)。」ここでは「アテナイから別れ出た者たち」ἀπὸ Ἀθηναίωνに注目したい。ヘロドトスも同様にナクソス人について「ナクソス人はアテナイ人から分かれ出た ἀπὸ Ἀθηναίων γεγονότεςイオニア人である(Hdt.8.46)」と言っている。このように表記された者たちがイオニア植民を指していることは明らかである。トゥキュディデスはイオニア植民によって建設された諸都市をアポイキアイと呼んでいるし(Thuc.1.2.6)、またヘロドトスはミレトス人をアテナイ人のアポイコイとも呼んでいる(Hdt.5.97)。従って、Ἀθηναίων ἀποικία/ἀποικοίはἀπὸ Ἀθηναίωνと同義であり「アテナイから別れ出た者たち」を意味すると考えてよい。

このように A-系の語が母市からの分かれを意味し、母市と植民市の絆を強調する語であることの根拠は、アリストテレスの用語法に最も明確に示されている。彼は、村の成り立ちを説明する際に次のように言っている。「最も自然に村は家の分かれの集合体 ἀποικία οἰκίαςであるように思われ、それらのある人々は同じ乳を飲んだ者たちと呼ぶ。(中略)血縁関係に基づく家の分かれの集合体 ἀποικίαίもまた同様である(Aristot.Pol.1252b)。」つまりアポイキアは本来、一つの家から分かれた家々の集合体であり、蜂の巣分かれにも例えられるもので(Xen.Oec.7.34)、それらはたとえ離れて住んでいても(Aristot.Pol.1272b; Xen.Oec.4.7)、血縁関係に基づく絆によって結び付けられていたものである。

では次に、E-系について見て見よう。これについては、エポイコイを「追加植民者」と解する見解と³²⁾、アポイコイを emigrants とすれば、エポイコイを immigrants と解する見解がある³³⁾。確かに「追加植民者」と解して差し支えない事例もある。例えば、アリストテレスは、異種族混合植民市の場合、最初の共同植民者 σύνοικοίに加えて、後からエポイコイが送られてくると、植民市内での種族のバランスが崩れて、一種の民族主義が台頭し、内乱が発生

したという事例をいくつも挙げている (Aristot. Pol. 1303a)。しかし、このことはトゥキュディデスの用語法には当てはまりにくい。彼は、アイギナ、ポティダイア、アムフィポリスへの最初の植民者を指してエポイコイと呼んでいるからである³⁴⁾。この語は必ずしも追加植民者を意味するのではなさそうである³⁵⁾。また、エポイコイが「移入民」を指すとする説にも当てはまらない事例がある。例えば、アリストファネスの『鳥』では、あちらからこちらへ押し寄せてくる者たちをエポイコイと呼んでいるからである (Aristoph. Aves. 1307)。

では、この語をどのように理解すればよいのであろうか。植民者はある場所からある場所へ移動する人のことである。従って、ある植民者を説明する際には、起点に重点を置く言い方と終点に重点を置く言い方があるはずである。ἀποικοίの接頭辞 ἀπόには「～から」という起点を表わす意味があり、ἐποικοίの接頭辞 ἐπίには「～へ」という移動の方向性を示す意味がある。つまり、どちらも送り出される者ではあるが、アポイコイは起点に重点が置かれた場合の、エポイコイは終点に重点が置かれた場合の表記法であり、植民者の本質には関わっていなかったと考えられるのである。

次に K-系について見てみよう。この語は、分配地そのものが κλήροςと呼ばれることから明らかなように、植民市において分配される土地に重点のある用語である。アリストファネスは、測量と聞けばすぐに土地分配を思い出す民衆を馬鹿にしているが、そこでは κληρουχικήという語が使われている (Aristoph. Nubes. 203)。また碑文史料においても、この語が使用されたのはやはり土地分配の文脈においてであった³⁶⁾。

以上の考察から、アポイコイ、エポイコイ、クレールーコイの語は、「起点」「終点」「土地所有」という植民者ならば必ず併せ持つ3つの側面から同一の植民者を別々に言い換えていたに過ぎないということが明らかになった。つまり、これらの語が表わす意味の違いは、ニュアンスの違いであって、植民者の本質的な差異を表わしてはいないのである。従来、アポイキア・クレールーキアの本質的差異が市民権の性格、つまり人の側面に求められてきたが、以上の結論からセオリー8は受け入れられない。

この結論を踏まえて、従来常にクレルーコイおよびクレルーキアの定義の出発点となってきたカルキスとレスボスに関する史料を読み直してみよう。

史料① νικήσαντες δὲ καὶ τούτους τετρακισχιλίους κληρούχους ἐπὶ
τῶν ἵπποβοτέων τῆ χώρῃ λείπουσι(Hdt.5.77) .

史料② ἐπὶ τοὺς ἄλλους σφῶν κληρούχους τοὺς λαγχάνους ἀπέπεμψαν
(Thuc.3.50.2) .

史料②「他の(クレーロイ)へ彼ら自身の中から籤で当たったクレルーコイを送り出した」は前 427 年のレスボス植民の経緯を記したものである。よく見るとこの文章には今示した植民者の 3 側面である ἐπί, κληρούχοι, ἀπόがはっきりと書き込まれていることに気づくであろう。史料①「勝利した後、4000 人のクレルーコイをヒッポボタイの土地に残した」は前 506 年のカルキス植民の経緯を記したもので、植民者を「残した」という状況のために ἀπόは現れないが、これにも同様に ἐπίと κληρούχοι という 2 側面が書き込まれている。このことはこれらの植民者が本来ならばアポイコイともエポイコイともクレルーコイとも表記され得たことを示している。しかし著者がクレルーコイという表記を選択した理由は、何よりもその文脈が土地分配にかかわるものだったからである。

このように、アポイコイ、エポイコイ、クレルーコイが本質的には異ならず、単にニュアンスの違いしかないのならば、クレルーコイがクレルーキアの構成要素となる必然性はない。それ故にセオリー 3 は受け入れられない。

第 4 節 アポイキアとクレルーキア

ここで第 2 節で扱った断片碑文を振り替えて見よう。そこにはアテナイの徴税権の及ぶアテナイの領土としてアポイキア・クレルーキアという 2 つの語が並記されていた。これらの語は単なるニュアンスの違いではなく、実質的な差異を持っていたはずである。

アポイキア、クレルーキアという語の用法について検討する前に、これらの語の時代分布について考察する必要がある。アポイキアという語は、前 5 世紀・前 4 世紀を通じて碑文史料にも文献史料にも至る所で見られる起源の古い一般的な用語であるように思われる。それに対して、クレルーキアという語は、確認される例が極端に少なく、時期も片寄っていることから、比較的新しい時代に作られた特殊な用語であると考えられる。そうであるならば、クレルーキアという特殊な語と対の関係にあるテクニカル・タームとしてのアポイキアという用語法も、クレルーキアという語の出現と同時に現われたはずである。

勿論、史料の残存状況にも左右されるが、現時点でのクレルーキアという語の初出史料は、第 1 節で見たように、ταί]ς ἀποικίαις καὶ κληροχία[ις と刻まれた前 5 世紀末の断片碑文 IG.I²37 である。そしてこれが碑文史料・文献史料を通じてクレルーキアという語が確認される前 5 世紀の唯一の史料である。前 4 世紀になるとこの語は、比較的豊富に残されている碑文史料においては一回も確認されず、その代わりに、前 5 世紀を回顧する内容の前 4 世紀の文献史料に散見されるようになる。用語のこのような時代分布から判断すると、アポイキア・クレルーキアという分類法は、前 5 世紀末に現われ、前 4 世紀になると早々に消え、その記憶だけが前 5 世紀を回顧する前 4 世紀の文献史料の中に残存したということになる。

そうであるならば、クレルーキアという語は既に前 6 世紀末から存在し、前 5 世紀と前 4 世紀の間でその用語法に変化が生じたとする従来解釈、セオリー 6 とセオリー 7 には無理があるように思われる。むしろ次のように解釈する方が自然であろう。つまり、前 6 世紀末から本格的な植民活動を開始したアテナイは、おそらく当初からアポイキア・クレルーキアという 2 種類の

植民形態を意図的に作り分けたのではなく、実際には、その場その場の状況に応じた植民を建設し、その結果として次第に2つの形態が出来上がっていったのではないか。それらを2つのカテゴリーとして初めて認識したのは、トゥキュディデスが示唆するように³⁷⁾、アテナイがシケリア遠征の失敗に直面して、国力の再評価と同盟の引き締めに迫られて、改めて帝国を意識した時、つまり前413年頃ではないか。このことは、アポイキア・クレルーキアという語が税徴収の文脈で初めて現われるという事実と無関係ではなさそうである。そしてまもなく、前404年にアテナイはペロポネソス戦争に破れ、サラミスを除く全ての植民市を失ったので、同時にそれらを示す用語も使用されなくなり、前5世紀を回顧する前4世紀の文献にのみ現われるようになったのではないか。

もしこの推測が正ければ、アポイキア・クレルーキアという用語法を再現する素材は、前4世紀の文献史料に見られる両語の集合名詞のみである。まずアポイキアについて見ると、アンドキデスは前391年の『平和論』の中で前421年のニキアスの平和を回顧して、当時のアテナイの国力の大きさを説明する文脈において「我々はケロネソスとナクソスと3分の2以上のエウボイアとを所有していた。他のアポイキアイについて一つ一つ詳しく述べれば、話が長くなるであろう。」と述べ(Andoc.3.9)、アイスキネスも前343年の『使節に関する演説』で同様のことを同様の文脈で述べている(Aesch.2.175)。次にクレルーキアについて見ると、イソクラテスは前380年の『パネギュリコス』において、前5世紀におけるアテナイの覇権に対する悪評を論駁するために、非難の的となったメロス植民とスキオネ植民を回顧して「これらのために思慮ある人々は、我々に対して非難する気持ちを抱くよりも、むしろずっと大きな感謝の気持ちを持つのは当然である。というのは我々は、諸ポリスの中で住民が追い出されて空になったポリスへ、私利私欲のためにではなく、その土地を保全するためにクレルーキアイを送り出したのであるから」と述べ(Isocr.4.107)、アリストテレスは前335/4年から前323/2年の『弁論術』の中でサモスをクレルーキアと呼んでいる(Aristot.Rhet.2.6.24)。

以上の史料から明らかとなる点は、アポイキアには、ケルソネソス、

ナクソス、エウボイアが、クレルーキアには、メロス、スキオネが対応することだけである。これがアポイキア・クレルーキアという語のみを手がかりとして得られる全てであり、ここから両カテゴリーの本質的な差異を導き出すことは不可能である。従って別の方法が必要となる。

そこで採用したいのがグループ記述の分析である。複数の植民市を最初から一つのグループとして記述している史料は、前4世紀の同時代人がアテナイの植民市を何らかの基準に従ってそのようなグループに分類する習慣があったことを示唆する可能性があるからである。この方法によると、2つのグループが浮かび上がる。一つは、レムノス・イムブロス・スキュロスを中心とするグループ、もう一つは、ケルソネソス・ナクソス・エウボイアを中心とするグループである(表2参照)。

ではその基準とは何か。幸い、アンドキデスの『平和論』の中にはこれら2つのグループが並記されているので、両者の対比が可能となる。彼は前391年にスパルタと和平を締結することの利点を証明するために、戦争継続の理由の正当性を一つ一つ反駁していくが、その一つとして次のように叙述している(Andoc.3.13-15)。「では、レムノス、スキュロ、イムブロスの島々を取り戻すためにか。それらがアテナイのものたるべきことは明確に条約に書かれているではないか。それとも、ケルソネソスやアポイキアイやエンクテーマタ ἐγκτήματα や損失を取り戻すためにか。それらは戦争によって獲得しなければならないが、ペルシア王も同盟も我々に同調しないではないか。」ここでは、ナクソス・エウボイアが言及されていないが、それらがアポイキアイとして言い替えられているであろうことは、既に取り上げたアンドキデスの史料から明白である(cf. Andoc.3.9.)。この史料から窺える両カテゴリーの相違点は、前404年のペロポネソス戦争の敗戦で失われた植民市のうち、レムノス・イムブロス・スキュロスは取り戻せそうであるが、ケルソネソス・ナクソス・エウボイアはそうは行きそうにないということである。

ではなぜこのような違いが生じたのであろうか。戦後のレムノス・イムブロス・スキュロスの帰属問題は前392年のアテナイ・スパルタ会談を経て

(Xen.Hell.4.8.15)、前 386 年の王の平和によって最終的に規定された。クセノフォンはその勅令を次のように伝えている (Xen.Hell.5.1.31)。「ペルシア王アルタクセルクセスは以下のことを正義と看做す。アジアにおける諸ポリスと島々のうちクラゾメナイとキュプロスは余のものたるべきこと。他のギリシア人諸ポリスは大小を問わず自治独立のままであるべきこと。但しレムノス・イムブロス・スキュロスは例外である。これらは昔と同様に、アテナイ人のものたるべきこと。」即ちこれら 3 島は、普遍平和によってアテナイ人固有の領土として承認されたのであった。

前 4 世紀の母市とこれら植民市の緊密な関係は、植民者が「ヘファイステイアに住むアテナイ人」「ミュリナに住むアテナイ人」「イムブロスに住むアテナイ人」「スキュロスに住むアテナイ人」と呼ばれるようになったこと³⁹⁾、これら植民市にアテナイから役人が派遣されたこと³⁹⁾、またアッティカの 10 部族と並んで初穂を奉納したこと⁴⁰⁾、などによって示されている。

クセノフォンの史料に「昔と同様に」とあるように、このようなアテナイとこれら 3 島の緊密な関係は、前 5 世紀に既に出来上がっていたものと思われる。これらはいずれも先住民を全て追い出した後に植民者が送られて、新しいポリスを建設したタイプで、植民者は初めは「レムノス人」、「イムブロス人」と呼ばれて、アテナイ人としばしば軍事行動を共にしていた⁴¹⁾。前 405 年の結局は失敗したスパルタとの平和会談では、アテナイが「アッティカに加えて、レムノス、イムブロス、スキュロスを所有し、慣習に従って民主政体の保持すること (Aesch.2.76)」がその条件として認められていたことから、前 5 世紀末までにはこれらの島々がアッティカに準ずるアテナイ固有の領土として認められていたと思われる。

これらの植民市に共通している点は、先住民がペラスゴイ人やドロブス人などの非ギリシア人であったこと、彼を全て追い出して土地を独占し、アテナイからの植民者が彼ら自身の新たなポリスを建設したことである。この徹底さが母市植民市関係の緊密さの原因であったと考えられる。

一方、ケルソネソス・ナクソス・エウボイアの領有については、前 377

年の第 2 次アテナイ海上同盟の決議によって規定された。「アテナイ人及びその同盟に対して同盟を結ぶポリスから、アテナイ人の民衆は、私的所有であれアテナイ人の公的所有であれ、同盟を結んだポリスの土地に今あるエンクテーマタ *ἐγκτήματα* を放棄すべきこと (Tod.123.25-30)。」「ナウシニコスがアルコンの時から、私的にであれ公的にであれ、同盟諸ポリスの土地において、家屋であれ土地であれ、エンクテーマタを所有することは *ἐγκτήσασθαι*、いかなるアテナイ人にも許されざるべきこと (Tod.123.35-41)。」この史料には具体的に植民市の名が挙げられていないが、王の平和によってアテナイ固有の領土と確定されたレムノス・イムブロス・スキュロスがこの禁止条項の対象にならなかったことは疑い得ない。つまりこれらとは別のグループの植民市群が放棄されたのである。注目すべき点は、エンクテーマタという表現である。この表現は既に見たアンドキデス (Andoc.3.15) およびデモステネス (Demosth.7.39-43.) の表現と一致する。つまりここで禁止されたエンクテーマタとは、具体的にはケルソネソス・ナクソス・エウボイアを指していると推測されるのである。

エンクテーマタとは他のポリス領土内における土地財産のことを意味する。この同盟決議には、同盟ポリスに対して前 5 世紀のアテナイ帝国支配が復活するという危惧を与えないように、諸ポリスの自治独立と彼等が欲する国制を持つことを保証し、アテナイによる貢納金徴収、駐留軍の派遣、アルコンの派遣などの禁止とともに、同盟ポリスの領土におけるエンクテーマタの放棄が明記されているのである。

従って、エンクテーマタという性格もまた前 5 世紀における植民の状況に由来するものであった。ケルソネソス・ナクソス・エウボイアのうち、ナクソスはそれ自体が一つのポリスであったが、ケルソネソスは大きな半島、エウボイアは大きな島で、とちらにも 10 前後のポリスが存在していた。アテナイはこれら全てのポリスに植民を送ったのではないが、大体に共通して言えることは、先住民がアテナイ人と同じイオニア人であること、彼等のポリスを破壊するのではなく存続させたまま、アテナイ人がそこに割り込んでいく形で植民したという事実である。この不徹底さが母市植民市関係の不安定要因となった

と考えられる。

このように、ケルソネソス・ナクソス・エウボイアがエンクテーマタと表記されたのに対応して、レムノス・イムブロス・スキュロスはアイスキネスとデモステネスによってクテーマタと表記されている。「フィリッポスは、マケドニアから出撃して、アムフィポリスをめぐって我々と戦うことはもはやない。しかし、我々のクテーマタ κτήματα であるレムノス、イムブロス、スキュロスをめぐる戦争は既に始まっている (Aesch.2.72)。」「それとも、レムノスへあなた方の中から選ばれた騎兵長官が赴かなければならないのか、メネラオスがポリスのクテーマタ κτήματα を守って戦っている騎兵隊の長官になるべきか (Demosth.4.27)。」

クテーマタとは本来単に財産を意味する言葉であるが、エンクテーマタ即ち外国のポリス領土内における土地財産を意味する語と対比する時、それはアッティカの外にあるが、アッティカに順する扱いを受けるべき自国の領土という積極的な意味合いを帯びてくる。

しかしそう考える時、2つの例外が考慮されなければならない。イソクラテスは第2次海上同盟の決議によって放棄されなければならない領土であるケルソネソス・ナクソス・エウボイアをはっきりとクテーマタと呼んでいる (Isocr.14.44)。またデモステネスはポティダイアをクテーマタと呼んでいるが、それは前361年に当地の親アテナイ派によって招かれたクレールーコイの派遣によって建設されたもので、上の理屈から言えばエンクテーマタに分類されるはずである。この矛盾はどのようにして解決されるべきであろうか。

デモステネスはこの問題を説くためのヒントを与えてくれる。彼は『ハロネソスについて』の中で、前342年のケルソネソスにおける領土を巡るアテナイ人とカルディア人の論争を扱っている。そこで彼はカルディア人によって侵略されたアテナイ人の土地をアテナイ人に向かって「あなた方のクテーマタ τὰ κτήματα τὰ ὑμέτερα」と呼んでいる。しかしカルディア人は次のように言ったと言う。「彼らが住んでいるのは彼ら自身の領土であり、あなた方ではなく、あなた方の領土は外国にあるエンクテーマタとしてであり ἐγκτήματα ὡς

εν ἀλλοτρίᾳ、彼ら自身の領土は祖国におけるクテーマタとして κτήμαθ' ὡς ἐν οἰκείᾳである、そしてこのことをあなた方の市民が法に書き留めたのであると彼らは言う(Demosth.7.41-43)。」この史料は厳密に言えばクテーマタとエンクテーマタは法的に異なる領土であり、前者は後者に優越することを示している。しかしまた実際には、ある領土がクテーマタであるかエンクテーマタであるかはしばしば論争となったということも示している。上に挙げた矛盾する2つの史料もそのように理解されるのではないであろうか。以上の考察から次の結論が得られた。

結論

1. アポイキア : 同種族の先住民のポリスを破壊せず、一部の住民だけを追放し、そこにアテナイの植民者を送り込んでいく、言わば「同種族共存型植民」であり、その土地は外国のポリス領土の中にあるエンクテーマタであり、アテナイの所有ではあっても、アッティカ固有の領土ではなかった。この点が不安定要因として作用し、前4世紀には放棄されざるを得なかった。この典型としてケルソネソス・ナクソス・エウボイアが挙げられる。これらは独自のポリスを形成しなかった。

2. クレールーキア : 異種族である先住民のポリスを破壊して、全ての住民を追放し、そこにアテナイの植民者を送り込んでいく、言わば「異種族追出型植民」であり、その土地はアテナイの独占所有であり、アテナイ固有の領土であった。この点が安定要因として作用し、前4世紀に回復された。この典型としてレムノス・イムブロス・スキュロスが挙げられる。これらは独自のポリスを形成した。

この結論に従えば、ポリスの形成は間違いなく分類基準の一つに数えられる。従ってセオリー9は受け入れられる。しかしクレールーキアとはポリスを形成するタイプであるから、セオリー5は否定される。またレスボスとカルキスはアポイキアであるので、セオリー4も否定される。期せずして、従来

の見解と正反対の結論が得られたことになる。

ところで、各事象を細かく検証していけば、直ちに上述の仮説は必ずしも証明されないことが明らかとなる。例えば、ケルソネソス半島にはアイオリス人の都市も含まれるし、スキュロス島の住民であるドロプス人は厳密に言えばギリシア人の一派である。また何よりも、レスボスは形の上では「同種族同居型植民」であっても、レスボス人はアイオリス人であり、イオニア人ではない。ではこの仮説は成立しないのであろうか。

そうではなく、その虚構にこそイオニア人たるアイデンティティー形成の真実が現れていると見るべきではないであらうか。アテナイは植民市建設の際に種族に拘ったようである。しかしそれは科学的な意味での種族ではなく想像の産物であった。前 425 年の貢納金の査定碑文は (IG.I⁷71.56-58)、査定された全ポリスに対して「アポイコイと同様に」大パンアテナイア祭に参加し、祭礼行列に供物を捧げるよう命じている。勿論多くはイオニア人のポリスであったが、中にはそれ以外の種族のポリスも含まれていた。このように種族というアイデンティティーは想像の産物であり、想像は参加行為によって形成されるために、それは他者を自己に取り込むための手段ともなり得たのである。アイデンティティー創出のからくりと植民市建設との関係を明らかにすることにおいて、アポイキア・クレルーキア問題に取り組むことの新たな意義が見出されるのではないであらうか。

註

1) このコピーは筆者が 1990 年 6 月に旧東ベルリンにある Deutsche Staatsbibliothek, Akademie der Wissenschaft der DDR, Zentralinstitut für Alte Geschichte und Archäologie (現在の Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften) を訪れ、そこに所蔵されている Inscriptiones Graecae の拓本を調査した際に投影した写真をもとに作成したもの

である。多くのアドバイスを下さり、また拓本の撮影ならびに写真の掲載を許された同研究所の Klaus Hallof 博士の御好意に感謝する。

2) IG. I¹. suppl. p. 129=IG. I² 140=IG. I³ 237

3) この碑文の制作年代についての決め手は、碑文中の文字の特徴である。① ガムマ、ラムダ、シグマの形がそれぞれ Λ 、 V 、 Σ であること。② オミクロンが \omicron 、 \ou 、 u の音価を兼ねること。③ エータ H が η の音価として用いられることがなく、氣息記号として付加されること。しかしイオニアアルファベットのようにそれが省略されることもしばしばあること。④ 二重母音としての ψ 、 Ξ 、 Ω が存在しないこと。これらの点から見て、この碑文が古アッティカアルファベットで記され、前 5 世紀の間に、遅くとも前 404 年までに刻まれたということは間違いない。また、この断片碑文の内容には碑文の制作年代を決定するキーは含まれていないが、アポイキアとクレルーキアという語が植民市を示し、それらを二類型に分類しているのならば、それが可能となるのは、アテナイがかなりの数の植民市を既に建設した後のことでなければならぬ。アテナイは前 447 年から特に多くの植民市を建設し始め、前 416 年までに全てが出揃ったのであるから、この点から見ても、この碑文が刻まれたのは前 5 世紀末ということになる。

4) Lolling のコピーを始めて見た時、以下の 3 点が気になった。① 9 行目の問題の箇所は語尾の部分が欠損しているが、本当に $KVEPOXIA[\Sigma]$ と読めるのか。小論がこの点に拘るのは、後に述べるように、集合名詞と普通名詞を厳密に分ける必要性を認めているからである。② 12 行目の $\Delta EYTEPA\Sigma$ の E と Y の間に 1 文字分の空白があるが、これはどういうことか。③ 2 行目の $HEK[\Lambda\Sigma TO$ には氣息記号としての H が付いているのに、4 行目の $EKA\Sigma TO$ にはそれがない。この部分の転写に誤りはないか。これらを確認するために、拓本の現物を実見した。その結果、まず碑文自体その中央部においてやや読みづらい箇所があるものの、9 行目において確かに $KVEPOXIA[\Sigma]$ と読める。次に拓本の 12 行目を見ると、 $\Delta ETEPA\Sigma$ の E と Y の間に 1 文字分の空間は存在しない。また Lolling のコピーにも脱字といったものは見あたらない。最後に氣息記号の H について見ると、

これも拓本に忠実である。以上、このコピーには、転写上の間違いは一切存在しないということが改めて確認された。

5) A. Boeckh, *Die Staatshaushaltung der Athener*, herausgegeben und Anmerkungen begleitet von Max Fränkel, Berlin, 1889³, 18. Von den Kleruchien. S.499-509, 1850²,1817¹; vgl. V. Thumser-K. F. Herman, *Lehbuch der griechischen Staatsaltertümer*, Freiburg, 1892⁶, Bd.I, 2, § 77 [117], S.434, Literatur über Kleruchen; J. V. Vömel, *De discrimine vocabulorum κληρούχος, ἄποικος, ἐποικος*, Frankfurt a. M., 1839, Diss; A. Kirchhoff, Über die Tributpflichtigkeit der attischen Kleruchien, in: *Philologische und historische Abhandlungen der königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin*, 1873, S.1-35; P. Foucart, Mémoire sur les colonies athéniennes au cinquième et au quatrième siècle, dans: *Mémoires présentés par divers savants à l'académie des inscriptions et Belles-Lettres de l'institut de France*, Sér.I, Tome.IX, I, 1878, p.323-413; K. J. Beloch, *Bevölkerung der griechisch-römischen Welt*, Leipzig, 1886, S.81-83; ders, *Griechische Geschichte*, Strassburg, 1893, Bd.I, S.467-468; H. Swoboda, Zur Geschichte der attischen Kleruchien, *Serta Hatteliana*, Wien, 1896, S.28-32; Ed. Meyer, *Forschung zur alten Geschichte*, Halle, 1899, Bd.II, S.182-183; ders, *Geschichte des Altertums*, Stuttgart, 1884-1902, Bd.III, S.15-29; H. Swoboda-K. F. Hermann, *Lehbuch der Griechischen Altertümer*, Tübingen, 1913, Bd.I, 3, S.184-207; M. Wagner, *Zur Geschichte der attischen Kleruchien*, Tübingen, 1914, Diss; O. Schulthess, Κληρούχοι, *RE*, Stuttgart, 1921, Bd.XI, S.814-832; G. Busolt-H. Swoboda, *Griechische Staatskunde*, München, Bd.II, S.1264-1280.

6) A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece*, Manchester, 1964; R. Meiggs, *The Athenian Empire*, Oxford, 1972; *The Oxford Classical Dictionary*, edited by N. G. L. Hammond and H. H. Scullard, Second Edition, Oxford, 1979, s.v., CLERUCHY, p.252; C. Mosse, *Discionaire de la civilisation grecque*, Bruxelles, 1992, s.v., Clérouquies, p.111-112; D. Sacks, *Encyclopedia of the Ancient Greek World*, New York, 1995, s.v., colonization, p.65; M. C. Howatson, *Reclams Lexikon der Antike*, Stuttgart, 1996, s.v.,Kleruch, S.341.

7) V. Ehrenberg, Zur älteren athenischen Kolonisation, *Eunomia*, Studia Graeca et Romana, Bd.I, Prag, 1939, S.11-22 = in: *Aspects of the Ancient World*, Oxford, 1946, p.116-143 = in: *Polis und Imperium*, Zürich und Stuttgart, 1965, S.221-244; D. B. Meritt/H. T. Wade-Gery /M. F. McGregor,

The Athenian Tribute Lists, Princeton, 1950, vol.III, p.284-297; V. Ehrenberg, *Thucydides on Athenian Colonisation*, *CL*, vol.47, 1952, p.143-149 = in : *Polis und Imperium*, Zürich und Stuttgart, 1965, S.245-253; Ph.Gauthier, *Les clérouques de Lesbos et la colonisation athénienne au V^e siècle*, *Revue des Etudes Grecques*, Tome.79, 1966, p.64-88; P. A. Brunt, *Athenian Settlements Abroad in the Fifth-Century B.C.*, in : *Ancient Society and Institutions*, Studies Presented to VICTOR EHRENBERG on his 75 Birthday, Oxford, 1966, p.71-92.

8) Th. J. Figueira, *Athens and Aegina in the Age of Imperial Colonization*, Baltimore, 1991; J. Cargill, *Athenian Settlements of the Fourth Century B.C.*, Leiden, New York, Köln, 1995.

9) W. Schuller, *Die Herrschaft der Athener im ersten attischen Seebund*, Berlin, 1974, S.13-32; E. Erxleben, *Die Kleruchien auf Euböa und Lesbos und die Methode der attischen Herrschaft im 5 Jh*, *Klio*, Heft.1, Bd.57, 1975, S.83-100.

10) ここでは οἶνος は葡萄酒を意味するが、本来はそれを含めて大麦や椰子などから作られる酒一般を指した。

11) τὸ κηρίον は「蜂の巣」、τὰ κηρία は「蜂蜜」を意味し、τὸ μέλι も「蜂蜜」を意味する。従って μελιτόν とは、γλεῦκος に蜂蜜を加えることによって味に変化を加えた、いわゆるフレバードワインのことである。

12) 葡萄酒製造の過程の中にこれら 3 語を位置付けて見ると、その意味がよく分かる。まず葡萄の樹から果実を収穫し、それらを潰して 3 日から 3 週間ほど発酵させるとアルコールが発生する。それを下流させて出来たのが新酒であるが、これは濁っていて味も良くない。次にこれを樽に入れて貯蔵し、1、2 年熟成させるが、その時味を整えるために蜂蜜が加えられることもあった。その後この熟成酒を壺に詰めて保存すると、さらに熟成が進行してまろやかな葡萄酒が出来上がる。中根猛彦「ぶどう酒」『大日本百科事典』15 卷、小学館、1970 年、p.640。以上のことを念頭におくと、ἀμπελος は葡萄の樹、καρπός は果実、γλεῦκος は新酒、μελιτόν 熟成酒、οἶνος は葡萄酒に対応し、例の 3 語の現われる順番が葡萄酒の製造過程と一致する。

13) cf. Liddell & Scott, *A Greek-English Lexicon, A New Edition*, Oxford, 1966, s.v., ὑπὲρ A.with Genit. II. 4. of payment. 但しこの碑文においては ημιοβέ]λιον と ὑπὲρ ηεκ

[άστοに分かれるように思われる。なぜならば、「～(もの)に付き～(額)」
と言う場合、ὕπὲρ ἐκάστο ἀμφορέος ὀβολόνのように、ἐκάστοを含む量の名詞
の属格の後にその額を表すのが普通だからである。

1 4)あるいは、τ[οὺς ἐ Σ]αλαμ[ῖνι οἰκοῦντας]「サラミスに住む者たち」とも
復元される(Di.Syll.13; IG.I¹.)。

1 5)6行目から7行目の ἀργ]υρίο「金銭」はどう繋がるのか判らない。8行目
は χρεματ]ίζει καὶ ἀπολαμβάνει「交渉し(金を)受け取る」とも復元される
(IG.I3237. note p.207.)。この場合、土地家屋の又貸との関係が考えられる。

1 6)あるいは、τὸς οἰκοῦντας ἐν ταί]ς ἀποικίαις καὶ κληροχίαις「アポイキ
アおよびクレールーキアに住む者たち」とも復元されるかも知れない。

1 7)11行目の]ζοντας καὶ ἁπονοῶντα[ςについては何も判らない。

1 8)あるいは、ταῦτ' ἐδοξ]εν [ἐπὶ] τῆς Β[…… ἀρχοντοςとも復元され
(Tod.11)。

1 9)その他の植民関連語として、οἰκήτρεις, κάτοικος, κατοικία, σύνοικος,
συνοικίαなどがあるが、本章で導き出される結論から、ここでは扱わない。

2 0)アテナイ植民についてはエポイキアと表記されたものは存在しない。但
し、前460年の東ロクリスからナウパクトスへの植民に関する規定には
(Tod.24.)、ἡἀπιΦοικί=ἡἀπιΦοικίαという表記が見られる。

2 1)ἀποικοί+π. Thuc.1.38.1; 5.116.4; 6.6.2. ἐποικοί+π. Thuc.2.27.1; 2.70.4; 4.102.2; 5.5.1;
5.5.1; 8.69.3; Isocr.5.6; ἐποικοί+ἀπάγω. Thuc.6.4.3. κληροῦχοί+π. Thuc.3.50.2;
Tod.146.9.

2 2)ἀποικία+π. Thuc.1.2.6; 1.12.4; 3.92.4; Isocr.12.14. ἀποικία+ἐξάγω. ML.49.29.
κληρουχία+π. Isocr.4.107.

2 3)Thuc.2.70.4; ML.66.1; ATL.ii.D21.9.

2 4)Aristot.Rhet.2.6.24; Aesch.1.53.

2 5)Thuc.7.57.2=ἀποικοί, Thuc.2.27.1; 8.69.3=ἐποικοί.

2 6)Thuc.4.102.1=ἀποικία, Thuc.4.102.2=ἐποικοί.

- 2 7) Isocr.5.5=ἀποικία, Isocr.5.6=ἐποικοί.
- 2 8) Tod.200.179=ἀποικία, Tod.200.226=ἐποικοί.
- 2 9) ML.49.5; 8; 29; 33=ἀποικία, ML.49.14; 19; 25; 41=ἀποικοί, ML. 49. 28 =ἐποικ[έσοντας].
- 3 0) ἀποικία+pl.gen=Thuc.1.25.3; 1.26.2; 1.30.2; 1.66.1; 3.102.2; 4.7.1; 4.75.2; 4.84.1; 4.88.2; 4.102.2; 4.104.4; 4.107.3; 4.109.3; 4.123.1; 5.6.1; 5.6.2; Xen.Anab.4.8.22; Demosth.7.32.
ἀποικίη+pl.gen=Hdt.5.46. ἀποικος+pl.gen=Xen.Anab.5.3.3; 5.5.3; 6.2.1. ἀποικοί+pl.gen=Hdt.1.174; 2.34; 2.42; 5.9; 5.9; 5.13; 5.97; 5.113; 7.73; 7.74; 7.96; Thuc.1.25.4; 1.56.2; 2.66.2; 3.88.2; 4.103.3; 5.84.2; 5.89.1; 7.57.6; 7.57.6; 7.57.7; 8.61.1; Xen.Anab.5.5.10; 6.1.15; Xen.Hell.2.2.3; Demosth.6.20; Aristot.Pol.1271b.
- 3 1) 母市に対する植民市の従属=Thuc.1.25.4; 1.26.3; 1.28.2; 1.34.1; 1.38.3; 1.38.3; 5.11.1; 5.96.1. 母市による植民市の保護=Thuc.1.25.2; 1.34.1; 5.106.1; 7.57.9; 7.57.10.
母市と植民市の絆=Thuc.7.57.2; 2.80.3; 5.5.3; 6.76.2. 植民市を巡る戦争=Isocr.12.167; 12.190. 植民の経緯=Hdt.1.94; 1.146; 4.147; 4.150; 4.151; 4.155; 4.157; 4.159; 5.42; 5.124; 6.22; 7.167; 9.106; Thuc.1.27.1; 1.27.1; 3.92.1; 6.4.1; 6.5.1; Isocr.4.36; 5.5.
- 3 2) V.Ehrenberg, *op.cit.*,1952, p.143.
- 3 3) *ATL*, iii, p.285.
- 3 4) Aegina=Thuc.2.27.1; 8.69.3. Poteidaia=Thuc.2.70. Amphipolis=4.102.2.
- 3 5) Figueira は、追放されずに残された先住民のところへ植民者が送られた場合、彼らはエポイコイと呼ばれ得たと考える。Figueira, *op.cit.*, p.24-30.
- 3 6) IG.I²66; IG.II.I²30. Tod.146 は中立である。
- 3 7) Thuc.8.1.3.「同盟諸国、特にエウポイアを確保するための手段を講ずるべきこと」が決議されたと伝える。
- 3 8) IG.XII.8.4.1; IG.XII.8.26; Di.Syll.659; IG.XII.8.668; etc.
- 3 9) Aristot.Ath.Pol.62.2; cf.61.6; 54.8.
- 4 0) IG.II.2.1672.
- 4 1) Thuc.3.5.1; 4.28.4; 5.8.1-2; 7.57.2.

Table 1. Analysis of Terminology¹⁾

ἀποικ-related terms	132	ἔποικ-related terms	19	κληρουχ-related terms	20
ἀποικος ²⁾	3	ἔποικοι ³⁾	17	κληροῦχοι ⁴⁾	14
ἄποικοι ⁵⁾	54	ἐποικοῦντες ⁶⁾	1	κληρουχία ⁷⁾	1
ἀποικία ⁸⁾	38	ἐποικέσοντες ⁹⁾	1	κληρουχία ¹⁰⁾	2
ἀποικίη ¹¹⁾	10			κληρουχέοντες ¹²⁾	1
ἀποικίαι ¹³⁾	17			κληρουχίκη ¹⁴⁾	1
ἀποικίδες ¹⁵⁾	1			κληρουχίκαι ¹⁶⁾	1
ἀποικισμός ¹⁷⁾	1				
ἀποικίζω ¹⁸⁾	6				
ἀποικέω ¹⁹⁾	1				
ἀποικοῦντες ²⁰⁾	1				
				Total = 171	

¹⁾ This table was made by using TLG and PHI with Pandora 2.5.2.

²⁾ Xen. *Anab.* 5.3.3; 5.5.3; 6.2.1.

³⁾ Aristoph. *Aves.* 1307; Aristot. *Pol.* 1303a; 1303a; 1303a; 1303a; *ATL* ii. D21.9; Isocr. 5. 6; *ML*.66.1; Thuc.2. 27.1; 2.70.4; 4. 102.2; 5.5.1; 5.5.1; 6. 4.3; 8.69.3; *Tod*200.225; Xen. *Hell.* 1. 2.18.

⁴⁾ Aesch. 1.53; Demosth. 8.6; [*Philippi*] *epistula*. 16; Hdt. 5.77; *IG. I²* 30.a.13; a.20; a.22; b.6; c.5; *IG. I²* 1952.a.1; *IG. I²* 66.17; 25; Thuc. 3. 50.2; *Tod* 146.9.

⁵⁾ Aristot. *Pol.* 1252b; 1271b; Demosth. 6.20; Hdt. 1. 174; 2.34; 2. 42; 5.9; 5.9; 5.13; 5.97; 5.113; 7.73; 7. 74; 7.96; *IG. I²* 47.a.6; a.10; a.14; a. 15; *IG. I²* 101.a-d.8; *IG. I²* 263. A.col. III.11; 27; 264. A. col.I.36; 265. Bright.col.I.38; *ML*.49. 14; 19; 25; 41; Thuc.1.25.4; 1.34.1; 1. 38.1; 1. 38.3; 1. 56.2; 2.66. 2; 2.80. 3; 3.88. 2; 4.103. 3; 5.5.3; 5. 84.2; 5. 89. 1; 5.96. 1; 5.106.1; 5. 116. 4; 6.6. 2; 6. 76.2; 7.57.2; 7.57.6; 7. 57. 6; 7. 57.7; 7.57. 9; 7.57.10; 8.61.1; Xen. *Anab.* 5.5.10; 6.1.15; *Hell* 2.2. 3.

⁶⁾ Xen. *Cyrop.* 6.2.

⁷⁾ Aristot. *Rhet.* 1384b.

⁸⁾ Aristot. *Pol.* 1252b; 1271b; Attica. *DAA*.301.1; *IG. I²* 37.bc.45; *IG. I²* 101. e-g.59; Isocr. 12. 14; *ML*.49. 5; 8; 29; 33; Thuc. 1. 25. 2; 1.25. 3; 1.26.2; 1. 26.3; 1.27.1; 1. 27.1; 1.28.2; 1.30.2; 1.34.1; 1.66. 1; 3.92.1; 3.92.4; 3.102. 2; 4.7.1; 4. 75. 2; 4. 84.1; 4.88.2; 4. 102. 1; 4. 104.4; 4.107.3; 4. 109. 3; 4. 123.1; 5.6.1; 5.6.2; 5.11. 1; 6.4.1; 6.5.1; *Tod.* 200.177; Xen. *Anab.* 4.8.22.

⁹⁾ *ML*.49.28.

¹⁰⁾ *IG. I²* 237.9; Isocr. 4.107.

¹¹⁾ Hdt. 1.146; 4.147; 4.150; 4.151; 4.157; 4.159; 5.42; 5.46; 5.124; 6.22.

¹²⁾ Hdt. 6.100.

¹³⁾ Andok. 3.9; 3.15; Aesch. 2.175; Aristot. *Pol.* 1252b; 1290b; 1319a; Demosth. 7.32; Hdt. 9.106; *IG. I²* 237.9; Thuc. 1. 2. 6; 1.12.4; 1.25.4; 1. 38.3; 4.107.3; Isocr. 5.5; 12.167; 12. 190.

¹⁴⁾ Aristoph. *Nubes*. 203.

¹⁵⁾ Hdt. 7.167.

¹⁶⁾ Demosth. *N&*. 16.

¹⁷⁾ Aristot. *Pol.* 1304b.

¹⁸⁾ Aristot. *De Gen Anim.* 740a; *Hist Anim.* 633a; Hdt. 1.94; 4.155; Isocr. 4.36; Xen. *Oec.* 7.34.

¹⁹⁾ Aristot. *Pol.* 1272b.

²⁰⁾ Xen. *Oec.* 4.7.

Table 2. Group Descriptions

= disputable case

Source	Group	κλη / άπο	κτη / έγ
Lemnos , Imbros , and Scyros			
Andoc.3.12.	Lemnos, Imbros, Scyros		
Andoc.3.14. ¹⁾	Lemnos, Imbros, Scyros		
Aesch.2.72. ²⁾	Lemnos, Imbros, Scyros		κτηματα
Aesch.2.76.	Lemnos, Imbros, Scyros		
Xen.Hell.4.8.15.	Lemnos, Imbros, Scyros		
Xen.Hell.5.1.31.	Lemnos, Imbros, Scyros		
Demosth.7.4.	Lemnos, Imbros, Scyros		
Demosth.4.34.	Lemnos, Imbros		
Demosth.4.27.	Lemnos		κτηματα
Aristot.Ath.Pol.62.2.	Lemnos, Imbros, Scyros, Salamis, Samos		
IG.II21672.	Lemnos, Imbros, Scyros, Salamis		
IG.II230.	Lemnos, Salamis		
# Demosth.7.10.	Potidaea		κτηματα
# Aristot.Rhet.2.6.24.	Samos	κληρουχια	
Isocr.4.107. ³⁾	Melos, Scione	κληρουχιαι	
the Chersonese , Naxos , and Euboea			
Andoc.3.9.	Chersonese, Naxos, Euboea	άποικιαι	
Aesch.2.175.	Chersonese, Naxos, Euboea	άποικιαι	
Andoc.3.15.	Chersonese	άποικιαι	έγκτηματα
# Demosth.7.39-43.	Chersonese		έγκτηματα
Aesch.2.72.	Chersonese		
Isocr.4.108.	Euboea		
Tod. 123.	(Chersonese, Naxos, Euboea) ⁴⁾		έγκτηματα
# Isocr .14.44.	(Chersonese, Naxos, Euboea) ⁴⁾		κτηματα

¹⁾ Pair with Andoc. 3.15.

²⁾ Pair with Aesch . 2.72.

³⁾ Pair with Isocr.4.108.

⁴⁾ Not naming but indicating these colonies is clear .

第Ⅱ部 アテナイ植民活動と種族イデオロギー

—仮説の検証—

第3章 ペイシストラトスの時代

—アテナイ植民活動の二つの源流—

はじめに

種族とは「一般には、同一の人種的・文化的系統に所属する人たち、すなわち言語・宗教・慣習・道徳を共通にし、同一の祖先に由来するという信念のもとづく集団」を指す¹⁾。小稿で扱う種族とは、具体的には「イオニア人」「ドーリス人」「アイオロス人」「アカイア人」などを指す。古代ギリシア人とは、インド・ヨーロッパ語であるギリシア語を話し、共通の神話と祭礼を持つ人々のことである。彼らは自らを「ヘレネス」と呼び、ギリシア語を話さない人々を「バルバロイ」と称して区別していた。しかしギリシア語の中にはいくつかの主要な方言があり、ここで言う種族とは、専ら方言に従ったグループ分けのことである。

種族の誕生について神話は以下のように語る。ゼウスが墮落した青銅時代の人間に怒り、人類を大洪水で滅ぼそうとした時、プロメテウスとクリュメネの子デウカリオンは、父の忠告により箱船を建造して必需品を積み込み、妻のピュラとともに九日九夜水上を彷徨いパルナッソス山に流れ着いた。その他の人間は全て死んでしまった。船から出て避難の神ゼウスに犠牲を捧げると、神はヘルメスを遣わして何でも願いごとを叶えようと言った。そこで彼は人間が生ずることを望んだ。すると神は母の骨を背後に投げよと命じた。母の骨とは石のことであると悟り、石を拾って頭ごしに投げた。すると、彼が投げた石は男に、彼女の投げた石は女になった。このようにして彼らからヘレン、アムピクテュオン、プロトゲネイアの三人の子が産まれた。ヘレンはオルセイスと結婚して、クストス、ドーロス、アイオロスを産み、クストスはクレウサと結婚して、アカイオスとイオンを産んだと云われている²⁾。つまり、ヘレンとはヘ

レネスの名祖であり、ドーロスはドーリス人の、アイオロスはアイオリス人の、アカイオスはアカイア人の、イオンはイオニア人の名祖である。

当時のアテナイ人がこれらの種族を強く意識していたことは間違いない。431年から404年までギリシアを二分して戦われたペロポネソス戦争の歴史を書いたトゥキディデスは、ヘレン以前の遙か昔にはヘレネスもバルバロイもなかったと言い、この大戦をアテナイを中心とするイオニア人とスパルタ人を中心とするドーリス人の戦いとして描いている。実際に6世紀から既にアテナイは、イオニア人の母市であることを自認し、イオニア人の祭祀の中心地であるデロス島に対する影響力を強めようとしていた。ペルシア戦争前夜には、イオニア人の母市としてイオニア反乱への援軍派遣に応じ、戦後にはデロス島を本拠地とする同盟の盟主の地位に就いた。ペロポネソス戦争中には帝国祭儀を創設し、自らを母市、同盟加盟諸都市を植民市と見なす関係を取り結んでいた。

種族意識には三つの機能が備わっていたと考えられる。①同じイオニア人であるというアイデンティティーを持った者たちを統合する機能、②イオニア人でない者たちを異質な者として排除する機能、③それらを利用してイオニア人の母市としての対外活動を正当化する機能である。これら三つの機能をまとめて小稿では「種族イデオロギー」と呼ぶこととする。

アテナイ人は前古典期から古典期にかけて多数の植民市を建設した。その時にはもはや自由な大地は残されていなかった。従って、植民には常に武力による先住民の追放と土地奪取がともなっていた。この過酷な行為を直ちに「帝国主義」と呼べば、少々ナイーブとの誹りは免れないかも知れない。しかし土地を奪われた者の立場に立てば、学問的な帝国主義論争は無意味だろう。彼らはアテナイ人を憎んだに違いない。アテナイ人もそのことを十分に認識していたはずである。では、アテナイ人はその行為を、他人に対してであれ自分に対してであれ、どのように正当化しようとしたのだろうか。自己正当化なくして、このような行為は出来なかったはずである。

彼らが建設した植民市には、アポイキアとクレールーキアという二つのグループのあったことが知られている。しかしその分類基準が何であったかにつ

いては必ずしも明らかではない。この問題に関して従来から二つの説がある。①植民者が母市市民権を保持するか否かにあったとする説³⁾、②植民市がポリスを形成するか否かにあったとする説⁴⁾。筆者は以前この問題について、②の説を発展させつつ、この分類基準は種族イデオロギーと密接な関係があったのではないかという仮説を提示した。一口で言えば、アポイキアとは「同種族同居型植民」、クレールキアとは「異種族追放型植民」のことで、それらは4世紀にはそれぞれエンクテマタ、クテマタと呼ばれたというものである⁵⁾。一般に、後ろめたい行為にはそれを正当化するようなネーミングがなされるものである。そうであるならば、これら二つの名称の背景から植民活動に対してアテナイ人が抱いていた心的態度が読みとれるのではないだろうか。小稿の目的は二つある。第一は、この仮説を検証することである。そのためにはまず、植民市建設に関するテキストに現れる先住民の種族と彼らに対する処置との関係が明らかにされなければならない。その際に注意すべき点は、種族には常に虚構性が伴うということである。つまり種族とは、自然にあるものではなく、一定の客観的状況を基にして何者かの努力によって創作されたものだけのことである。そこで次に、その時々のエリートによって種族がいかにして創り出されたかが明らかにされなければならない。この作業は容易ではないが、エリートの神話、伝承、宗教行為に着目することが肝要であろう。第二は、なぜ5世紀のアポイキア・クレールキアという語が4世紀には使われなくなり、エンクテマタ・クテマタという語に取って代わられたのか、その理由を明らかにすることである。

小稿では、561/0年から338年までのアテナイ植民活動を考察の対象とする。その際に、便宜的に五つの時期に区分し、それぞれを当時の植民活動の主導者の名に因んで、Ⅰ.ペイストラトスの時代、Ⅱ.キモンの時代、Ⅲ.ペリクレスの時代、Ⅳ.クレオンの時代、Ⅴ.ティモテオスの時代とする。なお、小稿で用いる年号は、特別な指示がない限り紀元前を指す。

第1節 アッティカの党派争い

アリストテレスの『アテナイ人の国制』によれば、初期アテナイの国制は、貴族と民衆の激しい抗争を基盤として、ドラコンの立法、ソロンの改革、三党派の争い、ペイストラトスの僭主政、クレステネスの改革を経て、民主政へ移行したとされている(Aristot.*Ath.Pol.*1-22)。また同書によれば、最初の民衆指導者はソロンであり、二番目がペイストラトス、三番目がクレステネス、四番目がクサンティッポスで、一方、名士の指導者はミルティアデス、そしてその子キモンであったと述べている(Aristot.*Ath.Pol.*28.2)。つまり、独裁政治を樹立したペイストラトスもそれを打倒したクレステネスも同じ範疇に入れられているのである。僭主政と民主政、民衆指導者と名士の指導者、これらはどのような関係にあったのだろうか。

民衆指導者も名士の指導者もアテナイの富裕な名門貴族であった。民衆指導者はもちろん民衆を積極的に仲間に取り込んでいったが、名士の指導者も民衆に惜しみなく施しをして彼らを自派に取り込もうとした(Aristot.*Ath.Pol.*27.3)。民衆を自らの企てに動員しようとした点において、彼らは異なるものではなかったのである。異なるのは、彼らの政治的権威の拠り所であった。名士の指導者は伝統的なアレイオス・パゴス評議会を拠り所としていたのに対して、民衆指導者はそれを無視したり、新しく設置された五百人評議会、民会、民衆法廷を拠り所としていたのである。

民衆指導者と名士の指導者との対立があったのと同時に、民衆指導者たちの内部でもヘゲモニーを巡る対立があった。594/3年のソロンの改革の後、アッティカには三つの党派が鼎立していた。メガクレスが率いる「海岸党」は、ヒュメットス山以東の半島部を拠点とし、中庸の農民や職人を集めて、中庸な政体を目指していた。リュクルゴスが率いる「平野党」は、ケフィソス川以西の肥沃な平野部を拠点とし、富裕な地主貴族を集め、寡頭政治を目指していた。ペイストラトスが率いる「山地党」は、アッティカ北東部の山地を拠点とし、貧困な小農や牧人を集め、最も民主的な政体を目指していた。

この中で最初に抜きん出たのはペイストラトスだった。彼は 561/0

年に最初の僭主政を樹立した。511/0年に彼の子ヒッピアスを追放して僭主政を打倒したのはメガクレスの子クレステネスだった。彼は508/7年に改革を行い、アテナイ民主政治の基礎を確立した。このように、民衆指導者の内部では、ペイストラティダイとアルクメオニダイが対立軸を成していた。両派の違いは、前者がポリスの分裂のバランスに乗ってむしろ遠くの貴族を頼りとしたのに対して、後者はポリスの統合を計りむしろ近くの民衆を頼りとした点にある。このような彼らの戦略の違いは、当時のアテナイの植民活動にも影響を与えた⁹⁾。

第2節 エーゲ海北岸における植民

ペイストラトスは僭主政を三度樹立したが、その間に二度の追放を受け、二度の帰国を果たした⁷⁾。しかし彼の三回目の帰還の仕方は以前のものとは全く異なっていた。その背景には、マケドニア地方のライケロスおよびトラキア地方のパンガイオンとの密接な関係があった。

ペイストラトスは561/0年に第一回僭主政を樹立した。メガラとの戦争において名声を高めていた彼は、自らを傷つけて置きながら反対派にやられたと狂言を打ち、身辺警護のために「棍棒持ち」を得た後、クーデターを起こした(Hdt.1.59;Aristot.*Ath.Pol.*14.1)。しかし彼の政権が根付く前、恐らく556/5年頃メガクレスとリュクルゴスが協力して彼を追放した(Hdt.1.60;Aristot.*Ath.Pol.*14.3)。第二回僭主政は551/0年頃、ペイストラトスとメガクレスの和解によって始まった。ペイストラトスの追放後、メガクレスとリュクルゴスの間で再び党争が起こり、それに悩まされたメガクレスがペイストラトスに自分の娘と僭主政を与える代わりに、帰国して自派を助けるよう要請した。これに応じたペイストラトスは帰国に際して、ヒュエというトラキア出身の美しい大柄な女にアテナ女神の衣装を付けさせ、効果的なポーズを取らせて共に戦車に乗って町に駆け込み、触れ役たちにアテナ女神がペイストラトスを連れ戻したのだという口上を述べさせた。アテナイ人はそれを見て

平伏し、彼を迎え入れたと云われている (Hdt.1.60; Aristot.*Ath.Pol.*14.4)。

(1) ライケロス・パンガイオン植民

ペイシストラトスがメガクレスの娘と結婚して置きながら彼女をないがしろにしたことから和解が破れ、550/49年頃に彼は再び国外へ逃亡した (Hdt.1.61; Aristot.*Ath.Pol.*15.1)。彼ら一族はまずエレクトリアへ向かい、それからテルメ湾近くのライケロスに移り、その後さらに東部のパンガイオンへ進出した。帰国のための軍資金の一部は自国から一部はストリュモン河畔から入り、また彼に恩義を感じている者たちからも義援金を集めた。539/8年頃、十一年目にして再びエレクトリアへ戻り、この時はじめて武力によって支配権を取り戻そうとした。彼は、テーベ人、ナクソス人リュグダミス、エレクトリアの騎士たち、アルゴスの傭兵を引き連れて、アテナイへの帰国を果たした (Hdt.1.61-62,64; Aristot.*Ath.Pol.*15.2-3)。

テルメ湾奥の東側に位置するライケロスの近くにエケイドロスという名の河がある。その名の由来は次のようなものである。「マケドニアの河。以前はエドノスと呼ばれていた。エケイドロスは贈り物(ドロネ)を持つ(エケイ)河の意義くと伝わるが、それは砂金を下流へ運んでくるためであって、地元の人々は毛を刈った山羊の毛皮を水中に浸して砂金を収集している。(Ethnologicum Magnum, s.v., 'Εχσιδορος)」⁹⁾。多分ペイシストラトスの最初の資金源は、ライケロス地方の砂金だったのだろう。彼がこの砂金をどのようにして経営したのかは判らないが、彼がこの情報をエレクトリアから得たであろうことは間違いない。なぜならば、エレクトリアは8世紀の半ばにテルメ湾の入り口から奥にかけて植民市を建設していたので、その地の事情に詳しかったはずだからである⁹⁾。

ペイシストラトスがライケロスからパンガイオンに移った理由は判らない。パンガイオンはギリシア屈指の金山であった。ストリュモン河畔と海岸の間を東西に走る軍道沿いにある山で、その高みは島のように見えるらしい。

伝説によれば、この山を最初に開発したのはフェニキア人カドモスということになっているが(Strab.14.680)、実際は現地のトラキア人であった¹⁰⁾。ストリュモン河畔の町エイオンには、ギリシア人としては7世紀後半から既にパロス人が植民しており、当地の金を入手して加工していたようである。パンガイオンの金もエケイドロスの金と同様に、鉱山採掘というよりは、山麓から吐き出されてくる砂金を河の流れや河床から採集するというものであった¹¹⁾。

ペイシストラトスの帰国を可能にしたもう一つの要因は、貴族同士の相互扶助ネットワークである。それを最もよく表しているのがナクソスの例だろう。リュグダミスは、多くの資金と軍隊を調達してペイシストラトスの復帰を最も熱心に支援した。ペイシストラトスは自分の政権を樹立すると、今度はリュグダミスを助けて彼をナクソスの僭主の地位に就かせている(Hdt.1.64)。そうであるならば、トラキア人から資金援助を受けたペイシストラトスは、彼らに対する見返りとしてどのような援助をしたのだろうか。そのことを知るためには、ペイシストラトスの第一回僭主政樹立と同じ時期に建設されたケルソネソス植民を見なければならない。

(2)ケルソネソス植民

ケルソネソスは、トラキア南岸から南西に向かって腕のように突き出した大きな半島で、この半島の重要性は、それが交通の十字路に位置したことと土地の肥沃さにある。そもそもそこにはトラキア人が住んでいたが、7世紀になると、レスボスからのアイオリス人がマデュトスとアロペコネソスとセストスに、ミレトスとクラゾメナイからのイオニア人がリムナイとカルディアに、テオスからのイオニア人がエライウスに植民した¹²⁾。半島において彼らはトラキア人と混在して住んでいた。4世紀はじめには半島に11か12のポリスが存在していたと伝えられている(Xen.Hell.3.2.10)。そこにはポリスの名が記されていないが、上記のもの以外にアビュドス、ケルソネソス・アパゴラス、カリポリス、クリトテ、パクテュエが同定されるだろう。半島に住む者たちは、一般

には「ケルソネソス人」と呼ばれていたが、彼らの政治機構は統一的なものではなく、半島の個々の都市が独立したポリスを形成していた。

ケルソネソスの初代統治者はキュプセロスの子ミルティアデスであった。ヘロドトスはその経緯を詳しく述べている。「ケルソネソスにはトラキア人のドロニコイ人が住んでいた。このドロニコイ人はアプシントス人との戦争によって苦しめられていたので、戦局に関する神託を得るために首長たちをデルフォイに派遣した。巫女は、この神域から帰る途中に最初に自分たちを饗応に招いてくれる人物を都市建設者としてその地に連れて行けという神託を彼らに与えた。彼らは「聖なる道」をフォキスとボイオティアを通過して行ったが、誰も自分たちを饗応に招いてくれないので、アテナイに向かった。(省略)このミルティアデスが自分の家の戸口に座っていると、その国では見慣れない服を着て槍を持ったドロニコイ人が通り過ぎるのを見て彼らに近づき、宿と饗応を申し出た。彼らは彼の申し出を受け饗応されると、例の神託のこと全てを彼に打ち明けて、神意に従うよう彼に懇願した。その言葉は、聞いたミルティアデスを直ちに説得した。というのは、彼はペイストラトスの支配に強い不満を持ち、国を出たいと願っていたからである。彼はすぐに、ドロニコイ人が願ったことをすべきかどうかを尋ねるために、デルフォイに使節を派遣した。巫女がそうせよと命じたので、オリュμπシア競技祭での四頭立て戦車競技の優勝者であるキュプセロスの子ミルティアデスは、その時アテナイ人の内でその一行に参加することを望む者全てを引き連れて、ドロニコイ人たちと一緒に航行し、その地に住み着いた。そして連れていった者たちは彼を僭主に立てた(Hdt.6.34-36)」。

この叙述に特徴的なのは、この都市建設に際しては「饗応」の申し出と受け入れという手続きがなされたことである。クセニア慣行は単なるサービスの申し出ではなく、相互扶助の同盟を意味する。従って、これに続く文章に見られるように、ミルティアデスとドロニコイ人はギブ・アンド・テークの関係にあった。彼はまず、半島の頸部を横断する大防壁を建設し、アプシントス人の侵入を防いだ(Hdt.6.36)。アプシントス人とは、ドロニコイ人と同じトラ

キアの一部族であるが、彼らはアイノスの東の海岸地帯に住み、しばしば半島内に侵入していた好戦的な部族であった¹³⁾。次にラムプサコス人との戦争を行った(Hdt.6.37)。ラムプサコス人は、半島の対岸にあるギリシア人ボリスの住民で、種族的にはアテナイ人と同じイオニア人であった¹⁴⁾。

実際ケルソネソスは危険な場所であった。その後キュプセロスの子ミルティアデスは、原因は判らないが、子を残さずに死んだ。彼の権力と財産を継いだのは、異父兄弟であるキモンの子のステサゴラスであった。彼はアプシントス人との戦争の最中に、プリュタネイオンで暗殺された。その次の後継者は、キモンの子ミルティアデスであった。彼はペイシストラティダイによって三段櫂船と共に半島に派遣された。到着すると、先の僭主の葬儀を行い、それに参列した各部族の首長たちを突然逮捕し、500人の傭兵隊を養ってケルソネソスを統治した(Hdt.6.39)。このことから、半島内の諸部族の中でも反フィライダイ派が存在したこと、それをペイシストラティダイもミルティアデスも恐れ、反抗を武力によって押さえようとしたことが窺える。

しかしミルティアデスは弱腰であった。495年にスキタイ人が半島に侵入した時、彼は踏み止まってそれを防ごうとしないばかりか、スキタイ人が撤退するまでケルソネソスから逃亡し、ドロニコイ人によって連れ戻されるという失態を見せた(Hdt.6.40)。また493年にフェニキア艦隊が半島に近づいてきた時、彼はあるだけの財産を五隻の三段櫂船に満載してアテナイへ遁走した(Hdt.6.41)。この時、ミルティアデスの一族のみならず、彼らと共に移住した植民者たちの多くも引き揚げたと考えられる。単純に一隻の三段櫂船に定員の200人が乗り込んだとすれば、五隻で1000人となり当時の植民者の数としては妥当なものとなろう。

では、このように危険な任務の見返りとは一体何だったのだろうか。明記されてはいないが、キモンの子ミルティアデスがトラキア人の王オロロスの娘ヘゲシピュレを娶ったという記述(Hdt.6.39)は、その回答を示唆している。オロロスとはタソス島の対岸に位置するトラキア地方に住むサパイオイ人の王であった。そしてこの地方は金鉱山に恵まれており、この結婚以後、フィライダ

イはその権益を持つようになった。最初にミルティアデスが半島に赴いたのは561/0年頃で、ペイストラトスが最初の僭主政を樹立した時と一致する。ヘロドトスによれば、彼はペイストラトスの独裁政治に不満を持っていたとしているが、実際にはペイストラトスの命によって派遣されたと見るのが通説である¹⁵⁾。ペイストラトスがトラキアへ移住するのは、第三回僭主政樹立の前であるが、第二回僭主政樹立の時にトラキア出身のヒュエという女性をアテナ女神に扮装させたというエピソードは、彼がその時から既にトラキアと関係を持っていたことを示唆する。そうだとすれば、ペイストラトスに対するトラキア人からの資金提供は、フィライダイを通じてのケルソネソス半島防衛の見返りだったのではないだろうか。

(3) シゲイオン植民

ケルソネソスの対岸にあるシゲイオンは、トロイア戦争の舞台となったイリオンの地に位置するアイオリス人の都市である¹⁶⁾。530年頃ペイストラトスはシゲイオンを武力で奪い、それをアルゴス貴族の娘ティモナッサから生まれた息子ヘゲストラトスに与えて、彼を当地の僭主に立てた¹⁷⁾。しかしその後も紛争は絶えず、ミュティレネ人はアキレイオンを、アテナイ人はシゲイオンを拠点として、長期に渡って戦争した。ミュティレネ人はシゲイオンの返還を要求したが、アテナイ人は「ヘレネの誘拐に対する復讐のためにメネラオスに協力した自分たちや他のギリシア人たち以上に、アイオリス人がそのイリオンの地域の権利を持つはずがない」と言って、それを認めなかったと云われている(Hdt.5.94)。古代ギリシア人にとって神話は歴史と同じであり、神話はまた種族の記憶と結びついたものでもあった。

シゲイオンがケルソネソス防衛と関係があったかどうかは判らない。ただ言えることは、ケルソネソス同様シゲイオンも、ペイストラトスの息のかかった者に統治させていたということである。510/9年ペイストラトス一族の僭主政が崩壊し、アッティカを退去するよう命じられた時、ヒッピアスを

頭とする一族はシゲイオンへ移住していった(Hdt.5.65)。それ以後シゲイオンはペイシストラティダイの拠点となり、次第にアテナイと疎遠になっていった。

(4) レムノス植民

キモンの子ミルティアデスは、アテナイに遁走する以前、恐らく 510 年から 505 年頃¹⁸⁾、ケルソネソスからその沖合にあるレムノス島を征服し、アテナイに植民市として与えた。また、史料によって言及はされていないが、この時に隣のイムブロス島も植民されたと考えられている¹⁹⁾。しかしこれらがケルソネソス防衛と関係があったかどうかは判らない。恐らくなかつただろう。レムノスはエーゲ海北部に浮かぶ大きな肥沃な島で、島の住民はペラスゴイ人あるいはテュレニア人とされる。ペラスゴイ人はギリシアの先住民で、非ギリシア語を話すバルバロイである。テュレニア人は元は小アジアに住んでいたエトルスキ人の一派である。イムブロスの住民もまたペラスゴイ人であった。

この島の征服と植民の正当性について、ヘロドトスは長々と述べている。そこには『歴史』執筆当時のアテナイのセスノセントリズムが色濃く反映されている。彼の記述は、レムノスの住民であるペラスゴイ人がアッティカから追放されたことから始まる。その追放が正当な行為であったか否かについて、二つの意見が紹介される。それを不当とする見解はヘカタイオスのもので、それによると、アテナイ人がアクロポリスの周囲に防壁を建設した時、ペラスゴイ人を雇い、その賃金としてヒュメットス山麓の土地を与えたが、それまで取るに足らないと思われていたその土地が彼らによって立派に開墾されたのを見て妬ましくなり、アテナイ人はペラスゴイ人を追い出したという。一方、それを正当とする見解はアテナイ人自身のもので、それによるとペラスゴイ人は、エンネアクルノスと呼ばれる泉に水汲みに来るアテナイ人の婦女子をしばしば襲っていたが、それに飽きたらず、ついにはアテナイを襲う陰謀を企てたという。その陰謀は未然に漏れたために事なきを得たのであったが、その時アテナイ人は「彼らより優れた人間であったので、彼らが陰謀を企てているところを

押さえた時に、ペラスゴイ人を皆殺しにすることが出来たのにそれを望まず、その土地から立ち退くことを命じた(Hdt.6.137)」。この最後の言葉は、裏を返せば、皆殺しは野蛮人のすることであると言っているのと同じである。

追放されたペラスゴイ人は様々な所に散っていったが、レムノスはその一つであった。レムノスのペラスゴイ人はアテナイ人に復讐するためにブラウロンでアルテミスの祭典が行われる時、待ち伏せしてアテナイ人の女たちを誘拐し、島に連れ戻って妾とした。しかし「その女たちが子供をたくさん産むに連れて、彼女たちはその子供たちにアッティカの言葉と習慣を教えた。子供たちは、ペラスゴイ人の女たちが産んだ子供たちと交わろうとせず、もしアテナイ人の子供の誰かがペラスゴイ人の子供の誰かに殴られた時には、全員が救援に走り、互いに手助けをした。アテナイ人の子供たちはペラスゴイ人の子供たちを支配することを正当なことであると考え、実際に大いに支配するようになっていた」。この文章は、ヘロドトスの時代の現実のアテナイ帝国支配を子供の世界に投影しているように思われる。そこには、アテナイ人の民族的な優秀さと結束の強さが強調され、優秀な民族による劣性な民族の支配の正当化が窺える。さらに続けて、このような事態を重く見たペラスゴイ人は協議し「そこで彼らは、アッティカの女から産まれた子供たちを殺すことを決議した。このことを実行した後、母親たちも皆殺しにした」。そしてそれ以来「ギリシア中で惨たらしい行為は皆『レムノ斯的』と呼ばれるようになった(Hdt.6.138)」。アテナイ人とペラスゴイ人の対比は、優秀と野蛮の対比と同一視されている。

残虐な行為をしたペラスゴイ人の所ではその後、穀物も実らず家畜も女を子を産まなくなった。「飢饉と不妊に悩まされたので、デルフォイに使節を派遣し、この災厄から解放される方法を尋ねたところ、巫女はアテナイ自身が望むようにアテナイ人に償いをせよと命じた(Hdt.6.139)」。ペラスゴイ人はアテナイに赴き、償いを申し出ると、アテナイ人は彼らの住んでいる島を引き渡すよう命じた。そこでペラスゴイ人は、北風に吹かれた船が一日であなた方の国から私たちの国に到着した時には、島を引き渡しましょうと言った。なぜならば、アッティカはレムノスの遙か南に位置していたので、そのようなこと

が起こるはずがないと確信していたからである。

「その時はそれで済んだ。しかしそれから非常に長い年月が経ち、ケルソネソスがアテナイ人の支配するところとなった時、キモンの子ミルティアデスは、北西の季節風が吹く頃、ケルソネソスのエライウスからレムノスに到達し、島から出ていくようにペラスゴイ人に勧告し、ペラスゴイ人が決して成就しないと思っていた例の神託を彼らに思い出させた。ヘファイスティア人は従ったが、ミュリナ人はケルソネソスがアッティカであるとは認めなかったので、包囲攻撃され、ついに力づくで意に従わされた。このようにして、レムノスをアテナイ人とミルティアデスが征服したのである(Hdt.6.140)」。以上の説明は、いかにもよく出来た作り話らしい感じがする。

一方ディオドロスは、簡略ではあるがより現実味のある記述を伝えている。「テュレニア人は、ペルシアの脅威によってレムノスを立ち去ろうとしている時、ある神託に従ってそうするのだと言って、島をミルティアデスに引き渡した。これはヘルモンがテュレニア人の首長であった時のことなので、そのような好意はその時以来『ヘルモンの』と呼ばれるようになった(Diod.10.19.6)」。レムノスは512年にペルシア人オタネスによって征服されて以来、480年までペルシアの支配下にあった²⁰⁾。従って先住民が「ペルシアの脅威によって」島を立ち去ったというのは頷ける。実際にその期に乗じてミルティアデスが占領したのかも知れない。

第3節 アッティカ周辺における植民

7世紀までにアッティカ地方全域は都市アテナイによって政治的に統合され、ポリスとしてのアテナイの枠組みが出来上がっていた。しかしその後も、サラミスを巡って西隣のメガラと、オロピアを巡って北隣のボイオティアと長年に渡って領土問題が争われた。カルキスはオロピアの対岸に位置する。

一方、党派争いにおいて、遠方の有力者と提携出来ないエリートは、自分の周りにいる民衆に目を向けた。エリートが民衆を見方に付けるためには、

彼らに土地を与えて恩を売し、彼らを動員可能な重装歩兵とすることが必要であった。その場合、彼らを自分の近くに配置しなければ意味がない。アッティカ周辺における植民は、領土紛争とヘゲモニー争いの接点に位置づけられる。

(1) サラミス植民

アテナイは既に7世紀からサラミスの領有を巡ってメガラとしばしば戦争し、島を取ったり取られたりしていた。610年頃ソロンの指揮のともてアテナイは島を取り戻したと云われている(Plut.Sol.8.1-3;Diog.Laert.1.46-47)。しかしその後もサラミスを巡る抗争は続いた。そこで両者はスパルタ人に調停を依頼し、その結果アテナイが島を領有することとなった。伝承ではソロンが交渉に当たったとされているが、実際には510年頃のことである²⁰⁾。彼はアテナイによるサラミス領有の正当性の根拠として以下の点を主張したと云われている。

①ホメロスの軍船表にある『アイアスはサラミスから12隻の軍船を率い、導いてアテナイ人の戦列が陣取っている所に配置した』という件、②フィライオスとエウリュサケスがアテナイ市民権と引き替えにサラミスを明け渡したという言い伝え、③サラミスに見られる葬制がアッティカ式であること、④サラミスはイオニアであるとのピュティアの神託。

最後の論拠は踏み込んで考える必要がある。ソロンの時代の島の住民はメガラ人で、彼らはドーリス人に属していた。メガラ地方がドーリス化したのは、ヘラクレスの子孫たちが帰還した後のこととされる(Strab.9.393;Paus.1.39.4-5)。しかし別の伝承によれば、そもそもメガラ地方はアッティカの一部であり、そこにはイオニア人が住んでいたと云われている。ストラボン『アッティカ地方誌』をまとめた著者たちの様々な見解を整理し、その共通認識としてパンディオンの四人の子供たち、即ちアイゲイス、リュコス、パラス、ニソスによるアッティカの四分割の伝承を伝えている(Strab.9.1.6-7)。それによると、パンディオンはアッティカの王であったが、彼の兄弟たちによって王位を奪われ、メガラ王ピュラスのところに身を寄せて、

その娘を妻とした。ピュラス自身が退位せざるを得なくなった時、パンディオンがメガラ王となった。そしてアイゲウスが父の王位を回復してアッティカ王となった折り、リュコスがエウボイアを望む地方を、パラスは南方を、ニソスはメガラ地方を割り当てられた。彼はそこに都市を建設し、自分の名に因んでニサイアと名付けたと云われている²³⁾。

サラミス領有は種族アイデンティティーが認められる最初の例である²⁴⁾。スパルタの調停の直後 510 年から 500 年頃、アテナイはサラミスにクレールーコイを派遣し、それ以後サラミスは一貫してアテナイの領土となった²⁴⁾。

(1)カルキス植民

510/9 年に僭主ヒッピアスが追放された後、アテナイではクレイステネスとイサゴラスとの間で政権争いが起こった。508 年クレイステネスは民衆を見方に引き入れようと部族改革を行った。一方イサゴラスは同年アルコンに就任し、スパルタ王クレオメネスに救援を要請した。506 年スパルタ軍がアテナイに進駐して、クレイステネスと「穢れ人」700 家族を追放した。更に評議会を廃止して、イサゴラスと 300 人に政権を委譲しようとした時、評議会の反対に会い、スパルタ人は国外退去し、イサゴラス派は投獄された。この時クレイステネスと「穢れ人」は帰国した。同年クレオメネスは、アテナイに復讐しイサゴラスを僭主にするためにペロポネソス全土から軍を召集した。ペロポネソス軍はエレウシスに侵入し、ボイオティア軍はアッティカ国境を占領し、カルキス軍もアッティカ各地を荒らした。アテナイ軍はまずエレウシスのペロポネソス軍に対抗したが、コリントス軍が撤退するとスパルタのもう一人の王デマラトスも撤退した。この様子を見て他の同盟軍も撤退した(Hdt.5.66-75)。

「それからその遠征軍が無様に解体したので、その時アテナイ人は復讐することを欲し、まずカルキス人に対して遠征を行った。一方ボイオティア人はカルキス人を救援するためにエウリポスへ向かった。その救援軍を見たアテナイ人は、カルキス人よりもボイオティア人を先に攻撃する方がよいと思っ

た。そこでボイオティア人に当たり、アテナイ人は大きな戦果を挙げ、非常に多くの者を殺し、彼らの内の 700 人を捕虜とした。その同じ日にアテナイ人はエウボイアへ渡り、今度はカルキス人と交戦し、勝利して 4000 人のクレールーコイをヒッポボタイの領地に残した。ヒッポボタイとはカルキス人の富裕者の呼称である。彼らの内で捕虜とした限りの者たちを、既に捕虜にされていたボイオティア人と一緒に足枷を掛けて監禁した。しかし後に一人 2 ムナの身代金を取って解放した(Hdt.5.77)。

アイリアノスは別な典拠に依拠した記録を残している。「アテナイ人はカルキス人に勝利して、彼らの土地を 2000 のクレーロスに分けた。それはヒッポボトスと呼ばれる領地で、レラントンという名の領域にあり、アテナ女神に神域を奉納し、残りをストア・バシレイオスの前に立っている賃貸料の取り決めを記した碑文に従って賃貸した。また彼らは捕虜に足枷を掛けたが、それでもカルキス人に対する怒りを収めなかった(Aelian.V.H.6.1)」。これら二つの史料では植民者の数が違っており、4000 か 2000 か判然としない²⁹。

カルキス植民については、回りくどい正当化はされていない。それは単刀直入に「怒り」であった。ケルソネソス植民やレムノス植民のような長々しい説明よりも説得力がある。その理由は恐らく、カルキスがイオニア人であり、アテナイから見れば自分の植民市に当たるにも拘わらず、母市に対して侵略したということであろう。植民市の母市に対する謀反は神意に忤ることとされていた(Hdt.3.19)。この植民団は 490 年のペルシア軍の侵略の際にアテナイに撤退した(Hdt.6.100-101)。

第 4 節 ヘロドトスの『ペルシア戦争』

この時、それまでに獲得されたアテナイの植民市は、サラミスを除いて全て失われたことになる。ところで、本章で扱った植民に関する情報の多くはヘロドトスの著述から得られるのであるが、これらの事件は彼の執筆時期から見て 50 年から 100 年も過去のことであった。しかしペルシア戦争の記憶は

彼にとって現代史的な意味があった。

ハリカルナソス出身のヘロドトスは、諸国を漫遊した後、445/4年アテナイを訪れた。ソフォクレス、ペリクレスらと親好を結び、自分の書いた『歴史』を読んで報奨金を受け取ったと云われている³⁶⁾。それは、本章で扱ったケルソネソスとカルキス(レムノスも?)がペリクレスによって再植民されて間もない頃であった。『歴史』が出版されたのは425年より少し前のことであるらしいが、それ以前から彼の作品は人々によく知られていた³⁷⁾。『歴史』はエンターテインメントであり、よく語られよく読まれたものと思われる。それ故に民衆に与えた影響も大きかっただろう。

彼はペリクレスの礼賛者であった。彼が『歴史』でアテナイの威信を高め、ペリクレスの政策を支持したならば、彼の描くアテナイ植民史は、彼らにとっての現代を過去に投影し、その正当化を狙ったものと言えるだろう。

第4章 キモンの時代

—トラキア植民の奪還—

第1節 デロス同盟

478/7年冬に結成されたデロス同盟の初期の軍事行動は、ミルティアデスの子キモンによって遂行された。「まず初めに、ミルティアデスの子キモンが将軍の時、メディア人によって占領されていたストリュモン河畔のエイオンを包囲攻撃によって奪い、住民を奴隷に売った。次にドロペス人が住んでいたエーゲ海のスキュロス島を奪い、住民を奴隷に売って彼ら自身を植民した。また彼らは、エウボイアの諸都市のうちカリュストス人に対してのみ戦争を起し、後になって協定を結んだ。またナクソスが離反し、その後、戦争状態に陥ったが、包囲攻撃によってそれを鎮圧した。後には多くの都市がそれぞれの事情で隷属化させられることとなったが、それらのうちでこの都市は、協定に違反して隷属化させられた最初の同盟都市であった(Thuc.1.98.1-4)」。

この殆ど列挙に近い叙述から、それぞれの事件に関する詳しい情報を得ることは不可能である。しかしこれら四つの出来事の流れと選択からは、著者の明確な意図が読み取れる。これらの事件は、同盟の行動が当初の目的から逸れていく過程を四つの段階として示しているのである。第一段階は477年秋から476/5年にかけてのエイオン攻略で、これは残留するペルシア軍に対する追討戦であり、それゆえに同盟結成の目的に全く適った行動の例である。第二段階は476/5年のスキュロス植民で、これはペルシア戦争とは関係ないが、有害な非ギリシア人の追放であり、同盟にとっては有益な行動の例である。第三段階は475年から471年にかけてのカリュストスとの戦争で、これは恐らく同盟加入を強制された最初のギリシア人都市の例であったと考えられる。第四段階は470年のナクソスの離反と鎮圧で、これは離反して隷属化させられた最初

のギリシア人同盟都市の例である²⁸⁾。このように、同盟の性格は結成から約十年の内に徐々に変化していったとするのがトゥキュディデスの見解である。

彼の同盟結成の目的に関して、彼は次のように述べる。「パウサニ阿斯に対する憎悪が原因となって、このような仕方でも同盟諸都市の自由意思に基づく指導権を引き受けたアテナイは、バルバロスに対してどの都市が資金をどの都市が軍船を醸出すべきかを決定したが、その表向きの理由は、王の土地を略奪することによって彼らが受けた被害の復讐をすることであった。(Thuc.1.96.1-2)」。アテナイ人が「指導権を引き受けた」とする記述は、覇権獲得に積極的であったとするヘロドトスやアリストテレスの記述と矛盾しており、同盟結成の事情に関するトゥキュディデスの立場を示す重要な箇所であるが²⁹⁾、ここでは専ら同盟結成の目的に注目したい。彼は「表向きの理由」としてペルシアに対する復讐を挙げている。では一体、真の理由とは何だったのだろうか。またなぜ表向きの理由が必要だったのだろうか。

第2節 キモンとトゥキュディデス

キモンによる初期の同盟軍の軍事行動は、二回のトラキア遠征に収斂される。第一ラウンドはストリュモン河畔のエイオン攻略とそれに纏わる諸事件であり、第二ラウンドはエイオンの目と鼻の先にあるタソスの反乱鎮圧とそれに纏わる諸事件である。確かに、同盟結成当時にはまだペルシア軍はトラキアに残留していたので、初期の軍事行動がトラキアに集中しても不思議ではない。しかし理由はそれだけではなさそうである。そもそもキモンとトラキアの間には非常に密接な関係があったのである。

キモンはフィライダイの人間であった。彼の父ミルティアデスは、既に述べたように、ケルソネソスの三代目の僭主であり、キモン自身は510年頃にケルソネソスの地で生まれたと思われる。母はミルティアデスが当地に滞在中、515年頃に娶ったオロロスの娘ヘゲシピュレで、オロロスとはタソス島の対岸のトラキアに住むサパイオイ人の王であった。従って彼にはトラキア王家の

血が流れていることになる。イオニア反乱鎮圧の波にケルソネソスが飲み込まれた 493 年に、彼の一族は五隻の船に財産を積み込んで、フェニキア艦隊の追跡を逃れて命からがらアテナイへ逃げ戻った。その時キモンは 17 歳くらいであったろう。キモンにとってトラキアは故郷であり、もしかしたら祖国アテナイによりも強い憧憬の念を抱いていたのかも知れない。母方の血縁関係から、キモンはトラキアにある鉱山の権益を持っていた³⁰⁾。そうであってみれば、彼がまずトラキア方面での作戦に着手し、それに熱心であったことはよく理解できる。

トゥキュディデスの生涯については、確実なことは判らないが、伝承によれば³¹⁾、彼もまたフィライダイに繋がる者であったらしい。彼の父の名もオロロスと言い、トラキア王オロロスに由来すると云う。またトゥキュディデスもトラキアにおける鉱山の権益を持っていた。このことは彼自身が著書の中で述べており(Thuc.4.105.1)³²⁾、実際に彼は 422 年にトラキアを巡るブラシダスとの戦闘を指揮し、その失敗の責任をとって追放刑に処された。その期間中に彼はトラキアのスカプテヒュレに住み、そこで著述活動に没頭したとも云われている。つまり、同盟初期に活躍した將軍キモンと彼の行動を書き留めたトゥキュディデスとは親戚どうしだったのである³³⁾。

同盟結成の目的が本質的に対ペルシア戦であったことには疑問の余地がない。しかし、ペイシストラティダイやフィライダイは、6 世紀から既にトラキアにおける鉱山の権益を保持し、そこから莫大な資金を得ていた。しかし彼らはペルシア戦争以来それを失ってしまっていた。この事実からすれば、デロス同盟が結成されるや否や、フィライダイのキモンがトラキア遠征を行ったことの背景に、一族の富の源泉と自分の故郷を取り戻そうという彼の強い意志が働いていたと見ても的外れではあるまい。トゥキュディデスにとって『戦史』の当該箇所の記述内容は、いわば身内の所業であったし、彼自身もまた当事者の一人であった。同盟結成の裏の理由とは、トラキアにおける鉱山の権益を取り戻すというフィライダイの個人的な思惑のことではなかったのだろうか。そうすると、その動機はペルシア戦争以前に遡りうるものであり、同盟の目的が

徐々に変化したとか、指導権を引き受けたという彼の申し立てと食い違ってくる。このことは、同盟初期の植民活動を詳しく見ることによってより鮮明になるだろう。

(1) エイオン植民

トゥキュディデスによって同盟最初の軍事行動として伝えられているのがエイオン攻略である。エイオンはトラキア地方を流れるストリュモン河畔の河口、海から見て右側に位置する都市で、その河の上流には後に建設されるアムフィポリス(=エンネアホドイ)から 25st(約 4.5km)の距離にあり、アムフィポリス建設後はその港としての機能を果たしていた³⁹⁾。

a. 黄金の都市

480年にクセルクセスがギリシアに侵入した際、ヘブロス河畔のドリスコスとストリュモン河畔のエイオンなどが前線基地として整備され、そこに大規模な食糧倉庫が設置された。これらはペルシアのギリシア戦略にとって不可欠な拠点であった。479年のプラタイアの戦いに敗れて、大方のペルシア軍がギリシアから撤退した後も、これらの地にはペルシア軍が残留し、そこを防備していた。ドリスコスの将軍はマスカメス、エイオンの将軍はボゲスであった。

エイオン攻略の開始は477年秋、陥落は476年の秋のことであるから、一年ほど包囲攻撃を受けたことになる。エイオン陥落の後、海岸沿いのギリシア諸都市はギリシア側に寝返ったが、ドリスコスは何度も攻撃を受けながらも、結局は陥落しなかった。それゆえにこれらの地を死守したマスカメスとボゲスの子孫は、ペルシア王によって厚遇されたと云う。エイオン植民が行われたのは、475年の春のことであったと考えられるが、その規模については判らない。ヘロドトスは、ボゲスの壮絶な戦死の模様を生々しく描写している。「クセル

クセス王は、ギリシア人によって追放された者たちのうちの誰一人として立派な人物であると評価しなかったが、エイオンから追放されたボゲスだけは例外であった。王はこの人物を賞賛して止まなかったし、また生き残ってペルシアにいる彼の子供たちにも非常な名誉を与えたのであった。なぜならば、ボゲスは大きな賞賛に値する人物だったからである。彼はアテナイ人とミルティアデスの子キモンによって包圍攻撃された時、休戦協定を結んで脱出して、アジアへ帰国することも出来たのであったが、死を恐れて生き恥をさらしたと王に思われぬようにそれを望まず、死ぬまで持ちこたえたのであった。城内にもはや食料が尽きた時、薪を高く積み上げて、子供たちや妻、妾たち、そして奴隷たちの喉を斬り、それから彼らを火の中に投げ込み、その後その都市で採れた全ての金と銀を城壁からストリュモン河へ蒔いた。これらのことをなし終えてから、自ら火中に飛び込んだのであった。このようなわけで、彼は今でもなお、ペルシア人によって正当に賞賛されているのである(Hdt.7.107)」。この記述で目を引くのは、最期を迎えたボゲスが「その都市で採れた全ての金と銀を城壁からストリュモン河へ蒔いた」という件である。エイオンはパンガイオンの麓に位置していた。

ブルタルコスも、ヘロドトスほど精彩はないがエイオン陥落を伝え、新たな情報を付け加えている。「同盟諸都市はすでに彼に従っていたので、キモンは將軍としてトラキアへ航行し、王の親族で評判の高いペルシア人がストリュモン河畔にある都市エイオンを占領して、その近辺のギリシア人を苦しめているということを知った。まず最初に、そのペルシア人を戦闘によって打ち破り、都市に閉じ込めた。その後、ストリュモン河の向こうのトラキア人を追放した。というのは、そこから彼らはペルシア人に定期的に食糧を送っていたからである。その全ての土地を監視下において、籠城した敵を非常に苦しみに陥れたので、王の將軍であるブテスはついに断念し、都市に火を放ち、友人や財産とともに滅びてしまった。このようにしてその都市を奪ったが、他に言うに値する戦利品を手に入れることが出来なかった。大抵のものはバルバロイとともに灰塵に帰ってしまったからである。しかし、その土地は非常に肥沃であ

り、また美しかったので、植民の目的でアテナイ人に与えた(Plut.Cim.7.1-3)」。

将軍の名が異なっているが、この点は重要ではない。混同した理由は分からないが、両者は同一人物であろう。「他に言うに値する戦利品を手に入れることが出来なかった」というプルタルコスという言葉は、キモンが率いるギリシア軍の目当てもまた金であったことを匂わせる。しかし彼らが入城した時には、金も銀もすでにそこにはなかった。トゥキュディデスは植民に言及していないが、キモンは兵士たちを落胆させないように、彼らにその土地を与えて入植させたことがここから知られる。もう一つ注目すべきは、駐留していたペルシア軍がストリュモン河上流のトラキア人から食糧供給を受けていたということである。エイオンからペルシア軍を追放した後にも、その周辺におけるトラキア人との紛争は終わらなかった。長いタイムスパンで見れば、エイオン攻略は、単なる残留ペルシア軍の追討戦とは思えない。その真の意味を知るためには、ペルシア戦争以前の事情を探る必要がある。

b. パロス人青年トケスの墓碑

ギリシア人がパンガイオンを開発するようになったのは、恐らく7世紀頃からで、それはアテナイ人ではなくタソス人であった。タソスはパロスの植民市であったので、それはパロス人であったと言っても同じことである。エイオン攻略の前史として、エイオンとタソスないしパロスの関係を調べなければならぬ。

パロスにはキュクラデス諸島にあるイオニア人の島で、土地は痩せているが、大理石に恵まれていたため、古典期においては大理石の産地として有名になり、富を蓄積したが、アルカイック期において既に「当時キュクラデス諸島のなかで最も富んだ最も偉大な島」と呼ばれていた³⁵⁾。詩人アルキロコス、7世紀の中頃に活躍した上層のパロス人であり、パロス人にとっては単なる詩人ではなく、愛国的な戦士であり、崇拜の対象でもあった。彼はタソス島への植民に参加し、彼の詩の大半はこの植民と関係があるらしい。

3世紀頃にデメアスという人物がパロスの年代記のようなものを書き、その中でアルキロコスの業績にも言及しているが、1世紀頃にソステネスという人物がその書物からの抜粋を石碑に刻み、アルキロケイオンに奉納した。その碑文が状態は悪いが現存している。そこにはタソス植民に関するアルキロコスの詩が引用されており、6世紀中頃のパロス、タソス、トラキアの関係を暗示している。「ペイシストラトスの息子が人々を(率いて)、彼は笛と豎琴をタソスへもたらした、犬のトラキア人どもに贈り物として純金を携えて。しかし自分の利益によって、共通の災難を招いた(FGH502.45-52)」。ペイシストラトスはまったくの無名の人物である。これは最初のタソス植民から半世紀程後の時代のことで、タソスには母市パロスから何度にも渡って植民者が送られたものと思われる。「笛と豎琴」は槍と盾ではなく平和的な植民を暗示するものであろう。あるいは豎琴はアルキロコスを象徴するものかも知れない。興味深いのは「純金」を携えてという箇所である。このことから、純金がパロスからタソスのトラキア人の元へもたらされていたことが分かる³⁶⁾。

ところがパロスは金を産出しない。そのパロスから金の産地として有名なタソスへ純金を贈るとは、非常に奇妙なことである。この謎を解く決定的な証拠はなく、ただ推測するのみであるが、もしかしたら、トラキア人の顧客に依頼されて、パロス人が鉱石を精練・加工し、完成品として彼らに納品し、その手数料として相当分の金地金を差し引いて受け取っていたのかも知れない。あるいは、タソスで産出した鉱石を精練・加工したものが母市パロスに蓄えられており、それをパロス人がトラキア人との友好関係を維持するために彼らに定期的に贈っていたのかも知れない³⁷⁾。いずれにせよこの碑文から、6世紀中頃において、パロス、タソス、トラキアが金によって結び付けられていたことが窺い知れる。

タソスは7世紀半ばの直前にパロス人によって植民されたが、パロス人はさらにタソスを足掛りとして7世紀後半にはその島の対岸にあるトラキア沿岸一帯における領土を獲得した。タソスの対岸領は、西はストリュモン河口東側のガレブソスから東はネストス河畔、さらにアブデラとマロネイアの間

のストリュメまで広がっていたと思われる。つまり、西はガレプソス止りで、エイオンには及んでいないことになる。しかし、対岸領獲得運動を推進したパロスがトラキアで最も重要なエイオンに手を付けなかったとは考えられない³⁸⁾。

事実、パロスとエイオンが 500 年頃に直接的に密接な関係にあったことが、アムフィポリスで発見された碑文から明らかとなった。それは、市壁の門に組み込まれていたトケスという名の青年のための武勇の記念墓の台座で、もともとはその上に若いトケスの騎馬像が載っていたものと思われる。碑文はこの台座に刻まれており、文字の形態から、これが 500 年前後のものであることは明らかである。「愛しきエイオンがために（戦いて、若き命を失いたるがゆえに）パロス人らが建立せし (SEG XXVII (1977) No.249)」³⁹⁾。トケスはエイオンのためにアムフィポリス周辺での戦闘に参加して、戦死したのだろう。その犠牲を称えて、祖国のパロス人が彼のために記念碑を建立したと考えられる。この戦闘が具体的にどのようなものであったのかは不明であるが、少なくとも、この碑文から当時のパロスとエイオンの間に密接な関係があったこと、およびパロスがエイオンのみならずアムフィポリスにまで勢力を延ばしていたことを窺い知ることが出来る⁴⁰⁾。

トケスという名は明らかにトラキア系であるが、彼はおそらくギリシア人であろう。トケスの祖先に地元トラキア人の有力者の娘を妻にした者がいたに違いない。ここで思い起こされるのがキモンのケースである。キモンはトラキアの鉱山採掘権を持っていたが、彼の父ミルティアデスは、トラキア王オロロスの娘と結婚していた。同様にトラキアの鉱山採掘権を持っていたトゥキエディデスも、このオロロスに繋がると云う。これらのことから、トラキアの有力者と血縁関係を持つことが、当地における鉱山の採掘権取得の重要な条件であったことが推測される。トケスも彼らと同様の事情を持ったエイオン在住のパロス有力市民の子弟であったと推察される⁴¹⁾。

エイオンはタソスの対岸領土に含まれないが、おそらく 7 世紀後半の対岸領土獲得運動の一貫としてパロス人によって植民されたものと考えられ

る。ただし、その地はタソス人に委ねず、パロスの直営地として経営されていたと思われる。エイオンはそれほど重要な地点だったのであろう。513年のダレイオスのスキタイ遠征の後、ペルシア軍のトラキア侵略やヒスティアイオスのミュルキノス植民を目のあたりして、パロスはおそらくはペルシアへの服従を誓うことによってエイオンを守り通したと推察されている¹³⁾。

以上の考察が正しければ、476/5年のエイオン攻略は、単なる残留ペルシア軍追討戦ではなく、ことによればキモンとエイオン在住のパロス人およびタソス人との戦争であったと見ることも可能となってくる。

c. ミルティアデスのパロス遠征

ここで思い起こされるのが、ミルティアデスのパロス遠征である。489年にマラトンの英雄ミルティアデスがアテナイ民会に攻撃目標を明かさないうまま、「大量の金を易々と手に入れることが出来るある国に連れていくのだ」と言って、軍船70隻と軍勢および軍資金を要求して出撃した。彼はパロスに着くと金100タラントンを要求した。結局その遠征は失敗し、金を持ち帰るどころか帰国後、彼は裁判にかけられて有罪となり、50タラントンの罰金を課されて支払うことが出来ず、パロスの神殿に盗みに入った時に受けた傷がもとで失意のうちにこの世を去った。この遠征についてヘロドトスも「表向きの理由」を持ち出している。「ミルティアデスは遠征軍を受け取ってパロスへ向けて出航すると、パロスの方が先にペルシア勢とともに一隻の三段櫂船でもってマラトンに遠征してきたからだ」と彼は遠征の理由を述べた。しかしこのことは表向きの理由に過ぎなかった。本当の理由は、パロス出身のテイシアスの子リュサゴラスが彼のことをペルシア人ヒュダルネスに中傷したことのために、パロス人に対して怨みを持っていたからであった(Hdt.6.133)。

テイシアスの子リュサゴラスについてこれ以上のことは判らないが、ヒュダルネスはアジアにおける沿岸地方の軍司令官である(Hdt.7.135)。「表向きの理由」はトゥキュディデスの例の記述を想起させる。パロス遠征の表向き

の理由として、ミルティアデスはマラトンの戦いを持ち出した。しかし本当の理由は、表に出せないような個人的なものだった。中傷の内容については判らないが、恐らく 493 年のペルシア軍によるケルソネソス攻撃と関係があるのであろう⁴⁹⁾。そのためにミルティアデスは半島から撤退せざるを得なくなり、同時にトラキアにおける鉞山の権益も失うことになったはずである。この怨みを晴らすために、彼はパロス遠征を思い立ったのではなかっただろうか。この状況からすれば、489 年以前から既にエイオンをめぐるアテナイとパロス（タソス）の戦いは始まっていたことになる。

d. 三体のヘルメス像

キモンによるエイオン攻略および植民は、当時のアテナイ人によって大いに歓迎されたらしく、彼には三体のヘルメス像建立が許可された。そのことについて、アイスキネスは以下のように伝えている。「アテナイ人諸君、当時は多くの苦勞と大きな危険に耐えて、ストリュモン河畔でメディア人と戦って勝利した人々がいたのです。彼らは帰還すると、民衆に褒美を要求しました。そして民衆は彼らに大きな名誉を与えたのです。つまり、当時決められていたように、それはヘルメス像の柱廊に三体の石のヘルメス像を建立するということでした。ただし、それには彼ら自身の名を刻むことは認められませんでした。というのは、その銘文が民衆のためのものでなくて、將軍たちのためのものであると思われてはいけないという配慮があったからでした。私が真実を述べているということは、それらの詩自体から明らかとなります。現に、ヘルメス像のうち第一のものには次のように刻まれています。『かつてストリュモン河畔のエイオンでメディア人の子らに、燃えるような飢えと激しい戦闘をもたらし、はじめて敵を困難に陥れたかの者たちは、実際に勇敢であった』。第二のには『彼らの善行と勇氣に報いて、アテナイ人は返礼としてこれらを指揮官たちに与えた。後の時代の人々のうちでこれらを見た者は、より一層公共の事のために骨を折りたいと思うであろう』。第三のヘルメス像にはこう刻まれている。

ます。『昔この都市から、アトレウスの子孫たちと共にメネステウスも、聖なるトロヤの野に軍を進めた。かつてホメロスは、しっかりと青銅で身を固めたダナオイ人たちのうちでこの者が、軍指揮官として最優位の者であると謳っていた。このように、戦争と武勇に優れた指揮官という呼び名をアテナイ人に与えてもまったく不当ではない』。そこには将軍の名は誰一人としてなく、あるのは民衆という名だけです(Aesch.3.183-185)』。

これらの碑文の第一の眼目は、エイオン攻略がメディア人に対する戦争、すなわちペルシア戦争の一部であったということである。この主張は、先に見たエイオン攻略の事情と比較すると、食い違いが生じる。エイオン攻略は確かに残留ペルシア軍に対する追討戦ではあったが、それが全てではなく、ギリシア人の進出に抵抗するトラキア人に対する戦争とも連動しており、またパロス人との戦争でもあった可能性もある。第一の碑文にはエイオン攻略を対ペルシア戦争に見せようとする作為が感じられる。

第二の眼目は、エイオン攻略をトロイ戦争になぞらえて、アテナイ人がギリシア第一の武勇を誇ることである。第三の碑文に見られるアトレウスの子孫たちとは、ミュケナイ王アガ멤ノンとその兄弟であるスパルタ王メネラオスを指し、メネステウスはアテナイ王であり、神話によれば、彼らはともにトロイ戦争に参加したとされている。ダナオイ人とはギリシア人一般を指す名称である。従って、第三の碑文も第一の碑文と同様に、エイオン攻略を対異民族戦争と位置付け、同時にアテナイ人をミュケナイ人やスパルタ人などのドーリス人よりも優れた指揮官であると喧伝しているように思われる。

第三の眼目は、このようなエイオン攻略が公共の事のための行為であったと主張することである。もちろん、残留ペルシア軍追討戦であるならば、それが公共の事であるのは明白であるが、ここではそれが殊更に強調されている。エイオン攻略は確かに、キモンのようなアテナイの指導者たちと民衆とが一致協力してなした行為であったに違いないが、碑文に関するアイスキネスの説明にもあるように、何がしかの不調和が両者の間には最初からあったのではないだろうか。プルタルコスもキモン伝の中でこの碑文を収録しており、この

ことを考えるためには、それに続くプルタルコスの記事を読み進まなくてはならない。「たとえこれらがキモンの名をどこにもはっきりと示していないとしても、当時の人々にとっては破格の賞賛であったように思われる。というのは、テミストクレスもミルティアデスも、そのような賞賛を受けたことがなかったからである。ほんのオリーブの冠を要求したミルティアデスに対してさえ、デケレイア区のソファネスは、民会の最中に立ち上がってそれに反対した程であった。彼が放った言葉は好意的なものではなかったが、当時の民衆には気に入られた。彼は「ミルティアデスよ、一人で戦ってバルバロイに勝ったのなら、君一人が賞賛されるに値する」と言ったのである。それならば、何ゆえにキモンの行為は、それ程までに好評を博したのであろうか。他の者たちが将軍になった時には、殺されたり傷つけられたりしないように、敵にあまり近づかないものであるが、彼が将軍になった時には、略奪を目的として自ら敵に向かって遠征することができ、エイオンであれアムフィポリスであれ、土地を手に入れて植民したからであらうか(Plut.Cim.8.1-2)」。

プルタルコスはキモンのパトロンの性格に注目している。そして、実際に民衆に与えたものは土地であった。この記述から判断すれば、民衆は金銀の鉱山とは無縁であったように思われる。ここにエリートと民衆の思惑のギャップと金銀の鉱山の利権を狙ったエリートが土地獲得を餌に民衆を動員したエイオン攻略の図式が見て取れる。そしてこのギャップを埋めるものが表向きの理由だったのである。

(2) スキュロス植民

トゥキュディデスによれば、エイオン攻略の次に行われた行動はスキュロス植民である(Thuc.1.98.2)。先住民であるドロペス人は全て島から追放され、土地はアテナイ人に分配された。これは476/5年のことと考えられている。スキュロスはエウボイアの東、エーゲ海のほぼ中央に浮かぶ島で、ほとんどが石灰石からなっており、土地は痩せている。島の南部は水が乏しく痩せている

が二つの良港があり、北部は比較的肥沃で人口も多い⁴³⁾。

この島には、かつてカリア人、クレタ人などが住んでいた形跡があるが、後にドロペス人が移住してきた。ドロペス人は、テッサリア人の種族で、名の語尾が（単数形で）*ov* であることから、彼らがギリシア人であったことが推測される。実際、彼らは常にギリシア人として見られていた。彼らの故郷は、東はアカイア・フティオティス、南はアイニアネス人、西はエペイロスに囲まれた範囲で、そこはギリシアで最も交通が困難な辺境で、人口の少ない地域であった。ドロペス人の名はすでにホメロスの時代に知られており、彼らはデルフォイのアムフィクテュオニアのメンバーであった⁴⁴⁾。

ほとんどの史料はドロペス人を島の先住民としているが、ディオドロスはそれをドロペス人とベラスゴイ人としている(Diod.11.60.2)。ベラスゴイ人については、レムノス植民の箇所ですべた通り、彼らは非ギリシア人の先住民であった。本土のドロペス人とは異なり、スキュロスのドロペス人は、ギリシア人と非ギリシア人のボーダー的な存在として見られていたのかも知れない。

a. スキュロスの海賊

480年、本土のドロペス人はクセルクセスに土と水を献上し、遠征に陸軍を参加させた。ペルシア戦争中のスキュロス人の動きについてヘロドトスは、アルテミシオンの海戦の際に「蟻岩」と呼ばれる暗礁があることをペルシア艦隊に知らせたのは、パンモンというスキュロス人であったと述べるだけである(Hdt.7.183)。本土とスキュロスのドロペス人の間に連携があったかどうかは分からないが、その島がペルシア軍の侵入経路から外れていたこと、ヘロドトスはその島にほとんど言及していないことからすれば、スキュロスのドロペス人がペルシア戦争においてあまり大きな役割を果たさなかったということは言えそうである。

トゥキュディデスの記述からは、なぜスキュロスが植民されたのか、

その理由がまったく分からない。ネ波斯も言わない。その点を補完してくれるのがプルタルコスである。「キモンが以下のようなきっかけでスキュロスを征服した時、そこを植民した。その島にはドロベス人が住み、彼らは農耕に適さず、昔から海を荒していたが、ついには彼らのところへ航行してきた外国人を襲うことを止めないどころか、テッサリア人のある商人たちをクテシオンの辺りで襲撃し、商品を略奪して、彼らを監禁してしまった。この人々は牢獄から逃げ出して、アムフィクテュオニアに訴え、スキュロスの有罪判決を勝ち取った。しかし、彼らは多額の賠償金を支払うことを望まなかったので、略奪品の所有者にそれを返還するよう命じた。彼らは恐れて、キモン宛に手紙を送り、都市を占領してくれれば、自分たちはそれを引き渡すから、軍船を率いて来てくれるよう要請した。こういうわけで、キモンはその島を受け取り、ドロベス人を追放して、エーゲ海を自由にしたのである (Plut. Cim. 8.3-5)」。

つまり、スキュロスが征服された理由は、そこの住民が海賊であったということである。彼らが海賊であったということは、この島が交通の要所であり、彼らはその海域に精通していたことを意味する。アテナイ人がトラキア方面に航行する際には、本土とエウボイア島の西岸の間を通過するか、もしくはエウボイア島の東岸とこの島の間を通過するか、二者択一であった。本文にもあるように、テッサリア人の商人が同島の港で襲われたということは、この島が後者のルートにおいて重要な寄港地であったことを示唆している。また、先にも触れた「蟻岩」の暗礁をペルシア艦隊に教えたという話も、スキュロス人がその海域に精通していたことを仄めかしている。キモンにとってスキュロス占領は、トラキア方面への航路を確保するという意味があったのだろう。

b. テセウスの骨

キモンはスキュロス植民の際に伝説の英雄テセウスの骨を探索してアテナイに持ち帰った⁴⁹⁾。トゥキュディデスはこのことを語っていないが、プルタルコスはキモンの伝記とテセウスの伝記の両方において詳しく述べている。

「昔アイゲウスの子テセウスがアテナイからスキュロスに逃亡し、そこで恐れから起こったリュコメデス王による陰謀によって殺されたということを知って、キモンはその墓を一生懸命に探した。というのは、テセウスの遺骸をアテナイへ持ち帰って、半神としてふさわしく祀るべしという神託をアテナイ人が受けていたが、スキュロス人が島を調査することに同意も許可もしなかったもので、それがどこにあるのか分からなかったからである。しかし大きな野心に突き動かされて、やっとのことで墓所を見つけ出したので、キモンはその骨を自分の船に積み、他のことどもを整えて、華やかに祖国に帰港した。それはテセウスにとっては約 400 年ぶりの帰還であった。これらのことのために民衆は、とりわけ彼を愛したのである (Plut. Cim. 8.5-6)」。「ペルシア戦争の後、ファイドンがアルコンの時、巫女はアテナイ人に、テセウスの遺骨を採集して持ち帰り、うやうやしく納めて自分たちのところで守るべしという神託を下した。しかし、島に住んでいるドロベス人と行き来がなかったし、彼らは気むずかしかったので、それを採集することはもちろん、墓を見つけ出すことさえも困難であった。それにもかかわらず、キモンはその島を征服して、彼に関する伝記に書かれてある通り、熱心に探した。伝えられるところでは、何かの神助であろうか、彼は驚がある場所を口ばしでつつき、爪で引っ搔いているのを見て気付き、そこを掘り返した。すると、大きな遺体の入った棺と傍らに置かれた青銅の槍と剣が出てきた。それらがキモンによって彼の三段櫂船に乗せて大切に持ち帰られた時、喜んだアテナイ人は、あたかもテセウス自身がアテナイへ帰還したかのように、行列と松明と犠牲をもって出迎えた。それは都市の中央の今の体育場の傍に安置されていて、奴隷や全ての弱者が強者を恐れて非難するところである。なぜならば、テセウスには、ある者を庇護し、援助し、弱者の嘆願を親切に受け入れてくれるというご利益があったからである (Plut. Thes. 36.1-2)」。

ファイドンがアルコンの年は 476/5 年に相当する。キモンはこの年にデルフォイの巫女から下された神託に従って、テセウスの遺骸を探索し、アテナイに持ち帰ったということである。テセウスとは、アテナイの国民的な英雄であり、彼にまつわる様々な物語がテセウス伝説として総称されて伝わってい

るが、彼はドーリス人のオレステスに対抗して作られた一種のアイドルであった(Paus.3.3.7)。キモンはこの事業を何らかのプロパガンダに利用したに違いないが、それがどのようなものであったのかを探るためにはまず、当時の人々がテセウスにどのようなイメージを持っていたのかを明らかにしなければならない。

パウサニアスは、アテナイのアゴラを散策した時、ストア・ポイキレについても言及し、そこにある三枚の壁画を詳しく描写している。最後の絵はマラトンの戦いの模様を描写したもので、そこにテセウスが描かれている。「最後の画面には、マラトンで戦った勇士がいる。プラタイアに住むボイオティア人とアッティカ全域の軍勢が、非ギリシア人と戦いを交えている。このあたりでは両軍互角に戦っているが、画面の中程の戦いでは、非ギリシア勢が敗走し、押し合いながら沼地に入っている。そして最後の場面には、フェニキア人の船群がいて、ギリシア勢が船へ逃げ込もうとする異国勢を殺している。画面には、この平原の名の起源となった英雄マラトンも、冥界から上がってきているところらしい姿のテセウスも、アテナとヘラクレスも描いてある。当のマラトンの伝承では、ヘラクレスを神とみなしたのは、この地の住民が最初である。また、画面の戦士のなかでも、とりわけはっきり判るのは、市民から選出されてポレマルコスとなったカリマコス、将軍の一人ミルティアデス、英雄「エケトロス」――これについては後でまた触れる――である(Paus.1.15.3)」⁴⁷⁾。

ここでは「冥界から上がってきているところらしい姿のテセウス」が描かれているが、これは次のような伝説に基づいたモチーフである。「ところで、しばらくして後、アテナイ人はテセウスを半神として崇めるようになったが、マラトンでメディア人に対して戦った者たちの内、少なからずの者は、武装したテセウスの亡霊が彼らの前に立って、バルバロイに向かって突き進んでいるのをはっきりと見たと信じていた(Plut.Thes.35.8)」。つまりテセウスは、マラトンの戦いにおいて亡霊となってバルバロイからアテナイ軍を護った守護神としてイメージされていたのである。このことは、テセウスの遺骸がアテナイに安置され、半神として祭られた場所が奴隷や弱者の非難場所になっていたと

いう叙述とも符合する。マラトンの戦いは、490年すなわちスキュロス植民からわずか14、5年程前に戦われたペルシア戦争の一大決戦であり、当時の人々の記憶には生々しく残っていたはずである。その戦いを実際に勝利に導いたのがキモンの父ミルティアデスであった。そして例の壁画には、ミルティアデスその人の姿もはっきりとそれと分かるように、テセウスと並んで描き込まれていた。ミルティアデスとテセウスの像は二重写しになっていたのである。そして、テセウス崇拝を創設したのがキモンであった(Paus.1.17.6)。

以上の考察から、キモンがテセウスの骨をアテナイに持ち帰った行為の真意が読み取れるであろう。まず、テセウスの骨を持ち帰ることによって、強力な守護神を得た功績を民衆に誇示した。次に、父ミルティアデスの偉業を民衆に思い起こさせることによって、自分の威信を高めようとした。最後に、スキュロス占領および植民の目的は、実際にはトラキアへの航路の確保であったが、その島は本来ペルシア戦争の文脈から外れていたため、スキュロス占領に異民族からギリシアを護ったテセウスの亡霊譚を結び付けることによって、これをペルシア戦争の文脈に読み替えようとしたのである。

(3) エンネアホドイ植民

トラキア遠征の第二ラウンドは、465年真夏のタソス反乱とエンネアホドイ植民とから始まる。エンネアホドイとは「九路」を意味し、そこが交通の結節点であったことが知られている⁴⁸⁾。それと同時に、既に見たように、そこはタソスの母市であるパロスがペルシア戦争以前から金鉱山の利害を有していた場所であった。

a. タソスの反乱

反乱の原因は明らかにタソスの鉱山権益を巡るものであった。「しばらくして次に、対岸のトラキアにあるタソス人の所有していた商港と鉱山をめ

ぐる争いから、タソス人が彼らから離反するということが起こった。そこでアテナイ人は、船でタソスへ向かい、海戦によって打ち勝ち、その地に上陸した。同じ頃に、彼ら自身とその同盟の中から 10000 人の植民者をストリュモン河畔に送った。その時にはエンネアホドイと呼ばれていたが、今ではアムフィポリスと呼ばれている所に植民するためであった。エドノス人が所有していたエンネアホドイを手に入れてから、トラキアの奥地へ侵攻した時、エドニア領のドラベスコスで全トラキア人によって全滅させられた。彼らは、その土地がギリシア人によって植民されることに敵意を持っていたのである (Thuc1.100.1-3)」。タソス人は、ラケダイモン人に救援を要請し、アッティカに侵入するよう依頼したが、その時スパルタで地震が発生し、それに乗じてヘイロタイとメトイコイが反乱を起こしたため、援軍が得られなかった。その結果「タソス人は包囲の 3 年目にアテナイと協定を結ぶに至り、防壁を取り壊すべきこと、軍船を引き渡すべきこと、直ちに支払うべき賠償金および今後支払うべき金額を査定すべきこと、そして大陸領と鉱山を放棄すべきことが決定された (Thuc.1.101.1-3)」⁹⁹⁾。

情報が少し込み入っているので整理しよう。まず 465 年にタソスは対岸の大陸に所有していた鉱山を巡ってデロス同盟から離反した。アテナイは直ちにタソスを包囲攻撃した。それと同時に、かつてパロスが管轄していたエンネアホドイ (後のアムフィポリス) に 10000 人の植民者を派遣した⁹⁹⁾。そして 463 年にタソスは協定を結び、大陸の鉱山とタソス島の鉱山の両方を放棄した。従って、パロスにしてみれば、エンネアホドイ、大陸領、タソス島の三つを同時に失ったことになる。

大陸の鉱山とは、パンガイオン山にあるスカプテシュレ (スカプテヒュレの異名) を指す。これらの鉱山については、ヘロドトス自身が見たと報告しており、「彼らの収入は、大陸と鉱山とから上がるのであった。スカプテシュレの金山からは、年平均 80 タラント産出し、タソス自身にある鉱山からはそれより少なかったが、普通はタソス人には穀物税が免除されるほど大きく、大陸からと鉱山からの収入は、毎年 200 タラントに上り、最も多いときは 300

タラントンにもなった(Hdt.6.46-47)」と云う。これらの鉱山がいかに豊かなものであり、それ故に常に外敵から狙われていたことがよく判る。

b. ケルソネソスの再征服

トゥキュディデスの記述からは、エウリュメドンの戦いとそれに続いて起こったタソスの離反との繋がりが分からないが、プルタルコスPlutarchの記述からは、466年キモンはまず、アテナイからケルソネソス(ケロネソスの異名)へ就航し、そのトラキア人を制圧して後に、タソス離反の鎮圧に向かったことが窺える。「一部のペルシア人はケロネソスを退こうとしないどころか、奥地からトラキア人を呼び寄せ、全くの少数の三段櫂船を率いてアテナイから出撃して来ていたキモンを見くびっていたが、キモンは彼らに対して4隻の軍船で攻撃し、彼らの13隻の軍船を奪い、ペルシア人を追放し、全トラキア人を制圧して、ケロネソスをアテナイのものとした。その後、アテナイから離反したタソス人を海戦で打ち破り、33隻の軍船を奪い、その都市を包囲攻撃して、対岸にある金鉱山をアテナイ人のものとし、またタソス人が支配していた土地を取り上げた(Plut.Cim.14.1-2)」。

c. 10000人の都市

キモンの視点に立てば、ここにおいて彼の大願が成就したと言えるであろう。彼の生まれ故郷であるケルソネソスを奪還し、母の故郷でありかつて権益を持っていた金山のあるタソスの大陸領も取り戻した。さらに、エンネアホドイ植民とタソス島の鉱山をも奪うことで、父ミルティアデスの怨みをパロスに晴らすことが出来たからである。逆にタソス人の視点に立てば、離反も無理からぬことであった。ペルシア戦争以前からのミルティアデスとパロス人の反目、彼のパロス遠征、キモンによるエイオン攻略、これらはトラキアの金を巡る両者の闘争の歴史と言える。トラキアに視点を移せば、常に彼らがキャ

スティングボードを握っていた。彼らとて一枚岩ではないが、富を求めてやってくるギリシア人たちを、或いは引き入れ或いは追い返して、彼らからの軍事的支援を得ていたのだろう。一方ギリシア人は、ケルソネソスに大防壁を築くことによって、またはエンネアホドイに 10000 人の植民都市を築くことによって、それらの地をトラキアから切り取ろうと目論んだ。そのような目論みを早くから察知したトラキア人は、今度はペルシアを招き入れたのではなかっただろうか。ミルティアデスやタソス人に関してペルシアに報告された中傷とトラキア人のペルシア駐留軍に対する援助は、そのことを示唆している。

第5章 ペリクレスの時代

—アテナイ植民の最盛期—

第1節 キモンとペリクレス

アリストテレスの『アテナイ人の国制』は、キモンとペリクレスの民心収攬の手法の違いを指摘している⁵¹⁾。「ペリクレスは陪審手当を導入した最初の人物であったが、それはキモンの富に対抗して民衆の歓心を買うためであった。なぜならば、キモンは僭主が持つような財産を持ち、まず公共奉仕を華々しく行い、次に多くの民衆を養っていたからである。つまり、ラキアダイ区民の内でも毎日でも彼の家に来ることを望む者は誰でも、そこそこのものを得ることが許されており、更に彼の全ての領地は柵で囲まれておらず、果実を望む者は誰でも取ることが出来るようになっていたのである。この財力に対して、ペリクレスは財産に欠けていたので、オイエ区のダモニデスに、(省略)、私産において劣っているので、大衆には彼ら自身のものを与えよと忠告された(Aristot.Ath.Pol.27.2-4)」。

既に見たように、キモンはトラキアにおける私的な鉱山からの莫大な資金を有していた。彼はペルシア戦争によって失われた権益を取り戻すためにアテナイ民衆および同盟諸ポリス民を動員したが、彼らには報酬としてトラキア人やバルバロイから奪った金品や土地を与えた。それ故に彼の指揮は人気があったという。ペリクレスが民衆の支持を勝ち得るためには、このような貴族的なパトロネジに対抗しなければならなかった⁵²⁾。確かに彼は裕福ではあったが、キモンほどの個人的な財源はなかったので、同盟から入る富を民衆に分配したのである。そして民衆が喜んだ政策の一つが植民であった(Plut.Per.34.1)。

プルタルコスには、ペリクレスによる一連の植民活動のリストを掲載している。「それらに加えて(ペリクレスは)、ケロネソスへは1000人のクレール

一コイを、ナクソスへは 500 人を、アンドロスへはその半分を、トラキアへはビザルタイ人とともに住む者たち 1000 人を、イタリアへは、シュバリスが再建された時、それはトゥリオイと呼ばれたが、別の (1000 人?) を送った。ペレクリスはこれらのことをして、怠惰で暇の故にあれこれと口を出す群衆から都市を解放し、民衆の困窮を改善し、反乱を起こさせないために脅しと監視を同盟たちの隣人としたのであった (Plut. Per. 11.5)。

ディオドロスとパウサニアスはもう一つのリストを掲載している。「その後 (ペリクレスは)、ケロネソスへ到着して、市民の内の 1000 人にその土地を分け与えた。これらのことが行われたのと同じ時に、もう一人の將軍であるトルミデスは、エウボイアへ進出して他の 1000 人の市民に [その土地と] ナクソス人の土地とを分配した (Diod. 11.88.3)」。 「後にアテナイへ帰還した時、エウボイアとナクソスへアテナイ人のクレールーコイを導き入れ、ポイオティアへも軍勢を率いて侵攻した (Paus. 1.27.5)」。

アンドキデスとアイスキネスはこの時代を振り返って、それがアテナイ植民の全盛期であったと言う。「我々はケロネソスとナクソスとエウボイアの三分の二以上を所有していた。また他のアポイキアを一つ一つ詳しく述べると長い話になるだろう (Andoc. 3.9)」。 「我々はケロネソスとナクソスとエウボイアを所有し、非常に多くのアポイキアをその頃に送り出した (Aesch. 2.175)」。

これらの史料をまとめると、ペリクレスとトルミデスが手分けをして、ケロネソス植民 (ケルソネソスの異名、これには複数のポリスが含まれる)、ナクソス植民、アンドロス植民、トラキア植民 (ブレアのこと)、トゥリオイ植民、エウボイア植民 (これにはカルキス、エレトリア、ヘスティアアイアなどが含まれる) を行ったことが判る。その他にも多くの植民市が建設され、それらの内で知られているものは、アマフィポリス植民、シノペ植民、アミソス植民、アスタコス植民、アイギナ植民、ポティダイア植民である。また、アテナイ人自身が入植したのではないが、ナウパクトス植民もこれに加えられる。

第 2 節 第一次ペロポネソス戦争

460年のアテナイ・メガラ同盟を機にいわゆる第一次ペロポネソス戦争が始まった。戦場は専ら本土中央部およびペロポネソス半島周辺に限られた。この戦争は446/5年の三十年の平和締結まで続けられた⁹⁾。今見たリストの殆どの植民はこの時期に建設されたものである。

(1) ナウパクトス植民

ナウパクトスはアテナイによって占領、植民されたが、入植したのはアテナイ人自身ではなかったことから、アテナイ植民研究では余り注目されてこなかった。しかしここではまずそれを取り上げたい。なぜならば、この植民の分析が従来のクレールーキア概念の再考を促すと考えられるからである。

465年に金山の権益をめぐってタソスがアテナイから離反した。アテナイは直ちに反乱鎮圧の軍を派遣した。465/4年冬タソスはスパルタに救援を求め、アッティカに侵入するよう要請した。464年スパルタはそれを承諾して、まさに実行に移そうとした時に大地震が起こった。プルタルコスによれば、その地震はそれまでに記憶のないもので、スパルタの地方には多くの割れ目が出来て落ち込み、タイゲトス山の峰が崩れ落ち、スパルタの町には五軒を残して全ての家が倒壊したと云う(Plut.Cim.14.4)。464/3年この混乱に乗じて、スパルタのヘイロタイやペリオイコイが反乱を起こして、イトメ山に立て籠もった。ヘイロタイのほとんどはかつてのメッセニア人の子孫であったので、彼らはメッセニア人と総称されていた。

462年スパルタ人は諸国に救援を求めた。アテナイもそれに応じて、親スパルタ派のキモンを指揮官とする援軍を派遣した。しかし包囲戦が長引く間に、スパルタ人はアテナイ人が反乱を幫助するのではないかと疑念を抱き、アテナイ軍だけを撤退させた。そのことを侮辱と感じたアテナイ人は、462/1年ギリシア連合を脱退した。同年キモンは陶片追放にあった。

ナウパクトスは、457年初夏のペロポネソス攻撃の際、トルミデスに

よって占領された(Diod.11.84)。アテナイは 455 年頃、ナウパクトスにアテナイ人自身ではなく、イトメに立て籠もったメッセニア人を入植させた⁵⁹⁾。「イトメに立て籠もった者たちは十年目になってもはや抵抗する力がなくなった時、ラケダイモン人と同意に至り、ペロポネソスから退去し、二度とそこに足を踏み入れず、もし捕えられた場合には、その者は捕えた者の奴隷になるという協定を締結した。というのは、それ以前にデルフォイのある神託がラケダイモン人にあったからで、それはイトメのゼウスの嘆願者を解放すべしというものであった。彼らと婦女子が退去すると、以前からのラケダイモン人に対する憎しみから、彼らをアテナイ人が受け入れて、たまたま最近オゾリスのロクリス人の所有から奪ったナウパクトスへ住まわせた(Thuc.1.103;cf.Paus.4.24.7)」。入植していたメッセニア人は、405 年のアイゴスポタモイの海戦後、スパルタ人によって追放された(Paus.10.38.10)。

メッセニア人のナウパクトスは貢納金を支払わなかったが、常にアテナイの西方における最大の軍事拠点であり、メッセニア人はアテナイ人に対する強い忠誠心を示していた。アテナイは重要な軍事拠点を確保するためにアテナイ市民からなる植民団を派遣したというのがクレールーキアの通説であったが、この理論はナウパクトス植民には全く当てはまらないのである。

ところで、なぜアテナイ人自身はナウパクトスに入植しなかったのだろうか。勿論、危険な場所だったのだろう。しかしそのような所に設置してこそ軍事植民というものである。入植者の不足は考えられない。440 年代から 30 年代にかけてアテナイは爆発的に植民者を送り出している。むしろアテナイ人がナウパクトスには植民したがない理由があったのではないだろうか。

そもそもナウパクトスはオゾリスのロクリス人の都市であった。ロクリス人はドーリス地方とフォキス地方を挟んで東ロクリスと西ロクリスに別れ、東ロクリスはオプースのロクリス人とクネーミス山麓のロクリス人からなり、西ロクリスはオゾリスのロクリス人からなる。西ロクリスはもともと東ロクリスからの移民であった。アテナイが占領する以前、460 年頃にも東ロクリスからナウパクトスへの追加植民が行われたことが知られている(M&L.20)⁵⁹⁾。

ドーリス地方はスパルタ人を含むドーリス人の故郷であり、ロクリス人もドーリス方言と同じ北西方言に属していた。「ドーリス族はその場所でアリストマコスの子供たちとともに船を建造し、それらに乗ってペロポネソスへ渡った。それゆえにその名がその場所に付けられたと云われている (Paus. 10.38.10)」。

これはヘラクレスの子孫の帰還の物語である。この伝承から、ナウパクトスは同じドーリス人であるメッセニア人にとっては縁りの地であったが、イオニア人であるアテナイ人には無縁の地であったことが判る。このことがアテナイから植民者が送られなかったことと関係があったのかも知れない。

(2) レムノス・イムブロス植民？

軍事拠点を確保するために母市市民権を持った植民者が派遣されたとの定説は、レムノス・イムブロス植民の解釈に大きな影響を与えている。両島は 477 年の時点からデロス同盟に加盟し、貢納金を支払っていた。5 世紀の中頃にこれらの島々に新たに植民者が派遣されたことを伝える文献史料は存在しないが、貢納金の減額を根拠として(つまり、土地を割譲させたので貢納金の減額が生じたという理論)、レムノスには 450 年夏に、イムブロスには 447/6 年に植民者が送られたと考えられている⁵⁶⁾。この理論自体は頷けるし、文献史料が言及しなかった植民もたくさんあったはずである。実際にこの時に植民者が派遣されたかも知れない。

しかし問題は、この時に性格の異なる植民者が送られたという推測である。つまり、6 世紀末にレムノスとイムブロスはアポイキア(従來說による母市市民権を持たない植民市)として建設されたのに、5 世紀の中頃になると「レムノス人」と「イムブロス人」が積極的にアテナイ人と軍事行動に共にしたことを伝える記述が目立つようになる。これらの記述はいかにも彼らがアテナイの命令に忠実な軍隊であるとの印象を与えるが、アポイコイならそのような行動は示さないはずである。この矛盾を解決すめために、5 世紀中頃にレムノスとイムブロスにクレールーコイが派遣されたとする解釈である⁵⁷⁾。従来の

クレールーキア理論に拘泥する限り、このような解釈が必要となるが、ノウパクトス植民の例から明らかなように、植民市の従属性と母市市民権の保持とを不可分に考える必要はないように思われる。従って、仮に新たに植民者が派遣されたと認めるとしても、彼らは以前と同じ植民者であった。

(3) ナクソス植民

島には複数の集落があったが、ナクソスという都市を中心とした一つのポリスを形成し、市民は「ナクソス人」と呼ばれていた。先史時代の島の住民は、トラキア人、クレタ人、カリア人などであったらしいが (Diod.5.50ff)、歴史時代になってからはイオニア人が住むようになった⁵⁸⁾。このことは、「ナクソス人はアテナイ出身のイオニア人である (Hdt.8.46)」と伝えるヘロドトスの記述からも、また、コドロスの子孫であるネレウスがナクソスに上陸した (Aelian.V.H.8.5) とか、同じくコドロスの子孫であるプロメトスがナクソスへ逃れた (Paus.7.3.3) という伝承からも窺える⁵⁹⁾。

ナクソスは 477 年にデロス同盟に加盟した。理由は判らないが、470 年に離反し 466 年に鎮圧されて、同盟の中で最初に隷属させられたポリスとなった (Thuc.1.98.4)。ナクソスは初め軍船を出していたが、後に貢納金に切り替えた。この島に 500 人の植民者が送られたのは (Plut.Per.11.5;Diod.11.88.3;Paus.1.27.5)、貢納金の減少から恐らく 450 年夏のことと考えられている⁶⁰⁾。しかしその経緯についてはよく判らない。植民後も減額はしたものの貢納金を支払い続けていることから、ナクソスというポリスは存続したものと考えられる。

ナクソスはキュクラデス諸島の中で最も大きく肥沃な島で、特にブドウ栽培が盛んであった。そのためディオニュソス信仰の中心地とされた。この島の肥沃なことはあまねく知られ (Hdt.5.31;Pind.Pyth.4.156;Plin.n.h.4.67)、ヘロドトスはアリスタゴラスの口を借りて「ナクソスは大きさにおいては大きな島ではないが、他の点においては美しく、肥沃であり、イオニアにも近く、そこには

豊かな財宝も奴隷もある。(省略)また、ナクソスそのものやナクソスに従属しているパロスやアンドロスやキュクラデスと呼ばれる他の島々もペルシア王のものとするであろうし、そこから出撃すれば、大きく豊かな島であるエウボイアへ簡単に攻撃ができるでしょう(Hdt.5.31)」と語らせている。アテナイにとってもナクソスを押さえることは、キュクラデス諸島を押さえることに等しく、イオニアへの航路の確保にも不可欠だったと考えられる。

(4) アンドロス植民

アンドロスはキュクラデス諸島の北端にあるナクソスに続く大きさのイオニア人の島で、カリュストスの対岸に位置する⁶¹⁾。他のキュクラデスの島々と同様にデロス同盟に加盟し、貢納金を支払っていた。この島へは250人の植民者が送り込まれたことが知られている(Plut.Per.11.5)。植民の経緯は不明であるが、その時期は貢納金の減少からナクソス植民と同じ450年夏のことと考えられている⁶²⁾。植民後も「アンドロス人」の名で貢納金を支払い続けていることから、アンドロスというポリスは存続した。植民者は敗戦の404年引き揚げたと思われる。

(5) エウボイア植民

エウボイアはクレタに次ぐエーゲ海で二番目に大きな島で、細長い形をしている。この島は地質学的に三つの部分に分けられるが、それと同様にエウボイアの社会も三つの地域にまとまっていた⁶³⁾。①ヘステイアイアを中心とする北部。これはエウボイアの中で最も肥沃で、最も人口の多い地帯である。ヘステイアイオスおよびエロピアは穏やかな丘陵地であり、オレオス、ヘステイアイア、オロピアイ、アイガイ、ケリントス、ディオーン、アテナイ・ディアデスなどの都市がある。もとはアバンティス人が住んでいたが、後にテッサリアから入ってきたエロピア人によって中部地帯に駆逐された。②カルキスを中

心とする中部。ここは最も幅が広く場所で、高く険しい山脈がある。先住民はアバンティス人であったが、7世紀にイオニア族が移住することによってイオニア化された。その主要な都市は、カルキス、エレトリア、キュメである。カルキスとエレトリアの間には、レラントンという肥沃な平野がある。7世紀にこの平野をめぐる両市が戦い、ギリシアの海上勢力を二分する大戦争に発展した時、その戦争に勝利したカルキスがエウボイア第一の都市としての名声を得ることとなった。③カリュストスを中心とする南部。ここは最も狭い地域で、概して肥沃ではない。主要な都市として、デュストス、ゼレトラ、ステュラ、カリュストスがある。カリュストスは、美しい肥沃な海岸平野に囲まれている。

既に見たように、アンドキデスとアスキネスによれば、ニキアスの平和の頃にはアテナイはエウボイアの三分の二以上を所有していた(Andoc.3.9; Aesch.2.175)。しかしエウボイアが三つの地域にまとまっていたという事実を考慮すれば、この言葉は土地の面積のことだけを意味するのではなく、同時に三つの地域を指していたとも考えられないだろうか。つまり、ヘスティアイアを中心とする北部の全体、カルキスとエレトリアを中心とする中部の全体、そして南部の一部の地域、これらの範囲がアテナイの勢力圏であったという意味である。但し、どのような形で土地が所有されていたのかについては、よく分からない。

アテナイはトルミデスの指揮の下、エウボイアに500人の植民団を派遣した⁶⁴⁾。植民の文脈はよく分からない。しかしその時期は、ディオドロスによれば(Diod.11.88.3)、ペリクレスのケルソネソス侵攻が行われていたのと同じ時期であり(447/6年冬)、パウサニアスによれば(Paus.1.27.5)、植民後にボイオティアの反乱が発生し(446年春)、その鎮圧作戦で彼が戦死したのだから、447/6年ということになる。問題は、彼がエウボイアのどこに植民者を派遣したのかである。確証はなく、カルキスおよびエレトリアとする説⁶⁵⁾、カリュストスとする説がある⁶⁶⁾。

(6)ヘスティアイア植民

446年春ボイオティアが反乱を起こした。アテナイは直ちにトルミデス麾下の鎮圧軍を派遣し、カイロネイアおよびコロネイアで戦闘を行ったが、結局アテナイはボイオティアを放棄した。ボイオティアの民主勢力は解体し、プラタイア以外のボイオティアの諸都市は、テーベを中心とする貴族政治を再建し、自治独立の連邦を形成した。その戦いにエウボイア人の亡命者も荷担していたことが記されており(Thuc.1.113.2)、彼らはトルミデスのエウボイア植民の際に土地を奪われた貴族たちであった可能性がある。

ボイオティアにおけるアテナイの影響力の低下を機に、同年初夏その対岸にあるエウボイアの諸都市も同盟から離反した。反乱の首謀者はカルキスのヒッポボタイと呼ばれる貴族たちであった⁶⁷⁾。ペリクレスは直ちに軍隊を率いてエウボイアに渡ったが、同時にメガラが離反し、ペロポネソス軍がアッティカに侵攻した。そこで彼は急遽アッティカに引き返すと、ペロポネソス軍はエレウシスからトリアに至る地域を荒したたげで撤退していった。この撤退がペリクレスの買収によるものであったことは当時から知られていた。そうしてペリクレスは再びエウボイアに渡って反乱を鎮圧した。

トゥキュディデスは、446/5年のエウボイア諸都市の処分について、簡単に伝えるのみである。「そしてアテナイ人は、ペリクレスの指揮下で再びエウボイアへ渡り、全島を制圧した。そして他の全ての土地は同意によって処理したが、ヘスティアイアからは住民を全て追い出し、自分たちがその土地を所有した(Thuc.1.114.3)」。ディオドロスはトゥキュディデスを引いているようであるが、新しい情報としてヘスティアイアへの植民者の数が1000人であったことを記している。「その年に、一方ギリシアにおいては、ボイオティアのコロネイア付近における敗戦によって、アテナイの力が弱まったので、多くのポリスがアテナイから離反した。特にエウボイアに住む者たちが革命を起こしたので、ペリクレスが将軍に選ばれ、強力な軍隊を率いてエウボイアへ遠征した。そしてヘスティアイア人のポリスを奪い、無理やりヘスティアイア人を祖国から全て追い出した。一方、他の諸ポリスを威嚇し、再びアテナイに服従す

ることを強いた(Diod.12.7.1)。「一方ギリシアにおいては、ペリクレスの指揮の下でアテナイが再びエウボイアを取り戻し、ヘスティアイア人をポリスから追い出し、自分の植民をそこへ送り出した。1000人の植民者を派遣し、町も田舎もクジで分配した(Diod.12.22.2)」。

一方ストラボンが、テオポンポスを引用して、ヘスティアイアへの植民者が2000人であったこと、また彼らがマケドニアへ逃げていったことを記している。「また、ペリクレスがエウボイアを征服した時、ヘスティアイア(ヘスティアイアの異名)人は同意によってマケドニアへ移住し、アテナイからやって来た2000人がかつてヘスティアイアの区であったオレオスに住んだとテオポンポスは言っている(Strab.10.1.3)」。

ヘスティアイア人は全て追放されたと見て間違いない。事実これ以降「ヘスティアイア人」の名は貢納表から姿を消した⁶⁸⁾。

(7)カルキス植民

以上の史料は、エウボイアの諸都市の中でヘスティアイアに対しては厳しい処置をとったが、他の諸都市に対してはそれよりは穏健に扱ったということを通じて共通に伝えている。なぜヘスティアイアだけが厳罰に処されたのか、また他の諸都市とはどの都市を指していたのかについては述べていない。しかしプルタルコスがそれらの点について答えている。「そこで再びあの離反者たちに向かい、船20隻と重装歩兵5000人を率いてエウボイアに渡り、諸ポリスを制圧した。カルキス人のうちヒッポボタイと呼ばれる富と名声に秀でた人々を追い出し、全てのヘスティアイア人をその領土から移住させ、アテナイ人を入植させた。彼らにだけ容赦のない処分をしたのは、前にアッティカの船を拿捕し、その乗組員を殺したことがあったためである(Plut.Per.23.2)」。

カルキス植民に関しては、非常に保存状態のよい碑文が残されている(Tod.42; ATL II, D17; M&L.52; IG.I⁴⁰)。この長い碑文史料は、ディオグネトスによる第一決議(1-39)、アンティクレスによる第二決議(40-69)、アルケストラトスによる第三決議(70-80)から構成され、446/5年のエウボイア反乱鎮圧後の和解

協定であると考えられている。ここで注目したい点は植民者への言及と思われる箇所である。この文章は余り整然としていないので解釈が難しいが、以下のように試訳できるであろう。「カルキスにいる外国人は、そこに住んでいる間もアテナイに税を支払う者およびアテナイのデーモスによって免税特権が認められている者を除いて、他の者たちは、カルキス人と同様にカルキスに税を支払うべきこと(51-57)」⁶⁹⁾。

この箇所はカルキスの徴税権に関わる部分であり、その対象者である外人は三種類に分かれるように思われる。①カルキスに住んでいる間アテナイに税を支払う者、②アテナイのデーモスによって免税特権が認められている者、③その他の者。①と②がアテナイ人の植民者を指している可能性は高いが、③の解釈は難しい。しかしこの碑文がアテナイとカルキスの間に交わされた協定であるならば、何らかの形でアテナイ人に言及していないとおかしい。従って、文面上カルキスに植民したアテナイ人の中にはアテナイに税を支払う者とカルキスに税を支払う者との両方がいたことになるが、実際には①と②が通例ではなかっただろうか。

(8) エレトリア植民

上の碑文は、エレトリアとの和解協定にも言及していて興味深い。「アテナイ人とカルキス人は誓いをなすべきこと、ちょうどアテナイ人のデーモスがエレトリア人について決議したのと同様に(40-44)」⁷⁰⁾。ここから、カルキス人との誓いは、それに先立つエレトリア人との誓いをモデルにして書かれたものであったことが分かる。そして、ここで言及されたエレトリアに関するその碑文が現存している(JG.I³39)。これは 446/5 年に刻まれたものと思われ、内容はカルキス碑文の 14 行目から 27 行目とほぼ同様の、エレトリア人とアテナイ人双方の誓いの一部である。従って、エレトリアに関する史料は少ないが、エレトリアに対してもカルキスと同様な措置が取られたと考えられる。

ところで、アテナイ人が被征服地であるカルキスやエレトリアに税を

支払っていたことは不自然に思われるかもしれないが、アテナイとカルキスおよびエレトリアの関係を、母市植民市の関係で捉え直すと、それは何ら不自然ではない。例えば、東ロクリス人によるナウパクトス植民に関する碑文史料においては、東ロクリス人がナウパクトスへ移住した場合、植民者は母市にではなく、植民市に税を支払うことが規定されていた(M&L.20)。しかしカルキスの場合、アテナイ人は「クセノス」であり、カルキス人になった訳ではなかった。それでも、時期ははっきり判らないが、遅くとも 413 年以前に、アテナイはエウボイア人に通婚権を与えていたことが知られる(Lysias.34.3)。この不即不離の関係は、アテナイとカルキスが母市植民市関係にあったことを示唆している。

エウボイア島には様々な種族が住んでいたが、7 世紀から 6 世紀にかけてイオニア人が侵入した。その中心地がカルキスとエレトリアであった。ヘロドトスは、両市をアテナイ人と同じイオニア人であると述べている(Hdt.8.46)。ストラボンが両市の起源について詳しく述べ、エウボイア第一の都市はカルキスで、第二の都市はエレトリアであったが、どちらもトロイ戦争以前にアテナイ人によって建設されたとも、その戦争の後にアテナイ人のアイクロスがエレトリアを、同じくコトスがカルキスを建設したとも述べている(Strab.10.1.8)。ことの真偽はともかく、観念の上でカルキスとエレトリアがアテナイの植民市と見なされていたのならば、アテナイの措置は侵略行為ではなく、母市の植民市に対する干渉として正当化され、植民者の派遣も追加植民と見なされたことになる。一方、ヘスティアイアに対してだけ厳しい措置をとった理由は、ヘスティアイアがアバンテス人ないしはエロピア人の都市であり、イオニア人の都市でなかったことと関係があるのかもれ知れない。「乗組員を殺した」というのは、バルバロイ的行為のアナロジーであろう(11-12 頁参照)。

エウボイアはアテナイへの穀物供給の生命線であった。411 年にエウボイア全島が反乱した時、ヘスティアイアを除く他の植民市は崩壊したと考えられ、ヘスティアイアも 404 年までには消滅したであろう。

(9)ケルソネソス植民

447/6年ペリクレスはケルソネソスに植民団を送り出した。「ペリクレスの遠征の中で、ケルソネソスを巡るものが最も高く評価されたが、それはその場所に居住していたギリシア人にとっての救いとなったからである。というのは、アテナイ人の1000人のエポイコイを送り出して、諸都市を強化したのみならず、地峡のところに城壁と防御柵を海から海まで連ねて、ケルソネソスの周辺に住むトラキア人の侵入を遮断することによって、近隣の異民族と混住し、境を接して近くに住んでいる盗賊団に満ち満ちたその地域がずっと悩まされてきた長い耐え難い戦争を閉め出したからである(Plut.Per.19.1)」。

植民団を送り半島の頸部に防壁を築いたことは、ペリクレスがミルティアデスの偉業を継承したことを意味する。しかしそのその行為の意義付けは、プルタルコスと以前に考察したヘロドトスとは異なっている。プルタルコスは、半島に住むギリシア人を防衛するために、近くに住むトラキア人やバルバロイの侵入を遮断したとしているが、ヘロドトスは、トラキア人であるドロニコイ人を防衛するために、近隣に住む敵対的なトラキア人(アプシントス人)やギリシア人(ラムプサコス人)と戦争したと言っている。

確かに時代状況は変わっていた。466年にキモンが半島に残留するペルシア軍を追討して、半島の諸都市はデロス同盟に加盟した。半島は448年まで「ケルソネソス人」の名で18タラントンの貢納金を支払っていたが、447/6年以降「セストス人」「マデュトス人」「エライウス人」「リムナイ人」「アロペコネソス人」「アゴラ人」の名で別々支払うようになり、合計も僅か2タラントんに減少した。この減額は半島の植民と関係があると考えられている⁷⁰⁾。それ故にペリクレスの時代には、半島における同盟の引き締めが重要な意味を持っていたことは間違いない。しかし本来、フィライダイによる半島経営は、トラキアにおける金山の権益取得と密接に結びついたものであった。ペリクレスがそれを継承したのならば、真の目的は半島の特定のトラキア人の保護であったはずである。そうであるならば、プルタルコスの記述は、親ギリシア・反

バルバロイ的な偏見によって歪められていると見る事が出来る。事実ケルソネソス植民の直後に、ペリクレスはエンネアホドイ周辺における植民を再開したのである。

(10)ブレア植民

この植民については、アテナイ植民としては唯一の設立碑文が残されており、貴重な情報源となっている(M&L.49)。しかし逆に文献史料は極端に少なく、植民の経緯は勿論、その場所さえも正確には判らない。ただステファノス・ビュザンティオノスとヘシュキオスによれば「ブレア、アテナイ人がアポイキアを送り出したトラキアのポリス(Steph. Byz. Βρέα; Hesychius. Βρέα)」とされ、それがトラキアに建設されたことは判る。「トラキアへはビザルタイ人とともに住む者たち 1000 人を」送り出したというプルタルコスの記述(Plut. Per. 11.5)は、ブレアのことを指しているのであろう。ビザルタイ人はアルギロスに接して住んでいるトラキア人部族で、アルギロスはストリュモン河の西側に位置し、エイオンやエンネアホドイから近い⁷⁹⁾。

この碑文には、①都市建設者、土地分配役、全権委任者などの役人、②切り取り地の存在、③大パンアテナイア祭およびディオニュシア祭への参加、④土地の防衛、⑤植民者の登録期日、⑥資金の支払い、⑦植民者の農民級と労働者級への限定が記されている。この文面からは植民の正当化については何も得られないが、ここでは④に注目したい。「もし誰かがアポイコイたちの土地に攻撃を仕掛けてくるならば、・・・が書記であった時に締結されたトラキア地方の諸ポリスに関する条約に従って、諸ポリスは出来る限り速やかに救援に向かうべきこと(13-17)」。植民市が軍事拠点の役割を果たしたことは疑い得ないが、建設当初はむしろ周囲の諸都市によって守られなければならない存在であった。

植民の時期については、アルギロスの貢納金が 446 年以降減少したこととこの碑文の文字形態とから 447/6 年に行われたと考えられている⁷⁹⁾。ブレ

アのその後も不明である。422年のアムフィポリスを巡るクレオンとブラシダスの戦闘に関する詳細なトゥキュディデスの記述にブレアは現れないので、その時までには消滅していたのだろう。ブレアは、戦略的に価値の高いアムフィポリスが建設された437年に吸収合併されたのかも知れない⁷³⁾。

第3節 三十年の平和

460年から始まった第一次ペロポネソス戦争は、446/5年の秋か冬の三十年の平和締結によって終結した。これによってアテナイはアイギナを獲得したが、ニサイア、パガイ、トロイゼン、アカイアを放棄した⁷⁴⁾。これ以降アテナイは、西と東の辺境に植民者を送り出すようになった。

(1) トゥリオイ植民

イタリア半島南端に位置するトゥリオイはシュバリスの再興としてペリクレスによって建設された(Plut.Per.11.5)。その経緯についてはディオドロスが詳しく伝えている。シュバリスは720年にアカイア人とトロイゼン人によって建設されたアカイア系のポリスである。その土地は大変肥沃であったので、多くの人口を有し非常に繁栄した。そのため外敵に狙われることが多く、破壊と再建を繰り返した。511年にクロトン人との戦争に破れ、第一シュバリスが破壊された⁷⁵⁾。453年ポセイドニアの援助で第二シュバリスを再建するが、448/7年に再びクロトン人によって破壊された(Diod.11.90.3)。同年彼らはスパルタとアテナイに援助を求めた。スパルタは拒否したがアテナイは応じた。446/5年アテナイはまず少数の植民者を派遣して支援した。彼らはシュバリス人と共に住んだ。これが第三シュバリスの再建である。しかし間もなくアテナイはシュバリス人を追放し、場所を移して第四シュバリスを建設した。これがトゥリオイである。アテナイはペロポネソスを含む各地に植民者を募った(Diod.12.10.4)。スパルタとコリントスは国家としてはこれに参加しなかったが、これに参加し

た個人は多かった⁶¹⁾。

トゥリオイ人は民主政的な政体を確立したが、興味深いのは、「彼らが市民を十部族に分割し、それを構成する人々の国籍に因んだ名を付けたことである。ペロポネソスから集まった人々から成る三部族を、アルカディア部族、アカイア部族、エレイア部族と名付け、ペロポネソスの外に住むその親戚から集められた3部族を、ボイオティア部族、アムフィクティオニア部族、トリア部族と名付け、他の人々から成る残りの4部族を、イオニア部族、アテナイ部族、エウボイア部族、島民部族と名付けた(Diod.12.11.3)」。トゥリオイ植民は一般にペリクレスのパンヘレニズムの表明と言われる。確かに都市の種族構成を見ればそう言えるかもしれないが、しかし元々の国籍に固執し、結局は種族のモザイクになっていることを考慮すれば、むしろ種族意識に根ざした分裂傾向が窺われる。

実際 434/3年にどのポリスが正当な都市建設者であるかを巡って内紛が発生した。それまではアテナイがそれを自認していたが、結局は当たり障りがないようアポロンとすることとなった(Diod.12.35.1f)。そして414年以降はアテナイの影響力は薄れていった⁷⁾。このことは二つの重要な点を示している。①都市建設者の選択は政治的な意味があったこと、②種族という都市のカラーは都市建設者を取り替えることによって変更可能であること。これらの点は次に述べるアムフィポリス植民にも言えることである。

(2)アムフィポリス植民

アムフィポリス植民はかつてのエンネアホドイの再建である。トゥキディデスはアムフィポリスの前史を次のようにまとめている。「その同じ冬に(424/3年)、ブラシダスはトラキアの同盟を率いて、アテナイ人のアポイキアであるストリュモン河畔のアムフィポリスへ遠征した。今この都市があるこの地域は、かつてダレイオス王から逃れてきたミレトス人のアリスタゴラスが都市を建設しようと試みたが、エドノス人によって撃退されたところである

(497年)。その32年後にアテナイ人は、彼ら自身の中から及び他の諸都市の中から志願した10000人のエポイコイを送り込んだが(465年秋)、彼らもドラベスコスでトラキア人によって全滅させられた(465/4年初冬)。そして再び29年後にアテナイ人はそこに向かった(437年)。ニキアスの子ハグノン都市建設者として送り出した時、エドノス人を追放してその地域に都市を建設した。それこそかつてエンネアホドイと呼ばれていたところである。彼らはエイオンから出撃したのであるが、それはストリュモン河口の海岸沿いにあり、彼らが抑えていた商港で、今の都市から25スタディオン離れていた。その都市をアムフィポリスと名付けたのはハグノンであった。というのは、その都市の両側をストリュモン河が取り囲むように流れていたため、その河から河までを防壁で遮断して堅め、海も陸もよく見渡せる都市を建設したからである(Thuc.4.102.1-4)。

まことにこの地はギリシアの権力者を引きつけて止まない土地であった。アムフィポリスは貢納金を支払っていなかったが⁷⁹⁾、何よりも金鉱山の権益所得と密接に関わっていた。ペリクレスがまずケルソネソスに植民団を送り、防壁を建設し、次にストリュモン河畔にブレア、アムフィポリスを建設したことは、かつてのミルティアデスの行為の再現とも思われる。この時ペリクレスがトラキアの権益を掌握したと見て間違いないだろう。

アムフィポリスへ送られた植民者の数はどの史料にも記されていないが、前回同様かなりの人員を要しただろう。ディオドロスも述べているように「アテナイ人はアムフィポリスを共同で植民した。その住民の一部はアテナイ市民から、一部は近くの駐留軍から選ばれた(Diod.12.32.3)」のであり、アテナイ市民はむしろ少数派であった(Thuc.4.106.1)。

それ故この都市は長続きしなかった。424/3年のブラシダスのアムフィポリス攻撃が成功した理由の一つは、市内にいたアルギロス人の密通であったとトゥキュディデスは述べている(Thuc.4.103)。アルギロスは先のブレア建設の時に土地を奪われており、アテナイ人に対して怨みを持っていた。またブラシダスが「アムフィポリス人とアテナイ人の内で望む者は、自分の財産に加え

て、平等かつ公平な権利を共有して留まるべきこと、またそれを望まない者は、五日以内に自分の財産を携えて退去すべきこと(Thuc.4.105.2)」を布告すると、アムフィポリスは容易く開城した。この時アテナイ人の殆どは退去しただろう。

422年の夏、クレオンはアムフィポリス奪還を試みるが、ブラシダスの抵抗によって失敗した。両将とも戦死するほどの激戦であった。興味深いのはそれ以後のアムフィポリス人の態度である。彼らはブラシダスをアゴラに面する場所に埋葬し、記念碑を建て、半神としての犠牲を捧げ、毎年の競技と犠牲式を行った。また彼らは彼を都市建設者として崇拜した。その一方でハグノンの都市建設に拘わる記憶を抹消した(Thuc.5.11.1)。

(3) シノペ植民

サモスとピュザンティオンの反乱鎮圧の直後の440年から435年の間に、アテナイはプロポンティスから黒海南岸にかけて大示威行動を行い、この地域に三つの植民市を建設した⁷⁹⁾。これらはいずれもトゥキュディデスによっては伝えられていない。

プルタルコスによれば、ペリクレスは「立派に装備された大艦隊を率いて黒海へ乗り入れると、ギリシア人諸都市に対しては、彼らの望みを叶えてやって友好的な態度をとり、周辺に住むバルバロイと彼らの王や首長たちに対しては、全海域を自分たちの支配下に置いた今や、望む時にはいつでも艦隊を派遣することが出来るその力の大きさと恐れを知らない勇氣とを誇示した。またシノペ人のためには、僭主ティメシレオスに対抗するための13隻の軍船と兵士をラマコスと共に残してやった。彼と彼の仲間が追放された後、アテナイ人の内で希望する600人がシノペへ航行すべきこと、そして以前に僭主たちが所有していた土地および家屋を分配して、シノペ人と共に住むべきことが決議された(Plut.Per.20.1-2)」。この植民は435年頃のことと考えられる⁸⁰⁾。

このテキストには三つの異なる対象が現れ、それぞれに対する態度が異なっている。①ギリシア人諸都市に対しては友好的であり、②バルバロイに

対しては威圧的であり、③シノペに対しては僭主を追放し、民衆に味方している。シノペの周辺の土地は肥沃であり、黒海南岸のほぼ中央に位置し、良港に恵まれているため、海上交通の拠点であったのみならず、キリキアへ至る小アジア内陸における商業ルートの拠点でもあった。シノペは7世紀にミレトス人によって二度に渡って植民されたイオニア人の都市である⁸¹⁾。

(4) アミソス植民

そもそもアミソスはシノペの植民市であった。アテナイ人による植民の経緯や規模は不明である。植民の時期も430年代の中頃としか言えない⁸²⁾。ストラボンが、この近くのアマセイアという町の出身であったので、アミソスの地理と歴史について詳しくまとめている。それによると「ガゼロンの次にサラメネと重要な都市アミソス。シノペから約900スタディオン離れている。テオポムポスは、それは最初にミレトス人が建設し、・・・(二番目に)カッパドキアの首長が、三番目にアテノクレスとアテナイ人が植民し、ペイライエウスと名を変えたと云っている(Strab.12.3.14)」。植民者は彼らと同居したと思われる。

都市名の変更は、フクロウの図柄と Πειραιῶν の文字の刻印された4世紀のコインによって証明される⁸³⁾。このことは、アテナイ人がアミソスを相当に重要な港と見なしていたことを示唆している。アミソスは370年頃ペルシアに征服されるが、4世紀末にアレクサンドロス大王が自由を与え、再び名をアミソスに戻した⁸⁴⁾。プルタルコス(Plut.Luc.19.6-7)、この都市が1世紀においてもなおアテナイの都市と見なされていたことを示している。

(5) アスタコス植民

この植民もまた経緯も規模も不明である。植民年代も正確には判らないが、443年より後か430年代と思われる⁸⁵⁾。ディオドロスは「これらのこと

が行われたのと同じ頃、アテナイ人はプロポンティスにあるアスタコスと呼ばれる都市を建設した(Diod.12.34.5)」と伝えるのみである。その時、都市はオルビアに改名された⁹⁰⁾。この都市も興亡が激しく、ストラボンによれば「その湾の中にアスタコスという都市があった。メガラ人の、そしてアテナイ人の、そしてその後にドイダルサスの建設による。その都市に因んでその湾は名付けられた。それからリュシマコスによって徹底的に破壊された。またその住民をニコメディアへ、その都市の建設者は連れていった(Strab.12.4.2)」と伝えられる。先住民はドーリス人であったが、植民者は彼らと同居したと思われる。

第4節 第二次ペロポネソス戦争

446/5年に締結された平和条約は431年に破られた。トゥキュディデスの記述によれば、ペロポネソス戦争の遠因は、ペロポネソス同盟を擁するスパルタの覇権とデロス同盟の盟主たるアテナイ新興勢力との避けがたい衝突であり、その直接的な原因は、コリントスとの軋轢で、具体的にはケルキュラ問題とポティダイア問題であった。これ以降の植民は、先住民に対する過酷さを増していった。

(1) アイギナ植民

アイギナはサロニカ湾内にあり、アルゴリス地方の東岸とアッティカの西岸の真ん中に位置するあまり肥沃ではないドーリス人の島である(Hdt.8.46)。アテナイとアイギナはともに海軍国家で、もともと不仲だった。491年頃から既に戦争状態にあり(Hdt.6.87-93)、サラミスの海戦で活躍したアテナイの大艦隊は、そもそもは483/2年に対アイギナ戦に備えて建造されたものであった。ペルシア戦争中は休戦状態であったが、460年夏からアテナイはアイギナを激しく攻撃した(Thuc.1.105.2)。457年春アイギナ人はアテナイ人と協定を締結し、防壁の取り壊し、軍船の引き渡し、貢納金の査定を受け入れた

(Thuc.1.108.4)。このことによってアイギナは強制的にデロス同盟に加盟させられたことになる。以後アイギナは貢納金を納めていた。

その後ペリクレスは「ペイライエウスの目脂のようなアイギナを拭い去ってしまえ」と命じたと言われている(Aristot.*Rhet.*3.10; Plut.*Per.*8.5; Plut.*Demosth.*1.2)。そして431年7月「アテナイ人は自分たちに対する戦争の責任の多くは彼らにあると非難して、アイギナ市民と婦女子をアイギナから移住させた。ペロポネソスの沖に浮かぶアイギナに自分たちの中から送り出されたエポイコイが住む方がより安全であると思われたからである。実際に間もなく、そこに植民者を送り出した(Thuc.2.27.1)」。植民者の規模については不明である。

「追放されたアイギナ人に対してラケダイモン人は、テュレアに居住し土地の分配を許可した。というのは、一つには反アテナイ感情から、一つには地震の時に起こった奴隷反乱の際にアイギナ人が自分たちに恩恵をなしたからであった。テュレアの土地はアルゴスとラコニアの中間地帯であり、海に達する斜面を占めていた。アイギナ人の内のある者たちはそこに住み着いたが、他の者たちは他のギリシアの土地へ四散していった(Thuc.2.27.2;4.56.2;Plut.*Per.*34.1; Diod.12.44)」。ここまでなら後に見るポティダイア植民と同じ処置であるが、アイギナ植民の場合はより過酷であった。

424年夏アテナイはニキアスの指揮の下でアイギナ難民の受け入れ先であるテュレアを攻撃した。「その都市を焼き尽くし、財貨を略奪し、白兵戦で殺されなかった限りの者を(省略)連行してアテナイへ到着した。(省略)そしてアテナイ人は(省略)逮捕された限りのアイギナ人全てをかねてからの憎しみの故に処刑すべきことを欲した(Thuc.4.57.3-5; Plut.*Nic.*6.7)」。

405年のアイゴスポタモイの戦いの後(Xen.*Hell.*2.2.9)、植民者は島から追放された。アイギナは自治独立を取り戻したが、アテナイ人に対するアイギナ人の憎しみは相当なもので、4世紀においては、アイギナで捕らえたアテナイ人は奴隷に売るべしという決議がなされていたほどであった(Plut.*Dion.*5.7)。次章で考察するように、424年当時、先住民がギリシア人であっても彼らを抹殺するという方針は珍しいものではなくなっていた。

第6章 クレオンの時代

—植民者なき植民—

第1節 疫病の大流行

430年5月初旬、ペロポネソス軍の第二次アッティカ侵攻が開始されて間もなく、アテナイで疫病が発生した。以前にもレムノス島付近で疫病が流行ったことがあったが、これほどの規模のものは前代未聞であった。この時の状況は、実際にその場にいたトゥキュディデスによって克明に記録されている(Thuc.2.47-54)。彼は病状について医者さながらの観察眼をもって叙述しているが、それは彼がヒポクラテス派の中でも特に科学的な「病状記」の一派と密接な関係を持っていたことに由来する³⁷⁾。この疫病の感染力は非常に強く、放置された遺体を食べた鳥や獣までも死んでしまう程であった。431年5月以来ペリクレスの指導のもとに人々が地方の村々から集まり、アテナイ市内に籠城していた(Thuc.2.13-14)。それは、最小限の力で都市を防衛し、最大限の力を海軍に投入するという彼の戦法であった。そのため移住者たちには住む家もなく、小屋掛けの下に寝起きしていた。このような劣悪な状況が疫病の流行に拍車を掛けたことは間違いない。

歴史家トゥキュディデスは、この疫病が人々にもたらした心理的变化を見逃さなかった。次々と息絶えていく人々の死体は、他の死体の上に積み重ねられ、路上に累々と打ち捨てられた。泉の回りは水を求めてやってきた瀕死者たちであふれた。神殿にも屍の山が築かれた。このような状態に置かれた人間は、もはや神聖とか清浄といった宗教感情に無頓着になり、他人が準備した火葬場に先回りして、自分の持ってきた死体に先に火を付ける者、すでに焼かれている他人の死体の上に自分の持ってきた死体を投げ降ろす者などもいたと言う。彼は、この疫病こそがポリス生活全面にかつてない無秩序を生み出した

最初の契機となったと指摘する。金持ちも貧乏人も等しく突如として死に、死人の持物を奪って金持ちになる者もいる。そんな風潮の中で人々は、取れるものは生きている間に取り、享樂に耽るべきだと考えるようになった。宗教的畏怖、社会的掟、人間に対する拘束力、そのような道徳的歯止めが、この疫病の蔓延によって失われてしまった。

第2節 ペリクレスからクレオンへ

429年の秋か冬にペリクレスもこの病気に罹って死亡した(Thuc.2.65.6; Plut.Per.38.1)。奇しくも、先の時代をリードしたペレクレスがこの病に倒れたこと自体、時代の画期を象徴している。権力を継承したのはクレオンであった。彼は従来の名門出身の貴族政治家たちとは異なり、工業家出身の新しいタイプの政治家の代表であった。それ故、彼らはデマゴゴスとして伝統的な貴族からしばしば誹謗された⁸⁸⁾。例えば、彼自身は皮鞣し業者であったので、アリストファネスの喜劇において、パフラゴニア人とか、皮臭いとか(Aristoph.Eq.892)、キュダテナイ区の犬(Aristoph.Vesp.895)とか、卑しい生まれの教養のない者(Aristoph.Eq.178-194;211-220)などと罵られ、『アテナイ人の国制』では、演壇上で叫んだり、罵倒したり、衣服を巻き上げたりした最初の人物として(Aristot.Ath.Pol.28.3)、その野卑な態度を嫌われている。

しかし実際には、彼は卑しい生まれでも無教養な人間でもなかった。彼は470年以前の生まれで、キュダテナイ区のクレアイネトスの子である。クレアイネトスは奴隷の皮鞣し工を使う工場を所有しており(Schol.Arisoiph.Eq.44)、公共奉仕も行ったことがあり、裕福な家庭の出であった。クレオンはペリクレスの生前から政治活動を始めていたらしく、そのような彼には教養もあり、取り巻きもいたはずである⁸⁹⁾。

トゥキュディデスは、ペリクレスを高く評価し、クレオンを敗戦の原因として悪く描いている。その理由の一つは、クレオンのせいでトゥキュディデス自身が425/4年のアムフィポリス攻防戦の失敗の責任をとってアテナイを追

放されたからである⁹⁰⁾。この事実からも明らかなように、クレオンもトラキア方面に多大な関心を持ち、ペイシストラトス以来の鉱山の権益を継承しようとしたことは疑いない。しかし、むしろここで注目したいのは、彼の目的ではなく、彼が置かれた状況である。

第3節 植民者なき植民

ペロポネソス戦争開戦前夜のアテナイの成年男子市民の人口は、35,000から45,000あったと見積もられているが⁹¹⁾、疫病は426年まで断続的に繰り返し、その結果、人口の1/3以上が病死したと見積もられる。疫病による市民人口の減少は、当時のアテナイ植民活動を規定したはずである。この時期の植民に概ね共通する特徴は、対象がデロス同盟のメンバーであり、彼らを武力で制圧した後に、成人男子は皆殺しにし、婦女子は奴隷に売るという残虐な処置をしたこと、またそうやって土地を獲得しながら、アテナイから植民者を送り出さなかったり、送り出したとしてもすぐに撤退させたり、ごく少数であったことである。つまりこの時代のアテナイは、懲罰と見せしめのために離反都市の住民を抹殺したが、人口不足のためにそこへ植民者を送り出したくても出来ない状況にあったと見られるのである。

本章で扱うレスボス植民は従来、常にクレルーキアすなわち軍事植民の典型と見なされてきた⁹²⁾。しかし、この評価は正しいのであろうか。従来の研究の方法論には、二つの欠点があったように思われる。①疫病による人的影響を考慮に入れなかったこと、②レスボス植民を同時期に建設された他の植民との関わりにおいて捉えようとしなかったこと。特に、ノティオン植民、トロネ(植民)、スキオネ植民は、アテナイ人自身が入植しなかったために、従来のクレルーキア研究ではほとんど無視されてきた。しかし、ポティダイア植民、メロス植民も含め、これら六つの植民を包括的に捉えてはじめて、レスボス植民を正しく評価することが出来るのではないだろうか。

(1) ポティダイア植民

ポティダイアはパレネ半島の地峡部に位置するコリントスの植民市、即ちドーリス系であり、5世紀には母市から毎年エピダミウルゴイと呼ばれる役人が派遣されていた(Thuc.1.56.2)。一方でデロス同盟に加盟し、初めは軍船を提供していたが、後に貢納金を支払うようになった⁹⁾。しかしポティダイアは432年の3月か4月に、アテナイ、マケドニア王ペルディッカス、コリントスとの間の緊張関係から同盟を離反した。直ちにアテナイの包囲攻撃を受け、二年以上に及ぶ籠城を強いられた。その間に飢餓のため人食まで起こったという(Thuc.2.70.1)。そしてついに430/29年の冬に条件付きで降伏した。

その条件とは「ポティダイアの市民および婦女子そして援軍は一枚の外衣、但し婦女子は二枚、それと旅費として決められた額の金を持って退去すべきこと(Thuc.2.70.3)」であり、「彼らは休戦を保証されて、カルキディケや各人が行ける所へ退去した。しかしアテナイ人は、本国の同意なしでそのような措置をとった將軍たちを叱責した(というのは、彼らはその都市を無条件降伏させるつもりだったからである)。彼らは後に、エポイコイを自分たちの中からポティダイアに送り出し、そこに住まわせた(Thuc.2.70.4)」。植民は恐らく429/8年に行われたのであろう⁹⁾。ディオドロスによれば、その規模は1000人であった(Diod.12.46.7)。出発の際に彼らがアテナ・ポリアスに捧げた奉納品の台座が残されている(M&L.66)。

ブレアと同様ポティダイアも建設当初は周辺諸ポリスによって守られていた。このことは、428/7年のポティダイアと周辺諸都市との関係を規定した碑文によって明らかとなる。「アフュティス人はポティダイアにいる者たちに対して、以下の宣誓をなすべきこと。もしアテナイ人のポリスに対して、あるいはポティダイアに住んでいるアテナイ人のエポイコイに対して、何らかの敵が来襲した場合には、言葉においても行為においても、出来る限りアテナイ人を救援せよ(ATL.II,D21)」。ポティダイアは404年の終戦の時までアテナイの支配下にあったと考えられる。

(2) ノティオン植民

トゥキュディデスによれば、パケスによるノティオンの征服とそれに伴う植民は、それ自体を目的としたものではなく、それに先立つレスボス反乱の鎮圧行動の中で言わば突発的に行われたものであった。当時のデロス同盟諸都市のほとんどは、軍船や兵員を提供する代わりに貢納金を支払っていたが、レスボスとキオスだけは、貢納金を支払うことなく軍船を提供することによって完全な自治独立を維持していた。しかしレスボスは一枚岩ではなく、その島には、ミュティレネ、アンティッサ、ピュラ、エレスス、メテュムナの五つのポリスがあり、これらはいずれもアイオリス系のポリスであったが、最大のミュティレネが貴族政をとり、アンティッサ、ピュラ、エレススもそれに従っていたのに対して、メテュムナだけが民主政をとっていた。

428年6月中旬頃メテュムナを除くレスボス島の全市がアテナイとの同盟から離反した。時期は不詳であるが、レスボスは以前にも離反を計画したことがあると云う(Thuc.3.2.1)。今回も反乱の首謀者はミュティレネ人であった。他の諸都市を政治的に統合し、血縁関係のあるボイオティア人の勧めで⁹⁵⁾、スパルタ人と内通して反乱の準備を進めていた。アテナイはこの動きをメテュムナ人からの密告によって知った。そこでアテナイは先手を打って、40隻の艦隊をレスボスに派遣し、軍船の引き渡しと防壁の取り壊しを命じたが、ミュティレネはそれに従わなかったので、マレア岬を拠点として攻撃を開始した。その後、ミュティレネはスパルタとの同盟締結を果たし、援軍派遣とアッティカ攻撃の約束を取り付けたが、時すでに秋に入っていたので実行されなかった。冬にアテナイは、パケスを指揮官とする追加の艦隊を派遣して、ミュティレネを包囲した。427年6月末になってやっとスパルタは42隻の艦隊をレスボスに派遣し、同時にアッティカ侵攻も行った。しかしスパルタ艦隊がもたついている間に、籠城していたミュティレネ人の下層市民と富裕市民の間で食糧分配を巡って内紛が発生した。その結果ミュティレネ人はパケスに降伏を申し入れた。

一方レスボスへ向かったスパルタ艦隊は、ミュコノスカイカロスあたりに近づいた時に初めて、ミュティレネが陥落したことを知った有様であった。敵艦隊接近の知らせを受けたパケスは追撃したが、パトモス島付近まで追った時、あきらめてレスボスへの航路を引き返した。ノティオン植民はその途中に起こった出来事であった。「沿岸を航行し、再びコロフォン人のノティオンに船を着けた。そこには、内陸の都市が私的な内紛に乗じてイタマネスと彼の配下のバルバロイによって占領されて以来、コロフォン人が移住していた。占領は、ペロポネソス人の第二次アッティカ侵攻が行われたのとほぼ同じ時であった。しかしノティオンに避難して住み着いた者たちは、そこで再び内乱状態に陥った。ある者たちは、ピッストネスのもとから来たアルカディア人とバルバロイの傭兵を見方に引き入れ、要塞の中に住まわせて、内陸の都市から来たコロフォン人の内でペルシアに見方した者たちも一緒に中に入り、政治を行っていた。またある者たちは、それらのもとを密かに立ち去り、亡命者となって、パケスを見方に引さ入れた。彼は、もし和解が得られなくても、再び無事に要塞に連れ戻すという条件で、要塞の中にいるアルカディア人の指揮官であるヒッピアスと会談した。ヒッピアスがパケスのところへやってくると、パケスはその者を軟禁し、自分は突如として要塞を攻撃し、迎撃する間も与えずそれを奪い、中にいた限りのアルカディア人とバルバロイを皆殺しにした。そうした後に、協定通りにヒッピアスを連れ出し、中に入るや否や、捕えそして射殺した。彼は、ペルシアに見方した者を除くコロフォン人にノティオンを引き渡した。後にアテナイ人は、オイキステスたちを派遣し、自分たちの法に従って、ノティオンを植民市として建設し、分散していたコロフォン人をあらゆる都市から集めた(Thuc.3.34)」

ノティオンはもともとはアイオリス人によって建設された港湾都市であったが、そこから約 13km 内陸にある古いイオニア人の都市コロフォンの外港としての機能を果たしていた。後にノティオンもコロフォンもコロフォン人の都市となり、デロス同盟に加盟し、それぞれ「ノティオン人」「コロフォン人」として別々に貢納金を支払っていた⁹⁰⁾。ここで注目したい点は二つある。

一つは都市を牛耳っていたアルカディア人とバルパロイ傭兵を皆殺しにしたこと。これは実質的にはコロフォン人の解放と彼らの都市の再建を意味する。コロフォンはイオニア十二市の一つで、イオニア人の母市を自認するアテナイにとっては、当然の役目と見なされたであろう。もう一つはパクスによるノティオン征服の後に、アテナイからオイキステスたちを派遣し、自分たちの法に従って植民市を建設しておきながら、アテナイ人を入植させなかったことである。当時のアテナイがまだ疫病によって疲弊していたことはトゥキュディデスが明記している(Thuc.3.3.1)。

(3) レスボス植民

パクスは先にミュティレネを陥落させた時、艦隊をアンティッサに向け、すでにそれを制圧していたが、ノティオンを征服して再びミュティレネに戻ると、残りのピュレとエレソスも従属させた。ここにレスボス全島が降伏するに至った。427年6月末のことであった。彼は市内に匿われていたサライトス、テネドスに抑留中のミュティレネ市民、パクスが今回の離反の首謀者と判断した者たちと一緒にアテナイへ送還し、軍勢の過半も帰還させた。彼自身はそこに留まり、ミュティレネをはじめとするレスボス島全般の処理に当たった。

7月ミュティレネ市民の処分について開かれた最初の民会決議は非常に過酷なものであった。「怒りに駆られた彼らは、ここに護送された者たちのみならず、ミュティレネの成年男子を全員死刑にし、婦女子を奴隷にすることを決議した(Thuc.3.36.2)」。審議が終わると即刻、この決議をパクスに伝えるために三段櫂船が派遣された。しかし一夜明けると、アテナイ人の間にはこれではあまりにも過酷ではないかとの後悔の念が生じた。そのような雰囲気を感じて察知したアテナイ駐在のミュティレネ使節や親ミュティレネ的なアテナイ人は、決議の差し戻しを要求し許可された。

再び民会が召集されて、まず前日に極刑論を通したクレオンが登壇した。彼は、支配者にとって寛容は敵であり、今の支配を維持するためには、裏

切られた時の怒りが薄れないうちに、即刻ミュティレネ人を抹殺し、それを同盟諸都市に対する見せしめとせよと主張した。これに対してディオドトスは、このような判断は性急に過ぎ、性急な判断は理性的ではないと反論する。しかし彼の反論の焦点は、ミュティレネ人が有罪か無罪かにあるのではなく、彼らを抹殺することがアテナイにとって得策か否かにあった。彼の見解は、支配者に必要なものは寛答であり、改悛の余地を与えることによって同盟諸都市の反乱が回避されるし、また一度起こったとしても、早期に鎮圧されるが、反乱都市の抹殺は、貢納金の減収を意味するゆえに、生かしておいて利用する方が得策であるというものであった。

両者の意見が述べられると、アテナイ人の意見は二つに別れ、挙手投票の結果、ほぼ同数となったが、結局ディオドトスの提案が決議された。処刑取り消しを伝える三段櫓船が間一髪のところの間合ったという件は、『戦史』のクライマックスの一つをなす。結局、レスボス人の処罰は以下のようなものであった。「アテナイ人は、パケスが送った残りの者たちをその反乱の首謀者であるとして、クレオンの動議に従って全て処刑した（その数は 1000 人より少し多かった）。そしてミュティレネ人の防壁を取り壊し、軍船を取り上げた。後に貢納金をレスボス人に課すことはなかったが、メテュムナ人の土地を除いて、その土地を 3000 のクレーロスに分割し、300 を神々のための神域として除外して、残りに対して彼ら自身の内から籤に当たったクレールーコイを送り出した。レスボス人は自ら土地を耕して、彼らに 1 クレーロスにつき年 2 ムナの金を支払った。またアテナイ人は、大陸にあるミュティレネ人が支配していた諸都市を取り上げ、後にアテナイ人の支配するところとなった。レスボスに関することは以上であった (Thuc.3.50)」。

レスボス処分で特徴的なのは、土地賃貸が行われた点である。この点において従来、カルキス植民との類似性が指摘されてきた。しかしカルキスにおける土地賃貸は、おそらく公有地たる植民市の土地を植民者に対して賃貸したものであったと思われる。サラミスおよびレムノスの場合に見られるように、植民市における土地は本来、植民者が自ら耕作するものであり、それを第三者

に又貸しすることが禁じられていた。従って、レスボスの事例とは別物と見なすべきであろう。

このクレールーコイについては二つの説がある。①クレールーコイはアテナイに留まって賃貸料を受け取り、それで生計を立てていたとする「不在地主説」⁹⁷⁾、②クレールーコイは現地に派遣されて、農業をせず軍事に専念していたとする「駐留軍説」⁹⁸⁾。前者は「貧民救済説」後者は「軍事植民説」とも言い換えることが出来る。レスボス植民にアテナイ帝国支配の先鋭化した姿を見ようとする点において両説は共通するが、クレールーコイが現地に送られたか否かについては真っ向から対立する。トゥキュディデスの「籤に当たったクレールーコイを送り出した」*κληρούχους τοὺς λαχόντας ἀπέπεμψαν* のアオリスト形が過去における事実を表記する用法であることから、クレールーコイは実際に現地に送られたとみるのが通説である。

それは認めるとしても、彼らは本当にレスボス周辺を軍事的に支配していたのであろうか。424年のレスボス反乱の時にも彼らに関する言及は見られない。それにも拘わらず駐留軍説を裏付ける証拠とされてきたものは、年2ムナの賃貸料である。この額は当時のゼウギータイ級の年収に相当するという⁹⁹⁾。この賃貸料によってテーテスがゼウギータイに上昇し、重装歩兵が増強されたと考えられてきた。確かに、この説は2ムナの説得的な意味付けに成功している。しかしまた、2ムナという額は5世紀における重装歩兵一人当たりの捕虜に対する身代金や罰金にも相当した(Hdt.5.77;6.79;Thuc.5.49)。この観点に立つならば、2ムナの賃貸料は処刑を免れたミュティレネ市民に課された身代金とみなすことも可能ではないだろうか。この推測は後に試みるトロネ(植民)の考察によって補強されるだろう。

レスボスへのクレールーコイが現地に送られたとしても、彼らは早い段階で撤退したと見るべきだろう。そのことは、427/6年に刻まれた保存状態の悪い碑文から窺い知ることが出来る(IG.I⁶⁶)。そこには、「ミュティレネ人使節を翌日の饗応のためにプリュタネイオンに招待すべきこと」(24-25)が記され、アテナイとミュティレネの和解が読みとれる。これを要として考えれば、

この殆ど不完全な碑文の中に見える「自治独立」*αὐτο[νό]μος*(11)、「クレールーコイ」*τοῖς κλε[ρό]χοις*(17)、*τοῖς δὲ κλ[ερό]χοις*(25)、「土地の返還」*γῆς ἀνταπόδο[σις]*(26)というキーワードは、和解に伴うミュティレネの自治独立の回復、土地の返還、クレールーコイの撤退というふうに繋がってくる。

トゥキュディデスの記述とこの碑文を組み合わせて考えるならば、レスボス処分の経緯は以下のように再現されるだろう。①クレオンによるレスボス人の皆殺し案の提出と撤回、②ディオドトスによる首謀者だけの処刑、防壁の取り壊し、軍船の没収、植民者の派遣、③和解と自治独立の回復、植民者の撤退、年2ムナの賃貸料支払い。つまり、レスボス処分は三段階に分けてトーンダウンしたのである。人口不足という現実がそれを余儀なくしたのである。この考えが正しければ、レスボス植民は軍事植民の典型ではあり得ない。

(4)トロネ(植民)

アムフィポリスを奪取した後、423年初めブラシダスはそこを拠点としてトラキア地方におけるアテナイの同盟の切り崩しを開始した。彼はまずアクテ半島に兵を進め、アンドロスの植民市サネ、ペラスゴイ人の都市テュッソス、クレオナイ、アクロトオイ、オロビュクソス、ディオオン、およびビザルティア族、クレストニア族、エドノス族などの村々の大部分をアテナイから離反させ、スパルタ側へ付けることに成功した。トロネ占領もその一貫であった。423年夏ラケダイモン人とアテナイ人は、一年間の休戦条約を締結した。それは現状維持を原則として、双方は既得圏内に留まるべきことを規定したが、この条約の交渉中にスキオネが自発的にアテナイから離反した。ブラシダスはそこを拠点としてメンデ及びポティダイアを攻撃した。しかし後に、スキオネ離反が休戦条約発効の2日後に行われたことが判明し、クレオンはアテナイ市民を説得して、スキオネ遠征を決議させた。その後メンデも離反した。

この状況に対してアテナイは巻き返しを計った。ブラシダスは、アケドニア王ペルディッカスと共同でリュンコスアラバイオスへ遠征したが、その

時に両者の間に不和が生じ、ペルディッカスはアテナイと和解した。これがきっかけとなって戦況はアテナイに有利となった。ブラシダスがマケドニアからトロネへ帰還すると、すでにメンデはアテナイに奪還されていた。そこで彼はパレネ半島を断念して、トロネの守備に専念した。アテナイ軍はメンデからスキオネへ軍を進めた。スキオネ人とペロポネソス軍はそれを迎え撃ったが、アテナイ軍は攻城壁を構築して、それを封鎖した。一年の休戦期間が終了すると、クレオンはアテナイ人を説得してトラキア討伐の軍団を派遣した。彼はまず、籠城中のスキオネに向かい、現地の重装歩兵を加えて、トロネから遠くないコポス湾に船を着けた。ブラシダスが不在であり、守備隊も手薄であることを知ると、クレオンは攻撃し、陥落させた。ブラシダスも駆けつけたが間に合わず、そのまま引き返した。

トロネに対する処罰は以下の通りである。「クレオンとアテナイ人は、港のそばと城壁の前に二つの戦勝碑を立て、トロネ人の婦女子を奴隷に売り、トロネ市民とペロポネソス兵、その他カルキディケ人など、合わせて 700 人をアテナイへ送還した。そしてペロポネソス兵の捕虜は後に締結された休戦条約において、また残りの捕虜はオリュントス人の配慮によって、アテナイ人捕虜と一対一の条件で交換、解放された(Thuc.5.3.4)」。

トロネはシトニア半島の西岸にある良港を有する最も重要な都市で、カルキス人の植民市である¹⁰⁰⁾。従って彼らはイオニア人であった。アテナイは、婦女子は奴隷に売ったが、トロネ市民は殺さず、アテナイ人捕虜と一対一の条件で交換した。確かに、ここでは植民は行われなかった。しかしトロネに対するこの行為がヘスティアイア植民、アイギナ植民、メロス植民と同列に扱われていることは、後に見る史料から明らかである。従って、これを「植民者なき植民」の一つと見なして差し支えないだろう。

(5) スキオネ植民

421 年 3 月頃アテナイ陣営とスパルタ陣営の間で五十年間の平和条約

が締結された。これによって両陣営の間の戦闘行為が禁止され、双方の領土交換および捕虜交換が規定された。この中でスキオネに関してはアテナイが所有し、その処置はアテナイの裁決に委ねられるが、アテナイはそこに籠城中のペロポネソス兵、その同盟将兵、およびブラシダスが送り込んだ者たちの退去を認めなければならないというものであった。しかしその平和条約にはあまり効力がなく、双方の領土内で戦闘が行われることはなかったが、領土外ではしばしば紛争が起こっていた。スキオネに関しても、実際にはペロポネソスの守備隊は撤退しなかったようである。421年夏アテナイは実力行使してスキオネを奪回した。「それらのことと同じ頃、その夏に、アテナイ人はスキオネ人を包囲によって征服し、成人男子に死刑の判決を下し、婦女子を奴隷として売った。そしてその土地をプラタイア人の所有に委ねた(Thuc.5.32.1; cf. Diod. 12.76.3)」。

スキオネはパレネ半島の南西岸にある都市で、ペレネの植民市と自称していた。ペレネはホメロスにおいてアカイア人の十二都市の一つとされている¹⁰¹⁾。土地をプラタイア人に与えたのは、一部のプラタイア人がアテナイ市民権を賦与されていたからであった(Thuc.3.55.3)。

(6)メロス植民

メロスはラケダイモン人の植民市であったので、住民はドーリス人であった。彼らは、他の島々とは違って、アテナイの支配下に入ることを拒み、431年の開戦当初から中立を保っていた。しかし実際にはスパルタに軍資金を提供していたことが知られている。アテナイからは一方的に貢納金の査定を受けたが、その納付を拒否した。426年夏にアテナイは三段櫂船 30 と重装歩兵 2000 をメロスに派遣し、同盟への加盟を要求したが、拒否された。416年夏それを上回る軍勢を率いて再び遠征した。

アテナイ軍の指揮官クレオメデスとテイシアスは、メロスに到着して陣地を設営すると、攻撃を開始する前にメロス人との交渉を行った。これが所謂メロス対話である。しかし彼らの間にこのような対話が実際に交されたかど

うかは疑わしい。交渉が決裂すると、さっそくアテナイ軍は攻撃準備を開始した。まず彼らはポリスの周辺に攻城壁を構築し、それが完成すると、守備隊に都市の封鎖を命じ、過半の軍勢を撤退させ、残った者たちは包囲を続けた。夏の間は散発的な戦闘が行われたが、冬に総攻撃が開始された。「メロス人は同じ頃再び、アテナイ軍の攻城壁の守備が手薄になっていた別の部分を奪った。このことが起こったので、デメアスの子フィロクラテスが指揮する別の遠征軍がアテナイから到着した。すでに包囲戦は力づくとなり、また裏切りもあったので、自分たちについてはアテナイ人が望むように処置するとの条件で、自分たちからアテナイ人に降伏した。アテナイ人はメロス人の内で捉えた限りの成人男子を死刑にし、婦女子を奴隷に売った。その領土は彼らが植民し、後に500人のアポイコイを送った(Thuc.5.116.2-4; cf. Diod.12.80.5; Andoc.4.22-23)」。この時までには、アテナイは再び植民者を送り出すことが出来るようになった。しかしその数は僅か500人に過ぎなかった。

第4節 アイゴスポタモイの海戦

多少の斟酌や未遂があったとは言え、同じギリシア人の市民を処刑し、婦女子を奴隷に売るという一連の冷酷な行為は、どうしても正当化することが出来なかった。そのことは405年にアイゴスポタモイの海戦でアテナイが大敗北を喫した時にアテナイ人自身が抱いた恐怖が雄弁に語っている。「夜パラロス号が到着すると、アテナイ人の間に訃報が伝わった。嘆きの声は、ペイライエウスから大防壁を通過してアテナイ市街へ、人から人へ語り継がれた。このためその夜は誰一つとして眠る者はなく、彼らは戦死者を悼むのみならず、むしろいっそうわが身を嘆いた。彼らは、ラケダイモン人のアポイコイであるメロス人、ヒスティアイア人、トロネ人、アイギナ人、その他多くのギリシア人たちを包囲攻撃によって征服したように、自分たちも征服されるのだと悟ったからである(Xen.Hell.2.2.3;cf. Isocr.4.100;12.63; Diod.13.30.6)」。

第7章 テイモテオスの時代

—失地の回復—

第1節 ペロポネソス戦争の終結

アテナイの敗戦は決定的となった。スパルタのこの勝利の背景には、ペルシアの陰の力があつた。スパルタは既に 411 年からペルシアと同盟関係にあり、戦争を終結させるための資金援助を受けていた。その代償は小アジアのギリシア人ポリスに対するペルシアの支配権の承認であつた。この密約は勿論、アテナイの支配からギリシアを解放するというスパルタの掲げたスローガンと矛盾するものであつた。この矛盾が 4 世紀の最初の三十年間のギリシア史を動かす原動力の一つとなつた。

(1) サラミスを除く全植民市の喪失

正式な平和条約の締結より前にアテナイ植民市の崩壊は始まっていた。リュサンドロスは、出来るだけ早くアテナイを降伏させるために、ヘレスポントスを封鎖して黒海からアテナイに向かう穀物輸送を遮断すると同時に、海外にいるアテナイ人を強制的に帰国させた (*Xen.Hell.2.2.2*)。

404 年 4 月、6 ヶ月間の包囲の後、飢餓に苦しめられたアテナイはスパルタと平和条約を締結した。その条件は以下の 4 点。①サラミスを除く全ての海外領土の放棄、②都市の防壁と長城の破壊、③ 12 隻を残した他の艦船の放棄、④父祖の国制の採用。この条件は寛大な措置であつた。同盟国として勝利したテーベとコリントスは、アテナイの全ての成人市民を処刑し、婦女子を奴隷に売るべしとの過酷な措置を主張したが (*Xen.Hell.2.2.20*; *Plut.Lys.14.4*; *Diod.14.3.2*; *Aristot.Ath.Pol.34*)、政治的配慮からスパルタはそれを拒否した¹⁰²⁾。

条約は全ての植民者の引き揚げを要求したのではない。レムノス・イムブロス・スキュロスは先住民に返還されず、植民者はそのまま居残り、母市から政治的に分離されて自治独立とされた。そのことは、404年の休戦条約と391年のそれとを比較して「レムノス、イムブロス、スキュロスはその時には所有する者が所有すべきことが、しかし今回は我々のものたるべきことが」決議されたというアンドキデスの言葉から明らかである(Andoc.3.12)。実際にはその他にも存続した植民市はあったかも知れない。

戦後のアテナイには多くの引揚者がいたに違いない。彼らにアッティカの土地が用意されたというケースは希であろう。大抵の場合は、エウテロスの様に「国外の財産を失い、アッティカには父親が何も遺してくれなかった(Xen.Mem.2.8.1)」という状況であったと推測される。戦争によって人口が減少したとはいえ、アテナイには相当な人口圧がかかったと思われる。それ故に4世紀におけるアテナイ植民活動の主要な目的は、失地を回復して引揚者に再び土地を与えることであったに違いない。

スパルタ占領下のアテナイは間もなく内乱状態に陥った。403年には民主政が復活するが、国力を回復するには約10年の歳月が必要であった。一方スパルタは、小アジアのギリシア人ポリスを除く、ビュザンティオンからロドスまでの諸ポリスを含む帝国を築き上げた。スパルタの覇権は371年まで継続するが、それに対する抵抗運動の中でアテナイは失地を徐々に回復していった。

小稿の残された頁はその道筋を辿ることに費やされるが、結論を先取りすれば、種族イデオロギーはもはや機能しなくなった。従って、植民に対するアテナイの心的態度もこの時に大きく変化したと見るべきであろう。

第2節 コリントス戦争

ギリシア人の解放と小アジアのギリシア人の切り捨てという矛盾は、戦後間もなく露見した。アテナイの降伏の直前、この密約を取り結んだペルシ

ア王大イレオスが病死し、王位はその子アルタクセルクセスが継承した。野心的な弟キュロスは、兄の殺害を計画したが発覚し幽閉された。それまで彼がサトラップとして統治していたイオニア地方は、ティッサフェルネスに委譲された。母の取りなしによって釈放されたキュロスは、401年イオニア地方のギリシア人を動員して、兄に対する反乱を起こした。スパルタは、ペロポネソス戦争末期にキュロスから多大な資金提供を受けていたので、その反乱に荷担した。ギリシアからは10000人の傭兵が徴募された。結局、反乱は失敗に終わった。キュロスはクナクサで殺害され、イオニア人はティッサフェルネスの支配下に置かれた。守護者を失ったイオニア人は、400年スパルタに使節を派遣して「全ギリシア人の守り手」たる彼らに保護を求めた(Xen.Hell.3.1.3)。スパルタは、ギリシア人解放のスローガンを掲げ、事実上ペルシアと交戦状態にあったので、それを承諾した。この行為は密約の破棄を意味した。

ここで注意すべき点は、イオニア人がスパルタに支援を求めたと言うことである。勿論、当時のアテナイには望べくもなかったことではあるが、ここにおいて種族イデオロギーは破綻したと言える。

当初スパルタは、ハルモスタイと駐留軍を設置してペルシアに対抗していたが、雇い主を失って帰国途中にあった10000人の傭兵の内、約半数がこの戦争に参加したことによって、スパルタの軍事力は飛躍的に強化された。ティブロン、後にデルキュリダスは、すぐにヘレスポントスまで解放戦線を拡大した。しかしスパルタは、それほどの軍隊を維持する確固とした財源がなかったので、出来るだけ有利に停戦へ持ち込むことを目論んだ。ところが397年末ペルシア王が大規模な艦隊を建造中との知らせが入った時、スパルタは調停路線を捨て、徹底抗戦の構えに入った。396年初頭スパルタは8000の追加部隊と共にアゲシラオスを派遣した。彼は小アジアの諸ポリスをまとめ上げ、ペルシア人の所領を荒らした。395年夏にはペルシア支配の拠点サルデイス、次いでもう一つの拠点ダスキュリオンを攻撃した。また、捕らえたペルシア人を裸にしてパレードさせるなどのデモンストレーションも行った。この時までは、小アジアの解放は実現されたかに思われた。

このような状況を苦々しく思ったペルシアは、アゲシラオスの軍隊をギリシア本土に撤退させるため、スパルタに二正面戦争を強いるよう画策した。即ち、ロドス人ティモクラテスをギリシアに派遣し、スパルタに敵対的なコリントス、テーベ、アテナイ、アルゴスに対して密かに軍資金を提供し、本土における反スパルタ同盟の結成を促したのである。そして 395 年コリントス戦争が勃発した。394 年春スパルタ当局は、本土での戦闘に当たらせるため、アゲシラオスを召還した。解放戦争の勝利を確信していたイオニア人も、彼に従って本土に渡って行った。ペルシアの思惑はまんまと成功した。

(1) レムノス・イムブロス・スキュロスの復帰

ペルシアはまた、スパルタに対抗しうる勢力としてアテナイの復興にもテコ入れした。ペルシアは、アイゴスポタモイの海戦以来キュプロスに亡命していたアテナイ人コノンにペルシア艦隊の指揮を執らせた。394 年夏彼はファルナボズスと合流して、クニドス沖の海戦でスパルタ海軍を粉砕した。その後、両者はヘレスポントスへ北上し、次々とスパルタの拠点を陥としていった。数ヶ月の後には、セストスとアビュドスを除いて、ハルモスタイも駐留軍も駆逐され、小アジア水域からスパルタの海軍は一掃されていた。ペルシアの艦隊ではあったが、アテナイ人が指揮を執ってスパルタに勝利したことは、アテナイ人に勇気を与えた。同じ頃コノンは、ペイライエウスの防壁再建に着手し、392 年までにはレムノス・イムブロス・スキュロスの三島を再びアテナイの植民市としていた¹⁰³⁾。アテナイの復興は火を見るより明らかであった。

392 年ペルシアとアテナイとの接近を恐れたスパルタは、アンタルキダスをサルディスに派遣し「ラケダイモン人はアジアのギリシア諸ポリスが自分のものであると王に主張しないし、全ての島々と他の諸ポリスが自治独立であることに満足する (Xen.Hell.4.8.14)」と述べ、ペルシアとの良好な関係を取り戻そうとした。それを聞いたアテナイは「諸ポリスと島々が自治独立となることに合意すれば、レムノス、イムブロス、スキュロスも奪い去られるのではな

いかと恐れた(Xen.Hell.4.8.15)」と伝えられている。結局この交渉は、現状維持をよしとしたアルタクセルクセスによって一蹴された¹⁰⁴⁾。

391年から390年にかけてスパルタは、ロドス、サモス、レスボスなどの島々を取り戻した。389年ヘレスポントスの封鎖を危惧したアテナイは、トラシュプロスをケルソネソスに派遣した。ことここに及び、戦線は本土から小アジアへ引き戻されることとなった。一方ペルシアは、388年末頃にはエジプトおよびキュプロスの離反に悩まされており、小アジアの問題にはこれ以上は拘わりたくないと思っていた。停戦の機は熟した。スパルタは再びアンタルキダスをアルタクセルクセスの許に派遣し、392年の提案とほぼ同じ内容で休戦を締結することに成功した。以後、スパルタはペルシアの同盟としてヘレスポントスのアテナイ軍と交戦した。387年末スパルタとペルシアの結合によって劣勢に立たされたアテナイも平和条約に応じる準備が出来た。

(2)レムノス・イムプロス・スキュロスの承認

コリントス戦争は386年の「王の平和」によって終結した。この条文は当事者によって協議されたものではなく、王の勅令としてサルディスに集会したスパルタ人、アテナイ人、その他のギリシア人使節に対してティリバゾスが読み下したものである。「ペルシア王アルタクセルクセスは以下のことを正義と見なす。アジアにおける諸ポリスおよび島々の内、クラゾメナイとキュプロスは余のものたるべきこと。他のギリシア人諸ポリスは大小を問わず自治独立のままであるべきこと。但しレムノス・イムプロス・スキュロスは例外である。これらは昔と同様にアテナイ人のものたるべきこと(Xen.Hell.5.1.31)」。

この勅令によって、小アジアは王のもの、島々は原則的に自治独立とされ、411年の密約がついに果たされた。但し二つの例外がある。島々の内、①クラゾメナイとキュプロスは王のものたるべきこと、②レムノス・イムプロス・スキュロスはアテナイのものたるべきこと。つまりペルシア王によって、これら三島はアテナイ固有の領土として承認されたのである。このことは392

年の条件にはなかった。そこには、アテナイに対するペルシアの特別な配慮が窺われる。一つには、これら三島がアテナイにとってなくてはならないほど重要な存在であったこと¹⁰⁵⁾。もう一つは、三島を返還することによってアテナイとスパルタの勢力均衡を計ったものと思われる。またしてもペルシアの外交の勝利と言うべきであろう。

では三島の返還を正当化したのは何であろうか。それは「昔と同様に」という表現が示しているように、密接な関係の既成事実そのものであった。この関係は、406年のアルギヌーサイの海戦の後にスパルタが提案した平和条約に既に確認される。その時アテナイは「アッティカに加えて、レムノス、イムブロス、スキュロス¹⁰⁶⁾を所有すべきこと、そして慣習に従って民主政体を保持すべきこと(Aesch.2.76)」が認められていた。このような不可分な関係は、恐らく413年のシケリア遠征失敗の後の引き締め策から生じたのであろう。

もう一つ、アテナイとこれら三島の関係を正当化する言説として注目すべきは、植民者の呼称の変化である。5世紀には貢納表や文献史料において「レムノス人」「イムブロス人」(スキュロスは史料に現れない)として現れ、貢納金を支払い、軍役にも従っていた。413年のシケリア遠征軍に関してトキュディデスは「アテナイ人はイオニア人であり、(省略)彼らとまだ同じ法律と言葉を持っているレムノス人とイムブロス人は、アテナイのアポイコイであり、共に遠征に参加した」と記述している(Thuc.7.57.2)。一方4世紀になると、植民市の評議会・民会決議は自分たちのことを「ミュリナに住むアテナイ」「ヘファイスティアに住むアテナイ人」「イムブロスに住むアテナイ人」「スキュロスに住むアテナイ人」というように「アテナイ人」と呼ぶようになり¹⁰⁶⁾、アッティカのアテナイ人も彼らを「我々の市民」(Dem.4.34; 23.12)、これらの島々を「我々の領土(クテーマタ)」(Aisch.2.72; Dem.4.27)と呼ぶようになる。つまり、5世紀には政治的分離を認めた上で種族的絆を強調していたのに対して、4世紀には種族的な絆には触れず政治的一体性を主張するようになったのである。

第3節 第二次アテナイ海上同盟

386年の王の平和によって、小アジアにあるギリシア諸ポリスはペルシアの支配下に入ることとなった。そのことはペルシアに対する貢納と軍役の義務を意味する。平和締結後間もなく、ペルシア王は懸案のキュプロスおよびエジプト遠征を開始した。小アジアのギリシア人は専らこの遠征に駆り出されることとなった。この遠征はエジプトが征服される343/2年まで続いた。ペルシア王の関心が小アジアから東地中海へと移っている間、小アジアでは360年代から350年代にかけてサトラップの反乱がしばしば起った。相次ぐ反乱は、アルタクセルクセスが老齢であり、近い将来の王位継承問題と密接な関係があった。小アジアにおける王の影響力は弱まっていた。ギリシアの問題についても、ペルシアは直接的には手を出さず、当面はスパルタを王の平和の監督役として任命し、統治に当たらせていた。

一方、小アジアの外にあるギリシア諸ポリスは、王の平和によって自治独立とされることになった。しかしこの自治独立とは互いのポリスがバラバラになっている状態を狙ったもので、それはスパルタやペルシアに対する無防備を意味した。386年から371年まではスパルタ支配の時期であった。ペルシアとの関係を繋ぎ止めたスパルタは、王を後ろ盾としてアウトノミア条項を恣意的に運用した。自らを守る術のない諸ポリスは、一度ペルシア王の関心が東地中海に移ると、それに乗じてアテナイを核とする対スパルタ防御同盟を次第に形成していった。

アテナイは最初384年にキオスと同盟を締結した。次に378年にビュザンティオンと、377年にはメテュムナ、ロドス、ミュティレネと同盟を締結した。これらの個別の同盟は、377年に第二次アテナイ海上同盟としてまとめ上げられた。同年の同盟結成規約を記した碑文には(*Tod.123*)、規約の下から左側面にかけて、それぞれ異なる手によって約60のポリスと個人のメンバーの名が刻まれている。このことは、新たなメンバーが加わる度にその名が刻まれていったことを物語っている。注目すべきは、同盟ポリスに対して5世紀のア

テナイ帝国支配が復活するのではないかという危惧を与えないように、①諸ポリスの自治独立と彼らが欲する国制を持つことを保証し、②アテナイによる貢納金徴収の禁止、③駐留軍およびアルコンの派遣の禁止、④同盟ポリスの領土におけるエンクテーマタの放棄が明記されていることである。

(1) エンクテーマタの放棄

④は植民活動を直接的に抑制した。「アテナイ人およびその同盟に対して同盟を結ぶポリスから、アテナイ人のデーモスは、私的所有であれアテナイ人の公的所有であれ、同盟を結んだポリスの土地に今あるエンクテーマタを放棄すべきこと(25-30)」。「ナウシニコスがアルコンの時から、私的にであれ公的にであれ、同盟諸ポリスの土地において、家屋であれ土地であれ、エンクテーマタを所有することは、いかなるアテナイ人にも許されざるべきこと(35-41)」。

王の平和によってアテナイ固有の領土と確定されたレムノス・イムブロス・スキュロスがこの禁止条項の対象にならなかったことは間違いない。エンクテーマタとは、外国のポリスの領土内における不動産を意味する。従って、ここで禁止されたのは、5世紀におけるケルソネソス・ナクソス・エウボイアのような同居型の植民を指していると思われる。

(2) サモス植民

スパルタの覇権は371年のレウクトラの戦いをもって終焉を迎え、替わってテーベが台頭した。367年の王の平和の更新の際に王はテーベをその平和の監督官に任命した。アルタクセルクセスがテーベに対して好意的な態度を示したのに対して、366年アテナイは自らの存在を誇示する目的で小アジアに遠征軍を派遣した¹⁰⁷⁾。指揮官はコノンの子ティモテウスであった。折しもアリオバルザネスの反乱の最中であり、ペルシアの手薄を突いた行動であった。

ティモテオスの軍隊はサモスを包囲攻撃し、10ヶ月後に占領した(Isocr.15.111; Demosth.15.9; Nepos.Tim.1)。365年夏に彼はケルソネソスのセストスとクリトテも征服した。同年アテナイは直ちにサモスに植民者を派遣した。これが4世紀になってアテナイがはじめて武力で獲得した植民市である。当時サモスは王の平和に反してペルシアの領土となっていた。サモスは第二次海上同盟に加盟していなかったので、植民は同盟規約の違反には当たらなかった¹⁰⁸⁾。

サモスは歴史時代にはイオニア人の島となっており、イオニア十二市の一つに数えられていた。ペルシア戦争の後デロス同盟に加盟した。440年に寡頭派の主導でアテナイから離反したが、ペリクレスの遠征によって直ちに鎮圧され、政権は民主派に返還された。412年に寡頭派は再び離反を試みるが、民主派によって未然に防がれた。405年のアイゴスポタモイの敗戦の後にも、アテナイに忠誠を誓った。それに報いてアテナイは、サモスに完全な自治独立とアテナイ市民権を賦与した(M&L.94; Tod.97)。サモスは最初から最後まで貢納金を支払わず軍船を提供した¹⁰⁹⁾。

これ程に親しいサモスに対して、アテナイは三次に渡る植民団を送り込んだ。それぞれの経緯については殆ど何も判らないが、年代は判明する。第一次植民は365年(Diod.18.18.9)、第二次植民は361年(Schol.Aesch.1.53)、第三次植民は352年(Dionys.Hal.Deinarch.13.1)である。植民者の数についても2000人という記録はあるが(Heraclid.10.7; Strab.14.1.18)、それがどれか一回の植民のものなのか、あるいは全部の合計なのか判明しない。ヘラクレイデスはアテナイ人は全てのサモス人を追放したと伝える(Heraclid.10.7; Zenob.2.28; Aristot.Rhet.2.21.13)。しかし僅か2000人で全てのサモス人を追放できたとは考えられない。むしろこれが第三次植民の数で、アテナイは第一次と第二次植民で相当数の植民者を送り込んでおり、最後の一押しで全てのサモス人を追放してしまったと取る方が理解しやすいだろう。

サモスにおけるアテナイ植民者の評議会議員および役人の名簿と思われる碑文がサモスで発見されている¹¹⁰⁾。それはほぼ真四角な石で、その二面に11のコラムがあり、十部族毎に記された人名リストとサモスの名祖アルコンをは

じめとする各種役人のリストが刻まれている。これは 352 年の役人のリストと思われるが、興味深いのはその人数の多さである。各部族から 25 人ずつが記されていることから、アテナイ植民者のサモスは 250 人評議会を有していたことになる。これはアテナイの 500 人評議会の丁度半分の規模に当たる。従って 6000 人から 12000 人程の成人男子が植民していたことになる¹¹¹⁾。

324 年アレクサンドロスはオリュムピアの祭典において、全ての追放者の帰国を宣言した。20000 人以上の群衆が喝采して喜んだという。しかしサモスを籤で分配していたアテナイ人は、決してその島を引き渡そうとせず、時を見計らって大王との戦争をも辞さない構えを示した (Diod.18.8.7)。このことは既に述べたような大規模な植民者を送り込んでいた事情を考えれば納得がいく。翌年に大王が急死したためにサモスの返還は免れたが、結局は 322 年ラミア戦争の末ペルディッカスが 43 年ぶりに亡命していたサモス人を祖国へ連れ戻した (Diod.18.18.9; cf. Diod.Laert.10.1)。報告書によれば、例のリストの人名はノミで丁寧に削り取ってあったらしい¹¹²⁾。サモス人の憎しみが窺われる。

同盟規約によって植民を限定されたアテナイは、一カ所に集中して移民団を送り出すより方法がなかったのだろう。それにしてもイオニア人の母市を自認したアテナイが同じイオニア人のポリスであり、しかも長らく特別に親しい関係にあったサモスを徹底的に占領したこの行為は、5 世紀の種族イデオロギーの明らかな放棄と見なせざるを得ない。デマデスは「アイギナをペイライエウスの目脂、サモスをアテナイの破片と呼んだ (Athen.3.99.d=3.55.24)」と云う。ここでも植民化の正当性は、徹底した占領に基づくアテナイの一部という既成事実であった。

第 4 節 マケドニア王国の興隆

424/3 年以来アムフィポリスを喪失していたアテナイは、371 年から再獲得を目論みはじめた。それは永久に成功しなかったが、アテナイ植民史を考察する上では見逃すことの出来ない事件である。なぜならば、既に見たように、

6世紀から既にアテナイはストリュモン河畔の金鉱山に利害を持ち、時の権力者は皆その地の獲得に勢力を費やしたからである。

4世紀におけるアムフィポリスの再獲得運動は、マケドニア王国の興隆の中で考察されるべきであろう。初期のマケドニア史には一つの風土病があったと言われている。即ち、マケドニアの地は森林および鉱山資源に恵まれていたが、各地方が地理的に孤立していたために、王国の統合が遅れていた。また王位継承の原則がなかったために、代替わりの度に内紛が生じた。それにつけ込んでイリュリア人が略奪にやってきた。王は外敵とライバルから自己の王権を守るために、資源と引き替えにギリシアの有力勢力の援助を必要としていた。このような状態は、フィリッポス2世が即位した後、王国を統合して強力な軍隊を創設するまで続いた¹¹³⁾。

アムフィポリスを巡る戦争には二つの段階があった。最初はマケドニアがまだ弱小であった頃、オリュントスとの攻防の段階、次はフィリッポスの即位によって強大となったマケドニアとの攻防の段階である。ポティダイア植民はその中間に位置づけられる。

(1)アムフィポリスを巡るオリュントスとの戦争

オリュントスはカルキディケ同盟の盟主であり、4世紀初頭にはエーゲ海北部における一大勢力となっていた。その起源はペロポネソス戦争に遡る。5世紀の後半、カルキディケの諸ポリスはデロス同盟のメンバーであった。ペロポネソス戦争前夜にポティダイアが離反した時、マケドニア王ベルディッカス2世は、アテナイの勢力浸透を恐れて、カルキディケの諸ポリスが総決起するよう喚びかけた。その際にカルキディケ人がオリュントスに集住したのが発展の出发点であった(Thuc.1.58.1-2)¹¹⁴⁾。オリュントスの興隆に警戒心を抱いたスパルタは、382年から包囲攻撃を開始し、379年に陥落させ、カルキディケ同盟を解体させた。371年にスパルタがギリシアの覇権を失った時、オリュントスは再びカルキディケ同盟を結成して、北部の一大勢力となった。

その後オリュントスは膨張政策を取り始めた。アムフィポリスを手中に納めようと画策し、マケドニアの王位争いにも介入した。丁度その頃、アテナイもアムフィポリスを再獲得しようとして計画していたので、両者の利害の衝突は避けられなかった。アテナイがアムフィポリスに大遠征隊を派遣すると(Aesch.2.27.32)、オリュントスも対抗して軍隊を派遣した。同時にオリュントスは、マケドニア王プロトレマイオスの王位を狙うパウサニ阿斯に軍事支援した。プロトレマイオスはアテナイに支援を求め、同盟を結んだ(Aesch.2.27-9)。間もなく、今度はテーベのペロピダスがマケドニアにおける自己の影響力を維持するためにプロトレマイオスに同盟を強要した。王位の安定を計るためにプロトレマイオスは、アムフィポリスに同盟を求めた。アテナイを脅威に感じていたアムフィポリスはプロトレマイオスとの同盟を締結した(Dem.23.149)。アテナイ人はこの行為を背信と受け止めた(Aesch.2.29)。一方、アムフィポリスはプロトレマイオスとの同盟を履行せず、オリュントスに自らの都市の支配を委ねた¹¹⁹⁾。

プロトレマイオスを暗殺して正統な王位を継承したベルディッカス3世は、自らの地位を確保するためにアテナイと同盟を締結し、その見返りとして、アムフィポリスを巡るカルキディケ同盟との戦争においてアテナイ支援を約束した(Dem.2.14;Schol.ad.loc.)。アテナイはカリステネスを派遣して成功を収めつつあった。恐れたアムフィポリスは今度はマケドニアに同盟を求めた。アムフィポリスへの影響力の獲得を目論んだ王は、アムフィポリスに駐留軍を設置した(Aesch.2.29;Diod.16.3.3)。この行動はマケドニアとアテナイとの戦争を引き起こした。カリステネスはマケドニアを攻撃した。

(2) ポティダイア植民

それと同時にアテナイはカルキディケにおいても交戦状態にあった。363年ティモテオスは、ピュドナ、メトネ(Dem.4.4;Tod.143)、ポティダイアを征服した(Diod.15.81.6;Isocr.15.113)。361年夏その中で最も重要なポティダイアへ植民者が派遣された。アテナイは「ポティダイアから派遣された国家の使節たち」

の植民者派遣要請に応じて、クレールーコイの派遣を決議した(*Tod.146*)。植民者の規模は判らない。ポティダイアは第二次海上同盟のメンバーであったので、この植民は同盟規約に反するものであった¹¹⁶⁾。ポティダイアは歴史的に見て、アムフィポリスへの足がかりとしての意味があったのであろう。356年のはじめ、ポティダイアはフィリッポスによって奪取された(*Diod.16.8.5*)。

(3)アムフィポリスを巡るフィリッポスとの戦争

カリステネスはベルディカスと休戦条約を結び、アムフィポリスを奪うことは出来なかった。ベルディカスは360年に侵入したイリュリア人に殺されるまで、アムフィポリスを保持していた(*Diod.16.3.3*)。この年フィリッポスが事実上マケドニアの王位に就いた。彼は王権の安泰、王国の統合、兵制改革を完了するまでは控えめな外交をした。アテナイ人を喜ばせるために、アムフィポリスの駐留軍を撤退させ、アテナイと同盟を締結した。アテナイ人はそれでもアムフィポリスを陥落させることは出来なかった¹¹⁷⁾。

王権の基盤が固まるや否や、357年に彼は突如アムフィポリスを占領した(*Diod.16.8.2*)。アテナイ人は驚いたが彼を止めようとはしなかった。アテナイ人は彼が占領するとすぐその都市を自分たちに委譲するだろうと信じていたからであった。アテナイ人は、始めオリュントス人から、次にアムフィポリス人から救援の依頼を受けたが、それを拒否した(*Dem.1.8-9; Dem.2.6; [Dem].7.27*)。一度アムフィポリスを占領したフィリッポスは、パンガイオン山から豊富な金銀を獲得し、潤沢な軍資金を得ることに成功した(*Diod.16.8.2, 6-7*)。彼は決してアテナイにその都市を明け渡そうとはしなかった¹¹⁸⁾。

356年ギリシア中央部では第三次神聖戦争が勃発した。フィリッポスはそれに介入しつつ、北部ではアムフィポリスを巡るアテナイとの戦争を戦っていた。フィリッポスはまずオリュントスと同盟を結び、アテナイが抑えていた諸都市を占領していった。350年代末フィリッポスの勢力伸張を恐れたオリュントスはアテナイに救援を求めた。オリュントスはまた王位を狙うフィリッ

ポスの兄弟を取り込もうと画策した。フィリッポスはこのことを裏切り行為と見なし、大軍をカルキディケ同盟に対して派遣した。アテナイも救援を派遣したが間に合わなかった。348年ついにオリュントスは陥落し、徹底的に破壊された(Dem.19.192;Diod.16.53.2,55.1)。346年フィロクラテスの和約によってフィリッポスと同盟を結び、アテナイはアムフィポリス獲得を断念させられた(Aesch.2.13,82;Dem.19.150)。ここにアムフィポリスを巡る戦争は終結した。パンガイオン山を手中に納めた者が覇権を握ると言っても、言い過ぎではないかも知れない。

第5節 オドリュサイ王国の興亡

ケルソネソス半島はトラキア東部の一部を構成する。マケドニア王国がそうであったように、トラキア王国も概して王権が弱く、王位継承の度に内紛が起こった。そのため王たちは、外部勢力との結託によって自己の地位の保全を計らなければならなかった¹¹⁹⁾。彼らはその見返りとして、協力者に豊富な金鉱山の恩恵に与らせていた。ケルソネソス植民はトラキア王国の内部事情との関わりで考察する必要がある。

オドリュサイ王国は、5世紀の中頃に起こった最も強力なトラキアの部族連合である。王国はシタルケス王の下424年までに南北はトラキア海からドナウ河まで、東西は黒海からストリュモン河まで領土を拡大し、ペロポネソス戦争初期には、アテナイと同盟関係にあった。424年の遠征中に王が死去すると、その甥のセウテスが王位を継承した。彼は版図を最大にし、貢納金を徴収した。しかし405年頃に王が死去すると、帝国はほぼ20年間の衰退期に入った。その間に三人の王が立ったが、その内の二人は暗殺された。王国は二人の対立王たちの間で内陸部と海岸部に分断された¹²⁰⁾。

アイゴスポタモイの海戦の後¹²¹⁾、リュサンドロスはセストスを征服し、全ケルソネソスをアテナイから奪った。402年頃から再び半島へのトラキア人の侵入が始まったので、398年デルキュリダスは大防壁を再建した。コリ

ントス戦争が始まり、小アジアにおけるスパルタの影響力は弱まったが、セストスはスパルタ人の避難場所となっていた。しかし 390 年までにアテナイはセストスを取り戻し、植民者が存在していた (Isocr.5.6)。388 年イフィクラテスはゲリラ戦を展開して、ケルソネソスをアテナイのため奪回しようとした。しかしアビュドスはスパルタの手に残った。王の平和によって小アジアの外にあるギリシア諸都市は自治独立たることが決定されたため、ケルソネソスもアテナイの支配から自由になった。第二次アテナイ海上同盟が結成された時、半島の諸都市の内でのこの同盟に加盟したのはエライウスだけであった。

(1)ケルソネソスを巡るコトュスとの戦争

384 年頃コトュスが即位した時、オドリュサイ王国は再び興隆した。王は自己の王権を確保すため、即位するとすぐに様々な有力勢力と関係を取り結んだ。中でも重要なのがアテナイとの関係であった。アテナイの側はトラキアの木材および鉱物資源に関心を持っていた (Thuc.4.108.1)。その後の 12 年間、王は王国の統合に腐心した。

王は王権が安定すると膨張政策に転じ、ケルソネソスの獲得を目論んだ。この政策転換はケルソネソスを巡るアテナイとの戦争を引き起こした。既に 375 年頃アビュドス人フィリスコスは、ギリシア人を裏切ってペルシア人アリオバルザネスのためにケルソネソスを征服していたが、コトュスは彼を暗殺して、365 年セストスを占領した。ケルソネソスがコトュスの手に落ちた時、エライウスとクリトテだけはアテナイ側に留まった。

サモス征服の後、365 年ティモテウスは反乱したアリオバルザネスを支援するためにケルソネソスへ向かった。その報酬としてアリオバルザネスはセストスとクリトテをアテナイ人に与えた。アテナイは彼にアテナイ市民権を賦与した。全半島をアテナイのために勝ち取る任務を受けていた彼は、364 年にエライウスとその他のポリスを征服した。その後、彼の後任として、エルゴフィロス、メノン、ケフィソドトス、ティモマコス、イフィクラテスらが次々

と派遣された¹²²⁾。

359年ティモテオスが将軍としてアムフィポリスおよびケルソネソスへ向かった時、彼は傭兵隊長カリデモスを雇った。しかしカリデモスは二度までティモテオスを裏切り、コトュスに味方した。その時までにはアテナイは恐らく、カルディアを除いて、セストス、クリトテ、エライウスを獲得していたようであるが、セストスはコトュスによって奪還された(Dem.23.149-160)。

(2)ケルセブレプテスによるケルソネソスの譲渡

360/59年コトュスが暗殺されると、彼の三人の息子たちの間で王位継承戦争が起こった。アテナイはこの好機にすぐさま介入し、王国の三分割を促した(Dem.23.163-180)。三人の王たちも自己の王位を確保すめために、それぞれが後ろ盾を必要としていた。その結果、アマドコスが西部、ペリサデスが中央部、ケルセブレプテスが東部をそれぞれ獲得することとなった¹²³⁾。ケルセブレプテスは自分の姉妹と結婚した傭兵隊長カリデモスを味方に付け(Demosth.23.129, 163)、357年アテナイと協定を結んだ(Diod.16.34.4)。ペリサデスは姻戚関係にあるアテナイ人傭兵隊長のアテノドロスの支持を得た。

357年アテナイはオドリュサイ王ケルセブレプテスとの協定によってカルディアを除くケルソネソスの諸都市を第二次海上同盟に加盟させた。カリデモスはコトュスとも親しい関係にあり、その子ケルセブレプテスに影響力を持っていたのである。しかし彼は、アテナイの勢力が存在する間しかその協定を守らなかった。アテナイのケルソネソス支配はまだ不安定であった¹²⁴⁾。

(3)ケルソネソス植民

ディオドロスによれば、「アテナイ人の将軍カレスは、ヘレスポントスへ向かい、セストスの町を占領し、その成人男子を殺害し、その他の者たちを奴隷に売った。そしてコトュスの子ケルソブレプテスがフィリッポスに対す

る敵意とアテナイ人に対する友情の故に、カルディアを除くケロネソスにある諸都市をアテナイに手渡した時、アテナイの民衆はそれらの諸都市にクレールーコイを派遣した(Diod.16.34.4)」。アテナイ人はそれに報いて、ケルセブレブテスに市民権と名誉を与えた。

このテキストでは協定締結と植民は同時期のこととされているが、実際には二つの出来事の間には時間的な隔たりがあった。その協定は 357/6 年に刻まれている(IG.II²126)が、「ケロネソスへの都市建設者たちが所有している三段櫂船(IG.II²795.133)」が言及されている海軍装備のリストは 353/2 年に刻まれたものである。植民者はこの年になってはじめて送られたものと思われる¹²⁵⁾。

346 年のフィロクラテスの和約によってアムフィポリスを巡る戦争は終わったが、今度はケルソネソスがフィリッポスの脅威に晒され始めた。アイスキネスは次のように訴える。「フィリッポスがマケドニアから出撃して、アムフィポリスをめぐって我々と戦うことはもはやない。しかし、我々のクテーマタであるレムノス、イムブロス、スキュロスをめぐる戦争は既に始まっている。またアテナイ人のものとして一般に認められているケロネソスから我々の市民が立ち去ろうとしている(Aesch.2.72)」。

この脅威に対抗するために、346 年ディオペイテスがクレールーコイと共にケルソネソスへ送り込まれた(Dem.8.6)。342 年からフィリッポスはトラキア攻撃を開始した。この第二次植民については、デモステネスが 341 年に書かいた『ケロネソス情勢について』および同年それに続いて書かれたほぼ同じ内容の『フィリッポスを攻撃する演説—その 3—』から明かとなる。まず、領土に関してデモステネスは、ケルソネソスをしばしば「我々のもの」と表現しているが、より明確には「王と全てのギリシア人があなたたち(アテナイ人)のものであると承認しているケロネソス」と叙述している。次に、ディオペイテスによる植民者の性格に関して彼は漠然と呼ぶときには「今ケロネソスにいる者たち」などと表記するが、植民者を「クレールーコイ」と表記し、明らかに同じ彼らをまた「傭兵たち」とも言い換えている。さらに、彼らを「兵隊たち」とも呼び、特に民会の決議の後になってやっと招集される市民軍と対比さ

せて「既成の軍隊」とも呼んでいる。

第6節 カイロネイアの戦い

338年カイロネイアにおいて反マケドニア戦争が戦われたが、アテナイ・テーベの連合軍はその戦争に敗れた。しかしアテナイに対するフィリッポスの処置は寛大であった。その理由はペルシア遠征を控えたフィリッポスにとってアテナイの艦隊が必要だったからである。アテナイ人は自由とサラミス、サモス、レムノス、イムブロス、スキュロスの海外領土、及びデロスの行政権を保全することが許された。但しケルソネソスは認められなかった¹²⁶⁾。第二次海上同盟は解体され、アテナイはフィリッポスのギリシア同盟のメンバーとなった¹²⁷⁾。

結論

小稿で考察した植民のパターンは、404年を境にして大きく変化する。404年以前においては、「同種族同居」「異種族追放」というパターンは概ね守られていたと言えるだろう。しかし、これはテキスト上の話であって、現実とは異なっていた。キモンは同じイオニア人であるパロス人やタソス人との金鉱山の権益を巡る戦いを対異民族戦争にすり替えた。またトゥリオイやアムフィポリスの植民者は都市建設者を取り替えることによって種族アイデンティティーを変換した。このように種族とは創られ、選り取られ、テキストに書き込まれるものであった。404年以前に二つのパターンが概ね守られたという事実は、アテナイが自らをイオニア人の母市として位置づけていたことを示している。

404年以降このパターンは全く守られなくなる。小アジアのイオニア人はドーリス人であるスパルタに援助を求め、アテナイは同じイオニア人であるサモス人を徹底的に追放した。このことはアテナイがもはやイオニア人の母市であることを放棄したことを意味する。種族的紐帯に替わって使われるよう

になったのは、市民権的紐帯であった。植民者がアテナイ人を名乗り、母市市民も彼らをアテナイ人と呼び、植民市の土地を我々の領土と呼ぶ。また善行をなした外人にその返礼として市民権を賦与した。

この変化は、植民に対するアテナイ人の心的態度の変化を反映していただろう。5世紀においてアテナイはイオニア人の母市であったので、イオニア人ポリスに対しては同族の絆を根拠にそれらを統合し、母市の植民市に対する保護の名目で干渉した。一方、非イオニア人ポリスに対しては異種族として彼らを排除した。アポイキアという言葉は本来「家の分かれ」を意味し、同族の意味合いを含んだ語であった。一方クレールキアは「籤による分配地」を意味し、他者からの獲得物の意味を持つ。これらの語はアテナイの拡大指向を正当化する機能を持っていたと言えるだろう。

一方、4世紀においてアテナイは、諸勢力の内の一つに過ぎなかった。しかも諸勢力の均衡の上でのみ維持される不安定な存在であった。その状況でアテナイはイオニア人の母市であることを止め、一個のポリスとなった。再獲得した領土は、再び切り離されないように母市との一体性をアピールしなければならなかった。その場合、種族的な絆では弱すぎる。植民者はアテナイ市民であり、その領土はアテナイ固有のものであり、そのことは法によって認められているという保証が必要であった。クテーマタとは固有の領土を、エンクテーマタとは外国のポリス内における領土を意味する。これらの語は現状維持を正当化する機能を持っていたと言えるだろう。

註

1) 濱嶋他『社会学小辞典』「種族」294頁。

2) 高津『ギリシア・ローマ神話辞典』「デウカリオン」158頁。

- 3) Boeckh, *Staatshaushaltung*, S.499-509; Kirchhoff, Tributpflichtigkeit, S.1-35; *ATL*, p.284-297; Graham, C&MC, p.166-210; etc.
- 4) Beloch, *Bevölkerung*, S.81-83; Busolt, *GG* I, S.467-468; Swoboda, Kleruchien, S.28-32; Ed. Meyer, *Forschung*, S.182-183; Ed. Meyer, *GdA* III.1, S.18-21; Schulthess, *Κληρούχοι*, S.814-832; Ehrenberg, Kolonisation, S.11-32; Gauthier, clérouques, p.64-88; Busolt, *GG* III.2, S.1032-1033; II, S.445-449; III¹, S.411; Gomme, *HCT* II. 50. 2, p.329; Brunt, *Settlements*, p.71-92; Schuller, *Herrschaft*, S.13-32; Figueira, *A&A*, p.10; p.19-20; p.39; p.47-48; etc.
- 5) 前野「[ΤΑΙ]Σ ΑΠΟΙΚΙΑΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ[Σ]」34-52頁。同「レームノス、イムブロス、スキュロス植民」49-70頁。同「ケルソネーソス、ナクソス、エウボイア植民」46-65頁。但し、これらの論文については、「アポイキアとクレルーキア — 碑文史料 IG.I²237 の分析 —」と改題してまとめる予定である。
- 6) Figueira, *A&A*, Patronal Colonization p.132-142, Athens and Regional Expansion p.142-160.
- 7) クロノロジーについては、Fritz Schachermeyr, Peisistratos, S.170-172. in : *RE*.
- 8) エーゲ海北岸の植民に関しては、馬場「トラキア」に依拠した。馬場「トラキア」13頁。
- 9) 馬場「トラキア」12頁。
- 10) *DKP*, s.v. Pangaion.
- 11) 馬場「トラキア」16頁。
- 12) Büchner, Chersonesos 1), S.2246. in : *RE*.
- 13) *DKP*, s.v. Apsinthioi.
- 14) *DKP*, s.v. Lampsakos.
- 15) 桜井「キモン」379頁。
- 16) *DKP*, s.v. Sigeion; Ehrenberg, Kolonisation, S.222-223.
- 17) Fritz Schachermeyr, Peisistratos, S.184-185. in : *RE*.
- 18) Schuller, *Herrschaft*, S.16. Amn.40.
- 19) Cargill, *Settlements*, p.2.
- 20) Fredrich, Lemnos, S.1929. in : *RE*.

- 21) Figueira, *A&A*, p.144.
- 22) 高津『ギリシア・ローマ神話辞典』「ニーソス」。
- 23) 「私は知る。そしてイアオニアの最も古き地の斬り殺されるのを眺める時、私の心の奥底に苦痛が横たわる」(Aristot.*Ath.Pol.*5.2)。
- 24) *Tod.*11; *M&L.*14; *IG.*1¹; Figueira, *A&A*, p.134; Cargill, *Settlements*, p.2-4, 205-206.
- 25) 一般には 446 年説が受け入れられている。例えば Meiggs, *Empire*, p.566. しかし怒りというモチーフからすれば 506 年の植民に関する記述であるように思われる。これを 446 年とする根拠はない。
- 26) Myres, *Herodotos*, p.12-13.
- 27) Easterling / Knox, *Greek Literature*, p.427-429.
- 28) クロノロジーについては、*ATL* III, p.175-179, 298-300.
- 29) 馬場「デロス同盟」 頁。
- 30) キモンの経歴については、桜井「キモン」 375-378 頁。
- 31) マルケリーノス作「トゥーキュディデース伝」小西晴雄訳『トゥーキュディデース』世界古典文学全集 11、筑摩書房、1971 年 317-327 頁。
- 32) Hornblower, *Commentary* II, p.334-335.
- 33) *PA*10210, *stemma*, p.91; Davies, *Families*, IV (C) p.233-234.
- 34) Büchner, Eion, S.2116-2117. in : *RE*; Hornblower, *Commentary* I, p.149-150.
- 35) *DKP*, s.v. Paros.
- 36) 馬場「トラキア」 14 頁。
- 37) 馬場「トラキア」 14 頁。
- 38) 馬場「トラキア」 30 頁。
- 39) 馬場「トラキア」 27-29 頁。
- 40) 馬場「トラキア」 27-28 頁。
- 41) 馬場「トラキア」 28-29 頁。
- 42) 馬場「トラキア」 31 頁。
- 43) 馬場「トラキア」 27 頁。

- 44) Fredrich, Skyros, S.690-691, in : *RE*.
- 45) Miller, j., Dolopes, S.1289-1290, in : *RE*.
- 46) Hornblower, *Commentary* I, p.150.
- 47) 飯尾訳、パウサニアス『ギリシア案内紀』1.15.3。
- 48) Hirschfeld, Amphipolis, S.1949-1952. in : *RE*.
- 49) Hornblower, *Commentary* I, p.155.
- 50) その移民は雑多であった。Diod.11.70.5;cf. Diod.11.70.1.
- 51) キモンとペリクレスの比較については桜井「キモン」372-375。
- 52) Rhodes, *Commentary* , p.339.
- 53) De Ste Croix, *P.War*, p.180-183, 196.
- 54) Trowbridge, M. L. / Oldfather, Wm. A., Naupaktos, S.1935. in : *RE*.
- 55) Oldfather, Lokris, S.1135-1288. in : *RE*.
- 56) *ATL* III, Chronological Table, p.298-300.
- 57) *ATL* III, p.290-293; Graham, *C&MC*, p.174-188; Brunt, *Settlement*, 77-80; Meiggs, *Empire*, 424-425. cf.Figueira, *A&A*, p.254f. この問題の整理は Cargill, *Settlements*, p.5-6.
- 58) Herbst, H., Naxos, S.2079-2095. in : *RE*.
- 59) コドロス伝説については、前野「帝国主義」。
- 60) *ATL* III. p.287.
- 61) Hirschfeld, Andros, S.2169-2171. in : *RE*.
- 62) *ATL* III. p.287.
- 63) Willrich, Euboia, S.851-858. in : *RE*.
- 64) エウボイアとナクソスに 1000 人 (Diod.11.88.3)、ナクソスに 500 人 (Plut.*Per*.11.5) が送られたから、エウボイアへは 500 人が送られた計算になる。
- 65) *ATL* III, Chronological Table p.299.
- 66) Erxleben, Kleruchien, S.85-86; Meiggs, *Empire*, p.123; Schuller, *Herrschaft*, S.23.
- 67) De Ste. Croix, *P.War*, p.197.
- 68) *ATL* III, Chronological Table p.300.

69) τὸς δὲ χσένος τὸς ἐν Χαλκίδι, ἡόσοι οἰκόντες μὲ τελοῶσιν Ἀθῆναζε, καὶ εἰ τοι δέδοται ἠυπὸ τῷ δέμο τῷ Ἀθηναίον ἀτέλεια, τὸς δὲ ἄλλος τελεῖν ἐς Χαλκίδα, καθάπερ ἡοι ἄλλοι Χαλκιδέες.

70) *ATL* III, p.289-290.

71) *DKP*, s.v., Bisaltai.

72) *M&L*.49, p.132.

73) *M&L*.49, p.133.

74) De Ste. Croix, *P. War*, p.196.

75) *DKP*, s.v.Sybaris.

76) Ehrenberg, Thurii, p.150-155.

77) Ehrenberg, Thurii, p.159.

78) Schuller, *Herrschaft*, S.29.

79) Meiggs, *Empire*, p.197-199.

80) Figueira, *A&A*, Table 4: Athenian Colonization, p.217-221.

81) Ruge, Sinope, S.252-255. : in *RE*.

82) Figueira, *A&A*, Table 4: Athenian Colonization, p.217-221.

83) Hirschfeld, Amisos, S.1839-1840. in : *RE*.

84) *ibid.*

85) Figueira, *A&A*, Table 4: Athenian Colonization, p.217-221.

86) Ruge, Astakos, S.1774-1775. in : *RE*.

87) 久保『戦史』(上)394頁、註236.2。

88) *PA*.8674.

89) 高島「アリストファネス」27-29頁。

90) *DKP*, s.v. Kleon, Thukydides.

91) 伊藤『古典期アテネ』54頁。 = Ehrenberg, *Greek State*, p.31.

92) Gauthier, clérrouques, p.64-65; Brunt, *Settlement*, p.71-92.; Figueira, *A&A*, p.10, 19-20, 39, 47-48; Hornblower, *Commentary* I, p.440-441.

- 93) *ATL*, III. p.321-325; De Ste. Croix, *P. War*, p.329.
- 94) *DKP*, s.v.Poteidaia; *M&L*.66.
- 95) アイオリス人はボイオティアやテッサリア方面からの移住者であった。
- 96) Keil, J., *Notion*, S.1075-1076. in :*RE*.
- 97) Beloch, *Bevölkerung*, S.81-83; Beloch, *GG I* S.467-468.
- 98) Swoboda, *Kleruchien*, p.28-32.
- 99) Gauthier, *clérouques*, p.64-65; Hornblower, *Commentary I*, p.440-441.
- 100) *DKP*, s.v.Torone.
- 101) *DKP*, Skione.
- 102) Schwenk, *Athens*, p.10.
- 103) Schwenk, *Athens*, p.15.
- 104) Ruzicka, *Eastern*, p.113.
- 105) レムノス、イムブロス、スキュロスのアテナイにとっての重要性は、329/8年の初穂の会計文書から窺うことができる (*JG.II*²1672, 275-7, 297)。そこには、アッティカの十部族の他に、サラミス、スキュロス、イムブロス、レムノスのミュリナとヘファイスティアから送られた初穂が記されているが、ミュリナとヘファイスティアからだけの初穂の量が総量に占める割合は、大麦の場合 41.6%、小麦の場合 55.1%に当る。
- 106) 史料は、前野「4世紀の市民権」の 50-51 頁を参照。
- 107) Ruzicka, *Eastern*, p.120.
- 108) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.287.
- 109) Geisau, *Samos*, S.2215, in : *RE*.
- 110) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.273-304.
- 111) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.288; Shipley, *Samos*, p.140-142, 157-158; Cargill, *Settlements*, p.17-21, 34-40.
- 112) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.273-234.
- 113) Heskell, *Macedonia*, p.167-170.

- 114) Heskell, Macedonia, p.172-173, 175.
- 115) Heskell, Macedonia, p.175-177.
- 116) Schwenk, Athens, p.26.
- 117) Heskell, Macedonia, p.178-179, 182-183.
- 118) Heskell, Macedonia, p.182.
- 119) Heskell, Macedonia, p.170.
- 120) Heskell, Macedonia, p.170-171; *DKP*, s.v., Odrysai.
- 121) 404年から377年までのケルソネソスについては、Cargill, *Settlements*, p.9-12; Ruzicka, *Eastern*, p.110-115.
- 122) 365年から301年までのケルソネソスについては、Cargill, *Settlements*, p.23-31.
- 123) Heskell, Macedonia, p.171.
- 124) Cargill, *Settlements*, p.25.
- 125) Cargill, *Settlements*, p.25-26.
- 126) あるいは存続したかも知れない。Cargill, *Settlements*, p.29-31.
- 127) Schwenk, Athenes, p.30-33.

年代	事項	先住民	処置	規模	備考
561/0	ペイシケ	(ドロー)	招待	1000?	
c.561/0 ~ 493	ラネ	(マコ)	招待	?	
c.550/49 ~ ?	ケリ	(トキ)	招待	?	
? ~ c.539	イノ	(アリス)	戦争	?	
c.530 ~ 510/9	グ	(ペゴ)	戦争	?	
c.505 ~ 493	レイ	(ペゴ)	戦争	?	
508/7	ク	(ドロー)	戦争	500?	
c.510 ~ 318	サ	(イリス)	戦争	4000 or 2000	
506 ~ 490	カル	(イリス)	戦争		
500	ペル	(イリス)	戦争		
478/7	デロス	(ドロー)	戦争	?	
476/5 ~ 404?	ス	(ペリス)	戦争	?	
475 ~ 404?	エ	(ペリス)	戦争	10000	雑多な入植者
465 ~ 465/4	エン	(エド)	戦争		
460	第一次	(ドロー)	戦争		
c.455 ~ 404	ナ	(ドロー)	戦争		
c.450 ~ 404	レ	(イリス)	追放		
c.450 ~ 404?	ナ	(イリス)	追放		
c.450 ~ 404?	ア	(イリス)	追放		
c.447/6 ~ 404	イ	(イリス)	追放		
c.447/6 ~ 405	ケ	(イリス)	追放		
c.447/6 ~ 437?	ブレ	(イリス)	追放		
447/6 ~	エ	(イリス)	追放		
446/5 ~ 404	ヘ	(イリス)	追放		
446/5 ~ 411	カ	(イリス)	追放		
446/5 ~ 411	エ	(イリス)	追放		
446/5	三十年	(イリス)	追放		
446/5 ~	ト	(イリス)	追放		
444/3 ~ 414	ト	(イリス)	追放		
c.440 ~ ?	ア	(イリス)	追放		
c.435 ~ ?	シ	(イリス)	追放		
c.435 ~ ?	ア	(イリス)	追放		
					雑多な入植者
					借主から解放

第Ⅲ部 アテナイ植民者の市民権とアイデンティティー

—残された問題—

第 8 章 前 5 世紀におけるアテナイ植民者の市民権

— その両義性をめぐって —

はじめに

アテナイが本格的に植民市建設に乗り出したのは前 6 世紀の末になってからのことであり、それはあたかも、終焉を迎えた大植民時代にとって代わる新たな植民時代の幕開けを告げるかのようにも見える。その後アテナイは、ヘレニズム時代が始まる前 4 世紀末までの約 200 年間、断続的に植民活動を行い、黒海からトラキアにかけてのエーゲ海北岸、エーゲ海の島々、イタリア半島南端からアドリア海までの広い範囲に渡り、述べ凡そ 40 個所に植民団を送り出した。

このようなアテナイ植民は当然、基本的には他のギリシア植民との共通性を持っていたが、同時に顕著な独自性をも合わせ持っていた。その独自性とは、ギリシアに一般的な植民市アポイキアが母市市民権を喪失するのとは異なり、アテナイの植民市は母市市民権を保持する点にあるとされてきた。このことによって母市との紐帯をより強固にしたアテナイに独自の植民市は、クレルーキアと呼ばれ、帝国支配の有効な手段、つまり軍事植民として歴史的な意義付けがなされてきた。

このような植民市が帝国支配に利用されたであろうことは疑う余地がないが、植民者の市民権とは、保持するか喪失するかというように二者択一的に割り切れるものであろうか。小論は、アテナイ植民者の市民権を、初めから二者択一的にプログラムされたものとしてではなく、本来母市から切り離される部分と母市と結び付けられる部分の両方を持つ両義的なものであり、両者のバランスは状況によって変わり得る可変的なものとして捉えようとする試みの一つである¹⁾。考察の手順として、まずアテナイ植民者の市民権に言及する史

料を収集してその割り切れない部分を抽出する。次にその部分が従来どのように解釈されてきたか、その残された問題点がどこにあるかを明らかにする。最後にその問題点の解決をナウパクトス碑文の分析を通して試みる。

第1節 アテナイ植民者の市民権に関する史料の検討

まずアテナイ植民者の市民権に言及する史料を収集し、内容別時代別に整理した上で、その割り切れない部分を抽出して見よう。史料群は以下の3つのグループに分かれる。

I. 植民者の呼称に関する史料

- 1) 前5世紀の貢納表では、Lemnos, Imbros の植民者が Λέμνιοι, (Ἐφαιστιάδες, Μυριναῖοι), Ἴμβριοι と記載されていた²⁾。
- 2) アテナイ出土のペロポネソス戦争中の戦死者名簿碑文にも Lemnos の植民者は Λημνίων ἐν Μυρίν[ης], Λήμνιοι と記載されていた³⁾。
- 3) Thucydides は、ペロポネソス戦争中の植民者とアテナイ人による共同の軍事行動を伝える際に植民者を Λήμνιοι, Ἴμβριοι, Αἰγινῆται, Ἐφαισπιαῖς と呼び、アテナイ人とは明確に区別していた⁴⁾。
- 4) Herodotus は、前490年の事件として、Lemnos の植民者を Λήμνιος と表記する一方、Chalkis の植民者を Ἀθημαίων と表記している⁵⁾。
- 5) 前4世紀になって初めて確認される、植民市における評議会及び民会決議碑文には、ὁ δῆ[μος ὁ] Ἀθ[ην]αίων ὁ ἐν Μυρ[ίν]ει οἰκῶν というふうに植民者をアテナイ人と表記する定型句があった。この表記は Hephaistia, Imbros, Skyros, Chersonesos にも見られる⁶⁾。
- 6) 前4世紀の法廷弁論にはフィリッポス2世の侵略の脅威に曝された Lemnos, Imbros, Chersonesos の植民者を指して ἡμῶν οἱ πολῖται と

呼ぶ表現が見られる”。

史料 I の考察から明らかとなることの一つは、前 5 世紀において先住民を追い出して新たなポリスを建設する Lemnos のタイプの植民者は「レムノス人」と呼ばれたが、先住民のポリスに割り込んで新しいポリスを建設しない Chalkis のタイプの植民者は「アテナイ人」と呼ばれたということである。このことは、自分たちのポリスを市民団の名をもって呼ぶギリシア人の慣習と符合する。従って、植民者が独自の呼称を持つことは、彼らが植民市の市民であったことの証と見做せそうである。

II. 植民者がアテナイの部族および区に属している事実を示す史料

- 1) Lemnos で出土した前 6 世紀末のものと思われる戦死者名簿碑文には、戦死者は Kleisthenes 改革による十部族の名ごとに記載されている⁹⁾。
- 2) I の 2) で紹介した同じ戦死者名簿碑文には、「レムノス人」という見出しとアテナイの十部族名とが併記されている。
- 3) Lemnos 出土の前 5 世紀後半のものと思われる抵当票石碑文には Εβαινέτωι Ἐρχιεῖといった具合に人名にアテナイの区名が付されている⁹⁾。
- 4) Melos 出土の前 5 世紀末のものと思われる墓碑には Ἐπόνφης Ἀθηναῖος Πανδιονίδος Κυθήριος と刻まれている¹⁰⁾。
- 5) 前 352/1 年のものであると思われる Imbros における評議会及び民会決議には、人名にアテナイの十部族名が付されている¹⁰⁾。

史料 II の考察から、植民者は、独自のポリスを形成する場合にも、母市の部族や区に属し続けたことが窺える。本来、アテナイの区に属することは即ち、「アテナイ人」であることを意味すると考えられる。従って、植民者が母市の

部族や区に属することは、彼らが母市の市民であったことの、少なくともね理論的な証拠であると見做せるであろう。

III. 植民者が帰国した後市民のように振る舞う事実を示す史料

- 1) Miltiades は、前 493 年にペルシアの侵略によって植民先の Chersonesos から帰国するが、その後アテナイの民会によって将軍に選出され、マラトンの戦いにおいてアテナイ軍を指揮したこと、また、一度は植民中に当地のギリシア人に対して僭主政を敷いた疑いによって、もう一度は失敗に終わったパロス遠征にアテナイ人を駆り立てた罪によって、アテナイで裁判されたことが伝えられている。また彼はラキアダイ区の人であった¹²⁾。
- 2) Platon の対話編に登場する Euthyphron という人物は、プロスパルタ区の人と呼ばれ、前 5 世紀後半に家族と共に Naxos に植民していたが、ペロポネソス戦争の敗戦と共に帰国し、前 399 年頃にアテナイにおいて殺人の訴訟を起こしたことになる¹³⁾。
- 3) Platon はコリュットス区のアテナイ人であるが、彼は彼の父が植民者として Aigina に渡っていた時の前 428 年に当地で生まれ、スパルタによって植民者が追い出された時アテナイに戻ったと言われている¹⁴⁾。
- 4) アリストファネスも Aigina に土地を持っていたらしく、そのためにアテナイ市民ではないとの訴えを受けたことがある¹⁵⁾。
- 5) 前 341 年に生まれた Epikuros は、アテナイ人であり、カルゲットス区の人であると言われ、彼の父が Samos への植民者であったために彼はそこで育ち、18 歳になった時にエフェーボスになるためにアテナイへ戻ったと伝えられている¹⁶⁾。

史料 III の考察から、植民者は帰国することが出来、その後市民として振る舞

うことが出来たことが明らかとなる。この事実を勘案すれば、史料Ⅱで確認したように、植民者が母市の部族や区に属することは、単なる理論上の問題ではなく、帰国の際に実質的な効力を発揮したと言えるであろう。

以上の分析結果をまとめると、まず史料Ⅰから植民者が独自の呼称を持つことは植民市の市民であることの証拠と見做された。しかし史料Ⅱからその同じ植民者が母市の部族や区に属し続けることによって理論的に母市市民であり続けることが示唆された。そして史料Ⅲによってこれが単なる理論ではなく実質的な意味を持っていたことが明らかとなった。このような現象は、我々の理解からすれば大きな矛盾と言わざるを得ない。しかし史料Ⅱの2)が示すように、そのことは古代のアテナイ人にとっては矛盾ではなかったようである。ここに二者択一では割り切れない部分が存在するのである。この現象を我々はどのように解釈すべきであろうか。

第2節 研究史の整理

古典期のアテナイ植民者は、イオニア植民とは異なり、母市市民権を保持することを最初に指摘したのは Boeckh であったが¹⁷⁾、彼は植民者の二重市民権を想定していた。つまり、一方でアテナイ植民市の殆どが独自のポリスを形成し、母市とは同盟関係にあったが、もう一方で植民者が、母市の部族や区に属すること、植民市においても帰国後母市においても母市市民のように振る舞うこと、母市の市民と呼ばれること、そして植民者の土地がアッティカのものと見做されることから、植民者は母市市民権と植民市市民権の両方を持つと考えたのである。彼はアテナイ植民者の市民権をそのようにものとして一様に捉えていたが、Ed.Meyer は¹⁸⁾、アテナイ植民市の市民権の差異に気付いた。つまり、独自の軍事高権と軍隊を備えた自治独立のポリスを形成するタイプとアテナイの部族部隊に編入されたままでポリスを形成しないタイプとに分類し、後者をアッティカの外にいるアテナイ市民からなる駐留軍、前者を独自の市民権を持った実質的な植民市と見做したのである。そしてこれらの植民市が、ア

テナイの部族結合に留まること、アテナイから送られた役人の指揮下にあること、戦死者はアテナイの戦死者名簿にアテナイ人と並んで記載されることから、母市からの独立性においてイオニア植民とアテナイ市民からなる駐留軍との中間に位置付けたのである。

それ以後、この中間に位置付けられたタイプの市民権を巡る一連の論争が起こったが、諸説は母市市民と見做す解釈から植民市市民と見做す解釈までの間を振り子のように揺れ動いた。焦点は、市民権獲得の原理を、*ius sanguinis* 或いは *ius soli* のいずれに求めるかにあった。具体的に俎上に置かれたのは、史料 II の 1) に掲げた、Lemnos で出土したアテナイの部族名が刻まれた戦死者名簿碑文であった。当時の通説は¹⁹⁾、これに基づいて Lemnos の植民者はアテナイ市民であったと見做すものであったが、Berve は²⁰⁾、部族とは観念的な血縁的紐帯を表すもので、植民者によってどこへでも運ばれていくのであり、政治的権利を意味するものではないと解釈し、植民者が Lemnos 人と呼ばれたこと、他のポリスと同様に貢納金を支払ったこと等から、植民者は Lemnos 市民であったと考えた。Ehrenberg は²¹⁾、血の原理は土地の原理によって排除されないと主張し、Lemnos の植民者は地方自治体を形成しながらもアテナイ市民であり続けたとの折衷的な解釈を提示した。この解釈を曖昧なものとして批判した ATL の著者たちは²²⁾、Lemnos は固有の市民権と固有の土地の原理を備えた新しいポリスを形成していたのであり、植民者を政治的にアテナイに留めておく血の原理は存在しなかったとする。また植民者が Lemnos 人と呼ばれた理由については、土地の原理とは関係なく、植民者はアテナイ人であったが、Lemnos に住んでいたので Lemnos 人と呼ばれたと、Samos 人の例を挙げながら、解釈した。

以上の諸説は、それぞれ解釈としては成り立つが、いずれも決定力に欠けると言わねばならない。このような解釈の齟齬を整理するために必要なものは、より多くの断片的個別的な史料ではなく、呼称、部族と区、帰国の三つの事象が古代人にとってはどのように矛盾なく絡み合っていたのか、その論理を示してくれる包括的な史料である。確かにアテナイ植民に関する限り、その

種の史料は今のところ存在しない。しかし我々は、幸いなことに、ナウパクトス植民に関するその種の史料を持っている。これ程まとまった形で母市植民市関係を規定した史料を他に持たない以上、この史料の検討は避けられない。

第3節 ナウパクトス碑文の検討

この史料は、前460年頃の、東ロクリスから西ロクリスのナウパクトスへの追加植民の条件を刻んだ碑文である。この碑文は、古代のカレイオンという町で出土した青銅製の長方形の板の両面に刻まれ、導入部とAからΘまでの番号が付された都合10のパラグラフから成る珍しい体裁を取っている²³⁾。まず細かな議論に入る前に、この碑文全体の概略と各条文の要約を文脈に従って再構成してみよう。ギリシア数字は本文に従って付したが、ローマ数字と[]付きの見出しは筆者なりの理解に従って付したものである。

I. [植民者の従うべき条件]・・・・・・・・・・・・・・・・・・①

1. ナウパクトス人になるべきこと(1-2)
2. クセノスとして母市の供儀に参加すること(2-5)
3. 税を母市に支払わざるべきこと(5-7)
4. 帰国の際に入国税が免除される条件(7-10)
5. 税を西ロクリスに支払うべきこと(10-11)

II. [植民市の宣誓]・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・②

A : 母市から離反しない旨の宣誓とその更新(12-14)

III. [帰国の手続き]

B : 入国税の支払い(15-16)

Γ : 後継者の選出(17-19)

Δ : 宣言(20-22)

IV. [母市における財産の相続]

E : ペルコタリアイとミュサケイスに関する規定(23-28)

F : 兄弟の財産を相続する権利 (29-31)

I : 裁判の手続き (31-35)

H : 父の財産を相続する権利 (35-37)

V. [この決議の扱い] ③

⊙ : 1. 違反した者に対する処罰 (38-46)

2. カレイオン植民者への適用 (46-47)

これらの条文は文脈に従って三つのパートに分類されるように読める。筆者の付したローマ数字で示せば、① = I、② = II、III、IV、③ = Vである。③は定型句であり重要ではない。重要なのは①と②で、それらは互いに相反する条件、つまり母市市民と植民市市民との関係について、①は「切り離す」条件を、②は「結び付ける」条件を、それぞれまとめて提示しているのである。

まず「切り離す」条件から見てみよう。植民者はもはやロクリス人ではなくナウパクトス人と呼ばれた事実がこのことを最も端的に表現していると思われる。具体的には、植民者は、母市で挙行される祭儀において、またオプースにおける裁判において、クセノス身分として参加が許され、母市にではなく植民市に税を支払った。つまり、植民者はポリスを運営する上での実務的な局面において母市から切り離されたのである。このように、植民者の呼称は、やはり先に見たように、ポリスの形成と運営に関わりがあると言えるであろう。

次に「結び付ける」条件を見てみよう。このことの端的な表現は、植民市が母市から離反しないという宣誓を立てたという事実であるが、具体的には、植民者が、例えクセノス身分であっても、母市における祭儀に参加出来き、母市の裁判を受け、母市における土地財産の相続権が認められ、そして割と容易に帰国出来た、ということである。つまり、植民者は母市の土地財産を相続出来るという大前提によって母市と結び付けられていたのである。

従来、植民市が一個のポリスを形成する場合、その市民権は植民者を母市から切り離すものとする傾向があったが、それはポリス運営の実務的な局

面においてのみのことであり、植民者は土地相続の局面においては尚母市に結び付けられていたのである。植民者の市民権の割り切れない部分はこの二面性に由来するのであろう。しかも碑文中①に関する部分よりも②に関する部分の方が長く、番号が符されて丁寧であることから見て、その重要性が窺われる。そこで、以下は「結び付ける」条件についてももう少し詳しく見ていこう。

植民者を母市に結び付けていた最大の要因は、母市・植民市双方における土地財産の相続権であったように思える。このことはF、H、Γに明確に言及されている。

F：「もしナウパクトスへ移住するものに兄弟がある場合には、ヒュポクナミディオンのロクリスの各々の法が定めるように、もしその兄弟が死んだ場合には、その植民者がその財産の権利を持つべきこと。そして正当な分け前を受け取るべきこと。」

H：「父と財産の内の自分の取り分とを父に残す者は、父が死んだ後には、ナウパクトスへの植民者がそれを得ることが許可されるべきこと。」

Γ：「もし家に家族がない或いはナウパクトスにおける植民者の中に相続人がいない場合には、ヒュポクナミディオンのロクリス人の最近親者が権利を持つべきこと。ロクリスのどこの出身であれ、彼が自ら赴き、成人であれ未成人であれ、3ヶ月以内に。もしそうしない場合には、ナウパクトスの法に従うべきこと。」

これらの史料から、以下のような状況が推測されないであろうか。つまり、母市において土地分配に与れなかった者は、一時的に植民市において土地を得るが、もし母市に残った彼の父あるいは兄弟が死亡して、その土地が空いた場合には、帰国することができた。そして今度は、植民市の空いた土地に自分の近親者を母市から送り出したと。即ち、母市と植民市との間には、土地利用を

巡るサイクルが形成されていたように見えるのである。このサイクルの維持が母市植民市双方にとっての重大な利害であったとすれば、例え植民市が新しいポリスを形成したとしても、植民者はなお母市に結び付けられていなければならなかったのではないか。

このサイクルをうまく運営するためには、帰国の容易さが不可欠である。事実、帰国したナウパクトス人は再びヒュポクナミディオンのロクリス人になれたのであったが、このように帰国を容易にした仕組みはどこにあったのか。帰国については随所に言及されているが、最も注目すべきはΔの条文である。

Δ：「ナウパクトスからヒュポクナミディオンのロクリス人に戻る者は、ナウパクトスのアゴラで ἐν τὰγοράι 宣言すべきこと、そしてヒュポクナミディオンのロクリス人に対して出身ポリスのアゴラで ἐν τὰγοράι 宣言すべきこと。」

つまり、植民者は自分の帰国をアゴラで宣言し、共同体の構成員がそれを認知することによって、再びロクリス人に戻る事が出来たと考えられるのである。このシステムは、アテナイのデーモスやフラトリアにおける成員認知を思い起こさせないであろうか。ここに見られるポリスという語は村程度の意味に解してよいが、4行目には δᾶμος と κοινῶν という語も見られ、前者が地縁的な、後者が民族的な、小共同体を意味することが知られている²⁴⁾。そうすると、このアゴラという語は広場とも解釈されるが²⁵⁾、デケレイエイス碑文に見られるアゴラという語と同様に²⁶⁾、フラトリア乃至はデーモスの成員総会と解することも可能であろう²⁷⁾。前4世紀におけるアテナイのデーモスの場合、その規模は過半数が80名以下、約3分の1が40名以下であった事が知られており²⁸⁾、東ロクリスの場合も同様であったと推測されるが、このように小規模な社会が植民の基盤となっていたと考えれば、植民者は、その小社会に面識のある限り²⁹⁾、帰国後母市における元の権利を容易に取り戻すことが可能と

なったのではないか。

おわりに

これまでの考察の結果をまとめてアテナイ植民を翻って見てみよう。前 5 世紀アテナイの植民者の市民権は、植民市が新しいポリスを形成する場合とそうでない場合とによって扱い分ける必要がある。後者の場合、植民者は依然「アテナイ人」と呼ばれ、アッティカを離れて住むアテナイ人と見做されるべき存在であった。一方前者の場合、植民者は「レムノス人」等と呼ばれたが、このことは植民者がポリスを運営するという実務的な要請から植民市の市民となったことを意味する。この局面において植民者は母市から切り離されたのである。同時に彼らは母市の部族と区に属し続けていたが、それは名目ではなく、将来の帰国の後に再び母市市民としての権利を行使出来ることの証であった。この意味において、植民者は母市に結び付けられていたのである。帰国の前提は、植民市の消滅もあったが、何よりも土地相続のサイクルを維持することであったであろう。そして彼らは条件が整えば帰国し、母市市民に戻れたが、その方法は植民者が所属する区の成員総会で宣言し、他のメンバーによって認知されることであった。この面識による認知方法を可能にしたのは区の小規模性であったと考えられる。このように前 5 世紀のアテナイ植民者の市民権とは、両義的なものとして捉えることが出来るのではないであろうか。

ところで、アテナイ植民者の市民権には前 4 世紀以降に現れるもう一つのタイプある。既に見たように、Lemnos のようにポリスを形成する場合でも、植民者が「アテナイ人」と呼ばれるようになるのである。この変化はどのようにして起こったのか、その市民権の実態はどのようなものであったのか、またこの現象は何を意味するのか。この変化は、今回考察する余裕のなかった植民者の市民権の可変性を示唆するものとして興味深く、今後の課題としたい。

註

- 1) Ph. B. Manville, *The Origins of Citizenship in Ancient Athens*, Princeton, New Jersey 1990. 本書は市民権は法的に固定したものでなく、変化し得るものとして捉える試みであり、示唆に富む。
- 2) Lemnos=CIA.I.228.i. Hephaistia=CIA.I.227.iii; CIA.I.233.i; CIA.I.233.ii; CIA.I.235.iv; CIA.I.236.v; CIA.I.237.v; CIA.I.238.v; CIA.I.239.i; CIA.I.242.iv. Myrina=CIA.I.233.ii; CIA.I.235.iv; CIA.I.236.v; CIA.I.237.v; CIA.I.238.v; CIA.I.239.ii. Imbros=CIA.I.233.ii; CIA.I.234.v; CIA.I.237.v; CIA.I.238.v; CIA.I.239.i. G.F.Hill, *Sources for Greek History between the Persian and Peloponnesian Wars*, Oxford²1907, Chapter II [The Quota Lists], p.43-81.
- 3) IG.I²947; IG.I²948.
- 4) Lemnos=Thuk.3.5.1; Thuk.4.28.4; Thuk.5.8.2; Thuk.7.57.2. Imbros=Thuk.3.5.1; Thuk.4.28.4; Thuk.5.8.2; Thuk.7.57.2. Aigina=Thuk.7.57.2. Hestiaia=Thuk.7.57.2.
- 5) Lemnos=Hdt.8.11. Chalkis=Hdt.6.100.
- 6) Myrina=IG.XII.8.3; IG.XII.8.4; IG.XII.8.5; IG.XII.8.6; IG.XII.8.9; IG.XII.8.10. Hephaistia=IG.XII.8.15; IG.XII.8.26. Imbros=IG.XII.46; Di.Syll.659. Skyros=IG.XII.8.668. Chersonesos=Di.Syll.I.255.
- 7) Lemnos/Imbros=Demosth.4.34. Imbros=Demosth.23.12. Chersonesos=Demosth.23.103; Aisch.2.73.
- 8) IG.I²948. note.
- 9) M.Segre, *Iscrizioni Greche di Lemno, Annuario della Scuola Archeologica di Atene e delle Missioni italiane in Oriente* 15-16, 1932-1933, p.306-309, no.12.
- 10) IG.XII.3.1187.
- 11) IG.XII.8.63.
- 12) Hdt.6.104; Hdt.6.136; Plut.Cim.4.2.
- 13) Plat.Euthyphr.A.1; Plat.Kraty.396.D.

- 14) Diog.Laert.3.1-3.
- 15) Aristoph.Ach.652-655; Theogenes.FGH 300F2.
- 16) Diog.Laert.10.1; Strab.14.1.18.
- 17) A. Boeckh, *Die Staatshaushaltung der Athener*, Berlin ¹1886 [¹1817], S.499-509.
- 18) Ed. Meyer, *Geschichte des Altertums*, Stuttgart ²1915, S.15-22. ders., *Forschung zur alten Geschichte*, Halle 1899, S.182-183.
- 19) U. Kahrstedt, *Staatsgebiet und Staatsangehörige in Athen, Studien zum öffentlichen Recht Athens*, Stuttgart 1934, S.34.
- 20) H. Berve, *Miltisdes, Studien zur Geschichte des Mannes und seiner Zeit*, Hermes Einzelschrift 2, 1937, S.51-53
- 21) V. Ehrenberg, Zur älteren athenischen Kolonisation, *Eunomia, Studia Graeca et Romana I*, Prag 1939, S.11-32.
- 22) B. D. Meritt/ H. T. Wade-Gery/ M. F. McGregor, *The Athenian Tribute Lists*, Princeton 1950, p.284-297.
- 23) E. Szanto, *Das griechische Bürgerrecht*, Freiburg, 1892, S.62-63; M. N. Tod, *A Selection of Greek Historical Inscriptions to the End of the Fifth Century B.C.*, Oxford, ²1946, no.34, p.31-36; A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece*, Manchester, 1964, p.40-68; R. Meiggs/ D. M. Lewis, *A Selection of Greek Historical Inscriptions to the End of the Fifth Century B.C.*, Oxford, 1969, no.20, p.35-40.
- 24) 伊藤貞夫「ポリスの成立と構造」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ — 古典古代の比較史的考察 —』、1988年、51頁、註15。
- 25) Tod, *op. cit.*, p.34. ; Meiggs/Lewis, *op. cit.*, p.38-39.
- 26) 伊藤貞夫「古典期アテネのフラトリア — IG.II²1237の場合 —」『史林』71-5、1988年、25頁。
- 27) J. A. O. Larsen, *Greek Federal States, Their Institutions and History*, Oxford, 1968, p.51.
- 28) 岩田拓郎「古典期アッティカのデーモスとフラトリア — 「ヘカトステー碑文」の検討を中心として —」『史学雑誌』71-3、1962年、19頁。

29) 勿論区民名簿は存在したが、母市に対する宣誓式や母市における祭儀への参加も面識の維持に役立ったであろう。

第9章 アテナイ植民者のアイデンティティー

—プロソポグラフィックなアプローチの試み—

はじめに

アテナイとその植民市との関係に関する従来の研究は¹⁾、専ら市民権という法的な権利に着目してきた。その際、ある植民者が母市市民権を保有していたか否かが細かく検証され、もしある植民市が母市市民権を保有する植民者から構成されていることが明らかになった場合には、その植民市は母市に従属的に結び付けられていたと見なされ、それがアテナイ帝国支配の手段として利用されていたと評価された。そしてそのような事例が多く確認されると、前5世紀におけるアテナイ植民帝国主義とも呼ばれ得るような像が結ばれることとなった。

しかし、そもそも植民者が母市市民権を保有するということは、本当に彼らが母市と緊密な関係にあったこと、ひいては母市に対して従属的な関係にあったことを意味するのであろうか。確かに制度上はそう言えるかも知れない。しかし植民者が実際に母市に対してどのような感情を抱いていたのか、また逆に、母市市民が植民者に対してどのような態度を示したのか、といった実態面については、そこからは何も引き出すことが出来ない。それにもかかわらず、従来の研究がこのことに満足していた背景には、植民市を見る眼差しが専ら母市アテナイから植民市ないしは植民者に向けられていたことがあったのではないであろうか。そこで小稿では、植民者諸個人に焦点を当てて²⁾、植民者の視点から母市ないしは植民市を見ることを試みたい。そうすることによって、母市植民市関係の新たな側面が見えてくるであろう。

第1節 母市植民市間の地理的・心理的距離

まず、母市植民市間の距離が考察されなければならない。尺度上の距離は心理上の距離に反映されたと考えられるからである。そこでペイライエウス港を起点として、1.イオニア・ヘレスポントス・黒海方面、2.エウボイア・トラキア方面、3.アイギナ・シケリア方面、の三地区にまとめて、各植民市までの道筋と距離を測ることとする。

1. イオニア・ヘレスポントス・黒海方面

この方面には、まずキュクラデス諸島のアンドロス、ナクソス、メロス、イオニア地方に渡ってサモス、ノティオン、そこから北上してアイオリス地方のレスボス島の諸市(ミュティレネ等)、トラキア地方のケルソネソス半島の諸市(エライウス、セストス等)、及びヘレスポントス周辺のレムノス、イムブロス、そこからプロポンティス海のアスタコス、黒海南岸のシノペ、アミノスが位置する。

まず、ペイライエウスからサモスまでの海路について見てみよう。ペイライエウスを出航した船は、まずスーニオン岬を目指して航行するが、航路はそこで二手に別れていたようである。一つは、そこからそのままキュクラデス諸島の中程を通るルートで、これが最短コースであつたらしい(Strab.C636)。もう一つは、少し遠回りになるが、一旦エウボイア南端のゲライストスまで北上し、そこからアンドロスを経由して行くルートである(Thuc.3.3.5;Hdt.5.121)。ゲライストス岬は、アジアからアッティカへ渡航する際の一つの通過点であつたと言われている(Strab.10.1.7)。スーニオンからゲライストスに近いレウケ岬までの距離は300スタディオ(以下stと表記する)である(Strab.C399)。その後は、これら二つのルートが再び合流し、中継地点であるデロスないしはミュコノス(Thuc.3.29.1-2;8.77.1;86.1)、あるいはナクソスに寄港した(Hdt.5.31;6.95;96-97;99)。それから、コルシアの島々とメランティオイの岩礁の間を通り(Strab.C636)、イカロスに寄って(Thuc.3.29.1-2;Hdt.6.95)、サモスに至つ

た。

さて、ペライエウスからサモスまで航行するのに何日を要したのであるか。これに関して興味深い史料が三つある。一つは、アテナイから一人の男がエウボイアへ渡り、陸路ゲライストスに向かい、そこからちょうど出航しようとしていた商船に乗り、順風に恵まれてアテナイを出て3日目にミュティレネに到着したという記述(Thuc.3.3.5)、もう一つは、スパルタを発ち、やはり順風に恵まれて3日目にイリオンに到着したという記述(Hdt.2.117)、もう一つは、サモスの対岸にあるトロギリオスという小島からスーニオンまでの航路は、最短距離で1600stあるという記述(Strab.C636)である。つまり、これらの史料に加えて、1stの長さや船の速度が得られれば、大体の日数が割り出せることになる。勿論、風や海流による誤差は承知の上である。まず1stの長さは、トゥキュディデスの場合0.13kmから0.175km³⁾、ストラボンの場合0.18km⁴⁾、とされているので、1st=0.18kmとしよう。次に当時の商船は、日中時速9km、三段櫂船も普段は9km、最高13kmで航行できたと言われている⁵⁾。そこで、サモス・スーニオン間の1600st=288kmとスーニオン・ペライエウス間の300st=54kmを足し、この距離を時速9kmで航行したとすれば、38時間かかる計算になり、ペライエウスを発って1日半、つまり2日目にはサモスに到着したことになる。この値は、ペライエウス・ミュティレネ間の3日目と比較して妥当であるように思われる。これから類推すれば、アンドロス、ナクソス、メロスには1日の内に到着出来たと考えられるであろう。

続いて、ペライエウスからヘレスポントスに至る航路について見てみよう。これがサモスへ至る航路の延長線上にあったことは間違いない(Thuc.8.22.1;cf.Thuc. 8.8.2;23.5;Hdt.9.106)。この航路は、夏期のみならず冬期にも開かれていたことがいくつかの史料から裏付けられる(Thuc.8.39.1-2)。サモスを発った船は、大陸の沿岸にそって航行し、エフェソスを通過し、テオスに向かい(Thuc.8.15.1-2)、そのミュオンネソスに寄港したが(Thuc.3.32.1-2)、その間にノティオンが位置する。テオスを過ぎると、コリュコス山を右手に見ながらそれを巡り(cf.Thuc.8.14.1)、アルギノン岬とキオス島の間を通過して、キオスに到

着した (Thuc.8.34.1)。このあたりでは、冬の間よく嵐に遭ったらしい (Thuc.8.34.1;32.1;31.2cf.Thuc.8.16.1-2)。また夏には北風もよく吹いた (Thuc.8.80.3;8.99.1; Hdt.5.33)。

さらに続いて、キオスからレスボスに向かうが、それにはマレア岬を
通ってミュティレネを目指す東周りルートと (Thuc.8.100.1;101.1-3)、ピュラ、エ
レススを目指す西周りルートの (Thuc.8.23.2)二つがあった。キオスからヘレス
ポントスに至る航路について時間の経過が窺い知れる史料がある
(Thuc.8.101.1-3)。それによると、キオスにいたミンダロスは、急いで出航し、
外洋に出ず、エレススにいた敵船に遭遇しないように、左にレスボスを見なが
ら、大陸沿いに航行し、カルテレイアで朝食をとった。それからキュメへ航行
し、アルギヌーサイで夕食をとった。ここはミュティレネの対岸である。そこ
から夜遅く出航し、メーテュムナの向かい側にある大陸のハルマトゥスに到着
し、急いで朝食をとった後、レクトン、ラリサ、ハマクシトスなどの諸市を通
って、夜半少し前にはヘレスポントスのロイティオンに到着したと云う。つま
り、この航海の間に2回の朝食と1回の夕食をとっているので、1日半の時間
の経過が読み取れる。その内訳は、キオスからミュティレネまで半日、ミュテ
イレネからハマクシトスまで、少し時間がかかりすぎている感じがするが、丸1
日となる。キオスからレスボスまでは、南風に乗って約 400st=72km と言われ
ている (Strab.C645)。この距離を当時の船で航行したとすれば、8時間すなわち
1/3日となるが、これはおそらく外洋を直行するコースであったと思われる。
そうだとすれば、沿岸ルートのキオス・ミュティレネ間の半日という数字は領
ける。以上のことから、ペイライエウスからヘレスポントスへは3日半、つま
り4日目には到着することになる。

ヘレスポントスに入る前に、向かいにあるレムノス・イムブロスにつ
いて見てみよう。これらの島々は、ヘレスポントスを追われたアテナイ船が逃
げ込む非難所のような役割を果たしていたようである (Hdt.6.41;104;Thuc.8.102.2)。
その際のヘレスポントス側からの出航地は、ロイティオンの対岸に位置するエ
ライウスであった (Hdt.6.140; Thuc.8.102.2)。これについては、ミルティアデース

によるレムノス征服のエピソードがある。それによると、ペラスゴイ人はもし北風を受けた船がアッティカからレムノスまで1日で達することが出来たなら島を明け渡そうという絶対に起こりえない約束をしたが、彼は季節風の時期に当時アテーナイの植民市となっていたケルソネソスのエウイウスからその島まで船で渡り、約束を成就させたという(Hdt.6.139-140)。エライウスからイムブロスまで約17km、レムノスまで約50kmなので、風が無くても当時の船で、前者は約2時間、後者は約5時間ということになるだろうか。従って、ペイライエウスからは4日目の内には到着出来たであろう。

ところで、イムブロス・レムノス・スキュロスを結ぶ航路が存在したのであるか。スキュロスについては史料がそもそも少ないので分かりにくいですが、そのような航路に言及した記事は見付けることが出来なかった。外洋を通るこのルートは、否定は出来ないが、極力避けられたのではないであろうか。

それではヘレスポントスに入って行こう。まずエライウスからセストスまでは170st=31km(Strab.7.9)、セストスとアビュドスの間の渡しは30st=5.4km(Strab.C591)、アビュドスからイリオンまで170st=31km(Strab.C591)、アビュドスからラムプサコスまでも同じく170st=31km(Strab.C589;591)、ラムプサコスからカリポリスの間の渡しは40st=7km(Strab.C589)、カリポリスからクリトテ、パクテュエ、アゴラを通してカルディアに出るが、そこからケルソネソス半島の外周りでエライウスまで400st=72kmあるという(Strab.C7.9)。従って、ヘレスポントスの内を通っても外を通ってもほぼ同じの400st=72kmとなり、当時の船なら8時間で半島の付け根まで行けることになる。従って、ペイライエウスからここまではなんとか4日目の内に至ることが出来るであろう。

ここからビュザンティオンに向かうために、プロポンティス海の中程を進む(Strab.C584)。プロポンティスは、アビュドスから約5km=28st南にあるキユノス・セーマ岬から始まり(Strab.7.9)、長さ1400st=252kmと言われているので(Strab.7.9)、ラムプサコスからビュザンティオンまでは、1400st=252kmから170st=31kmと約5km=28stを引いて1202st=216kmとなる。これは当時の船で24時間かかることになる。従って、ペイライエウスからビュザンティオンの手前の

アスタコスまでは丸3日間で6日目としておこう。

さらにビュザンティオンからカルペを經由してヘラクレイアへ向かうが、その間は三段權船で丸1日かかるという(Xen.Anab.6.4.1-3)。そこからさらにシノペまで2000st=360kmあるが(Strab.C546)、順風に恵まれれば2日間でヘラクレイア・シノペ間を沿岸航行が出来たと伝えられている(Xen.Anab.6.2.1-2)。ここで日数と里程の両方の値が得られたので、今までの計算の妥当性を検証して見よう。360kmを時速9kmの船で航行したとすれば40時間となり、2日かかったという情報は納得の行くものであると言えよう。従って、これまで用いてきた船の時速とストラボンの里程は、あながち見当外れではなさそうである。さらにシノペからアミソスに至るが、その間の距離は900st=162kmで(Strab.C547)、当時の船なら18時間かかったことになろうか。トラペズスの近くのケラススの西約100kmに位置するコトユオラからシノペへ至るのに順風を受けて丸1日かかったと言われていることから(Xen.Anab.6.1.14-15)、シノペからその中間にあるアミソスまで半日かかったとするのは妥当であろう。従って、ペライエウスからシノペまでは9日目に、アミソスまでは10日目に到着ということになろうか。

2. エウボイア・トラキア方面

この方面には、まずエウボイア島の諸市(カルキス、エレクトリア、ヘステイアイア、カリュストス等)及びスキュロス、そこから北上してトラキア地方のエイオン、アムフィポリス、ポティダイア等が位置する。

エウボイアは、アッティカからわずかな幅の海峡を隔てて、細長く横たわっているため、地理的にも近いが、ペロポネソス戦争中、アッティカよりも重要なエウボイアと言われたり(Thuc.8.96.2)、ペリクレスによる籠城作戦の際には、田園に住むアテナイ人が婦女子や家財道具を市内に非難させたのと同時に、牛や羊をエウボイアに疎開させたりしたことから(Thuc.2.14.1-2)、その心理的近さも窺われる。

アッティカとエウボイアは複数の地点で結ばれていた。まずカルキスとアウリスの間 (Strab.C444)。ここは、エウボイアと本土が最も接近している地点で、その距離はわずかに 2 プレトン (=60m) であり、ストラボンの時代にはそこに橋が架けられていたという (Strab.C403;400)。アテナイ人はここを渡ってカルキスに植民者を残した (Hdt.5.77)。次はカルキスから約 23km 南のエレトリアとアッティカの属領であるオロポスとの間 (Thuc.2.23.2)。その間は 60st=12km (Thuc.8.95.3;cf.Strab.C403) で、エレトリアで上げられたのろしがオロポスから見える距離である (Thuc.8.95.4)。ペルシア軍が侵攻してきた時、カルキスにいたアテナイの植民者はエレトリアに向かい、そこからオロポスに渡って避難した (Hdt.6.100-101s)。またこのルートは、エウボイアとアテナイを結ぶ重要な輸送路で、オロポスに陸揚げされた荷物は、ゲテレイアを通過してアテナイに運ばれていた。デケレイアとアテナイの距離は約 120st=21.6km あり (Thuc.7.19.2)、オロポスとデケレイアの距離も大体同じである。ところが、ペロポネソス軍によってデケレイアが占領されて後は、この道が遮断され、その代わりにやむなくスーニオン岬を廻る海上輸送の道がとられるようになったという (Thuc.7.28.1)。

ペイライエウスからスーニオン岬まで 330st=59km (Strab.C391)、スーニオンからエウボイア南端のゲライストス岬まで 300st=54km (Strab.C399)、スーニオンからカルキスまで、途中で難所であるコイラと呼ばれるエウボイアの凹みを通って (Strab.C445; Hdt.8.13)、670st=121km ある (Strab.C403)。この岬の近くにカリュストスがあり、その近くにステュラのマルマリオンがあるが、そことアッティカのハライ・アラフェニデスを結ぶ航路があった (Strab.C446)。また、マラトンとエレトリアを結ぶ航路もあった。これは、ヒッピアスがペルシア軍をエレトリアからマラトンへ誘導したルートでもあり (Hdt.6.102)、その 48 年前にペイシストラトスとヒッピアスがアテナイへの帰国を強行した時に、エレトリアからマラトンに上陸したルートでもあった (Hdt.1.62)。

ここで各航路の所要時間を割り出しておこう。まずオロポスからエレトリアやカルキスへ行く場合には、アッティカの国境からその日の内に到着出来た。一方、ペイライエウスからスーニオン岬を廻って、カリュストスへ向か

う場合は、330st=59km と 300st=54km を足して 12 時間つまり半日、カルキスへ至るには、330st=59km と 670st=121km を足して 20 時間つまり丸 1 日かかる。いずれにしてもその日の内にたどり着けた。次にヘスティアエアへは、エウボイア南端のゲライストス岬から北端のケナイオン岬まで約 1200st=216km とされているので(Strab.C444)、その間 24 時間かかる。従って、ペイライエウスからケナイオン岬のあるヘスティアエアまでは(Strab.C446)、12 時間を足して、36 時間つまり 1 日半かかり、2 日目には到着ということになる。ゲライストスから海峡を通らないで、外洋側を沿岸航行して、スキアトス島へ至る航路もあった(Hdt.8.7)。

さて、トラキアへ向かうルートは、エウリポス海峡を通過して、さらに北上していった(Thuc.7.29.1-3)。ヘスティアエアの近くにアルテミシオン岬があるが、その岬の沖で、スキアトス島と本土のマグネシアとの間が狭まって、水路が形成されている(Hdt.7.176)。アルテミシオンからスキアトスで上がった信号が見えたと言う(Hdt.7.183)。またマグネシアのアフェタイからアルテミシオンまで 80st=14km あるが、その間を一度も浮き上がることなく潜水して渡り切った男がいたという噂がある程である。もともとこれを収録したヘロドトス自身これを信じていないが(Hdt.8.8)。いずれにしろ、この水路が交通の要所であったことには間違いない(Hdt.7.183)。

アフェタイの近くに、場所は確定出来ないが、セピアス岬がある。ここから航路はマケドニアのテルメに向かう。その間の航海には丸 1 日かかったという記録がある(Hdt.7.183)。テルメあるいはその手前にあるピュドナからトラキア最大の要地であるポティダイアに向かう(Thuc.1.61.4-5;68.3)。そこからメンデ(Thuc.4.129.3)、スキオネ(Thuc.4.130.1)、トロネ(Thuc.5.2.1-4;3.5;5.6.1-2)へと航行し、さらに難所のアトス岬を周航して(Hdt.6.44-45)、ストリュモン河口にあるエイオンの港に入り(Thuc.4.106.3;108.1)、そこから 25st=4.5km 上流にあるアムフィポリスへ(Thuc.4.102.3)、船で至った(Thuc.4.107.2)。アムフィポリスは「九路」と呼ばれる交通の要所であり(Thuc.1.100.3;4.102.3)、タソスとは船で半日の距離であったという(Thuc.4.104.4)。エイオンもまた、アブデラ、アビュドスへ

と至るヘレスポントス方面のもう一つの航路の結接点であった (Hdt.5.13;8.117-120; 7.113-114;Thuc.4.50.1-3)。

これらの諸都市間の里程に関しては詳しい史料が得られなかった。地図の上で測って見ると、テルメからポティダイアまでが約 80km すなわち 9 時間、ポティダイアからエイオンまで約 170km すなわち 19 時間、エイオンからアムフィポリスまでは 30 分ということになる。アムフィポリスとタソスの間が 80km で半日行程であるならば、テルメからアムフィポリスまで約 250km で 28 時間は、許容範囲と言えようか。以上の結果に従って、ペイライエウスからポティダイアまで丸 3 日の 3 日目、エイオン・アムフィポリスまで丸 4 日の 4 日目としておこう。

3. アイギナ・シケリア方面

この方面には、まずサロニカ湾のサラミス、アイギナ、それからずっと離れて、アドリア海沿岸にも一つ植民市が建設されたが、場所については不明である。そして、イタリア南端のトゥリオイが位置する。

サラミスは、アッティカのアンピアレ岬から $2st=0.36km$ 離れており (Strab.C395)、サラミスで焚かれた敵襲を知らせる烽火がアテナイから見える程の距離である。アイギナは、ペイライエウスから $100st=18km$ の位置にあり (Strab.C375)、ペイライエウスから軍船で一気に漕いで渡れる程の距離である (Thuc.6.32.2)。ペルシア軍侵入の際に、アテナイ人が婦女子をトロイゼンやアイギナ及びサラミスに疎開したことや (Hdt.8.41)、アイギナがペイライエウスの目やにと呼ばれたことなどから (Plut.Per.8.7)、両島の近さが窺い知られる。

アイギナの次ぎの植民市はトゥリオイであるが、そこに至るまでの海路は、シケリア遠征にまつわるトゥキュディデスの記述からほぼ再現出来る。ペイライエウスを出航した船は、まずアイギナに向かい、そこで準備を整えたり (Thuc.5.53.1)、他の船団と合流した (Thuc.7.20.3)。そこからスキライオン岬を周り (Thuc.5.53.1)、エピダウロス・リメラを通過し、難所として有名なマレア

岬を周り (Thuc.7.168;Strab.C368)、キュテラの対岸に寄港した (Thuc.7.26.1-3)。この島は、エジプトやリビアからの商船も寄港する交通の要所であり (Thuc.4.53.2-3)、ペロポネソスに対する重要な軍事拠点でもあった (Thuc.4.54-57; Hdt.7.235)。ここを過ぎると、ピュロスに向かい、フェイアを通過し、ザキュントスとキュレネの間を通過して、ケファレニア、レウカスの東側を航行して、アナクトリオンに入る。次に、ケルキュラに至るが (Thuc.7.20.3;26.1-3;31.5)、ここはイタリア・シケリアへ向かう航路の要地であり (Thuc.1.36.2;44.2)、船団は一旦ここに集結して、イタリア南端のイアプュギア岬を目指して、イオニア海を渡って行った (Thuc.6.30.1;34.5; 42.1;43.1;44.1-3)。ここから、タラス、メタポントン、ヘラクレイアを通過して、トゥリオイに到着したのである (Thuc.7.33.3-5;Strab.C264;278;281)。

ペイライエウスからトゥリオイへ至るまでの日数はどのくらいであろうか。直接的な証言はないが、ディオンのアテナイから祖国シュラクサイに向けて遠征した時、12日間は穏やかな風を受けて航海した後、13日目にシュラクサイの南部にあるパキュノス岬に至ったことをプルタルコスが伝えている (Plut.Dion.25.1)。それならば、パキュノス岬からトゥリオイまでの行程を割り出して逆算すれば、ペイライエウスからトゥリオイまでの行程が求められることになる。パキュノス岬からイタリア半島との接点になるペロリアス岬まで $1130st=203km$ ある (Strab.C266)。ペロリアス岬とカイニウス岬が対い合ってポルトモス海峡を形成し (Strab.C257)、それによってシケリア島とイタリア半島が隔てられているが、その間はわずか $20st=3.6km$ である (Thuc.6.1.2)。そしてストラボンが、この海峡からラキニオン岬までを $2300st=414km$ とするポリュピオスの数字を引用しているが (Strab.C261)、これは実測とはかなりかけ離れたもので、この 2300 は 1300 の間違いであると一般には修正されている⁹⁾。すると $234km$ となり、地図上の実測と合致する。そこからクロトンまで $150st=27km$ (Strab.C262)、さらにそこからシュバリスまで $200st=36km$ あるというが (Strab.C263)、これもおかしい。そこでもう一つの計算をしなければならない。ラキニオン岬からイアプュギア岬に至るタラス湾に沿って航行すると 240 マイル

=346km であることが分かっているので (Strab.C261)、逆にイアプュギア岬からトゥリオイまでの距離が分かれば、ラキニオン岬からトゥリオイまでの距離も分かるはずである。さて、トゥリオイからヘラクレイアまで 330st=59km (Strab.C.264)、ヘラクレイアからメタポントンまで 140st=25km (Strab.C264)、メタポントンからタラスまで 240st=40km (Strab.C278)、タラスからパリスまで 600st=108km (Strab.C281)、そしてパリスからレウカまで 80st=14km ある (Strab.C281)。このレウカはイアプュギアのすぐ近くなので、トゥリオイからイアプュギアまで 1370st=246km になる。従って、ラキニオン岬からトゥリオイまでは、346km から 246km を引いて 100km となる。この値は実測とほぼ一致する。そして、このシュバリスの跡地にトゥリオイが建設されたのであるから、パキユノスからトゥリオイまでは、203km、3.6km、234km そして 100km を足して、540km すなわち船で 60 時間、つまり 2 日半かかることになる。従って、ペイライエウスからトゥリオイまでは、10 日目に到着ということになるろうか。この旅程が非常に長い航海であるという感覚を当時の人々が抱いていたことは、シケリア遠征に際する記述の所どころで示唆されている (Thuc.6.30.2; 31.3;31.6;34.4;37.1)。

さて、かなり大胆な計算をした箇所もあったが、とりあえず各植民市までの行程を以上のように割り出しのて見た。この考察から言えることは、三点ある。まず、1 日行程のサラミスとアイギナ、キュクラデス諸島、そしてエウボイアは、目と鼻の先あるいは裏庭といった距離感であったこと、次に、2 日から 4 日行程のイオニア地方、ヘレスポントス地方、トラキア地方に多くの植民市が建設されたことから、この程度の行程は許容されたと思われること、最後に、東西へ最も遠い植民市がともに 10 日行程であったことから、それがアテナイ植民の限界であり、当時の人々もそれ以上はかなり遠いと感じていたこと、である。この母市植民市間の近さ或いは遠さが母市市民と植民者の間の人間関係を規定に影響を与えたであろう。

第 2 節 差別される植民者たち

それでは、個々の植民者をプロソグラフィックに見ていこう。植民市が戦争によって潰されて、やむなく帰国した引揚者はかなりいたが、彼らは母市市民によって必ずしも暖かく迎えられた訳ではなかった。ここでは、法的には同じアテナイ市民でありながら、帰国して差別された三人の植民者たちの事例が扱われ、その原因が考察される。

①哲学者エピクーロスは、ガルゲットス区の人でアテナイ人であったが、サモス植民者の子供であった。彼の父はネオクレス、母はカイレストラテで、フィライダイに連なる家柄であったらしい(Diog.Laert.10.1)。サモスは、前365/4年、前361/0年、前352/1年の三次に渡ってアテナイ人によって植民されたが、ネオクレスは恐らく第三次植民の際に移住したと考えられている⁷⁾。

エピクーロスは18歳の時にアテナイに戻ったと伝えられている。その年は前324年なので、彼の生年は前342年になるから、彼は間違いなくサモスで生まれたことになる。アテナイに戻った理由は、エフェーボスになるためであった(Strab.14.1.18)。エフェーボスとは18歳になった市民に課せられる軍事教練で、期間は2年である。その間に各種兵器の使い方や、ポリス市民としての心構えを学び、実際に港や国境の警備に当たる。またこれに先だって、法定年齢に達しているかどうか、自由人であり合法的な生まれであるかどうかを審査される(Aristot.Ath.Pol.42.1-5)。つまり、エフェービアという制度は、市民登録のための重要な手続きであった。

エピクーロスはエフェーボスの勤めを果たし、合法的にアテナイ市民と認められたはずである。それにもかからわず、彼には悪い噂が付きまとったと云う。犬のように恥知らずで最も育ちの悪い者、惨めな給金もらい、遊女との同棲、50通もの淫らな恋文、おべっか使い、快樂主義者、卑猥な話をする男、無知、大食家、貧弱な体質、口汚い男、等々。その中で見逃せないのが、彼が合法の市民ではないとの噂である(Diog.Laert.10.4)。彼はサモスおよびテノスで育った。アテナイに行ったのは、その時が初めてだったのかも知れない。彼の「母市」には実際には彼を見知った人がほとんどいなかったのではないであろうか。ここに、制度的には受け入れられても、感情的には排除された植民

者二世の事例を見る事が出来る。

②ギリシア最大の喜劇作者であるアリストファネスは、フッリップスを父、ゼノドラを母とするキュダテナイ区のアテナイ人である。彼の生没年については、確かな伝承はないが、生年は前 445 年頃、没年は恐らく前 385 年頃と思われる。彼はアイギナと密接な関係にあった。前 425 年上演の『アカルナイの人々』には「かかる次第でラケダイモン人は諸君に平和を申し入れ、かつはアイギナを要求しているが、本心明かせばあの島などはどうでもよいので、ただこの作家を手に入れたいのさ。だが絶対に渡してはなりませんぞ(653ff)。」という一節があり⁸⁾、これがそのことを暗示している。アリストファネスはアイギナにおいて分与地を与えられたと云われているので(Schol.Plat.Apol.19c)⁹⁾、アテナイがアイギナを植民市とした前 431 年以降に、彼または彼の父が当地に植民者として移住した可能性がある¹⁰⁾。彼の息子のアリストクレイデスもアイギナ人と表記されている¹¹⁾。

アリストファネスは、ペロポネソス戦争中、平和論者としてクレオンやヒュペルボロスなどのデマゴゴスたちを攻撃していたので、政敵のクレオンによって非市民の嫌疑を掛けられた¹²⁾。確かに、彼らの論点は本質的には戦争継続の是非をめぐるものであったであろうが、そこに出自という感情的な中傷が入り込む余地のあったことは、アテナイに住む市民と植民者との埋めがたいギャップの存在を感じさせる。

③プラトーンの初期対話篇『エウテュフロン』は、ソクラテスとエウテュフロンがアテナイのバシレウスの役所の前でばったり出会い、そこでそれぞれの抱えている訴訟について語り、共通のテーマである敬虔とは何かについて議論するというものである。エウテュフロンの一家がかつてナクソスに植民して農業に従事していた頃、彼のところの日雇い人が酔った勢いで一人の奴隷を殺してしまうということが起こった。彼の父はその男の手足を縛り付け、溝に突き落としたままにしておいて、殺人の汚れを払う方法を尋ねるためにアテナイの聖法解釈者のところへ人を送ったが、使いが帰ってくる前に、その男が死んでしまった。そのために彼は自分の父親を殺人の罪で告発したのである

(Plat. Euth. 4c-d; 9a)。

エウテュフロンは予言者であり (Plat. Euth. 3e)、一種の狂信的な宗教家であった。彼ともう一つの対話篇『クラテュロス』に登場する語源研究に熱中しているプロスパルタ区のエウテュフロンとは (Plat. Kra. 396d; 399e; 428c)、その狂信的な正確から恐らく同一人物であったと考えられる。年齢については判らないが、状況からして、彼はナクソスで生まれた可能性はある。アテナイはナクソスを前 447 年頃から前 404 年まで所有していたので、問題の事件はその間に起こったことになる。この訴訟が行われたのは、ソクラテスが告発されて裁判が始まるまでの予審の期間、即ち前 399 年の 1 月から 2 月のことと設定されているので、事件の発生から訴訟まで少なくとも 5 年の歳月が経過しており、不自然な観がある。しかし、アテナイの敗戦、民主制の崩壊、寡頭政権の樹立、内乱、民主制の復活という一連の混乱が訴訟を遅らせたのかも知れない。この人物が実在したかどうかは判らないが、彼および彼の訴訟がプラトンによる全くの創作であったとも考えにくい。むしろ恐らく、実際に似たような訴訟があり、アテナイ民衆の嘲笑をかったという事実を題材として採用したと考える方が自然であろう¹⁹⁾。

問題は、なぜ主人公にナクソスからの引揚者が選ばれたのかということである。勿論、それが事実であったのかも知れない。しかしもしそれが創作であったならば、それはナクソスのイメージと結びついていたのではないであろうか。つまりナクソスは古来ディオニュソス信仰の中心地として有名であったので、そこから来た者が狂信者であったという設定である。もしそうならば、これはアッティカに住む市民が植民者を偏見の目で見ていることを暗示していることになる。

これまで考察してきた植民者たちはいずれも、何らかの差別を受けた者たちであったが、同じ引揚者であっても、歓迎された訳ではないが、差別はされなかった者たちもいた。両者を対比することによって、差別の原因を探ってみよう。前 404 年、アテナイがペロポネソス戦争に敗北した時、アテナイはサラミスを除く全ての植民市を失った。土地を失った植民者たちは続々と母市

に引き揚げてきたのであるが、恐らくその中にエウテロスがいた(Xen.Mem.2.8)。彼については他の史料がないので、詳しいことは判らないが、彼はソクラテスの弟子であった。しばらくの間どこかの植民市で暮らしていたようである。しかし敗戦によって引き揚げ、久しぶりに師に出会い、現状と老後のことを話し合う。それによると、彼は外国に持っていた全ての財産を失い、また母市にいる彼の父親は彼のために何も残していない。そこで彼は肉体を使う仕事に就くことを考えるが、その話しぶりから、彼はまだ老人ではないが、かといって青年でもない。働き盛りを少し過ぎた年齢であることが窺える。

彼の家には彼を養う財産はなかったようである。彼もやはり引揚者として穀潰し扱いされたのかもしれない。しかし彼が今までに考察してきた他の植民者たちと異なっている点は、彼には母市に親類や知人がいたことである。彼にはソクラテスという師がいた。師は彼に今後の身の振り方について色々とアドバイスをしている。また彼の父親はアテナイにいた。母もいたかもしれない。彼は植民者の二世ではなかったのである。この世代と面識の関係こそ、アテナイのような面識社会において、植民者が差別されるか否かの大きな決め手になったのではないであろうか。

第3節 したたかな植民者たち

植民者たちは虐げられてばかりいたのではなかった。彼らの中にはしたたかに母市をあしらい利用した者たちもいた。もつとも、そのような人物は実力者に限られるけれども。そのような植民者の例としてまずフィライダイの人々を見よう。彼らの一族は三代に渡ってケルソネソスを支配しており、彼らの植民以前、以後、そして帰国後の行動が詳しく伝えられている。そこから世代による態度の違いが窺い知ることが出来る。

①フィライダイはアテナイの裕福な名門であった¹⁴⁾。ラキアダイ区に属するが、その祖先はアイアコスとアイギナに遡り、アテナイの国籍に入ったのはアイアスの子フィライオス以来のことで、比較的新しい家柄であった

(Hdt.6.35)。またコリントスのキュプセロスとも姻戚関係にあったと云われている。ステサゴラスの子キモンは、ペイシストラトスの僭主政に不満を持って亡命したにもかかわらず、その間に二度オリュムピアの四頭立て戦車競争で優勝し、二度目の勝ちをペイシストラトスに譲って和解し、帰国を果たした。彼は前 524 年にペイシストラトスの子らによって暗殺されたが、その年にも同じ競技で優勝し¹⁹⁾、彼の異父兄弟であるキュプセロスの子ミルティアデスの偉業に並んだと云われている (Hdt.6.103)。

②キュプセロスの子ミルティアデスは前 6 世紀の中頃、ケルソネソスのトラキア人の一派であるドロニコイ人から国家再建の指導者になって欲しいとの要請を受けた時、彼もペイシストラトスの支配に不満を感じていたのでそれに応じ、アテナイから植民者を率いて移住し、そこで専制支配を始めた (Hdt.6.34-36)。彼はまず地峡に防壁を築いてアプシントス人の侵入を防ぎ (Hdt.6.36)、次にランプサコス人と戦争したと伝えられている (Hdt.6.37)。

③彼はその後、子を残さずに死亡したので、政権と財産は彼の異父兄弟であるキモンの子ステサゴラスに継承された。死後ミルティアデスは、ケルソネソスの住民によって建国の祖として崇拜されたと云う (Hdt.6.38)。ステサゴラスは元々、ケルソネソスにいる叔父ミルティアデスの許で養育されていたらしい (Hdt.6.103)。

④ステサゴラスも間もなく後継者を残さずに暗殺されたので (Hdt.6.38)、ペイシストラティダイは前 520 年頃、彼の兄弟であるキモンの子ミルティアデスを三段櫓船と共にアテナイから派遣して、半島の統治に当たらせられた。彼が生まれたのは前 550 年頃で、前 524/3 年にはアテナイでアルコンに就任しているので (Dion.Hal.7.3.1; SEG.X.352)、彼は元々はアテナイに住んでいたようである。彼は到着すると 500 の傭兵を雇い、ケルソネソスを手中に納めて、トラキア王オロロスの娘ヘゲシピュレと結婚した (Hdt.6.39)。前 513 年頃、彼はダレイオスのスキュタイ遠征に参加した時、イオニア解放のために橋の切断を企てたが失敗した (Hdt.4.137)。また前 505 年頃、エライウスからレムノスに渡り、ペラスゴイ人から島を奪い、アテナイ人に与えて植民した (Hdt.6.140)。

ミルティアデスは半島の当地にはあまり乗り気でなかったように思われる。前 495 年、ペルシアに圧迫されたスキュタイ人がケルソネソスに押し寄せた時、彼はそこに踏み止まらないで逃亡し、ドロニコイ人によって連れ戻されるという失態を見せた(Hdt.6.40)。そして前 493 年、イオニア反乱が鎮圧された時、彼はとうとう全財産を 5 隻の三段櫓船に積んでアテナイ目指して出奔した。彼は途中フェニキア艦隊に襲われながらも這々の体でアテナイに帰還した(Hdt.6.41)。

そんな彼はアテナイにおいては民衆に人気があり、英雄となった。帰国後、彼は反対派によってケルソネソスにおける僭主制の嫌疑で告訴されたが、結局は無罪となり、民会によってストラテゴスに任命されて、前 490 年のマラトンの戦いで指揮を執り、ギリシア軍を勝利に導いた(Hdt.6.104)。名声を高めた彼は、前 489 年に多大な軍船と資金を民会に要求してパロス遠征を企てたが、それは失敗した(Hdt.6.132-135)。このことがアテナイで問題となった時、特にアリフロンの子クサンティッポスは、彼を民会に召集してアテナイ人を欺瞞した罪で死刑にすることを提案したが、彼の数々の功績が斟酌されて、死刑は免れた。その代わりに 50 タラントンの罰金を課せられた。これを返済したのは、トラキア王オロロスの娘ヘゲシピュレと彼の間に生まれた子キモンであった(Hdt.6.136)。

⑤ミルティアデスの子キモンは父とは違い、海外で大活躍した。彼は前 510 年頃にケルソネソスで生まれたと思われる。彼は 10 代半ばまでその地に暮らしていたことになる。その間に、父の故郷アテナイ、母の故郷トラキアのタソス対岸に行ったことがあったかも知れない。前 483/2 年、ペルシアの再来に備えてテミストクレスが艦隊の整備を提案した時、キモンはいち早くそれを支持したと云われている(Plut.Cim.6.1-2)。彼がストラテゴスになったのは前 478/7 年で、それはデロス同盟が結成された年であった。彼は直ちに同盟軍を率い、前 477/6 年にペルシア軍の残留するエイオンを攻略して植民者を送り込んだ(Hdt.7.107;Thuc.1.98)。この地は金銀の産地であり、以後アテナイに大きな富をもたらすことになったが、そもそもこのあたりは彼の母の故郷でもあつ

た。続いて前 475 年にスキュロスを占領し(Thuc.1.98)、テセウスの骨をアテナイにもたらした(Plut.Cim.8.3-6)。前 468 年春に彼は、他の將軍たちと共に悲劇競演の審査員を勤め、この時ソフォクレスが彼の最初の作品『トリプトレモス』で優勝した(Plut.Cim.8.7-8)。翌前 467 年、彼はエウリュメドンの海戦でペルシア艦隊に勝利し(Thuc.1.100)、その戦利品を売却した金でアクロポリスの北壁を築いた(Plut.Cim.13.5)。前 466 年、彼は残留するペルシア軍を追放して、ケルソネーソスを再征服した。タソス反乱の 2 年後、前 463 年にキモンはそれを鎮圧して、多額の賠償金とタソスが持っていた本土側の権益がアテナイにもたらされた(Thuc.1.101.3)。その後、マケドニアへの侵入が容易であったにもかかわらず、それをしなかったため、マケドニア王に買収されたとの嫌疑を政敵のペリクレスらによって掛けられたが、無罪となった(Plut.Cim.14.3)。

彼はスパルタに対しては友好的な態度を示した。スパルタの大地震をきっかけとしてヘイロータイが反乱を起こした 2 年後の前 462 年、スパルタがアテナイに救援を要請した時、キモンはスパルタに対する自分の友誼から、アテナイの反対意見を押し切って援軍派遣を決議させ、自ら將軍として赴いた。しかしアテナイ軍だけが追い返されたために、アテナイはそれを侮辱と感じ、スパルタとの同盟を破棄した(Thuc.1.102-103;Plut.Cim.15)。彼の威信も失墜した。不在中にエフィアルテスが改革を断行し(Aristot.Ath.Pol.25)、ペリクレスとともに民主体制を固め、キモンは前 461 年に陶片追放にあった(Plut.Cim.15.1-3)。

それでも彼はアテナイに対する忠誠心を失わなかった。前 457 年、タナグラでアテナイがスパルタと戦闘した時、彼は自ら兵士を率いて参戦した。アテナイは敗北を喫したが、彼の忠誠とスパルタに対する恐怖から、彼の追放を解いた(Plut.Cim.17.8)。帰国したキモンは再び同盟艦隊を率いてエジプトおよびペルシア艦隊の基地があるキュプロスへ遠征し、華々しい戦果を上げた(Thuc.1.112;Plut.Cim.18.1-6)。しかし彼は遠征の終わる前に病死してしまった。彼の後は、フィライダイから歴史の表舞台に立つ者は絶えていなくなったようである。

以上のようなフィライダイの人々の行動を概観すると、それぞれの世

代によって態度が微妙に異なっていることに気づくだろう。まず第一世代であるキュブセロスの子ミルティアデスは、ヘロドトスによれば、ペイシストラトスの僭主政を嫌ってケルソネソスへ向かったとされているが、実際には当時シガイオンに強い関心を示していたペイシストラトスとの共同作業であったと考えられている¹⁶⁾。そこには彼の積極性が見て取れる。第二世代のステサゴラスについてはほとんど何も判らないが、キモンの子ミルティアデスは、ステサゴラスとは違って元々アテナイにおり、ペイシストラトスの子たちによって、むしろ強制的に派遣されたかの観が否めない。事実彼は半島に対する執着心を見せなかったのである。しかし第三世代である半島で生まれ育ったキモンは、アテナイに対する忠誠心を示しながらも、専ら海外で、特に母の故郷のトラキアおよび自分の生まれ故郷のケルソネソスで活躍した。アテナイの視点から見れば、彼の一連の行動はアテナイへの利益誘導として捉えることが出来るが、キモンの立場に立って見るならば、それは単にアテナイのためだけの行動ではなく、アテナイの戦略方針に沿いながら、自己の権益や生まれ故郷を奪還するためにそれをうまく利用していたとも取れる。彼はアテナイ人でありながら、むしろ多くケルソネソス人であったのかも知れない。

⑥次に、母市アテナイに戦争を仕掛けた男、イムプロスのアテノドロスについて見てみよう。彼の両親や生い立ちについては何も判らないが、彼は恐らくイムプロスに住むアテナイ植民者の子供であった。彼はしばしばイムプロス人とも (*Aen.Takt.*24.10; *Plut.Phoc.*18.4; *Ael.V.H.*1.25)、アテナイ人とも (*Le Bas et Waddington, Inscr. d'Asie Mineur, 1140=Michel, 539 (1)*) 表記されるが、市民権を付与された新市民とは区別されて、「生まれながらの市民」と表記されることから (*Demosth.*23.12)、彼がアテナイ人であったことは間違いない。

前 360 年、彼は傭兵隊長としてペルシアのサトラップであるアルタバゾスに仕え、レスボスの向かいにあるアタルネウスにおいて、アテナイの將軍フォキオンに対して戦った (*Polyaen.*5.21)。前 360 年、オドリューサイ王コトュスが死んだ後、トラキアの豪族ベリサデスとコトュスの子であるケルセブレテスとアマドコスの子の間に王位継承を巡る紛争が起こった時、アテノーロ

スは軍指揮官としてトラキアへ向かった。彼はその時、ベリサデスと姻戚関係を結んで(Demosth.23.10)、彼を後押しした。また彼はその地方に都市を一つ建設したらしいが、詳しいことは判らない(Demosth.23.170-176)。前 359 年、彼はケルセブレプテスに対して、アマドコス、ベリサデスおよびアテナイとの条約締結を強要したが、アテナイから十分な支援が得られなかったので、彼の試みは失敗した(Demosth.23.170-176)。前 358 年、アテナイの將軍カレスがこの王位継承戦争をアテナイに有利なように解決するために、王国の分割を提案した時、またしてもアテノドロスが介入した(Demosth.23.173)。

アテノドロスの名はイムブロスで発見された前 360 年頃の評議会および民会の決議碑文にも現れる。それは彼がある遠征隊の指揮官たちに資金提供したことを示しており、その人物が当該のアテノドロスと同一人物であることが認められている¹⁷⁾。このことと先に見た彼の経歴から、彼がイムブロスにおいて相当の財力と権力を持った人物であったことが判る。前 353 年、サトラップであるオロンテスが王から離反すると、アテナイは彼を支援した。そのことによってアテナイはペルシアと敵対関係になった時、アテノドロスはまたもやペルシアの傭兵隊長となった。そして今度はペルシア王を後ろ盾として、未だに解決されていないトラキアの王位継承紛争に再び介入し、マケドニア王フィリップスに対抗した。前 334 年、アレクサンドロス大王がペルシアに侵入した際、アテノドロスはサルディスのアクロポリスで逮捕されたが、後にフォキオンの取りなしによって釈放されたと云う(Plut.Phoc.18.4;Ael.V.H.1.25)。

彼の行動には強い自立性が窺える。ペルシア、トラキア、マケドニア、アテナイを股に掛けて活躍した彼にとっては、「母市」アテナイは相対化され、特別な存在ではなかったかのようにさえも思われる。もともと当時は、生粋のアテナイ人であれ、アテナイ市民権を賦与された新市民であれ、傭兵隊長たちが闊歩した時代であったが。

⑦これまで例は確かに特殊であった。一般民衆にそのようなことが出来たとは思えない。では、大多数の無力な植民者の行動とはどのようなものだったのであろうか。前 480 年のアルテミシオンの海戦には、ペルシア王の支配

下にあったギリシア人も多くペルシア勢として参戦していた。その中で唯一人、レムノス人アンティドロスは寝返ってギリシア勢に投降し、その功績に報いて、アテナイ人は彼にサラミスの土地を与えたと伝えられている(Hdt.8.11)。彼については他の史料が残されていないので、これ以上のことは判らないが、彼は恐らくレムノスに住んでいたアテナイ植民者あるいはその子孫であったと考えられる。彼の行動は日和見的とも映るが、ペルシアとギリシアという二つの勢力に挟まれた地域に住む一介の民衆にとって、情勢を見極めてその時その時の強い方に見方することが彼に残された唯一の生き残りの道であったのであろう。

第4節 もの言わぬ植民者たち

諸個人の態度や意識を語る雄弁な植民者の事例を探すとすれば、議論はどうしても歴史上の人物に集中してしまう。多くの場合、彼らは貴族でありエリートであった。彼らは大多数の民衆とは同レベルには扱えない。そこで少しでも史料の偏重を是正するために、もの言わぬ植民者たちの墓碑銘を分析しよう。植民者にとって墓碑は、その前を通りかかるであろう人に対する、自分がその地に生きたことの証であり、自分のアイデンティティーの主張でもあったと考えられるからである。

墓碑史料は数も種類も多い。また同じ形態の墓碑銘でも状況によって意味が異なる。そこで帰属意識を正確に読み取るためには、二系統の分類が必要となる。第一は公私による分類で、私的な墓碑(单身墓碑と家族墓碑を含む)と公的な戦死者名簿に分けられる。前者には個人的な感情が、後者には国家の思惑が反映されるであろう。第二は出土地による分類で、植民市出土と母市出土に分れられる。前者では植民市で一生を終えた植民者の、後者では母市に帰国して一生を終えた植民者の意識が刻まれるであろう。

まず本章の考察対象となる 230 例の墓碑銘を上記の二系統に分類した上で、そこに現われるアイデンティティー表現の要素とパターンを抽出して見

よう。

I 私的な墓碑

	C 植民市出土		M 母市出土	
	(m) 男	(f) 女	(m) 男	(f) 女
(1) 名+父名+区名	57	6	0	0
(2) 名+区名	12	0	1	0
(3) 名+父名	16	10	2	2
(4) 名	24	25	1	2
(5) 名+父名+植民市名	3	1	8	5
(6) 名+父名+母市名	1	0	0	0
(7) 名+植民市名	2	0	6	2
(8) 名+父名+ ξ +植民市名	0	0	0	2
(9) 名+ ξ +植民市名	0	0	2	0

II 公的な戦死者名簿

	C. 植民市出土		M. 母市出土	
	(m) 男	(f) 女	(m) 男	(f) 女
(10) 名+植民市名	0	0	2	0
(11) 部族名+名	15	0	0	0
(12) 植民市名+部族名+名	0	0	19	0
(13) 部族名+植民市名+名	0	0	4	0

この表から、アイデンティティの表現法には「区名」「部族名」「都市名」（「母市名」と「植民市名」を含む）の3要素があること、実際の用例には「名+区名」=(1)、(2)、「名」=(3)、(4)、「名+都市名」=(5)、(6)、(7)、(8)、(9)、(10)、「名+部族名」=(11)、「名+部族名+都市名」=(12)、(13)、の5パターンに大

きく分類されることが明らかとなる。

ではこれら 5 パターンからどのような帰属意識が読み取れるであろうか。まず「名+区名」について見てみよう。(1)C(m)の例として Εύθιππο[ς] 'Αμεινοκλείδο(υ) 'Αχαρνεύς¹⁸⁾、(1)C(f)の例として 'Ηδυλίνη Νικοδήμου θυγ. Ευπεταιόνος¹⁹⁾、(2)C(m)の例として Σωκράτης Λαμπρεύς²⁰⁾、(2)M(m)の例として Νικόμακος Πε(ι)ραιεύς²¹⁾、が挙げられる。このパターンは、そのほとんどが植民市で検出される。というのも、これは本来、母市における正式な記名法であるために、これが母市で検出された場合には、特別な証拠がない限り、母市に住む市民のものと看做されるので、母市での検出例はほとんどないのである。その唯一の例外については特別な言及が必要なので後で述べることとして、このようにこのパターンが植民市においてが大量に検出されるということは、植民者が母市市民団に対して尚も強い帰属意識を持っていたことの証拠と考えて間違いない。

では「名」だけのパターンはどうか。(3)C(m)の例として['E]πιχάρης ['Αντι]όχου²²⁾、(3)C(f)の例として Βοίδιον Δωρίωνος θυγ.²³⁾、(3)M(m)の例として Διονύσιος <'Α>λ<φ>ίνου²⁴⁾、(3)M(f)の例として Πλαγγών Χαρίου γυνή²⁵⁾、(4)C(m)の例として Εἰθανδρος²⁶⁾、(4)C(f)の例として 'Αβραγόρα²⁷⁾、(4)M(m)の例として Λάμπων²⁸⁾、(4)M(f)の例として Καλλιστρά[τη]²⁹⁾、が挙げられる。これには区名が付されていないという理由から、母市市民団への帰属意識の欠如を指摘することが出来るであろうか。これは、本来刻まれていた区名が偶然に欠損したのかも知れないし、帰属意識を持っていてもたまたまここではそれを表現しなかつただけかも知れないし、家族墓碑の場合に先行する人名に区名が附されているので次の人には省略されただけかも知れない。また表から明らかのように、このパターンが比較的多く女性に見られるのは、女性は区名を附されず名だけで記されることが多かったことに由来する。またそもそも墓主が植民者でない可能性も大いにある。従って母市出土であれ植民市出土であれ、このパターンから帰属意識を読み取ることは不可能と言わざるを得ない。

次に「名+都市名」を見る。(5)C(m)の例として 'Αισχίνης

Διονυσόδωρο[v] Ποτειδαιεύ[ς]³⁰⁾、(5) C(f)の例として[----] Θεοπόμπου Σαλαμινία³¹⁾、(5) M(m)の例として Λέων Πειθίου Σαλαμίνιος³²⁾、(5) M(f)の例として Δημητρία Χ[---c.4-5---] Σαλαμ[ινία]³³⁾、(6) C(m)の例として Αινέας Δημοστράτου 'Αθηναίος³⁴⁾、(7) C(m)の例として[----] Σαλαμίνιος³⁵⁾、(7) M(m)の例として 'Αρίσταρχος Σήστιος³⁶⁾、(7) M(f)の例として 'Αριστοδίκη Σηστία³⁷⁾、(8) M(f)の例として Μνησαρέτη Φιλινίσο(v) ἐγ Μυρίνης³⁸⁾、(9) M(m)の例として Κριτίας ἐξ 'Ηφαιστίας³⁹⁾、(10) M(m)の例として Καλλία[ς Μαδ]ύτιος⁴⁰⁾、が挙げられる。都市名の内、植民市名を名乗るということは、出土地を問わず、やはり植民市への帰属意識の現われと考えて良いであろう。従って植民市名を刻んだ墓碑が植民市から出土する場合には、それが母市よりも植民市により強い帰属意識を持つようになった植民者の墓碑と看做すことも出来ないではないが、むしろ現地人のそれと看做すほうが自然であろう。また植民市名を刻んだ墓碑が母市から出土する場合には、個人の墓碑ならば、それが帰国した植民者か或いは在留外人の可能性はあるが、それだけでは判断出来ない。また公的な戦死者名簿ならば、共に戦った同盟者である可能性が高い。一方、母市名が刻まれた墓碑が植民市から出土する場合には、彼が植民者か或いはアテナイ市民権を付与された現地人の可能性はあるが、いずれにせよアテナイへの帰属意識を示すものと理解すべきであろう。またこの種の墓碑が母市から出土しないのは、その意味上当然と言えよう。

最後に「名+部族名」及び「名+部族名+都市名」について検討しよう。

(11) C(m)の例とし *ἵπποθοντίς*: 'Ανυκίδης⁴¹⁾、(12) M(m)の例として *Λημνίων ἐγ Μυρίν[ης]*: 'Ερεχθειδός· Σόλον⁴²⁾、(13) M(m)の例として *ἵπποθοντίδος*: Λήμνιοι· Δεχσίνωμος⁴³⁾、が挙げられる。このパターンも、部族の構成要素が区であるからには、「名+区名」同様に、母市に対する強い帰属意識の現われと見て良い。従って部族名と植民市名の並記のパターンからは、母市と植民市の両方への帰属意識が読み取れる。彼らは恐らく植民者であり、母市市民と共に戦って戦死した者たちであろう。母市市民と植民市市民は、呼称においてはアテナイ人とレムノス人というふうにそれぞれ異なるが、名簿の中では両者は同じ部族毎に

まとめられ得る程の絆を持っていた。

ここまでの考察をまとめると、「区名」「部族名」「母市名」は母市への、「植民市名」は植民市への、そして「部族名+植民市名」は両方への、帰属意識の表明であることが明らかとなった。そこで次に問題になるのが、母市植民市両方への二重の帰属意識についてである。植民者がこのような意識を持つことは、言わば当然の行為かも知れない。しかし彼らは一見矛盾する二重の帰属意識を彼らの理念においてはどのように合理的に統合していたのであろうか。この点が問われなければならない。なぜならば、この点こそ母市と植民市を結び付ける精神的基盤になっていたと考えられるからである。

既述の戦死者名簿以外にも、二重のアイデンティティーを示す史料は幾つかある。例えば 'Ἀνδρ<ω>νίδης 'Ανδρ<ω>νίδου Εὐ[---] Σαλαμίνιος⁴⁴⁾と刻まれた前 425 年頃のものと思われるサラミス出土の墓碑である。まず注意すべき点は、Σαλαμίνιος という植民市名が附されていることである。この場合サラミス出土の墓碑に刻まれたサラミス人であることから、これは植民市への帰属意識の現われと見なすことが出来る。次に問題になるのは、父名の次にある Εὐ[---]である。これは何か。可能性は二つある。一つは区名、もう一つは祖父名である。もし前者であるならば、エウオニューモン区かエウピュリダイ区ということになる。そうであるならば、墓主はアテナイの植民者であり、母市と植民市への二重の帰属意識を持っていることになる。しかしこれはあまりにも不確かな証拠と言わざるを得ない。

明確な証拠は、前 4 世紀のものと思われるアッティカ出土の単身墓碑である。そこには「ペイライエウス区の人ニコマコス、ここにあるこの塚は、聖なる土地レムノスから来た男を埋葬している、彼は家畜好きであった。Νικόμαχος Πε(ι)ραιεύς Λήμνο(υ) ἀπ' ἡγαθέας κεύθει τάφος ἐνθάδε γαίης ἀνδρα φιλοπρόβατον.⁴⁵⁾」と刻まれている。彼がペイライエウス区の人として母市への帰属意識を表明していることは明らかである。それと同時に植民市への帰属意識も主張している。恐らく彼は、植民者の子としてレムノスに生まれたのであろう。母市に帰国した後、牧童をしていたのかも知れない。墓碑がルートロフ

オロスの形をしていることから、彼が若くして独身のまま死亡したことが推測される。そしてペイライエウスに埋葬されたのである。これは、植民者の帰国の一事例としても興味深い。墓碑の年代について、Koehler は植民者がレムノスから追放された前 404 年から前 387 年の間と見るが⁴⁶⁾、Clairmont は下限をより広く見積もる⁴⁷⁾。また Graham もこの期間にこだわらず、墓主はアッティカ訪問中に死んだ可能性もあるとする⁴⁸⁾。彼の帰国を植民者の追放の時期と結び付けて考えようとする傾向もあるが、Cargill は年代を前 399 年から前 300 年までのより長い範囲に取り、追放と帰国の因果関係にこだわらず、前 4 世紀においては植民者は自由意思によって帰国出来たのではないかと考えている⁴⁹⁾。最後の解釈を受け入れたい。

二重のアイデンティティーを最も明確に示す証拠は、アッティカ出土の Διονύσιος < 'A>λ<φ>ίνου⁵⁰⁾の墓碑である。問題はその土台に刻まれた銘で、そこには「さらにまた二重の祖国、つまり生まれによる祖国と法による祖国が大いなる節度の故に汝を愛した。δισσαὶ δ' αὐτὸ πατρίδες σ' ἡ μὲν φύσει, ἡ δὲ νόμοισιν ἔστερξαν πολλῆς ἐνεκα σωφροσύνης.⁵¹⁾」と書かれている。この墓主が前 346/5 年にサモスにおいて財務官を勤めた Διονύσιος Κολλυτεύς と同一視されることは一般に認められている⁵²⁾。従って彼は、遅くとも前 346/5 年までサモスに留まり、その後帰国して死亡し、埋葬の際にこのような墓碑銘を与えられたことになる。これもまた帰国の事例としても興味深い史料であるが、「生まれによる祖国」ἡ μὲν φύσειと「法による祖国」ἡ δὲ νόμοισινという表現は殊更に興味深い。このことから墓主が 2 つの祖国を意識し、それらを言い分けていたことが明確となる。しかしこの史料は、それぞれの語が母市と植民市のどちらを意味するのか、また二重の帰属意識がどのように矛盾なく統合されるのかと言った肝心なことには答えてくれない。これが墓碑史料の限界である。

そこで先に見たアテノドロスの事例と比較してみよう。彼は同時代史料によって「生まれながらの市民アテノドロス」ὁ δὲ δὴ γένει πολίτης 'Αθηνόδωρος⁵³⁾とも「アテナイ人」'Αθηναῖος⁵⁴⁾ともまた「イムブロス人アテノドロス」'Αθηνόδωρος 'Ιμβριος⁵⁵⁾とも呼ばれていた。彼はイムブロス植民者の子

で、恐らくは当地で生まれたのであろう。しかしここで言う「生まれながらの」とは、生まれた場所のことではなく、むしろ血筋のことを指していると考えるほうが妥当であろう。なぜならばこの表現は、市民権を付与されてアテナイ市民になったカリデーモスとの対比において言われた言葉であるからである。つまり、彼は血筋においてはアテナイ市民と呼ばれ、生まれ育った場所によってはイムブロス人と呼ばれたのである。すると「生まれながら」という表現は、区名が父から子へと受け継がれていくことと同意義と解せるかも知れない。翻ってこのことを Διονύσιος <A>λ<φ>ίνου に当てはめて見ると、φύσει と γένει の違いはあるが、「生まれによる祖国」とは血筋による祖国、即ち母市アテナイを、「法による祖国」とは植民者の従うべき諸規定による祖国³⁰、即ち植民市サモスを意味すると考えられるであろう。このような意識構造が一見矛盾する二重のアイデンティティーを統合していたと言えるのではないであろうか。

ただし二つのアイデンティティーは並列の関係にあったのではない。この墓碑が母市で出土したことからすれば、墓主がアテナイを敢えて祖国と呼ぶことから、逆に祖国からの疎遠さを感じずにはいられない。またそれと並んでサモスをも祖国と呼ぶことから、サモスへのより強い愛着が感じられる。ここに母市市民と植民者という二つのアイデンティティーの理論的統合と心理的分離が窺われるように思われる。

結論

一口でアテナイ植民者と言っても彼らの感情や態度は様々であった。法的には同じアテナイ人でありながら帰国して母市市民によって差別された植民者たちもいた。逆に、母市を自己の目的のために利用したり、戦争を仕掛けたり、両天秤に掛けたりしたたかな植民者たちもいた。このような実態を見れば、たとえ母市市民権を保持していようとも、植民者の立場から見れば、母市市民と植民市市民が緊密な関係にあったとか、植民市が母市に従属していたとは必ずしも言えないのではないであろうか。

確かに、植民者は母市と植民市双方に対するアイデンティティーを「生まれによる祖国」と「法による祖国」として矛盾なく併せ持っていた。しかしそのアイデンティティーは母市からの距離と世代によって大きく左右されたようである。非常に自立的な植民者二世が母市から4日行程離れたケルソネソスやイムブロスから生まれたことは偶然ではあるまい。また植民市を祖国と呼ぶことこそ、母市からの精神的分離を暗示している。

では、母市アテナイはこのような分離傾向にある植民市をどのようにして自らに繋ぎ止めようとしたのであろうか。前4世紀になると、それまで例えば「レムノス人」と表記されていた植民者が「レムノスに住むアテナイ人」というふうに表記されるような変化が生じたことはよく知られている。この現象と分離傾向とは何らかの関係があるのではないであろうか。この点は今後の課題としたい。

註

1) A. Boeckh, *Die Staatshaushaltung der Athener*, Berlin³1886 [¹1817], S.499-509; Ed. Meyer, *Geschichte des Altertums*, Stuttgart²1915, S.15-22; ders., *Forschung zur alten Geschichte*, Halle 1899, S.182-183; U. Kahrstedt, *Staatsgebiet und Staatsangehörige in Athen*, *Studien zum öffentlichen Recht Athens*, Stuttgart 1934, S.34; H. Berve, *Miltisdes*, *Studien zur Geschichte des Mannes und seiner Zeit*, *Hermes Einzelschrift* 2, 1937, S.51-53; V. Ehrenberg, *Zur älteren athenischen Kolonisation*, *Eunomia, Studia Graeca et Romana* I, Prag 1939, S.11-32; B. D. Meritt/ H. T. Wade-Gery/ M. F. McGregor, *The Athenian Tribute Lists*, Princeton 1950, p.284-297. A. J. Graham, *Colony and Mother City in Ancient Greece*, Manchester, 1964, p.166-210.

2) 植民者のプロソポグラフィックなデータは専ら J. Cargill, *Athenian Settlements of the Fourth Century B.C.*, Leiden・New Youk・Köln, 1995 (以下 JC と略す) を使用した。この本は、前4世紀のみならず、それ以前とそれ以後の植民者および

それに関連する 1500 以上に上る人物の情報をまとめたデータベースである。その他、J.Kirchner, *Prosopographia Attica*, reprint, Chicago, 1981, Berlin, 1901-1903 (以下 PA と略す); *A Lexicon of Greek Personal Names, vol.1, The Aegean Islands, Cyprus, Cyrenaica*, ed. by P. M. Fraser / E. Matthews, Oxford, 1987 (以下 LGPN.1 と略す); *A Lexicon of Greek Personal Names, vol.2, Attica*, ed. by M. J. Osborne / S. G. Byrne, Oxford, 1994 (以下 LGPN.2 と略す)も参照した。

3) 小西晴雄訳、『トゥーキュディデース』世界古典文学全集 11、筑摩書房、1971年、207 頁。

4) 飯尾都人訳、ストラボン『ギリシア・ローマ世界地誌』I、龍溪書舎、1994年、4 頁。

5) 小西、前掲書、11; 89; 207 頁。

6) H. L. Jones, *The Geography of Strabo* III, Loeb Classical Library, 1924, p.38, n.1; p.39.n.2.

ここで言及されたポリュピオスの数字は、そのオリジナルが残されていないため、比較して検証することが出来ない。

7) V. Amim, "Epikouros", *RE*, S.133.

8) 村川堅太郎訳、「アカルナイの人々」、『ギリシア悲劇』I アリストパネス(上)、筑摩書房、1986年、43 頁。

9) 「彼はまたテオゲネスがアイギナ誌に載するところによればアイギナに分配地を与えられたり。」村川、上掲書、101 頁。

10) Hans Gärtner, "Aristophanes.3", *Der Kleine Pauly*.

11) 村川、上掲書、101 頁

12) ラヴェンナ本古注の本編 28 頁註(3)「クレオンが彼に対し非市民なりとの訴えをなした。」村川、上掲書、101 頁。

13) 訳と解説は、今林万里子訳、「エウティプロン」、『プラトン全集』1、岩波書店、1980年を参照した。

14) フィライダイ及びキモンの行動については、桜井万里子、「「雅量」の人・キモン —そのエートスのアテナイ民主政における位置—」、同『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年、375-380 頁に詳しい。

- 15) 彼の優勝については、一回目は前 532 年、二回目は前 528 年、三回目は前 524 年のことである。Hans Gärtner, *Der Kleine Pauly*, s.v., Kimon.1..
- 16) 桜井、上掲書、379 頁。
- 17) P. Foucart, "Inscriptions des clérouques Athéniens d'Imbros", *BCH*, 7, 1883, p.160-162; IG.XII.8.48.
- 18) JC.494、前 399-300 年、レムノスのミュリナ出土。同類の他の事例、JC.71; 83; 92; 114; 353; 397; 414; 422; 425; 426; 427; 447; 468; 483; 504; 557; 569; 590; 598; 625; 630; 631; 650; 674; 687; 712; 763; 802; 806; 823; 825; 837; 890; 917; 930; 969; 991; 1017; 1018A; 1029; 1046; 1049; 1076; 1107; 1124; 1147; 1162; 1204; 1206; 1214; 1343; 1386; 1387; 1397; 1401; 1457.
- 19) JC.597、前 399-300 年、サラミス出土。同類の他の事例、JC.22; 980; 1250; 1380; 1390.
- 20) JC.1197、前 365-322 年、サモス出土。同類の他の事例、JC.180; 392A; 566; 630A; 550A; 888; 1035; 1038; 1125; 1411; 1431.
- 21) JC.1023、前 399-300 年、アッティカ出土。
- 22) JC.457、前 399-300 年、オリュントス出土。恐らくポティダイアから移動させられた。同類の他の事例、JC.240; 337; 422A; 642; 776; 864; 911; 985; 1157; 1213; 1219; 1243; 1244; 1400; 1531.
- 23) JC.264、前 375-325 年、サラミス出土。同類の他の事例、JC.39; 260A; 778; 780; 1282; 1314; 1339; 1488; 1423.
- 24) JC.365=367、前 346-338 年、アッティカ出土。
- 25) JC.1098、前 399-300 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.241.
- 26) JC.481、前 399 年頃、スキュロス出土。同類の他の事例、JC.270; 344; 524; 615; 643; 661A; 685; 688; 689; 707; 723A; 732; 756; 921; 979; 1044; 1154; 1158; 1342; 1516; 1519; 1523; 1544.
- 27) JC.5、前 375-325 年、サラミス出土。同類の他の事例、JC.76; 194; 205A; 219; 284; 298; 501; 622; 781; 794; 826; 859; 897; 920; 952A; 959; 1024; 1210; 1263; 1290; 1306; 1341; 1500; 1543.

- 28) JC.834、前 399-300 年、アッティカ出土。
- 29) JC.747、前 399-300 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.692.
- 30) JC.43、前 375-325 年、ポティダイア出土。同類の他の事例、JC.97; 610A.
- 31) JC.668、前 375-325 年、サラミス出土。
- 32) JC.855、前 399-300 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.130; 164; 182; 186; 1087; 1088; 1119.
- 33) JC.310、前 325-300 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.978; 999; 1053; 1063.
- 34) JC.40、前 399-300 年、サモス出土。
- 35) JC.1478、前 399 年頃、出土地不明、サラミスか。同類の他の事例、JC.1478.
- 36) JC.149、前 399-350 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.372; 951; 965; 1173; 1350.
- 37) JC.174、前 399-350 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.30.
- 38) JC.953、前 450-425 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.596.
- 39) JC.812、前 399-350 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.946.
- 40) JC.733、前 464 年、アッティカ出土。同類の他の事例、JC.1472.
- 41) JC.73、前 500-480 年、レムノスのヘファイスティア出土。名簿に記載された他の名、JC.402; 508; 832; 861; 1043; 1262; 1279; 1428; 1429; 1480; 1499; 1509; 1514; 1524.
- 42) JC.1166、前 450-400 年、アッティカ出土。名簿に記載された他の名、JC.2; 64; 87; 204; 216; 235; 304; 404; 550; 670; 744; 983; 1060; 1073; 1092; 1258; 1324; 1360.
- 43) JC.300、前 450-400 年、アッティカ出土。名簿に記載された他の名、JC.408; 552; 927.
- 44) JC.97.
- 45) JC.1023; IG.II²7180.
- 46) IG.II²7180.
- 47) Clairmont, C. C., *Gravestone and Epigram, Greek Memorials from the Archaic and*

Classical Period, Mainz on Rhein, 1970, No.80, p.154-155.

- 48) Graham, *op.cit.*, p.186.
- 49) Cargill, *op.cit.*, p.99.
- 50) JC.365=367、前 346-338 年。
- 51) IG.II²11169.
- 52) Cargill, *op.cit.*, p.111-112.
- 53) Demosth.23.12.
- 54) Foucart, P., *Inscriptions des clérouques athéniens d' Imbros*, *BCH*, 7, 1883, p.160-162.
- 55) Aen.Tact.24.10; Plut.Phoc.18.4.
- 56) この表現は、前 460 年頃に刻まれた東ロクリスからナウパクトスへの植民者に関する碑文(ML.20.1-2)に見られる、「ヒュポクナミデイオンのロクリス人は、ナウパクトス人になった後には、ナウパクトス人であるので・・・」
Λοκρὸν τὸν Ψποκναμίδιον, ἐπεὶ καὶ Ναυπάκτιος γένηται, Ναυπάκτιον εἶναι---とい
う規定を想起させる。「法による祖国」とは、このように植民に伴う規定に従
って得た祖国のことを意味するものと思われる。ナウパクトス碑文の分析につ
いては、拙論、「前 5 世紀におけるアテーナイ植民者の市民権 —その両義性
をめぐって—」、『西洋古典学研究』43 号、1995 年、32-41 頁、参照。

第 10 章 前 4 世紀におけるアテナイ植民者の市民権

— その可変性を巡って —

はじめに

古代ギリシアにおける歴史的な国家形態であるポリスには、近代的な意味での国号というものはなく、ポリス市民は自分たちの国を例えば複数で「アテナイ人」とか「ラケダイモン人」というように、市民の総体として表現していた。このことはポリスが人的結合体そのものであることの端的な現われである¹⁾。実際に、ポリスとは、例外的に大きなアテナイの場合でさえも、市民人口が前 5 世紀に 3 万から 4 万、前 4 世紀末には 2 万、領土面積も佐賀県程度に過ぎず、普通のポリスは市民人口数百人から千人、せいぜい数千人といった程度の非常に小さな国家であった。しかし、小さいとは言え、千単位や万単位の市民がいきなり一つの人的結合体を形成していたのではない。市民とポリスの間には、数十人から百人程度の規模のデーモスやフラトリアといった中間団体が多数存在し、そこにこそ相識性の高い社会が実現され、それら一つ一つが強い自立性を持った人的結合体を形成していたのである。従ってポリスは、そのような諸人的結合体の重層的な総体であると言える。そして古典期のギリシア人は、このような国家形態に最高の価値を認め、その中でこそ彼らの真価を発揮し、独自の文明を築くことが出来たのである。

ポリスはどのようにして衰退したのか。小稿ではこの問題に、植民活動という視点からの接近を試みたい。ポリスという小さな国家を維持していくためには、相対的な余剰人口を常に排出することが不可欠であり、この排出行為が植民活動であった。つまり、植民活動とは、ポリスの維持・再生産の営みであったと言える。それならば、植民活動を観察することによって、ポリスの衰退の過程を跡付けることが出来るのではないか。小稿で注目するのは、植民

者の呼称の変化である。例えば、母市から海路3日以上も離れたレムノス島及びイムブロス島への植民者が、前5世紀においては、母市市民から「レムノス人」或いはレムノスの2つの都市の名に因んで「ミュリナ人」「ヘファイステイア人」及び「イムブロス人」などと呼ばれていたのに²⁾、前4世紀においては、「ミュリナに住むアテナイ人」「ヘファイステイアに住むアテナイ人」或いは「イムブロスに住むアテナイ人」と名乗るようになり³⁾、それと呼応してアテナイに住むアテナイ人もまた彼らを「我々の市民」⁴⁾、それらの島々を「我々の財産」⁵⁾、と呼ぶようになった現象である。この現象は「アテナイ人たち」という人的結合体があたかも海を超えて拡大したかのような印象を与え⁶⁾、ポリスの本質に関わる変化の一つの指標として注目に値する。

小稿では、まずこの呼称の変化の背景と原因を前5世紀末から前4世紀初頭におけるアテナイの軍事的敗北と政治的危機に求め、次にこの現象を母市と植民市の実質的な結合、言い替えると母市の拡大と見なし、最後に母市の拡大に対するポリス的価値観の側からの抵抗を明らかにする。以上の考察を通して、前4世紀におけるポリス的理想と現実の葛藤が明らかにされるであろう。

第1節 呼称の変化の原因

1. 入れ替わりの可能性の検討

この呼称の変化の原因として、まず植民者の入れ替わりの可能性が考えられる⁷⁾。即ち、前5世紀において「レムノス人」と呼ばれていた植民者は、前404年の敗北の際にアッティカの外にいるアテナイ人がリュサンドロスによって強制帰国させられた時⁸⁾、島は先住民に返還されたが、その後アテナイは再び同島を占領し、前394年までに新たに「レムノスに住むアテナイ人」と呼ばれる植民者を送り出したとする解釈である。事情はイムブロスとスキュロスについても同様である。つまり、入れ替わり説は、植民者の追放を前提として

いるのである。しかし、この前提は本当に成り立つのであろうか。

鍵となる史料は、アンドキデスの証言である。彼は、前 391 年のアテナイ・スパルタ間の和平締結のためにスパルタを訪れた使節の一人であったが、今回の和平条件がいかに穏和なものであるかを、前 404 年の和平条約との比較において説明し、和平締結を力説した。その中で彼は、レムノス・イムブロス・スキュロスの 3 植民市に関して次のように言及している。「レムノス・イムブロス・スキュロスは、かつては(前 404 年)所有するものが所有すべきこと *ἔχειν τοὺς ἔχοντας* が決議されたが、しかし今回は(前 391 年)我々のものたるべきこと *ἡμετέρας εἶναι* が提案された⁹⁾。」ここに見られる「所有するものが所有すべきこと」という一節は何を指しているのか。通説では、これがリュサンドロスの帰国命令と同一視され、島を先住民に返還すべきことと解釈されるが、果たしてそのように読めるのか。

このことを検証するためには、この一節をこれら 3 島を巡る一連の平和条約の文脈の中で読む必要がある。まず前 405 年にスパルタがアテナイに提案した平和条約には「アッティカに加えて、レムノス・イムブロス・スキュロスを持つべきこと *ἔχοντας*」が保証されていた¹⁰⁾。また前 391 年のスパルタ・アテナイ会談では、アテナイ人は「レムノス・イムブロス・スキュロスが奪われるのではないかと、諸都市と島々が自治独立たること *αὐτονόμους εἶναι* が同意されること」を恐れた¹¹⁾。そして前 386 年の王の平和においては、王のものと認められたポリス以外のギリシア人ポリスは、大小を問わず自治独立のままであるが *αὐτονόμους εἶναι*、レムノス・イムブロス・スキュロスは例外であり、「これらは昔と同様に、アテナイ人のものたるべきこと *εἶναι Ἀθηναίων*」が決定されたのであった¹²⁾。つまり前 5 世紀末から前 4 世紀初頭にかけての 3 島の領有問題は、母市からの島の分離独立を巡る問題であったのである。恐らく前 5 世紀末から既に、3 島はアッティカに準ずる領土と見なされ得るほどに緊密な関係になっていたのであろう。従って、アンドキデスの一節をこの文脈で読むならば、「所有するものが所有すべきこと」とは、植民市に自治独立を与えるべきこと、言い替えると、アテナイから 3 島を分離独立させるべきこと、

と読むべきではないであろうか。実際に、島の再征服と再植民を伝える直接的な史料は存在しないのである。

以上の考察から、「入れ替わり説」の前提とされている植民者の追放も、先住民に対する島の返還も、その後の島の再征服と再植民も証明されない。つまり、呼称の変化は、植民者の入れ替わりによって起こったのではなさそうである。

2. 市民権一括賦与の可能性の検討

入れ替わりがなかったとすれば、次に考えられるのは、植民者に母市市民権が一括して賦与された可能性である。市民権賦与とは「アテナイの存続あるいは発展に大いに貢献した者に対してなされた」もので、「アテナイにとって有用な存在を市民団の中にとり込むことでその有用性を公認し、同時に内在化させる機能」を有する言わば「他者統合の手段」であったと定義付けられる¹³⁾。この観点からすれば、アテナイは、前5世紀中よく軍事行動を共にしたレムノスやイムブロスの植民者に母市市民権を賦与することによって、彼らを母市市民団に統合したと解釈することは合理的であるように思える。果たしてこの解釈は正しいか。

まず、呼称の変化をアテナイの一連の市民権賦与政策の流れの中に位置付けて考える必要がある。アテナイは前480年から前380年までの100年間に、知られる限りにおいて、28件の市民権賦与を行った¹⁴⁾。その内訳を見ると、①アテナイに善行をなした外国の王や市民あるいはその子孫などの個人、②不足する兵員を補うために解放を条件として動員された奴隷や外人の集団、③アテナイに対する忠実な態度を崩さなかった他の市民団、の3つのグループに大別され、年代的には、ペロポネソス戦争の開始からシケリア遠征の失敗、アテナイの降伏、30人僭主の樹立、内戦そして和解へと至る、前431年から前401/0年までのアテナイの危機の時代に全体の19件が集中している。一方レムノスの場合、呼称の変化が生じたのが前410年代から前390年代の間であっ

たこと、またその変化の対象がレムノス人という市民団全体であったことから、③に分類された前 427 年のプラタイア市民に対する賦与および前 405 年のサモス市民に対する賦与と似た状況にあると言える¹⁵⁾。そこで比較のためにこれら 2 つの事例について詳しく検討して行こう。

まずプラタイア人について見ると、前 429 年以降プラタイアはテーベによって包囲されていたが、約 200 人のプラタイア人がそれを突破してアテナイへ至ったことが直接の契機となって、彼らにアテナイ市民権が賦与されることとなった。この決議の実物は存在しないが、そのコピーはデモステネスの『アネイラ弾劾』に伝えられており¹⁶⁾、それによれば「プラタイア人はアテナイ人たるべきこと Πλαταιέας εἶναι Ἀθηναίους。」及び「プラタイア人を区と部族とに割り当てるべきこと κατανεῖμαι δὲ τοὺς Πλαταιέας εἰς τοὺς δήμους καὶ τὰς φυλάς。」が規定され、それには「彼らが割り当てられた後には、アテナイの民衆の側から与えられない限り、さらにアテナイ人になることは、いかなるプラタイア人にも許可されない。」という制限が付けられていた。つまりここで市民となったのはアテナイに到達した約 200 人のみで、彼らはアテナイの下部組織である区と部族に登録されたのである。彼らが下部組織に登録されたということは、この市民権賦与が実質的な権利を伴うものであったことを示していると考えられる。

次にサモス人について見ると¹⁷⁾、市民権賦与の理由は、前 405 年にアテナイがアイゴスポタモイの海戦に破れ、戦局が極端に悪化したにもかかわらず、サモスの民主派がアテナイに対する忠誠を失わなかったことにある。この忠誠に報いる市民権賦与が前 405/4 年に決議された。その当時の碑文は現存しないが、前 403/2 年に復活民主政の下でその再確認の決議が行われ、それが刻まれた碑文の中に前 405/4 年の決議のコピーも一緒に刻まれて現存している。それによると、まず第一動議において「サモス人はアテナイ人たるべきこと Σαμῖος Ἀθημαῖος εἶναι」が規定され、次にそれに対する追加動議において、アテナイを訪れたサモスの使節たちを指して「彼らを直ちに区と十の部族に割り当てるべきこと καὶ νεῖμαι [αὐτὸς αὐτίκα μάλα εἰς τὸς δήμος καὶ τὰς φυλάς

δέκαχα。」が規定されている。このことから、全てのサモス人はアテナイ市民になったが、区と部族に登録されたのは使節たちだけであったことが判る。つまり実質的な市民権を賦与されたのは使節たちだけであり、一般のサモス人は名目的な市民権を賦与されたに過ぎないということになる。

プラタイア人とサモス人に関する考察から明らかになったことは、彼らに対する市民権賦与には、全員にではないが、区と部族への登録が伴っていたということである。そして正にこのことがレムノスの場合と決定的に異なる点であると言える。なぜならば、レムノスの場合には、全ての植民者は、呼称の変化が生じる以前から既にアテナイの区と部族に属していたからである¹⁸⁾。つまり、区や部族への分属を実質的な市民権の指標とするならば、「レムノス人」は母市市民権の本質的な部分は既に持っており¹⁹⁾、その上で名目的な呼称の変化が生じたと見るべきであろう。

3. 呼称の変化の政治的な意味

呼称の変化について見落としてはならないことは、そもそもこの現象がこの時にだけ生じたのではないということである。レムノスのミュリナを代表例として挙げれば、前 404/3 年から前 394/3 年までのアテナイとレムノスが分離されていた時期に刻まれたと思われる顕彰碑文には、復元が正しければ「ミュリナ人」という表現が見られる²⁰⁾。同様に前 318 年以後の再びアテナイとレムノスが分離されていた時期に刻まれたと思われる別の顕彰碑文にも、復元が正しければ「ミュリナ人」という表現が確認される²¹⁾。そしてそれ以降の復帰の時期には再び「ミュリナにいるアテナイ人」という表現が現われるようになる²²⁾。当然その都度に住民の入れ替わりは起こっていない²³⁾。つまり、呼称の変化は、すぐれて政治的な意味を持っていたと言えるのである。

このことを前 5 世紀末から前 4 世紀初頭におけるアテナイの状況に当てはめると、軍事的敗北に伴って母市植民市関係が断ち切れそうになったとき、それを防ぐために両者の不可分性を強調して「レムノス人」から「レムノ

スに住むアテナイ人」へという呼称の変化が生じたのではないであろうか。呼称の変化は、外国の市民に対する市民権一括賦与とは異なるものであったが、他者統合という意味においては、同一線上にあるものと言えるであろう。

第2節 ポリスの拡大

では、その実態はいかなるものであったのか。その前に、前4世紀におけるアテナイ植民市の広がりを見つめておこう。アテナイは、前6世紀末から前5世紀末にかけて、知られる限りで、22箇所に植民市を建設したが²⁹⁾、前404年の敗北に伴って、サラミスを除く全植民市を一旦失い、前4世紀になるとそうそうに再獲得しはじめた。前4世紀に知られるアテナイの植民市は8箇所あり、その内、サラミスのみが継続で、レムノスとイムプロスとスキュロスが前394年までに返還されたもの、ケルソネソスとポティダイアはそれぞれ前365年と前361年に再建されたもの、そしてサモスとアドリアはそれぞれ前365年と前324年に新設されたものである。これらはいずれも、サラミスを除いて、再び前314年までには順次消滅していった。

これらの植民市は、サラミスとアドリアを除いて³⁰⁾、評議会と民会を備えた地方自治体の様相を呈していた。これらは、アテナイの制度を真似て小型化したもので、同様の手続きを行い、同様の書式の決議文を掲示し、同じ十部族による当番評議会が存在し、同じように議長、書記といった各種の役人が植民者によって選出された。

しかし、これらの植民市は、母市に対して従属的な立場にあった³¹⁾。このことを最も顕著に表わしているのが、母市から植民市へ派遣される各種の役人の存在である。これに関してアリストテレスの『アテナイ人の国制』は3箇所で言及している³²⁾。①「彼らはまたサラミスへのアルコン εις Σαλαμῖνα ἄρχοντα とペイライエウスのための区長とを籤で選出する。彼らはそれぞれの場所でディオニュシア祭を行い、合唱隊奉仕者を任命する。サラミスにおいてはまたこのアルコンの名が公文書に記録される。」②「そしてまた彼らはレム

ノスへの騎兵長官 εἰς Λήμνον ἵππαρχονを挙手で選挙する。彼はレムノスにおける騎兵を監督する。」③「・・・次にサラミスへのアルコンは ἀρχων εἰς Σαλαμίνα 1日1ドラクマを受ける。・・・またサモス、スキュロス、レムノス、イムブロス に向けて送られる役人たちは皆 ἀρχαὶ εἰς Σάμον ἢ Σκύρον ἢ Λήμνον ἢ Ἴμβρον、食費として金を受け取る。」これらの記述から、『アテナイ人の国制』が書かれた前 328/7 年頃に存在していた全てのアテナイの植民市に何らかの役人が派遣されていたことが判る²⁹⁾。

サラミスはアテナイに近いためか軍事的統制は受けないが、祭の挙行においては母市からの籤で選ばれたアルコンによって統制されていた。一方レムノスはアテナイから遠く離れ、トラキアやマケドニアと接する言わば前線であったために、籤ではなく挙手で選出された騎兵長官が、恐らく騎兵隊と共に当地に派遣されたのであろう²⁹⁾。またサモス、スキュロス、レムノス、イムブロスへの役人たちは、その選出方法、任務について不明であるが、彼らに支払われるものが金額としてではなく食費として示されていることから、彼らは下級の臨時的な役人であったのかも知れない。しかしレムノスについては、前 370/69 年の早い時期から 2 人の植民役人 κ[ληροα]ρχόντων が派遣されていた可能性があり、彼らはアテナイで選ばれた 1 年任期のクレルーコイのためのアルコンたちであったと考えられている³⁰⁾。

植民市における有事の際には将軍たち στρατηγοίが軍隊を率いて防衛に向かったことはよく知られている。しかし将軍は民事にも携わった。前 340 年の碑文の断片には³¹⁾、将軍カレースがケルソネソスのエライウス人とそこに住むアテナイ人との間の不和の解決に当たったことが窺えるし、前 329/8 年のエレウシスへの初穂の会計文書には、奉納のために、サラミス、スキュロス、イムブロス及びレムノスのミュリナとヘファイスティアに将軍が送られ、彼らが初穂を持ち帰ったことが記されている³²⁾。またサモスには特別にサモスへの将軍[τ]ὸν [σ]τρα[τ]ηγὸν [τ]ὸν [τῶν Ἀ]θηναίων εἰς Σάμονが任じられていたことが知られている³³⁾。このような植民市への派遣役人が確認されるのは、前 4 世紀になってからのことである。

その他に植民市の従属性を示す事象として、母市の暦が採用されていたこと³⁴⁾、貨幣の鑄造権がなかったこと³⁵⁾、裁判が母市で行われていたこと³⁶⁾、などが挙げられる。

以上の状況から、自ら「アテナイ人」と名乗り、母市市民から「我々の市民」「我々の財産」と呼ばれた前4世紀におけるアテナイ植民市は、実質的に母市に統合されていたと言えるであろう。そして植民市の防衛と統制が『アテナイ人の国制』の一部を占めるに至った事態は、「アテナイ人」という人的結合体、即ちポリスが海を超えて拡大したという意識を市民に与えることになったと考えられる。

第3節 ポリスの拡大に対する抵抗

1. 植民者の子エピクーロスの市民登録

以上のようなポリスの拡大に対して、アテナイ市民たちはどのような反応を示したのであるだろうか。一般的に言って、国家形態は時流に応じて素早く変わることもあるが、人々の価値観はそう簡単には変わるものではない。当時のアテナイにもこのことは当てはまるように思える。即ちアテナイ市民たちが、一方ではこのような変質を認めながら、他方では以前にも増して市民間の相識性を高め、より一層ポリスを意識させようと努力した痕跡が認められるのである。このようなポリスの拡大に対するポリス的価値観の抵抗は、様々な場面で行われたであろうが、それを明らかにするためには、市民団の再生産の場である市民登録におけるそれを考察するのが最も有効であろう。そこで我々は、エピクーロスという一植民者の子の市民登録を手掛かりとして、その実態と効力について考察しよう。ここで取り上げるエピクーロスとは、エピクーロス学派の創始者として有名なあの哲学者のエピクーロスのことである。

彼の生い立ちについては、ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』によって以下のように伝えられている³⁷⁾。「ネオクレスとカイ

レストラテの子エピクーロスは、メトロドロスが『良き生まれについて』の中で述べているように、アテナイ人であり、ガルゲットス区の人であり、フィライダイ家の出身であった。その他ヘラクレイデスもまた『ソティオンの抜粋』の中で、彼はアテナイ人がサモスにクレールーコイを送った後(前 352/1 年)³⁸⁾、そこで育てられ³⁹⁾、18 歳の時に *ὄκτω καὶ δεκέτη* アテナイに帰った(前 324 年 7 月)⁴⁰⁾、と伝えている。折しもクセノクラテスがアカデメイアで、アリストテレスがカルキスで、講義をしていた時であった。マケドニアのアレクサンドロスが死に(前 323 年 6 月 13 日)、アテナイ人がペルディッカスによって追放された時(前 322 年夏)⁴¹⁾、彼は父に会いにコロフォンへ向かった。しばらくの間、彼はそこに留まり、学生を集めたが、アナクシクラテスがアルコンの時(前 307/6 年)、再びアテナイに戻った。」

ディオゲネス・ラエルティオス自身は後 3 世紀の人で⁴²⁾、前 4 世紀後半から前 3 世紀にかけて生きたエピクーロスから見ればかなり後の人であるが、彼が引用した『良き生まれについて』の著者ラムプサコスのメトロドロスはエピクーロスの友人であり⁴³⁾、『ソティオンの抜粋』に引用されたポントスのヘラクレイデスもまた彼の同時代人である⁴⁴⁾。従ってこの記述には一定の信憑性があると見て差し支えない。

ここで注目したいのは、エピクーロスがサモスへの植民者の子供でありながら⁴⁵⁾、アテナイ人でありガルゲットス区の区民であったということである。どのようにして彼はアテナイ市民に登録されたのであろうか。ポイントは、彼が 18 歳の時にアテナイに戻ったという箇所である。ディオゲネスの文には帰国の理由が述べられていないが、ストラボンの『地理学』には、それがエフエーボスになるためであったことが明記されている⁴⁶⁾。エフエーボスになるということは、当時のアテナイにおいては、正に市民登録されることを意味したのであるから、この文は、アテナイ植民者の市民登録を伝える史料ということになる。この種の史料は、今のところ他に存在しない。これをどれ程一般化することが可能かは判断出来ないが⁴⁷⁾、少なくともこの史料から言えることは、サモスで生まれた植民者の子エピクーロスは、市民登録されるために 18 歳の

時にわざわざアテナイに戻らなければならなかったということである。

2. エフェーピアと市民登録

エフェーボスになるということは、ポリスの拡大に対する抵抗としてどのような意味があったのであろうか。このことの考察に入る前提として、エフェーボスを訓練する制度エフェーピアが具体的にどのようなものであったか見てみよう。これに関しては、アリストテレスの『アテナイ人の国制』がまとまった記述を伝えている⁴⁸⁾。これを筆者なりに整理して試訳すると以下のようになる。

1) 市民の資格

「現行の国制 τῆς πολιτείας は以下のようなものである⁴⁹⁾。市民 ἀστών である両親から生まれた者たちが国制 τῆς πολιτείας に与り、18 歳に ὀκτωκαίδεκα ἔτη になったら区の成員として登録される。

2) 市民の資格審査

a. 区民総会による審査と登録

登録する時には、区民たちが彼らに関して誓を立てた後に投票を行う。まず最初は、彼らが法定年齢に達しているか否かで、もし認めない場合には、彼らは少年組に戻される。次には、彼らが自由人であり合法的な生まれであると認めるか否かで、その際自由人ではないという反対投票がなされた場合には、疑われた側の者は陪審廷に提訴し、疑った側の区民たちは 5 人の告発者を彼らの中から選出する。そしてもし彼を登録することが非合法であると認められた場合には、ポリスはその者を奴隷として売却する。一方もし彼が勝訴した場合には、区民たちは彼を絶対に登録しなければならない。(1)」

b. 評議会による審査

「その後、評議会が登録された者たちを審査する。もし誰かが 18 歳に達していないと認められた場合には、その者の登録を行った区民たちに罰金が

課される。

3) エフェーボイの訓練

a. 第一年目

エフェーボイの審査が終了すると、彼らの父親たちが部族ごとに集まり、誓を立てた後に、部族民の中から 40 歳以上で、エフェーボイを監督するのに最適任と思われる者 3 人を選出する。彼らの中から民会 *δημος* は部族ごとに 1 人の訓育官 *σωφρονιστήν* と、また全てのエフェーボイのために 1 人の監督官 *κοσμητήν* とを挙手で選出する。(2)」「彼らはエフェーボイを集め、まず神殿を巡って参拝し、次にペイライエウスへ連れていく。そしてある者たちはムニキアに、ある者たちはアクテに駐屯する。それから民会は彼らのための 2 人の教練係 *παιδοτρίβας* を、そして重装歩兵戦術、弓の射方、投げ槍の投げ方、弩砲の撃ち方を教える教師たち *διδασκάλους* とを挙手で選出する。また各々の訓育官には扶養費として 1 日 1 ドラクマが、各々のエフェーボイには 4 オボロスが支給される。各々の訓育官は、自分の部族民たちから受け取った金を持ってアゴラへ出かけ、皆に必要なものをまとめて買い(というのは彼らは部族ごとに共食したからである)、他の全てのことの世話をする。(3)」「最初の年は、彼らは以上のようにして過ごす。

b. 第二年目

次の年は、劇場で民会 *ἐκκλησίας* が開催される時³⁰⁾、彼らは自分たちが身に付けた重装歩兵部隊としての資質を民衆に示し、そしてポリスから丸盾と槍の支給を受ける。それから田舎を巡回し、砦で時を過ごす。(4)」「彼らは 2 年間駐屯するが、その間軍衣を着用し、あらゆる税を免除される。また訴訟を受けることも起こすことも出来ない。というのは彼らの任務から逃れる口実をなくすためである。但し、財産相続と女相続人に関することと、氏族の神官職に就く場合は、この限りではない。以上の 2 年が終了してやっと、彼らは残りの諸権利を有することになる。(5)」

以上の記述から、エフェーピアとは、合法的な結婚から生まれた自由

人で 18 歳に達した青年を区と評議会が審査して区民名簿に登録するという市民登録、そしてそれと直結したポリスによる青年たちの軍事訓練のことである。青年の訓練という意味での起源は古く、恐らく重装歩兵以前にまで遡ると思われるが⁵¹⁾、『アテナイ人の国制』に見えるような制度としての起源は、前 338 年のカイロネイアにおける敗北の後、おそらく前 336/5 年頃であり⁵²⁾、その目的はリュクルゴスによって計画された市民軍の再建にあったと考えられている⁵³⁾。このような制度はヘレニズム期に入って軍事的な性格から教育的な性格へと変質していくが⁵⁴⁾、アテナイを中心として全ギリシアに普及し、帝政期まで至る所で似た制度が見られた⁵⁵⁾。

アッティカに住む青年であれ、植民市に住む青年であれ、市民に登録されることを欲するものは皆、区民総会と評議会による審査に合格して区民名簿に登録され、国家の課す 2 年間の軍事訓練を果たさなければならなかったのである。このようなエフェービアを現行の国制として紹介した『アテナイ人の国制』が書かれたのが前 328/7 年頃であり⁵⁶⁾、彼のエフェーボス時代が前 324 年の夏から前 322 年の夏までなので⁵⁷⁾、上記の記述は正にエピクローロスが経験した制度ということになる⁵⁸⁾。

3. 抵抗としてのエフェービア

エフェービアの果たした機能は、一般に言われているように市民登録と軍事訓練だけであろうか。ここではエフェービアをポリスの拡大に対する抵抗として位置付け、それが持つ市民間の相識性を強化する機能、及び市民に一層ポリスを意識させる機能に注目したい。

まず、市民登録を希望する青年は、例え植民者であっても、父の所属する区の区民総会に実際に赴いて、そこで資格審査を受けなければならなかった。この場には恐らくフラトリアの成員たちも立ち合ったであろう⁵⁹⁾。審査が具体的にどのように進められたかは判らないが、面識による認知、証人による証言が重要な決め手になったであろうことは容易に想像できる⁶⁰⁾。

このような審査に合格したエフェーボイは、第一年目の行事として、ペライエウス港のムニキアとアクテの砦に分かれて駐屯し、そこを守備しつつ、彼らの父親たちからポリスを守るための様々な訓練を受けた。彼らは、部族毎に組織され、部族毎に共食した。かつて何らかの祭の際に同じ部族民として面識があったかも知れないが、共に汗を流し、語り、寝食を共にして、彼らは、ポリスの直接の下部組織である部族民としての面識と共属意識を持つようになったと考えられる。またその間に青年たちは父親たちから、ポリスとは何か、ポリス市民とは何かを厳しく教わったに違いない。それと同時に実際にポリス防衛の任務に就くことによって自分が守るべきポリスを一層強く意識したのであろう。

アテナイの全市民が互いに知り合うということはそもそも不可能であったが⁶¹⁾、それでもエフェービアの訓練の中でそれを作り出そうとする努力がなされていたように見える。まず第二年目の行事としてのディオニュソス劇場におけるエフェーボイの閲兵式が挙げられる。これはそこで民会が開催される時に併せて行われたのであるから、少なくともアテナイ市あるいはその周辺に住む何千人もの市民が⁶²⁾、将来を背負って立つ若者立ちの顔を頼もしく見守ったであろう。そこで彼らがポリスから受け取った丸盾と槍は、ポリスの象徴と言えるかも知れない。またエフェーボイは一目でそれと分かるクラミュスという黄色の制服とペタソスというフェルト製の制帽を身に付け、アッティカの地方を巡回した⁶³⁾。このことによって彼らは、民会に出席する機会の少ない田舎の市民にも面識を作ることが可能となったと考えられる。同時にアッティカというポリスの領土を身を持って体験し、意識したことであろう⁶⁴⁾。

以上のように、エフェービアにおいては、区、フラトリア、部族、アテナイ、アッティカという様々なレベルで、面識とポリス意識とが築かれていたことが判る。そしてそれにエピクーロスも加わったということは、前4世紀末においては、それがさらに植民市にまで広がっていたことを示している。

おわりに 抵抗の限界

最後に、今まで考察してきたポリスの拡大に対する抵抗の限界について考察して結論としよう。ディオゲネスによれば、エピクローロスには様々な悪評が付きまどっていたらしい⁶⁵⁾。例えば、犬のように恥知らずで最も育ちの悪い者、惨めな給金もらい、遊女との同棲、50通もの淫らな恋文、おべっか使い、快樂主義者、卑猥な話をする男、無知、大食家、貧弱な体質、口汚い男、等等など。これらが事実かどうかは、ディオゲネス自身が反駁したように、疑わしいことであったかも知れないが、その中で見逃せないのが次の一文である⁶⁶⁾。「彼はまた合法の市民 *ἀστών* ではないとティモクラテスも言っているし、ヘロドトスも『エピクローロスのエフェービアについて』の中で述べている⁶⁷⁾。」植民者の子エピクロースは、厳しい審査と訓練に耐えて晴れてアテナイ市民に登録されたのは事実であろう。それにもかかわらず、このような悪評がたったのは、彼が植民市生まれの子であり、子供の時から区やフラトリアに面識がなかったために、何かうさん臭い男と思われたためであろうか。理由は他にもあったかも知れないが、制度的には受け入れられても感情的には疎外された、植民者の子の市民登録の実態と、ポリスの拡大に対する抵抗の限界が、この証言から読み取れないであろうか。

アテナイは前5世紀末から前4世紀前半にかけての、母市と植民市とを切り離そうとする国際的圧力に対抗して、逆に植民市との統合を促進し、ポリスとしては言わば肥大化した。この肥大化は時代の要請に即したものであり、それなりの成果を挙げることが出来たが、ポリス市民の理想とする国家形態からは逸脱するものであった。そこでエフェービアの制度を整備してポリスの相識性を取り戻す努力がさなれた。しかしこの対抗措置も十分な効果を挙げることが出来なかったようである。前4世紀のアテナイは、ポリスの肥大化という現実を受け入れながら、同時に、小さなポリスを維持するという理想を追及した。理想と現実の葛藤がここに見られる。従って当時のアテナイというポリスは、確かに変質しつつあったが、ポリス的価値観は依然として健在であった。

この意味において、ポリスは未だ衰退に至っていなかったと評価すべきであろう。しかし逆に言えば、この相識社会への執着が、ポリスをポリス以上のものに止揚することを妨げた一つの要因であったのかも知れない⁶⁸⁾。

註

1) 小稿は、1995年度広島史学研究会大会で開かれたシンポジウム「人的結合と支配の論理」において西洋史から報告した「前4世紀におけるアテナイ植民者の市民権 その可変性をめぐって」と題する発表に加筆修正を加えたものである。

2) ①貢納表、括弧内は年代。Λέμνιοι=CIA.I.228.1.(452); 'Εφαιστιῆς=CIA.I.227.2.(453); CIA.I.233.1.(447); CIA.I.233.2.(447); CIA.I.235.4.(445); CIA.I.236.5.(444); CIA.I.237.5.(443); CIA.I.238.5.(442); CIA.I.239.1.(441); CIA.I.242.4.(438); Μυρναῖοι=CIA.I.233.2.(447); CIA.I.235.4.(445); CIA.I.236.5.(444); CIA.I.237.5.(443); CIA.I.238.5.(442); CIA.I.239.2.(441); Ἴμβριοι=CIA.I.233.2.(447); CIA.I.234.5.(446); CIA.I.237.5.(443); CIA.I.238.5.(442); CIA.I.239.1.(441)。②母市における戦死者名簿、Λημνίων ἐγ Μυρίν[ης], IG. I2947. (431-404); Λήμνιοι, IG. I2948. (431-404)。文献史料の場合、'Αντίδωρος Λήμνιος μόνος τῶν σὺν βασιλεί 'Ελλήνων, Hdt.8.11. (490); καὶ Ἴμβριοι καὶ Λήμνιοι, Thuc.3.5.1. (428); Λημνίους δὲ καὶ Ἴμβρίους τοὺς παρόντας, Thuc.4.28.4. (425); καὶ Λημνίων καὶ Ἴμβρίων τὸ κράτιστον, Thuc.5.8.2. (422); καὶ αὐτοῖς τῇ αὐτῇ φωνῇ καὶ νομίμοις ἔτι χρώμενοι Λήμνιοι καὶ Ἴμβριοι, Thuc.7.57.2. (415); καὶ Αἰγινήται, οἱ τότε Αἰγίαν εἶχον, Thuc.7.57.2. (415); καὶ ἔτι 'Εστιαίης οἱ ἐν Εὐβοίᾳ 'Εστίαϊαν οἱ κοῦντες Thuc.7.57.2. (415); φράζει τοῖσι ἦκουσι 'Αθηναίων (=τοὺς τετρακισχιλίους τοὺς κληρουχέοντας), Hdt.6.100. (490)。

3) 植民市における評議会及び民会決議碑文、τῶι δήμωι τῶι 'Αθηναίων τῶν

ἐ[ν][Μυρίνει], IG. XII. 8.3. (356); ὁ δῆ[μος ὁ] Ἀθ[ην]αίων ὁ ἐ[ν Μυρ]ίνει οἰκῶν, IG. XII. 8.4. (348); περὶ τὸν δῆμον τὸν [Ἀθηναίων τῶν ἐν Μυρίνει], IG. XII. 8.5. (?); [τὸν δῆμον] [τ]ὸν Ἀθη[ναίων τῶν ἐν Μυρίνει], IG. XII. 8.6. (?); [περὶ τὸν δῆ]μον τὸ[ν] [Ἀθηναίων τῶν ἐν Μυρίνει], IG. XII. 8.9. (?); [ὁ δῆμος ὁ Ἀθη]ναίων τῶν ἐν Μυρίνει, IG. XII. 8.10. (?); π[ρ]ὸς τὸν [δῆμον τῶν Ἀθηναίων][τῶν ἐν Ἡφαιστίαι, IG. XII. 8.15. (?); [ὁ δῆμος ὁ] Ἀθηναίων ἐν Ἡφαιστίαι, IG. XII. 8.26. (?); [τῶι δήμωι τῶι Ἀθηναίων τῶν ἐν Ἴμβρω, IG. XII. 8.46. (318); ὁ ἀπ' ἄστεως στρατηγὸς Ἀθηναίων τῶν ἐν Ἴμβρω, Di. Syll. 659. (322 ?); δεδόχθαι τῶι δήμωι τῶν Ἀθηναίων τῶν κατοικούντων ἐν Σκύρωι, IG. XII. 8.668. (329/8); μετὰ Ἀθηναί[ων ἐν Χ]ερρονήσωι, Di. Syll. I. 255. (341/0); ὁ δῆμο[ς ὁ] ἐν Σάμωι, IG. II².699. (354/3)。

4) 文献史料、εις Λήμνον καὶ Ἴμβρον ἐμβαλῶν αἰχμαλώτους πολίτας ἡμετέτους ὄχετ' ἔχων, Demosth.4.34. (351) ; ὁ δὲ δὴ γένει πολίτης Ἀθηνόδωρος, Demosth.23.12. (353) ; τοῖς Χερρόνησον οἰκοῦσι τῶν πολιτῶν Demosth.23.103. (353) ; ἐξέλειπον δὲ Χερρόνησον ἡμῶν οἱ πολῖται, Aisch.2.72. (343)。

5) 文献史料、ταυτας(=Λήμνος, Ἴμβρος, Σκύρος) δὲ ὡσπερ τὸ ἀρχαῖον εἶναι Ἀθηναίων, Xen.Hell.5.1.31. (386) ; ταύτας(=Λήμνος, Ἴμβρος, Σκύρος) Ἀθηναίων εἶναι, Andok.3.15. (391) ; Ἴμβρον μὲν καὶ Λήμνον οὔσας Ἀθηναίων, Diod.16.21.2. (356/5); περὶ Λήμνου καὶ Ἴμβρου καὶ Σκύρου, τῶν ἡμετέρων κτημάτων, Aisch.2.72. (343); τῶν τῆς πόλεως κτημάτων(=Λήμνος), Demosth.4.27. (351)。

6) 以下、この呼称の変化の現象を便宜的に「レムノス人」から「レムノスに住むアテナイ人」へと表現することとする。

7) 入れ替わりがあったとする説は、例えば、G.Busolt/H.Swoboda, *Griechische Staatskunde*, II, München, 1926, S.1275. 入れ替わりはなかったとする説は、例えば、J. Cargill, *Athenian Settlements of the Fourth Century B.C.*, Leiden, 1995, p.12-15.

8) 「リュサンドロスは、アテナイ人の駐留軍及び彼がどこかで見つけた他の全てのアテナイ人をアテナイに送り返した(Xen.Hell.2.2.2.)。」cf. Xen.Hell.2.2.9; Plut.Lys.13.3. レムノス・イムブロス・スキュロス以外の植民市が放棄され、植民者が強制帰国させられたことは、間違いなく事実である。

- 9) Andoc.3.12.
- 10) Aesch.2.76.
- 11) Xen.Hell.4.8.15.
- 12) Xen.Hell.5.1.31.
- 13) 桜井万里子、「古典期アテナイにおける市民にとっての他者 その他者認識の変容とトラシュプロスの第一決議」、『歴史学研究』、597、1989年、55-57頁。
- 14) これらのデータは桜井前掲論文に表としてまとめてあり、筆者はそれを利用した。
- 15) これら 2 例の解釈については、伊藤貞夫、「古典期アテネのフラトリア その組織度をめぐって」、『西洋古典学研究』、31、1983年、4-6頁に詳しい。
- 16) Demosth.59.104.
- 17) 第 3 節で考察するように、サモスは前 365/4 年から前 322 年夏までアテナイの植民市であったが、ここで扱うのはそれ以前の時期である。
- 18) このことは「レムノス人」と名乗る植民者がペロポネソス戦争中に刻まれた戦死者名簿にアテナイの部族名を刻んでいた事実によって明らかである (IG.I²947;IG.I²948)。
- 19) たとえ植民者が母市市民と異なった呼称をもっていたとしても、母市市民権の本質的な部分は保持していること、及びそれと関連して、母市と植民市が土地利用を巡るサイクルによって不可分の関係にあったことについては、拙稿「前 5 世紀におけるアテナイ植民者の市民権 その両義性をめぐって」、『西洋古典学研究』、43、1995年、32-41頁において考察したことがある。
- 20) περὶ τὸν δῆμον [τὸν [Μυριναί]ων, IG. XII. 8.2. (前 404/3 年から前 394/3 年)。
- 21) [ὁ δῆμος ὁ Μυριναίων], [περὶ τὸν δῆμον τὸν Μυριναίων, IG. XII. 8.7. (前 318 年以降)。
- 22) [περὶ τὸν δῆ]μον τ[ὸν][Ἀθηναίων τῶν ἐν Μυρίνῃ] IG. XII. 8.9. (前 3 世紀)。
[ὁ δῆμος ὁ Ἀθη]ναίων τῶν ἐν Μυρίνῃ, IG. XII. 8.10. (前 1 世紀)。

- 23) レムノス及びイムブロスは、前 318 年から前 307 年まで、前 318 年から前 307 年まで、前 295/4 年から前 281 年まで、前 266 年から前 263 年まで、前 202 年から前 166 年まで、断続的にアテナイから分離独立を繰り返した (Fredrich, *RE*, s.v., Lemnos, 1930)。
- 24) ケネソネソス、サラミス、レムノス、イムブロス、エイオン、スキュロス、アムフィポリス、ナウパクトス、エウボイア、ナクソス、アンドロス、ブレア、トゥリオイ、アミノス、シノペ、アスタコス、アイギナ、ポティダイア、レスボス、ノティオン、スキオネ、メロス。ケルソネソスとエウボイアとレムノスにある複数の植民市は、それぞれまとめて一つに数えた。
- 25) サラミスはアテナイに近いので、自治組織を持っていなかったようである。またアドリアについては、建設に関する碑文は残っているが (Tod.200)、それ以後の事情については殆ど判らない。
- 26) 前 4 世紀におけるアテナイ植民市の制度に関しては、Cargill, *op.cit.*, Chapter 3. *Institutions of the Fourth Century Athenian Settlements*, p.134-202. に詳しい。
- 27) Aristot. Ath. Pol. 54.8; 61.6; 62.2.
- 28) ポティダイアは前 356 年に、ケルソネソスは前 338 年に、既に消滅していた。
- 29) Cargill, *op.cit.*, p.143-144.
- 30) Cargill, *op.cit.*, p.146-147
- 31) Cargill, *op.cit.*, p.141-142.
- 32) Cargill, *op.cit.*, p.142.
- 33) Cargill, *op.cit.*, p.142-143.
- 34) Cargill, *op.cit.*, p.165-168.
- 35) Cargill, *op.cit.*, p.185-187.
- 36) Cargill, *op.cit.*, p.179-181.
- 37) Diog. Laert. 10.1. 試訳に付された () 内の年代は筆者の註。小稿では、Loeb *Classical Library*, *Diogenes Laertius II with an English Translation by R.D.Hicks*, London, 1950.

のテキストを使用し、加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝(下)』、第一巻、第一章「エピクロス」、岩波文庫、1994年の訳文を参照した。

38) サモスは小アジアの沖に浮かぶ大きな島で、島全体が一つのポリスを成していた。サモスは前 404 年までデロス同盟のメンバーとしてアテナイに忠誠を尽くしたが、前 377 年の第二次アテナイ海上同盟には参加しなかった。そのため前 366 年に始まるティモテオスの侵略を受け、10 ヶ月間の包囲攻撃の後、前 365 年の冬アテナイによって征服された。そして前 365/4 年に反アテナイ的寡頭派を追放して第一次植民が行われた。このことが再び同盟諸市に対する悪影響を与える原因となった。さらに前 361/0 年ニコフェノスがアルコーンの時に第二次植民が、前 352/1 年アリストデモスがアルコーンの時に第三次植民が行われ、ついにアテナイ人は全てのサモス人を追放して島を独占してしまった (M. Wagner, *Zur Geschichte der attischen Kleruchien*, Tübingen, 1914, Diss, S.69-70)。エピクロースの父ネオクレスがサモスの渡ったのは、前 352/1 年の第三次植民の時であったと考えられている (V. Arnim., *RE*, s.v., Epikouros.133)。

39) エピクロースはサモスで生まれたと見て間違い (V. Arnim, *op.cit.*, S.133)。

40) 彼の帰国の年代については、本章の註 21 を参照。

41) Diod.18.8.7. 前 338 年のコリントスにおける同盟会議でアレクサンドロスはサモスがアテナイのものであることを承認したが、前 323 年のアレクサンドロスの死に伴ってラミア戦争が起こり、前 322 年の夏には終結したが、その平和条約でアテナイはサモスを失うこととなった。この時かつてアテナイ人によって追放されていたサモス人は帰国し、植民者としてサモスに渡っていたアテナイ人は追放された (Wagner, *op.cit.*, S.69-70)。

42) ディオゲネス・ラエルティオスについては、彼の名も生涯もまたこの作品が書かれた年代も定かではないらしいが、この作品がサトルニノスに触れていないことを上限、新プラトン主義哲学について触れていないことを下限として、後 2 世紀後半から後 3 世紀前半の頃に生きた人物であると考えられる (加来、上掲書の解説、356-358 頁)。

43) メトロドロスは前 331/0 年から前 278/7 年の人 (Der Kleine Pauly,

s.v.Metrodoros.6.)。『良き生まれについて』とは Περὶ Εὐγενείας のこと。

44) ヘラクレイデスは前 390 年から前 310 年頃の人 (*Der Kleine Pauly*, s.v., Herakleides)。ソティオンは前 2 世紀の人で、『ソティオンの抜粋 Σωτίωνος ἐπιτομή』とは前 200 年から前 170 年の間に編纂された『哲学者たちの系譜 διαδοχαὶ τῶν φιλοσόφων』のこと (*Der Kleine Pauly*, s.v., Sotion.1)。

45) 彼がサモス植民者の子供であったことは、古代においてもよく知られていたらしく、前 1 世紀の人であるストラボン (*Strabo*.14.1.18) やキケロ (*Cic. de nat. deo*.1.26) もそのことを伝えている。

46) *Strabo*.14.1.18. の試訳。「アテナイ人は、はじめには將軍であるペリクレスと彼と共に詩人のソフォクレスとを送り、従おうとしないサモス人を包囲戦によって苦境に陥れたこともあるし、また後には自分たちの内から 2000 人のクレルーコイを送り出したこともあるが、その中に哲学者であり、人が呼ぶところでは教師でもあるエピクーロスの父ネオクレスがいた。彼はそことテオスとで育てられ、そしてアテナイでエフエーボスになり ἐφηβεῦσαι Ἀθήνησιν、悲劇作家のメナンドロスも彼と一緒にエフエーボスになったと伝えられている。」ここでは「彼はそこ (=サモス) とテオスとで育てられ」とあるのは、彼が 14 歳までサモスで育てられ、14 歳から 17 歳まで当時有名なテオスのナウシファネスの学校で学んでいたためである (*V.Arnim, op. cit.*, p.133)。

47) サラミス植民者の子供が前 333/2 年にエフエーボスになった可能性が示唆されるが (*Cargill, op.cit.*, Appendix B. no. 763)、詳細は判らない。

48) *Aristot.Ath.Pol.*42.1-5. 小稿では、*Loeb Classical Library, Aristotle XX Athenian Constitution, Eudemian Ethics, Virtues and Vices Translated by H. Rackham*, London, 1981 のテキストを使用し、村川堅太郎訳、『アテナイ人の国制』、岩波文庫、1980 年の訳を参照した。

49) τῆς πολιτείας という語は、第 42 章にのみではなく、これ以下全ての章にかかるので、一律に「国制」と訳してみた。

50) 劇場とはディオニュソス劇場のこと (村川、上掲書、第 42 章の註 7、224 頁)。

- 51) エフェービアの起源については、P.Vidal-Naquet, *Le chasseur noir et l'origine de l'éphébie athénienne*, dans *Le chasseur noir, Formes de pensée et formes de société dans le monde grec*, Paris, 1981, p.173. その英訳として P.Vidal-Naquet, *The Black Hunter and the Origin of the Athenian Ephebia*, in ; *The Black Hunter, Forms of Thought and Forms of Society in the Greek World*, translated by Andrew Szegedy-Maszak, p.120.
- 52) 軍事訓練の制度としての起源については、前 5 世紀の前半であるとされるが (C.Pélédikis, *Histoire de l'éphébie attique, des origines à 31 avant J-C*, Paris, 1962, 78.)、『アテナイ人の国制』に見えるような制度としての起源は、前 366/5 年頃とされる (O.W.Reinmuth, *Der Kleine Pauly*, s.v., Ephebia, 288.)。ここで言及した起源論については、村川、上掲書、第 42 章の註 5、224 に簡潔にまとめてある。
- 53) エフェービアの目的については、C.Mossé, *Dictionnaire de la civilisation greque*, s.v., éphébie, Bruxelles, 1992, p.196.
- 54) エフェービアの変質については、Thalheim, RE, s.v., Ἐφηβία. S.2738-2741.
- 55) アテナイ以外のエフェービアについては、J.Oehler, RE, s.v., Ἐφηβία. S.2741-2746.
- 56) Reinmuth, *op.cit.*, S.287.
- 57) エピクロースのエフェーボス時代が西暦何年であったかを割り出すためには、当時のギリシアにおける年齢の数え方を考慮しなければならない。まず『アテナイ人の国制』の「18 歳になったら区の成員として登録される」という箇所の 18 歳に関して、満 18 歳とする説と数えの 18 歳とする説があるが (Thalheim, *op.cit.* s.v., Ἐφηβία. S.2738)、通説は満 18 歳とする説である (村川、上掲書、第 42 章の註 5、224 頁)。とすると、エピクロースのエフェーボス時代は、341 から 18 を引いて 323 となり、前 323 年の 7 月から前 321 年の 7 月までということになる。しかし、ディオゲネスが引用したアポドロスの『年代記』を見ると (Diog.Laert.10.14-15.)、エピクロースが生まれたのは、第 109 回オリンピックの第 3 年目のガメリオン月の 7 日であるから、前 341 年の 2 月頃に当たる。彼が没したのは、第 127 回オリンピックの第 2 年目で、月までは分からないので、前 271/0 年ということにしておこう。そして彼が 72 歳で没したとはっきり

記されている。現代の様に満年齢として計算すると、341 から 72 を引いて 269 になり、彼の没年より 1 年遅いことになる。この 1 年のずれは、当時の年齢が数え年であったことを示しているのではないか。もしそうだとすれば、彼が数えの 18 歳になった年は、前 324 年の 2 月となるから、彼のエフェーボス時代は、前 324 年の 7 月から前 322 年の 7 月ということになる。

58) 『アテナイ人の国制』に記されたようなエフェービアは長続きせず、前 322 年のラミア戦争の後の寡頭政の樹立とともに変質し、以後 9000 人の能動的市民の子弟にのみ限定されるようになった (Péledikis, *op.cit.*, p.155-157)。従って、エピクーロスのエフェーボス時代は、微妙な時期に当たり、もし数え年の計算が正しければ、『アテナイ人の国制』に記述された制度の最後の時期に当たる。

59) フラトリアの入籍は 16 歳の時、毎年秋に行われるアパトゥリア祭の第 3 日目に行われる。エピクーロスはこのためにアテナイに帰らなければならなかったはずであるがそのことを伝える史料はない。では帰らなかったのでしょうか。この点は重要ではあるが、不明とせざるを得ない。おわりにで見るように、彼が正式な市民とは認められなかったという噂がこのことと関係あるのかも知れない。

60) このことは、共和政末期のローマにおける市民登録と比較した場合、都市の中間団体に成員総会も資格審査の機能もなく、5 年に一度現地の役人が家長の申告を受け、それをケンソルに送付して登録するというローマの間接的手続きとは大きな違いであったと言わねばならない。ローマの市民登録については、島田誠、「ローマ市民団」、弓削達・伊藤貞夫編、『ギリシアとローマ』、河出書房新社、1988 年、56 頁を参照。

61) 例えば、プルタルコスが伝えるところによると (Plut. *Aristeid.* 7.)、アリスティデスが「正義の人」としてもてはやされたのを妬んだ田舎者が、本人とは知らずに陶片にアリスティデスと書いてくれと頼んだという。単なるエピソードであるが、ポリスにおいてそれほど有名な人物でされも、顔を知らない者がたくさんいたのが現実であったようである。

62) ディオニュソス劇場の収容人員は、17000 人から 20000 人 (村田数之亮、

『私のギリシア』、新潮選書、1978年、197頁)。

63) また彼等は馬に乗って市内をパトロールしたために、「巡察隊 πεπιπόλοι」と呼ばれた。

64) エフェーボイの誓の碑文は幾つか出土しているが、その中で彼等は誓約履行を監視し、違反者を制裁する者として神々と半神の名を挙げ、これに続いて小麦、大麦、ブドウ、イチヂク、オリーブ、に並んで祖国の国境が挙げられている(馬場恵二、『ギリシア・ローマの栄光』、《ビジュアル版》世界の歴史3、講談社、1980年、32-33頁)。このことから彼等が国境というものを強く意識させられたことが窺われる。また、エフェーボイの生活については、太田秀通、『ポリスの市民生活』、生活の世界歴史3、河出書房新社、新装版、1983年、68-73頁に詳しい。

65) Diog.Laert.10.3-8.

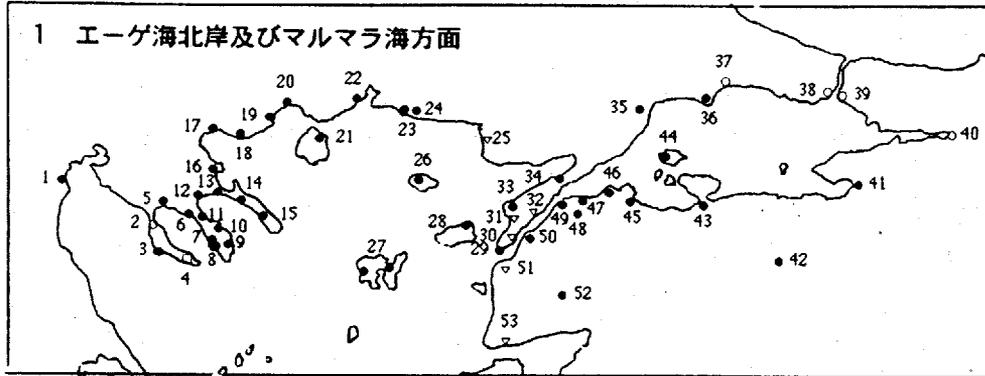
66) Diog.Laert.10.4.

67) ティモクレテースは、ラムプサコスのメトロドロスの兄で、はじめメトロドロスと同様にエピクーロスの弟子となったが、まもなく前306年頃にエピクーロスがアテナイへ帰国したのをきっかけとして(つまりこれは2回目の帰国)、彼から離れ、後に彼の説を批判するようになった(H. Dörrie, *Der Kleine Pauly*, s.v., Timokrates.5.)。ヘロドトスは、エピクーロスの弟子で、エピクロスは現存する3つの手紙の内の最初の手紙を彼に宛た(E.G.Schmidt, *Der Kleine Pauly*, s.v., Herodotos.2.)。

68) 相識性に裏付けされたこのような人的結合は、仮にパトロネジ関係を「縦の人的結合」と呼ぶならば、「横の人的結合」と呼べるかも知れない。

植民市の地図

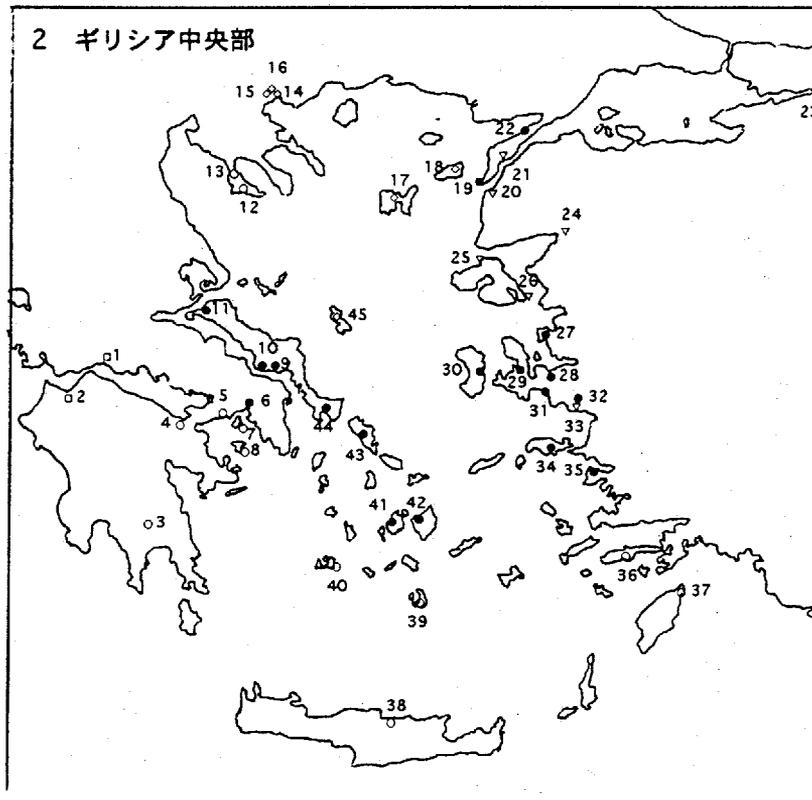
1



- 1 メトネ
- 2 ボティダイア
- 3 メンデ
- 4 スキオネ
- 5 メキュベルナ
- 6 セルミュレ
- 7 ガレ
- 8 トロネ
- 9 サルテ
- 10 シグヌス
- 11 ビロルス
- 12 アッセラ
- 13 アカントス
- 14 サネ
- 15 クレオナイ
- 16 スタゲイロス
- 17 アルギロス
- 18 ガレブソス
- 19 オイシュメ
- 20 ネアポリス
- 21 タソス
- 22 アプデラ
- 23 ストリュメ
- 24 マロネア
- 25 アイノス
- 26 サモトラケ
- 27 レムノス
- 28 イムブロス
- 29 エライウス
- 30 マデュトス
- 31 アロペコンネソス
- 32 セストス
- 33 リムナイ
- 34 カルディア
- 35 ビサンテ
- 36 ベリントス
- 37 セリュムブリア
- 38 ビュザンティオン
- 39 カルゲドン
- 40 アスタコス
- 41 キオス
- 42 ミレトポリス
- 43 キュジコス
- 44 プロコンネソス
- 45 プリアポリス
- 46 パリオン
- 47 バイソス
- 48 コロナイ
- 49 ラムブサコス
- 50 アビュドス
- 51 シグイオン
- 52 スケブシス
- 53 アッソス

2

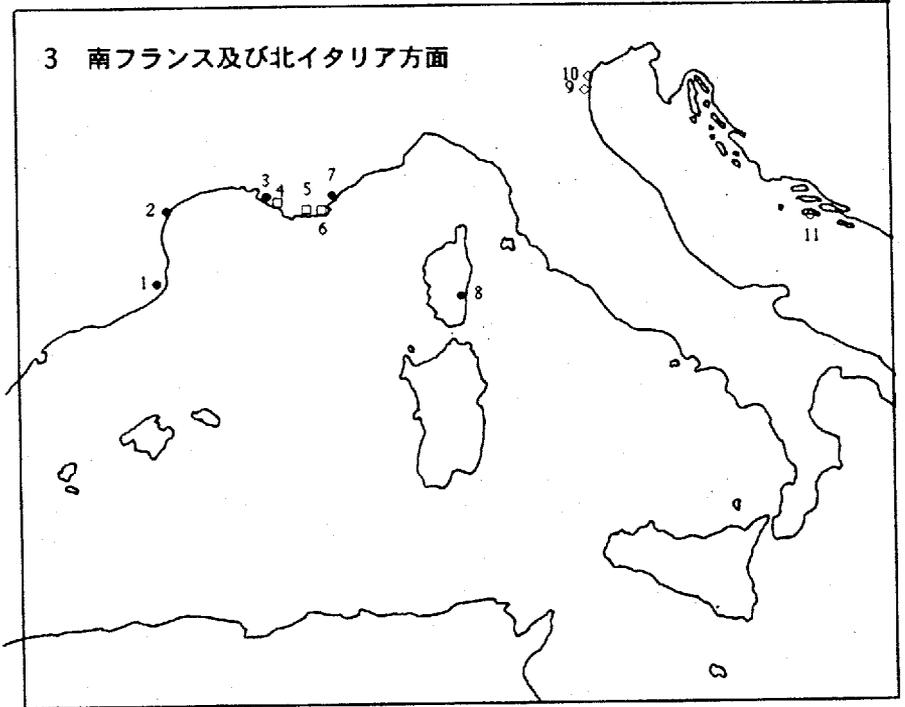
- 1 ロクリス
- 2 アカイア
- 3 スバルタ
- 4 コリントス
- 5 メガラ
- 6 アテナイ
- 7 サラミス
- 8 アイギナ
- 9 エレトリア
- 10 カルキス
- 11 ヘスティアア
- 12 スキオネ
- 13 ボティダイア
- 14 エイオン
- 15 アムフィポリス
- 16 プレア
- 17 レムノス
- 18 イムブロス
- 19 エライウス
- 20 シグイオン
- 21 セストス
- 22 カルディア
- 23 アスタコス
- 24 アイオリス
- 25 メテュムナ
- 26 ミュティレネ
- 27 フォカア
- 28 クラゾメナイ
- 29 エリュトライ
- 30 キオス
- 31 テオス
- 32 コロフォン
- 33 ノティオン
- 34 サモス
- 35 ミレトス
- 36 クニドス
- 37 ロドス
- 38 クレタ
- 39 テラ
- 40 メロス
- 41 パロス
- 42 ナクソス
- 43 アンドロス



- イオニア人
- ドーリア人
- アカイア人
- ▽ アイオリス人
- ◇ その他

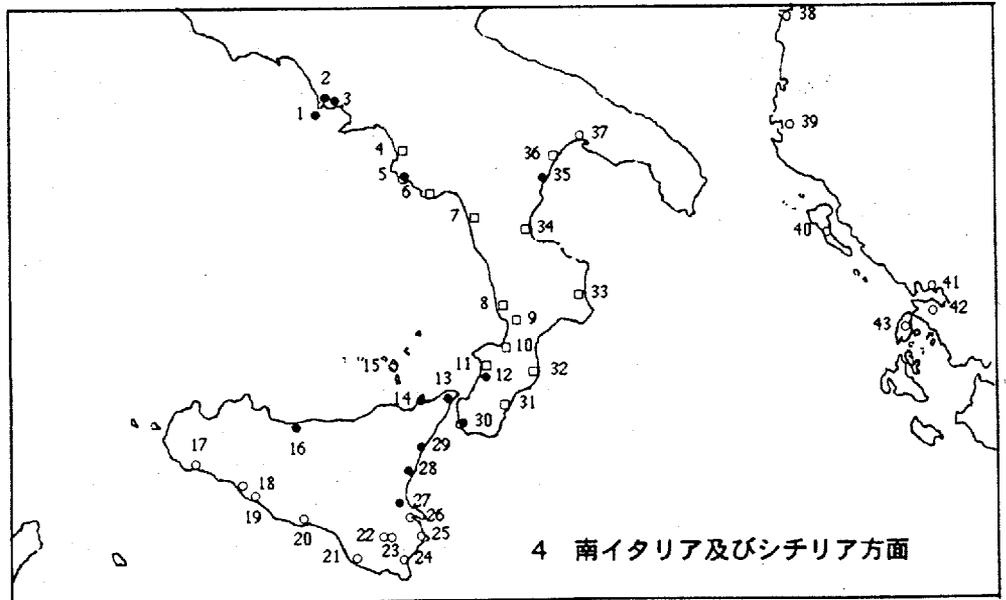
3

- 1 エムポリオン
- 2 アガタ
- 3 マッサリア
- 4 タウロエントゥム
- 5 オルピア
- 6 アンティポリス
- 7 ニカイア
- 8 アラリア
- 9 スピナ
- 10 アドリア
- 11 コルキュラメライナ



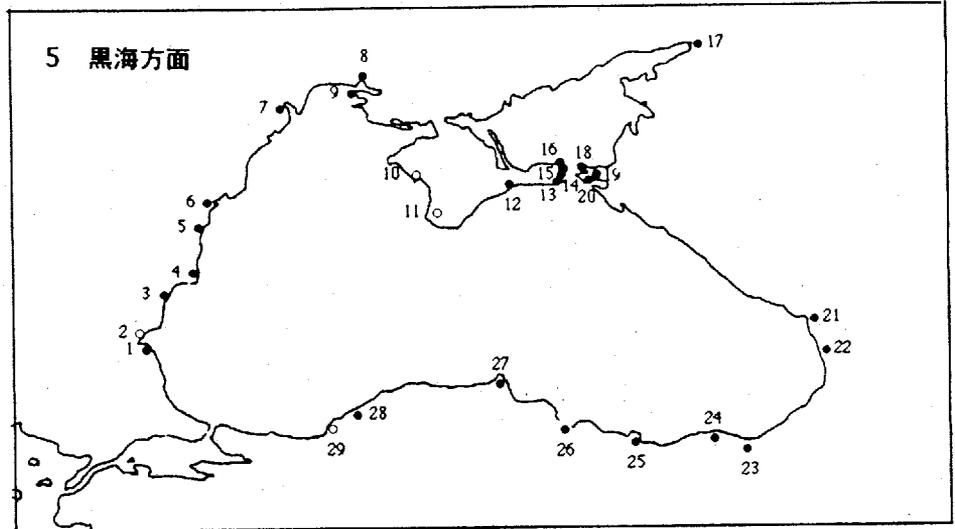
4

- 1 ビテクサ
- 2 キュメ
- 3 ディカイアルキア
- 4 ポセイドニア
- 5 エレア
- 6 ビュクソス
- 7 ラウス
- 8 テメサ
- 9 テリナ
- 10 ヒッポニオン
- 11 メドマ
- 12 マタウロス
- 13 ザングレ
- 14 ミュライ
- 15 リバラ
- 16 ヒメラ
- 17 セリヌス
- 18 ヘラクレアミノア
- 19 アクラガス
- 20 ゲラ
- 21 カマリナ
- 22 カスメナイ
- 23 アクライ
- 24 ヘロロス
- 25 シュラクサイ
- 26 メガラヒュブレイア
- 27 レオンティノイ
- 28 カタネ
- 29 ナクソス
- 30 レギオン
- 31 ロクロイエビゼフュロイ
- 32 カウロニア
- 33 クロトン
- 34 シュバリス
- 35 シリス
- 36 メタポンティオン
- 37 タラス
- 38 エビダムノス
- 39 アポロニア
- 40 コルキュラ
- 41 アムブラキア
- 42 アナクトリオン
- 43 レウカス



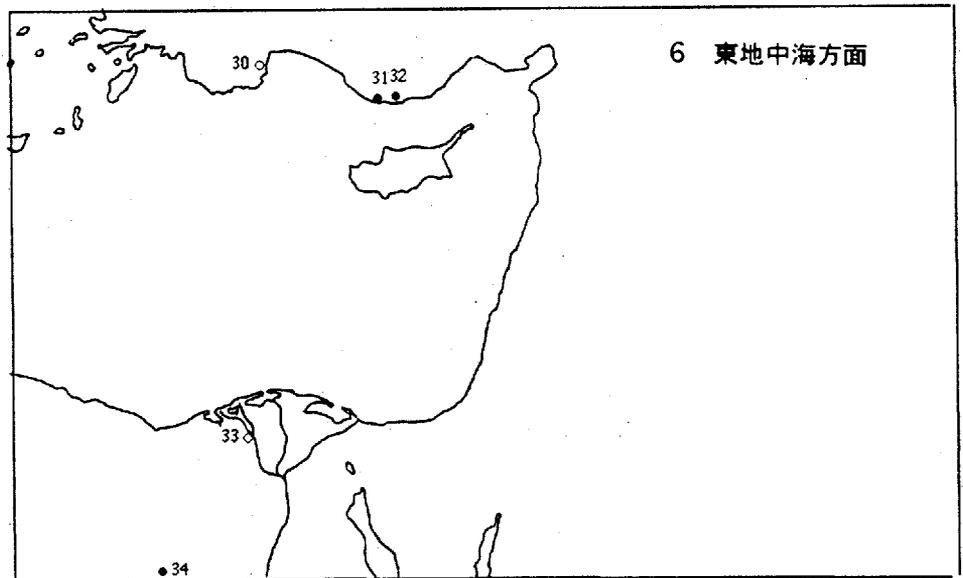
5

- 1 アポロニアポンティカ
- 2 メサムブリア
- 3 オデッソス
- 4 カラティス
- 5 トモイ
- 6 イストロス
- 7 テュラス
- 8 オルピア
- 9 ベレザン
- 10 ケルキニティス
- 11 ケルソネソス
- 12 テオドシア
- 13 ニュムファイオン
- 14 テュリタケ
- 15 バンティカバイオン
- 16 ミュルメキオン
- 17 タナイス
- 18 ファナゴレイア
- 19 ケボス
- 20 ヘルモナッサ
- 21 ディオスクリアス
- 22 ファシス
- 23 トラベズ
- 24 ケラス
- 25 コテュオラ
- 26 アミソス
- 27 シノベ
- 28 ティオス
- 29 ヘラクレイアポンティカ



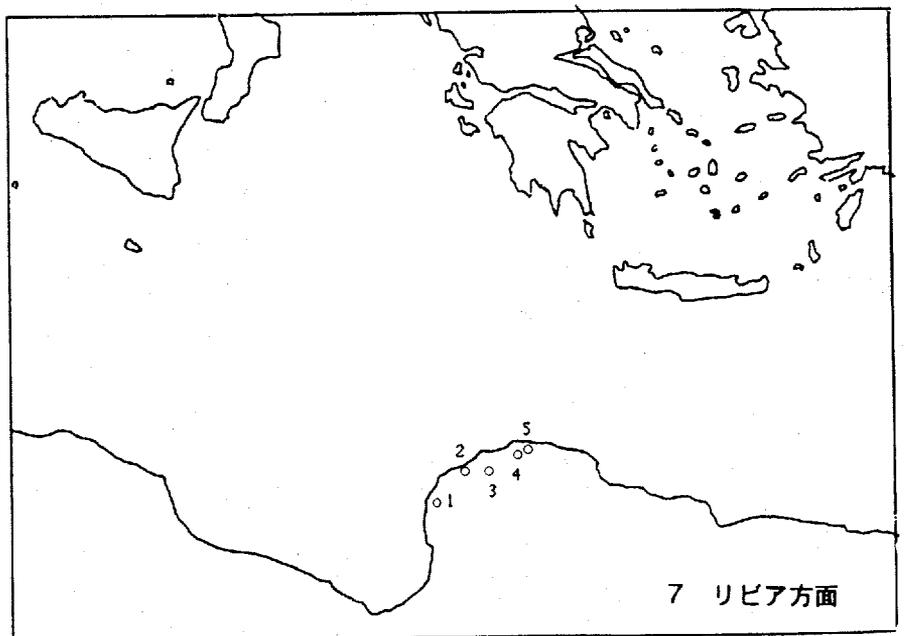
6

- 30 ファセリス
- 31 ナギドス
- 32 カレンジリス
- 33 ナウクラティス
- 34 オアシスポリス



7

- 1 エウヘスベリデス
- 2 タウケイラ
- 3 バルカ
- 4 キュレネ
- 5 アポロニア



結論

アポイキア・クレールーキアという用語は、従来からアテナイ植民の二つの類型を指すものと考えられてきた。その解釈は大まかに分けて二つあった。一つの説は 19 世紀に出されたもので、それらを母市市民権の有無によって分類する「市民権説」であった。しかしそれは、20 世紀の 60 年代以降には疑問視され、本論文でも否定された。それに取って替わった説は、それらをポリスを形成するか否かに分類する「形態論説」であった。本論文はそれに基本的には賛成であるが、それにはアテナイ人の種族意識が強く影響していたことを見逃す訳には行かないであろう。本論文は従って「種族イデオロギー説」を唱えるものである。

即ち、1. アポイキアとは、同種族の先住民のポリスを破壊せず、一部の住民だけを追放し、そこにアテナイの植民者を送り込んでいく、言わば「同種族共存型植民」であり、その土地は外国のポリス領土の中にあるエンクテマタであり、アテナイの所有ではあっても、アッティカ固有の領土ではなかった。この点が不安定要因として作用し、前 4 世紀には放棄されざるを得なかった。この典型としてケルソネソス・ナクソス・エウボイアが挙げられる。これらは独自のポリスを形成しなかった。2. クレールーキアとは、異種族である先住民のポリスを破壊して、全ての住民を追放し、そこにアテナイの植民者を送り込んでいく、言わば「異種族追出型植民」であり、その土地はアテナイの独占所有であり、アテナイ固有の領土であった。この点が安定要因として作用し、前 4 世紀に回復された。この典型としてレムノス・イムブロス・スキュロスが挙げられる。これらは独自のポリスを形成した。この説に従えば、従来クレールーキアの典型と考えられてきたレスボスとカルキスは、いずれもアポイキアに分類されることになり、従来説の修正を迫るものである。

このパターンは実際に種族イデオロギーとして採用された。つまりそ

これは、植民活動を正当化すること、更には、アテナイをイオニア人の母市、デロス同盟諸都市をその植民市とする想像の共同体を創造し、同盟諸市を統合することに利用されたのである。このイデオロギーは、前5世紀においては貫徹されたが、前4世紀になると無視されるようになった。ここにそのイデオロギーが放棄されたと見てよいであろう。

一方、植民者の市民権は、従来考えられてきたように法制度的・固定的・抽象的なものではなく、むしろポリス的な相識社会に強く根ざした、ある意味では曖昧かつ柔軟なものであったことが明らかとなった。また、母市市民権を持つ植民者が必ずしもアテナイに対して強い帰属意識を持っていたのではないことも明らかとなった。彼らは彼らなりのアイデンティティーを持ち、それに従って、母市との関係に折り合いを付けながら、行動したのであった。このように実際には様々なベクトルを示すアイデンティティーを持った植民者たちを統合するために、アテナイは相識制を高めるような儀礼・儀式・教育制度を整えた。しかしそれは、既に非ポリス的な領土を有するアテナイをポリス的な制度によつとまとめ上げようとした、いわばアナクロニズム的な対応であり、決して実態に即した制度ではなかった。ここにポリスたるアテナイがポリスであることを超克できなかつた一つの理由が見て取れるであろう。

結局、アテナイ人は植民市を建設する際に、原則的には、同種族同居型植民か異種族追出型植民を指向していた。これらはいずれも単種族植民を意味した。この単種族植民は、ギリシア世界全体の中に位置づけると、決して唯一の形態ではなかつた。シチリア、マケドニアなどギリシア世界の周辺部では、むしろ権力者が雑多な住民を混住させる多種族植民が主流であつた。そしてこれらの地域から、ポリスの枠を超えたヘレニズム国家が成長していった。一方ポリス世界からはそれを超克するものは遂に生まれなかつた。このように人的結合の諸相、特に都市の種族構成に着目することは、古代ギリシアにおける国家形態の変遷の問題を考察するのに有効な一つの視座を提供するであろう。

主要参考文献および略記号一覧

碑文史料

IG = *Inscriptiones Graecae* (Berlin+, 1873-)

IG.I A. Kirchhoff (1873-91)

IG.I² F. Hiller von Gaetringen (1924)

IG.I³, fasc.1 D. M. Lewis (1981); fasc.2 Lewis and L. Jeffery+ (1994)

IG.XII(8) C. Fredrich (1909)

IG.XII Supp. Hiller (1939)

FGH = Felix Jacoby, *Die Fragmente der Griechischen Historiker* (Berlin / Leiden, 1923-1958)

M&L = Meiggs. R./ Lewis.D. M., *A Selection of Greek Historical Inscriptions* (Oxford, 1969)

SEG = *Supplementum Epigraphicum* (1923-)

*Syll.*³ = *SIG* = W. Dittenberger (ed³ by Hiller), *Sylloge Inscriptionum Graecarum*³ (Leipzig, 1915-24)

Tod = Tod. M. N., *A Selection of Greek Historical Inscriptions* (Oxford, 1948)

文献史料

Aelian. = Aelianus, *Varia Historia*

Aesch. = Aeschines

1. *Against Timarchos*

2. *On the Embassy*

3. *Against Ktesiphon*

Andoc. = Andocides

1. *On the Mysteries*

3. *On the Peace*

Aristoph. = Aristophanes

Aristot. = Aristoteles,

Ath. Pol.=Athenaion Politeia (often attributed to Aristot.)

Pol=Politics

Athen. = Athenaios, *Deipnosophists*

Dem. = Demosthenes

1. *First Olynthiac*

2. *Second Olynthiac*

3. *Third Olynthiac*

4. *First Philippic*

5. *On the Peace*

6. *Second Philippic*

7. [On Halonnesos]

8. *On the Chersonesos*

9. *Third Philippic*

10. *Fourth Philippic*

11. [Answer to Philip's Letter]

12. [Philip's Letter]

15. *For the Liberty of the Rhodians*

18. *On the Crown*

19. *On the Embassy*

20. *Against Leptines*

23. *Against Aristocrates*

24. *Against Timocrates*

44. [Against Leochares]

52. [Against Kallippos]

59. [Against Neaira]

Diod. = Diodoros Siculus, *Library of History*

Diog. Laert. = Diogenes Laertios, *Lives of Eminent Philosophers*

Hdt. = Herodotus, *Persian Wars*

Hesch = Heschios

Isoc. = Isocrates

4. *Panegyrikos*

5. *Address to Philip*

8. *On the Peace*

12. *Panathenaikos*

15. *Antidosis*

Lysias. = Lysias

34.

Nepos. = Cornelius Nepos

Cimon

Paus. = Pausanias, *Description of Greece*

Plut. = Plutarchos

Cim=Cimon

Per=Pericles

Lys=Lysandros

Sol=Solon

Thes=Theseus

Strab. = Strabo, *Geography*

Suda

Thuc. = Thucydides, *Peloponnesian War*

Xen. = Xenophon

Hell=Hellenica

Mem=Memorabilia

英文参考文献

Arnim. V., Epikouros, *RE*, 133.

ATL = Meritt, B. D. / Wade-Gery, H. T. / McGregor, M. F., *The Athenian Tribute Lists I* (Princeton, 1939), II (1949), III (1950), IV (1953).

Bellen. H., s. v., Kleruchoi, *Der Kleine Pauly Lexikon der Antike* in fünf Bänden, Konrat Ziegler und Walther Sontheimer, Hrsg. (München : Deutschen Taschenbuch Verlag, 1979).

Beloch, *Bevölkerung* = Beloch, K. J., *Bevölkerung der griechisch-römischen Welt* (Leipzig, 1886).

Beloch, *GG* = Beloch, K. J., *Griechische Geschichte I* (Strassburg, 1893).

Berve. H., *Miltiades. Studien zur Geschichte des Mannes und seiner Zeit*, *Hermes*, Einzelschrift, 2, (1937).

Boeckh, *Staatshaushaltung* = Boeckh, A., *Die Staatshaushaltung der Athener: herausgegeben und Anmerkungen begleitet von Max Fränkel*, 18. Von den Kleruchien (Berlin, 1886¹) 499-509. 1850², 1817¹.

Brunt, *Athenian Settlements* = Brunt, P. A., "Athenian Settlements Abroad in the Fifth Century B.C.", in : E. Badian (ed.), *Ancient Society and Institutions: Studies Presented to VICTOR EHRENBERG on His 75th Birthday* (Oxford, 1966) 71-92.

Busolt, *GG* = Busolt, G., *Griechische Geschichte* III. 2, (Ghota, 1904), II (Ghota, 1895) III¹ (Ghota, 1897).

Busolt. G. / Swoboda. H., *Griechische Staatskunde* II, (Stuttgart, 1926) S.1264-1280.

Cargill, *IG.II²1* = Cargill, J., "IG.II²1 and the Athenian Kleruchy on Samos", *GRBS* 24, (1983) 326-332.

Cargill, *Athenian Settlements* = Cargill, J., *Athenian Settlements of the Fourth Century BC* (Leiden / New York / Köln, 1995).

Clairmont, C. C., *Gravestone and Epigram, Greek Memorials from the Archaic and Classical Period*, (Mainz on Rhein, 1970) No.80, 154-155.

Cohen. G. M., *The Hellenistic Settlements in Europe, the Islands, and Asia Minor* (Berkeley, Los Angels, and Oxford : University of California Press, 1995).

- Davies, *Families* = Davies, J. K., *Athenian Propertied Families 600-300 B.C.* (Oxford, 1971)
- De Ste. Croix, *Peloponnesian War* = De Ste. Croix, G. E. M., *The Origins of the Peloponnesian War* (London, 1972).
- DKP = *Der Kleine Pauly* (München, 1979).
- Easterling / Knox, *Greek Literature* = Easterling, P. E. / Knox, B. M. W. (ed), *The Cambridge History of Classical Literature I Greek Literature* (Cambridge, 1985).
- Ed. Meyer, *Forschung* = Ed. Meyer, *Forschung zur alten Geschichte* II (Halle, 1899).
- Ed. Meyer, *GdA* = Ed. Meyer., *Geschichte des Altertums* III. 1 (Stuttgart / Berlin, 1915).
- Ehrenberg, Thuriî = Ehrenberg, V., "The Foundation of Thuriî", *AJP* 69 (1948) 149-17.
- Ehrenberg, Kolonisation = Ehrenberg, V., "Zur älteren athenischen Kolonisation", *Eunomia : Studia Graeca et Romana* I (1939) 11-32. = *id. Aspects of the Ancient World : Essays and Reviews* (Oxford, 1946) 116-143. = *id. Polis und Imperium* (Zürich / Stuttgart, 1965) 221-244.
- Ehrenberg, Colonization = V. Ehrenberg, "Thucydides on Athenian Colonization", *Cph* 47 (1952) p.143-149. = *id. Polis und Imperium* (Zürich/Stuttgart, 1965) p.245-253.
- Ehrhard. N., *Milet und seine Kolonien* (Frankfurt am Main, Bern, New York, and Paris : Peter Lang, 1988).
- Erxleben. E., "Die Kleruchien auf Euböa und Lesbos und die Methode der attischen Herrschaft im 5 Jh", *Klio* 1.57 (1975) S.83-100.
- Figueira, *Athens and Aigina* = Figueira, Th. J., *Athens and Aigina in the Age of Imperial Colonization* (Baltimore, 1991).
- Fol / Marazov, *Trace* = Fol, A. / Marazov, I., *Trace and the Thracians*, (New York, 1977).
- Foucart. P., "Mémoire sur les colonies athéniennes au cinquième et au quatrième siècle", *Mémoires présentés par divers savants à l'académie des inscriptions et Belles-Lettres de l'institut de France* I.9.I, (1878) p.323-413.
- Foucart. P., "Inscriptions des clérouques Athéniens d'Imbros", *BCH*, 7, 1883, 160-162.
- Gauthier, clérouques = Gauthier, Ph., "Les clérouques de Lesbos et la colonisation athénienne au V° siècle", *REG* 79 (1966) 64-88.

- Gauthier, κ ENOI = Gauthier, Ph., "Les κ ENOI dans les textes athéniens de la seconde moitié du V^e siècle av. J.-C." *REG* 84 (1971) 44-79.
- Gilbert. G., *Handbuch der griechischen Staatsaltertümer* I, (Leipzig, 1881) 502-510.
- Gomme, HCT = Gomme, A. W., *A Historical Commentary on Thucydides* II. 50. 2, (Oxford, 1956) 329.
- Graham, *Colony and Mother City* = Graham, A. J., *Colony and Mother City in Ancient Greece* (Manchester, 1964).
- Graham. A. J., s.v., COLONIZATION, GREEK, *The Oxford Classical Dictionary*, Second Edition (Oxford : Oxford University Press, First Edition 1970, Reprinted 1979).
- Graham. A. J., The Colonial Expansion of Greece, *The Cambridge Ancient History* Volume III, The Expansion of the Greek World, Eighth to Sixth Centuries B.C., John Boardman, N. G. L. Hammond, eds (Cambridge, London, New York, New Rochelle, Melbourne, and Sydney : Cambridge University Press, Second Edition 1982) 83-162.
- Graham. A. J., s.v., cleruchy, *The Oxford Classical Dictionary*, Second Edition, N. G. L. Hammond and H. H. Schullard, eds. (Oxford : Oxford University Press, 1979)
- Gschnitzer. F., "Abhängige Orte im griechischen Altertum", *Zetemata* 17 (München, 1958) S.88-112.
- Habicht / Hallof, Buleuten und Beamte = Habicht, C. / Hallof, K., "Buleuten und Beamte der Athenischen Kleruchie in Samos", *AM* 110 (1995) 273-304.
- Hall, *Ethnic Identity* = Hall, J. M., *Ethnic Identity in Greek Antiquity* (Cambridge, 1997).
- Hamilton, Sparta = Hamilton, C. D., "Sparta", in : Tritle, L. A. (ed) ., *The Greek World in the Fourth Century* (London / New York, 1997) 41-65.
- Hampl. F., "Polis ohne Territorium", *Klio*, 32, (1939) S.1-60.
- Hermann. F / Thumser. V., *Lehrbuch der griechischen Staatsaltertümer* I. 2, § 77 Mitteilung des Bürgerrechtes, Kleruchen (Freiburg, 1892⁶) 434-443.
- Heskel, *North Aegean Wars* = Heskel, J., *The North Aegean Wars, 371-360 BC, the Struggle over Amphipolis and Chersonese*, *Historia Einzelschrift* (Stuttgart, 1996).
- Heskel, Macedonia = Heskel, J., "Macedonia and the North, 400-336", in : *The Greek World in*

- the Fourth Century* (London / New York, 1997) 167-188.
- Hornblower, *Commentary* = Hornblower, S., *A Commentary on Thucydides I* (Oxford, 1991), II (Oxford, 1996).
- How, *Commentary on Herodotus* = How, W. W. & Wells, J. A., *Commentary on Herodotus* Vol.I (Books I-IV), Vol.I (Books V-IX) (Oxford / New York, 1912).
- Howatson.M.C., s.v., Kleruch, *Reclams Lexicon der Antike* (Stuttgart : Philipp Reclam jun, 1996).
- Isaac. B. , *The Greek Settlements in Thrace until the Macedonian Conquest* (Leiden : E.J.Brill, 1986).
- Jones. A. H. M., "The Citizen Population of Athens during the Peloponnesian War", *The Economic Basis of the Athenian Democracy* (Oxford, 1957) p.161-180.
- Kahrstedt. U., *Staatsgebiet und Staatsangehörige in Athen, Studien zum öffentlichen Recht Athens*, (Stuttgart, 1934) 34.
- Kirchhoff, Tributpflichtigkeit = Kirchhoff, A., "Über die Tributpflichtigkeit der attischen Kleruchien", *Philologische und historische Abhandlungen der königlichen Akademie der Wissenschaft zu Berlin* (1873) 1-35.
- Larsen. J. A. O., *Greek Federal States, Their Institutions and History*, (Oxford, 1968) 51.
- LGN vol 1 = *A Lexicon of Greek Personal Names, vol.1, The Aegean Islands, Cyprus, Cyrenaica*, ed. by P. M. Fraser / E. Matthews, Oxford, 1987
- LGN vol 2 = *A Lexicon of Greek Personal Names, vol.2, Attica*, ed. by M. J. Osborne / S. G. Byrne, Oxford, 1994
- Maeno, Hiroshi, "Apokia and Klerouchia — an Analysis of IG.I²237 —", *KODAI*, to be issued in 1999.
- Malkin. I., *Myth and Territory in the Spartan Mediterranean* (Cambridge : Cambridge University Press, 1994).
- Manville. Ph. B., *The Origins of Citizenship in Ancient Athens*, (Princeton New Jersey, 1990).
- Meiggs, *Athenian Empire* = Meiggs, R., *The Athenian Empire* (Oxford, 1972).
- Mossé. C., s.v., Clerouques, *Dictionnaire de la civilisation grecque* (Bruxelles : Éditions

Complexe, 1992)

Myres, *Herodotos* = Myres, John L, *Herodotos Father of History* (Oxford, 1953).

Nesselhauf. H., *Untersuchungen zur Geschichte der delisch-attischen Symmachie*, Klio, Beiheft, 30, (1933) S.120-140.

Oehler. J., 'Αποικία, *RE*, 2823-2835.

Oehler. J., 'Εποικία, *RE*, 227-228;

Oehler. J., 'Εφηβία, *RE*, 2741-2746.

Osborne. R., *Greece in the Making 1200 - 479 BC* (London and New York : Routledge, 1996).

PA = Kirchner, J., *Prosopographia Attica* (Berlin, 1901-1903).

Pélédikis. C., *Histoire de l'éphébie attique, des origines à 31 avant J-C*, (Paris, 1962) 78.

RE = Pauly, A./ Wissowa, G./ Knoll, G., *Realencyclopädie der Classischen Altertums-wissenschaft* (Stuttgart, 1894-1980)

Rhode, *Commentary on Ath.Pol* = Rhode, P. J., *A Commentary on the Aristotelian Athenaion Politeia* (Oxford, 1981).

Ruzicka, Eastern Greek = Ruzicka, S., "The Eastern Greek World", in : Tritle, L. A. (ed) ., *The Greek World in the Fourth Century* (London / New York, 1997) 107-165.

Sacks. D., s.v., colonization, *Encyclopedia of the Ancient Greek World* (New York : Facts On File, 1995)

Schaefer. H., "Eigenart und Wesenzüge der griechischen Kolonisation", *Heiderberger Jahrbücher* IV (1960) S.77-93.

Scherling, Kodros, *RE*, 987-988.

Schuller, *Herrschaft* = Schuller, W., *Die Herrschaft der Athener im ersten attischen Seebund* (Berlin, 1974).

Schulthess, Κληρούχοι = Schulthess, O., "Κληρούχοι", *RE*, 814-832.

Schwenk, Athens = Schwenk, Cynthia., "Athens" in : Tritle, L. A. (ed) ., *The Greek World in the Fourth Century* (London / New York, 1997) 8-40.

Segre. M., *Iscrizioni Greche di Lemno*, *Annuario della Scuola Archeologica di Atene e delle Missioni italiane in Oriente* 15-16, 1932-1933, p.306-309, no.12.

- Shipley, *History of Samos* = Shipley, G., *A History of Samos 800-188 B.C.* (Oxford, 1987).
- Swoboda, Kleruchien = Swoboda, H., "Zur Geschichte der attischen Kleruchien", *Serta Harteliana* (1896) 28-32.
- Swoboda, H. / Hermn. K. F., *Lehbuch der griechischen Altertümer* I. 3, § 23 Militärkolonien, (Tübingen, 1913) S.196-197.
- Szanto, E., *Das griechische Bürgerrecht*, (Freiburg, 1892) 62-63.
- Thalheim, Ἐφηβία, *RE*, 2738-2741.
- Tritle, *Greek World* = Tritle, L. A. (ed) ., *The Greek World in the Fourth Century* (London / New York, 1997) .
- Vidal-Naquet, P., Le chasseur noir et l'origine de l'éphébie athénienne, dans *Le chasseur noir, Formes de pensée et formes de société dans le monde grec*, Paris, 1981, p.173. =
 Vidal-Naquet, P., The Black Hunter and the Origin of the Athenian Ephebia, in ;
 The Black Hunter, *Forms of Thought and Forms of Society in the Greek World*, translated by Andrew Szegedy-Maszak, p.120.
- Vömel, J. T., *De discrimine vocabulorum Κληρουῦχος, Ἀποικος, Ἐποικος*, Diss. (Frankfurt a.M, 1839);
- Wagner, M., *Zur Geschichte der attischen Kleruchien*, (Tübingen, 1914) Diss.
- de Weber, J. / van Compernelle, R., "La valeur des terms de «colonisation» chez Thucydide", *AC*, 36, (1967) p.461-532.
- Whibley, L., ed, *A Companion to Greek Studies*, Fourth Edition, Revised (Cambridge : Cambridge University Press, 1931) .
- Whitehead, D., *The Demes of Attica 509/7 - ca . 250 B.C., A political and social study* (Princeton : Princeton University Press, 1986) .

邦語参考文献

- 伊藤『古典期アテネ』= 伊藤貞夫、『古典期アテネの政治と社会』、東京大学出版会、1982年。

- 伊藤貞夫・本村凌二篇、『西洋古代史研究入門』東京大学出版会、1997年。
- 伊藤貞夫「ポリスの成立と構造」弓削達・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ — 古典古代の比較史的考察 —』、1988年、51頁の註15。
- 伊藤貞夫「古典期アテネのフラトリア — IG.II²1237の場合 —」『史林』71-5、1988年、25。
- 岩田拓郎「古典期アッティカのデーモスとフラトリア — 「ヘカトステー碑文」の検討を中心として —」『史学雑誌』71-3、1962年、19。
- 太田秀通、『ポリスの市民生活』、生活の世界歴史 3、河出書房新社、新装版、1983年、68-73。
- 笠原匡子「宗教政策から見た前五世紀アテナイの対同盟政策」、『関学西洋史論集』12、1983年、1-13。
- 清永昭次「国制転換のダイナミズム」『岩波講座世界歴史』古代 1、1969年、466-469。
- 清永昭次「パルテニアイのタラス植民」『学習院史学』7、1970年、1-14。
- 高津『ギリシア・ローマ神話辞典』= 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 1960年。
- 桜井万里子「古代ギリシア・アーケイック期初期の植民活動 — ギリシア人と先住民」『地理と歴史』345、1984年、1-14。
- 桜井「キモン」= 桜井万里子「「雅量の人」・キモン — そのエートスのアテナイ民主政における位置 —」桜井万里子『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年、371-389。
- 桜井万里子「ポリスと宗教」、前掲『古代ギリシア社会史研究』、26-30。
- 篠崎三男「黒海北岸のギリシア世界」、弓削徹・伊藤貞夫編『ギリシアとローマ — 古典古代の比較史的考察 —』河出書房新社、1988年、495-519。
- 篠崎三男「黒海北岸のギリシア植民市と土着住民」『歴史学研究』増刊号、1996年、142-150。
- 島田誠、「ローマ市民団」、弓削達・伊藤貞夫編、『ギリシアとローマ』、河出書房新社、1988、56。

- 高島「アリストファネス」= 高島純夫「アリストファネス喜劇と世論」、『西洋史研究』26、1997年、27-29。
- 高山十一『ギリシア社会史研究』未来社、1970年。
- 長島武之「前五世紀アテナイのクレルーキア」『西洋史研究』10、1981年、1-24。
- 馬場「トラキア」=馬場恵二「前6・5世紀のエーゲ海北岸のトラキアとギリシア世界」『駿台史学』69、1987年、1-34。
- 馬場恵二「デロス同盟とアテナイ民主政」『岩波講座世界歴史』古代2、1969年、18-19。
- 馬場恵二、『ギリシア・ローマの栄光』、『ビジュアル版』世界の歴史3、講談社、1980年、32-33。
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編、新版『社会学小辞典』有斐閣1997年、「種族」294。
- 古川堅治「ギリシア植民者の日常生活 — Paul Faure, *La Vie Quotidienne des Colons Grecs de la mer Noire à l'Atlantique au siècle de Pythagore, VI^e siècle avant J.-C.*, Hachette, Paris, 437pp. 1978. 解説と翻訳—(その5)」『独協大学教養諸学研究』30-1、1995年、94-135。
- 古山正人・中村純・田村孝・毛利晶・本村凌二・後藤篤子訳篇、『西洋古代史料集』東京大学出版会、1987年。
- 前沢伸行・大江善男・平田隆一・松本宣郎・渡部治雄・佐藤伊久男篇、『文献解説 ヨーロッパの成立』の第1部、第1章、第4節「前5世紀のギリシア世界」南総社、1981年、40。
- 前野弘志「クレルーキア概念」『西洋史学報』17、1-21、1990年、
- 前野「[ΤΑΙ]Σ ΑΠΟΙΚΙΑΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ[ΙΣ]」= 前野弘志「[ΤΑΙ]Σ ΑΠΟΙΚΙΑΣ ΚΑΙ [ΙΣ] —クレルーキア概念の再検討 碑文史料 IG.I²237 の解釈をめぐって—」『史学研究』191、1991年、34-52。
- 前野「レームノス、イムブロス、スキュロス植民」= 前野弘志「レームノス、イムブロス、スキュロス植民 —「クテーマタ型植民」の検討—」『史学研究』195、1992年 49-70。

前野「ケルソネーソス、ナクソス、エウボイア植民」= 前野弘志「ケルソネーソス、ナクソス、エウボイア植民 ―エンクテーマタ型植民の検討―」『西洋史学報』20、1993年 46-65。

前野弘志「前5世紀におけるアテナイ植民者の市民権 ―その両義性をめぐって―」、『西洋古典学研究』43、1995年、32-41。

前野弘志「前4世紀におけるアテナイ植民者の市民権 ―「レームノス人」から「レームノスにおけるアテナイ人」へ―」、『史学研究』212、49-66。

前野弘志「アテナイ帝国主義と植民 ―イオニア人の母市アテナイ―」、『季刊軍事史学』33.1、1997年、7-25頁。

前野弘志「アテナイ植民者のアイデンティティ ―プロソポグラフィックなアプローチの試み―」『史学研究』222、1998年、46-69

前野弘志『アテナイ植民活動と種族イデオロギー』、広島大学文学部紀要、特輯号II、歴史学コース、1998年。

真下英信「クレールーキア考(一)」『史学』41-3、1969年、137-154。

真下英信「クレールーキア考(二)」『史学』41-4、1969年、85-96。

真下英信「初期アテナイの植民活動」『史学』43-4、1971年、105-118。

村田数之亮、『私のギリシア』、新潮選書、1978年、197。

森谷公俊「古典期アテネの帝国支配」『歴史学研究』別冊特集、1983、50-58。

保田孝一「黒海北岸地方のギリシア植民市における農業 ケルソネソスの場合―」『史学雑誌』67-9、1958、47-64。

古典邦語訳

アイリアノス(松平千秋・中務哲郎訳)『ギリシア奇談集』岩波文庫、1989年。

アテナイオス(柳沼重剛訳)『食卓の賢人たち』岩波文庫、1992年

アリストテレス(村川堅太郎訳註)『アテナイ人の国制』岩波文庫、1980年。

アリストテレス(山本光雄訳)『政治学』岩波文庫、1961年。

アリストテレス『アリストテレス全集』全17巻、岩波書店、1968-78年。

イソクラテス(長坂公一訳)「平和について」(『ギリシア思想家集』世界文学大系、筑摩書房、1965年)

『ギリシア悲劇全集』1-2(アリストファネス)、ちくま文庫。

クセノフォーン(佐々木理訳)『ソークラテースの思いで』岩波文庫、1953年。

クセノポン(松平千秋訳)『アナバシス』筑摩書房、1985年

ストラボン(飯尾都人訳)『ギリシア・ローマ世界地誌』龍溪書舎、1994年。

ディオゲネス・ラエルティオス(加来彰俊訳)『ギリシア哲学者列伝』上、中、下、岩波文庫、1984-1994年

デモステネス(中村善也訳)『フィリッポスを攻撃する演説(1)』(『ギリシア思想家集』世界文学大系、筑摩書房、1965年)

デモステネス(中村善也訳)『フィリッポスを攻撃する演説(2)』(『ギリシア思想家集』世界文学大系、筑摩書房、1965年)

デモステネス(中村善也訳)『フィリッポスを攻撃する演説(3)』(『ギリシア思想家集』世界文学大系、筑摩書房、1965年)

デモステネス(中村善也訳)『オリュントスに関する演説』(『ギリシア思想家集』世界文学大系、筑摩書房、1965年)

デモステネス(田中美知太郎訳)『ケロネソス情勢についての演説』(『ギリシア思想家集』世界文学大系、筑摩書房、1965年)

トゥキュディデス(久保正彰訳)『戦史』上、中、下、岩波文庫、1966-67年

パウサニアス(飯尾都人訳)『ギリシア記 全巻』龍溪書舎、1991年。

パウサニアス(馬場恵二訳)『ギリシア案内記』上・下、岩波書店、1991-92年。

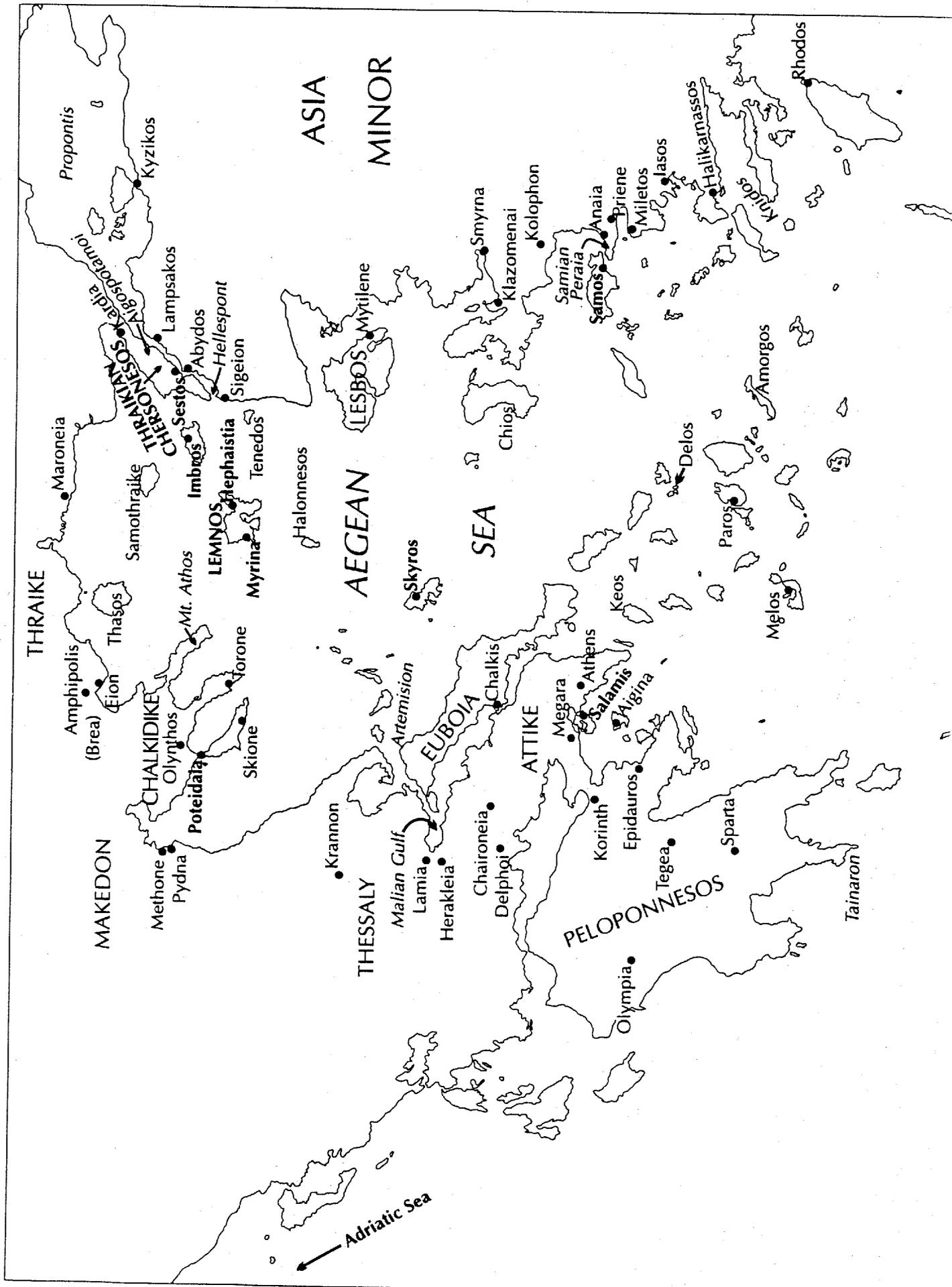
プラトン『プラトン全集』1-15巻、別巻1、岩波書店、1974-78年。

プルタルコス(河野与一訳)『プルターク英雄伝』1-12、岩波文庫、1952-1956年。

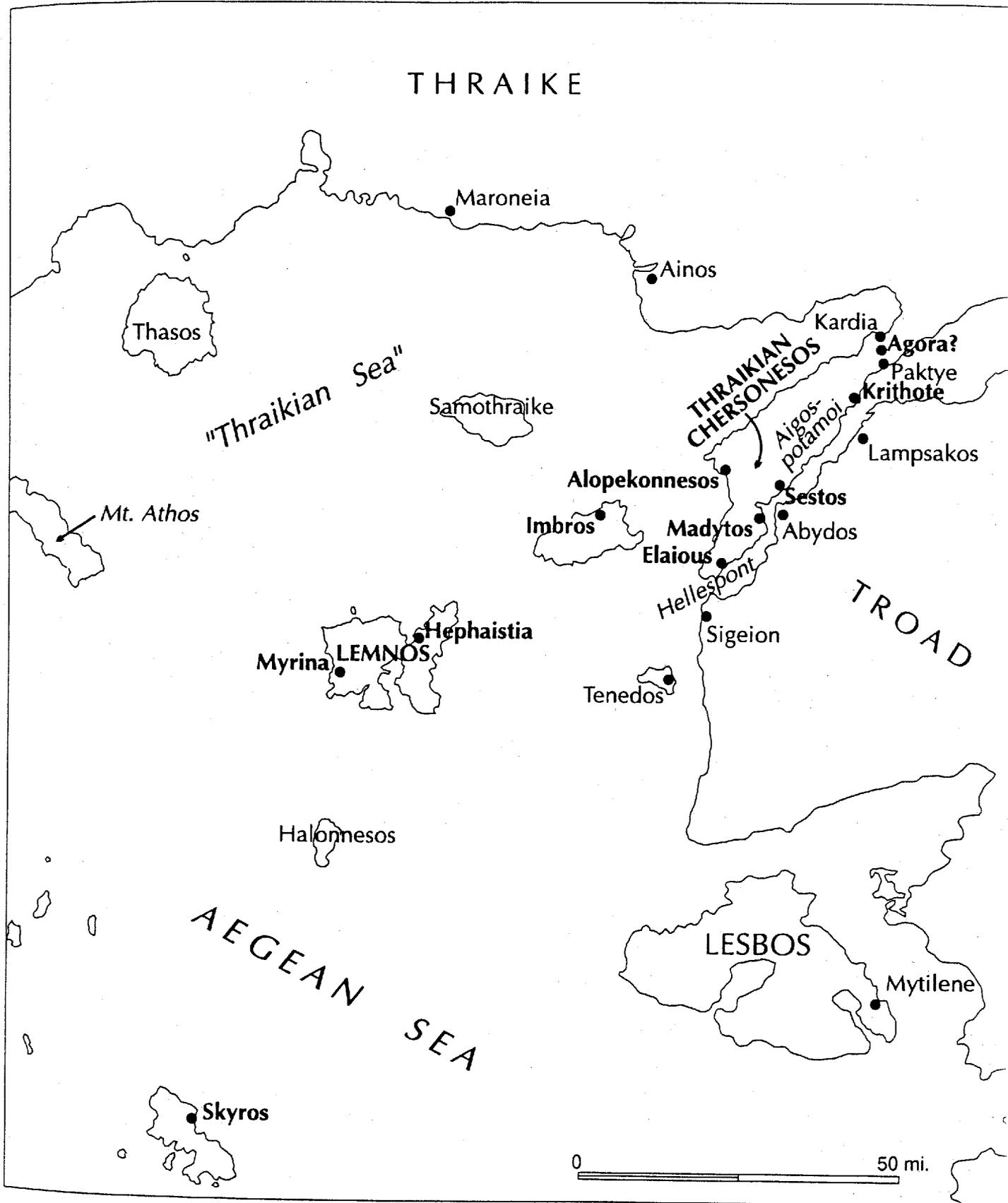
プルタルコス(村川堅太郎編)『プルタルコス』(世界古典文学全集)、筑摩書房、1966年。

ヘーロドトス(松平千秋訳)『歴史』上、中、下、岩波文庫、1971-1972年。

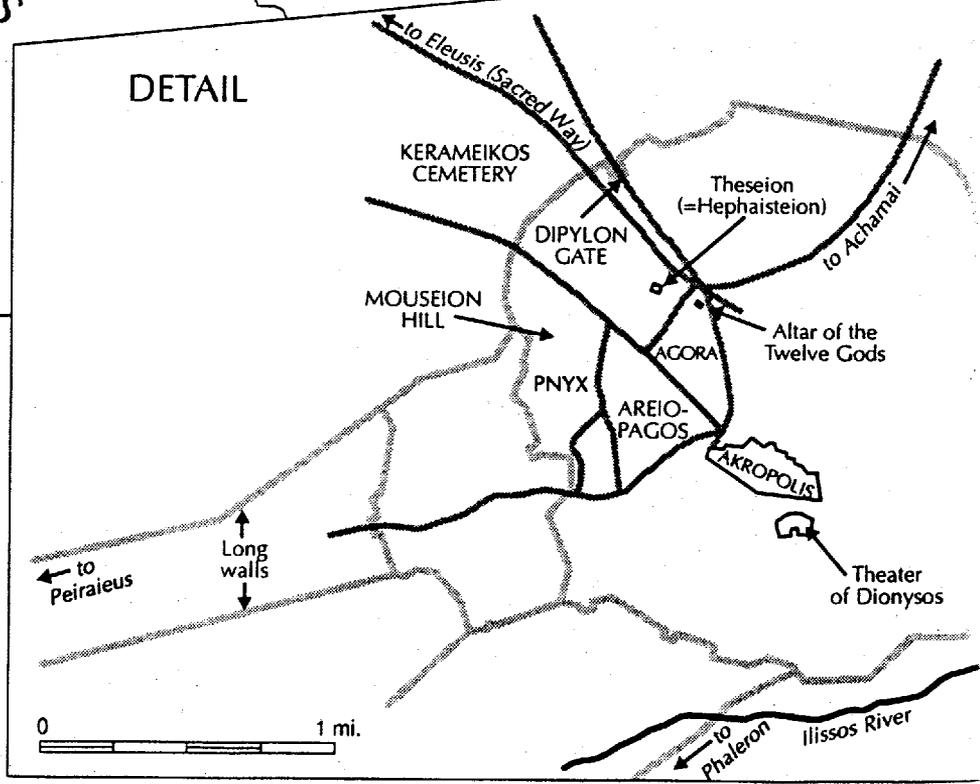
古山正人ほか『西洋古代史料集』東京大学出版会、1987年。



Cargill, Athenian Settlements.



Cargill, Athenian Settlements.



Cargill, Athenian Settlements.